東京都埋蔵文化財センター調査報告　第 372 集

北区

十条台遺跡群南橋遺跡

―都営中十条アパート及び都営王子・王子母子アパート撤去等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―

第２分冊

2023・9

東京都埋蔵文化財センター

十条台遺跡群南橋遺跡（王子・王子母子アパート地区）の調査

1　遺跡の概要

十条台遺跡群（北区 No.19 遺跡）は、武蔵野台地東縁部の本郷台地北側に位置する十条台の崖線沿いに立地しています。亀山遺跡、宿遺跡、南橋遺跡、十条台古墳群、十条台小学校横穴墓などからなる、東西約 0.7km、南北約 1.8km を測る広大な遺跡群です。これまでに東京都北区教育委員会による試掘調査・本調査の成果が積み重ねられ、旧石器時代から近世に至る複合遺跡であることが分かっています。

今回の調査地は十条台遺跡群の中の南橋遺跡の範囲にあたります。南橋遺跡は十条台遺跡群の南西側、中十条一丁目や王子本町二丁目の一帯に広がる遺跡です。これまでに北区教育委員会により数十回の調査が行われており、その成果から、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての大規模な集落と古代の集落が営まれていたことが明らかになっています。

2　遺構と遺物

本調査は、都営王子・王子母子アパートの撤去等事業に伴うもので、調査対象地は北区王子本町二丁目に所在し、調査面積は 4,698㎡です（写真 1）。発掘調査は令和 2 年 12 月 1 日から令和 4 年 2

写真 1　調査区全景（北から）

月 28 日まで、整理作業は令和 4 年 2 月 1 日から令和 5 年 5 月 31 日まで行いました。

調査の成果として、縄文時代、弥生時代後期から古墳時代初頭、古代の竪穴住居跡や土坑等の遺構と、土器等の遺物が検出されました。

なお、令和元年 7 月から令和 2 年 10 月まで実施された王子・王子母子アパート地区の北側に隣接する中十条アパート地区の調査では、主に弥生時代後期から古墳時代初頭と、古代の竪穴住居跡を含む遺構が多数検出されました。これに対して今回の地区は後世に削平され、遺構の密度が薄いことが試掘成果から示されていましたが、今回の調査でも前回の地区に比べ遺構の検出数は少なく、遺構分布が密でないことが明らかとなりました。

縄文時代（写真 2・3）

隅丸長方形の土坑が 2 基検出されました（写真 2）。長軸方向の両端壁が外側に抉り込まれており、深さは 1.0m 前後を測ります。2 基のうち 1 基からは、縄文時代前期前葉関山式の深鉢の破片が 2 点出土しました。このほか、縄文時代のものと思われる竪穴住居跡 1 軒と柱穴 1 基も検出されています。

調査区の表土や攪乱からは、前期前葉黒浜式や後期前葉堀之内 2 式の土器片、石鏃や石錐などの石器も出土していることから、南橋遺跡では縄文時代にも、人々の活動の痕跡があったことが確認されました。しかし、後の弥生時代や古代に竪穴住居等が築かれたことにより、縄文時代の遺構や遺物の痕跡の多くが失われたことが想定されます。

弥生時代後期から古墳時代初頭（写真 4 ～ 11）

竪穴住居跡 5 軒、掘立柱建物跡 1 棟、柱穴 8 基、土坑 4 基、溝跡 1 条が検出されました。竪穴住居跡は全体的に削平や攪乱の影響を受けており、遺存状態は良好ではありませんでした。しかし、調査区中央で検出された 141 号住居跡では遺物が良好に残存しており、ほぼ完形の直口壺が潰れた状態で出土しました（写真 4 ～ 8）。

柱穴は多くが調査区北側でまとまって検出されました。この中から 1 棟の掘立柱建物跡が復元され、その配置と重なりから、何度か建て替えを行ったことが推定されます。柱穴の周囲にも攪乱が広範囲に及んでおり、いくつかの柱穴は失われたことが考えられます（写真 9）。

溝跡は調査区北側で検出され、その位置と規模・形状から、中十条アパート地区の調査で検出された 2 号方形周溝墓と繋がる可能性があり、わずかに遺物も出土しています（写真 10）。

中十条アパート地区や南橋遺跡の過去の調査成果と比べると、王子・王子母子アパート地区での当該期の遺構の検出数は希薄であり、今回の調査区が南橋遺跡における当該期の集落の南端となる可能性が考えられます。

古代（写真 12 ～ 16）

竪穴住居跡 9 軒、柱穴 4 基が検出され、竪穴住居跡の多くは攪乱により上面が削平されていました。

遺物は各住居跡から出土し、調査区北側で検出された 126 号住居跡では、カマド内から 9 世紀初頭～中葉の土師器甕の破片が良好に出土しました。同じく調査区北側で検出された 132 号住居跡からは、7 世紀後半の土師器坏の破片が良好に出土しました。この他、調査区南側で検出された 134・135 号住居跡からは鉄製の刀子が出土しました（写真 12 ～ 15）。

各住居跡の年代は 7 世紀後半から 9 世紀後半にわたり（写真 16）、当該期においても人々の連続的な居住があったことが、中十条アパート地区の調査と合わせて明らかになりました。

写真 2　縄文時代の土坑（26 号土坑）（南から）

写真 3　縄文時代の土器と石器

写真 4　弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡（141 号住居跡）（北から）

写真 5　同住居跡内土器出土状態（北から）

写真 6　同住居跡内直口壺出土状態（南から）

写真 7　同住居跡内出土直口壺正面（1/5）

写真 8　同住居跡内出土直口壺内面（1/5）

写真 9　弥生時代後期から古墳時代初頭の掘立柱建物跡（7 号掘立柱建物跡）（南から）

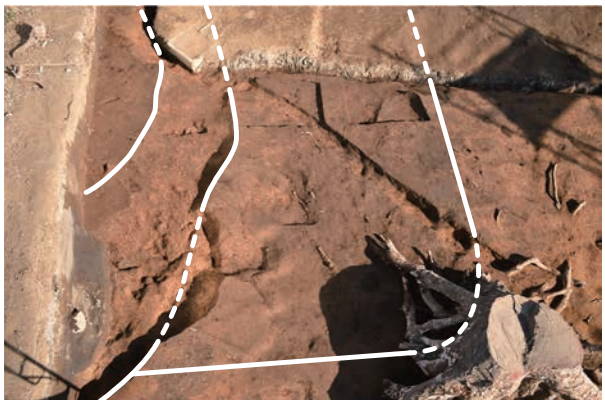


写真 10　弥生時代後期から古墳時代初頭の溝跡（4 号溝跡）（西から）

写真 11　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器

写真 12　古代の竪穴住居跡（135 号住居跡）（東から）

写真 13　古代の竪穴住居跡（126 号住居跡）土器出土状態（西から）

写真 14　古代の竪穴住居跡（132 号住居跡）土師器出土状態（南から）

写真 15　古代の刀子（2/3）

写真 16　古代の土師器

A Survey of the Minamibashi Site, One of the Jujodai Sites (Oji and Oji Boshi Apartment House Zone)

The Jujodai Sites (Kita Ward Site No. 19) are located along the cliff line of Jujodai in the north of the Hongo Plateau on the east edge of the Musashino Plateau. It is a vast group of sites, about 1.1 km east to west and 4.6 km north to south. The present investigation site is the Minamibashi Site. The Minamibashi Site, in the southwest part of the Jujodai Sites, is located throughout the area of 1-chome, Nakajujo, and 2-chome, Oji Honmachi. Previous surveys have revealed that there were ancient settlements here from the late Yayoi Period to the early Tumulus Period.

The present investigation has excavated relics and remains from the Jomon Period, the late Yayoi Period to the early Tumulus Period, and the Ancient Times.

Two earthen pits, round cornered and rectangular, from the Jomon Period have been found. Both ends of the longitudinal axes of these pits face inward, about 1.0 m deep. There is also one pit dwelling and one pillar hole that are considered to be from the Jomon Period.

The top soil layer and disturbance of the investigation site also revealed some pieces of Jomon earthenware and stoneware, suggesting that people lived in the Minamibashi Site during the Jomon Period as well.

From the soil layers dating back to the late Yayoi Period and the early Tumulus Period, five pit dwellings, one dug pillar dwelling, 8 pillar pits, four earthen pits, and one former groove were excavated.

From the Former Dwelling 141, which was found in the middle of the investigation site, well-preserved relics were unearthed, including a crushed pot with an almost complete rectangular mouth. Regarding the pillar holes, many were excavated together in the north of the investigation site. Of these, it is thought that one dug pillar dwelling was restored and rebuilt several times. The site, found in the north of the investigation site, may be linked to grave no. 2 with square ditches around it, which was excavated during the investigation of the Naka Jujo Apartment House zone.

Compared with previous survey findings on the Naka Jujo Apartment House zone and the Minamibashi Site, the Oji and Oji Boshi Apartment House Zone accounted for only a few sites in the relevant era. This investigation zone is therefore presumed to be at the south end of the settlement from the relevant era in the Minamibashi Site.

From the soil layers dating back to the Ancient Times nine pit dwellings and four pillar holes were unearthed.

Most of the pit dwellings were lost due to the disturbance. As for the furnace kitchen ranges, only a part of their sides and scorched soil remained. The former dwellings date back to the late 7th to late 9th century. It has been found, along with the investigation of the Naka Jujo Apartment House Zone, that people continuously lived there in that era too.

序　言

北区十条台遺跡群南橋遺跡の発掘調査は、東京都住宅政策本部東部住宅建設事務所による、都営王子・王子母子アパートの撤去等事業に先立って行われました。

遺跡は、東京都北区王子本町二丁目に所在し、武蔵野台地東縁部の本郷台地縁辺部にあたる十条台に位置しています。南橋遺跡はこれまでの調査成果から、弥生時代後期から古墳時代初頭および古代の集落遺跡であることが分かっています。

今回の発掘調査では、縄文時代、弥生時代後期から古墳時代初頭、古代の遺構や遺物が検出され、本遺跡を含む周辺地域一帯の歴史と地域史の解明に繋がる貴重な資料が得られました。特に、南橋遺跡の弥生時代後期から古墳時代初頭の集落の様相が明らかになったことは大きな成果と言えます。

これらの成果をまとめた本報告書が地域研究の資料としてばかりでなく、埋蔵文化財に対する理解を深める上で、北区民の皆様をはじめ多くの方々にご活用していただけることが出来れば幸いです。

本報告の刊行にあたり、ご協力とご指導を賜りました東京都住宅政策本部東部住宅建設事務所、東京都教育委員会、北区教育委員会に厚く御礼申し上げるとともに、ご教示いただきました研究者の皆様と調査にご協力いただいた地域住民の皆様に、心より感謝いたします。

令和５年９月

公益財団法人　東京都教育支援機構
理事長　坂東 眞理子

例　言

1　本書は都営中十条アパート及び都営王子・王子母子アパート撤去等事業に伴う北区十条台遺跡群南橋遺跡（北区 No.19 遺跡）の発掘調査報告書（東京都埋蔵文化財センター調査報告 第 372 集）である。なお、本報告は 2 分冊構成となっており、各分冊の主な掲載内容は、以下のとおりである。

第 1 分冊　中十条アパート地区に関わる報告

第 2 分冊　（本書）王子・王子母子アパート地区に関わる報告

中十条アパート地区及び王子・王子母子アパート地区に関わる総括報告

2　発掘調査事業は東京都住宅政策本部東部住宅建設事務所の委託を受け、公益財団法人東京都スポーツ文化事業団（現、東京都教育支援機構）　東京都埋蔵文化財センターが実施した。

3　本調査に先立つ試掘調査は、平成 29 年 1 月 16 日から 1 月 25 日にかけて、北区教育委員会立ち会いのもと、共和開発株式会社によって実施された。

4　遺跡所在地：東京都北区王子本町二丁目 12 番 2 ほか

5　調査面積：4,698㎡

6　調査及び一次整理期間：令和 2 年 12 月 1 日～令和 4 年 2 月 28 日

二次整理及び報告書作成期間：令和 4 年 3 月 1 日～令和 5 年 5 月 31 日

7　本事業における事業者との事業調整等は東京都教育庁地域教育支援部管理課が担当・指導した。

課長代理	鈴木　徳子		（令和 2 年 12 月 1 日～令和 5 年 5 月 31 日）
埋蔵文化財係	担当学芸員	野口　舞	（令和 2 年 12 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日）
			（令和 4 年 4 月 1 日～令和 5 年 5 月 31 日）
		山田　和史	（令和 3 年 4 月 1 日～令和 3 年 5 月 31 日）
		石井香代子	（令和 3 年 6 月 1 日～令和 4 年 3 月 31 日）

8　調査担当者

東京都埋蔵文化財センター北区王子アパート（王子本町）分室

調査課課長　　西澤　明（令和 2 年 12 月 1 日～令和 5 年 5 月 31 日）

調査研究主任　飯塚武司（令和 2 年 12 月 1 日～令和 4 年 8 月 31 日）

調査研究員　　島﨑瑛美（令和 2 年 12 月 1 日～令和 5 年 5 月 31 日）

調査協力　　岩倉建設株式会社　　テイケイトレード株式会社

9　本報告書の執筆はⅠ～Ⅲ章・Ⅴ章 2 節（2）（5）B（2）・C・D（2）、3 節を島﨑瑛美、Ⅴ章 1 節、2 節（1）（3）（4）（5）A・B（1）・D（1）を飯塚武司が担当し、Ⅴ章のみ文末に文責を示した。なお、遺跡の位置と環境については、第 1 分冊で記述しており、重複することから割愛している。

10　本報告書の編集は島﨑瑛美が行った。

11　出土遺物の分析に関して、下記の機関に協力を得た。

弥生時代後期から古墳時代初頭竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定：株式会社古環境研究所

12　本報告の概要については、令和 2 ～ 4 年度「東京都埋蔵文化財センター年報」に報告されているが、本書の刊行をもって正式報告とする。

13　出土遺物及び発掘調査・整理に関わる図面・写真等の記録類は、北区教育委員会で保管している。

14　本文用例等

（1）土層の土色や含有物の面積割合、土器の色調等の標記には、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（日本色彩研究所発行　1998 年）を用い、土色・マンセルノーションで示している。

（2）出土遺物の注記番号は、「JMOA- ○○○」である。

（3）挿図中に標記した標高値は、東京湾平均海面（T.P.）に基づいた標高を示している。

（4）調査時における遺構平面図の実測、遺物の取り上げはトータル・ステーションシステムにより行った。

・光波測距器：トプコン　トータルステーション ES

・データコレクター：トプコン FC-250

・使用ソフト：Totalstation 3 Dimention desighed for IntelliCAD

（5）本報告書掲載の地形図は以下のとおりである。

・国土地理院電子地形図 25000

・国土地理院基盤地図情報

15　グリッドの設定は北区の公共座標（世界測地系）を使用し、5m を単位として設定し、必要に応じてその中を細分した。標高は T.P. を用いている。遺跡の座標については以下のとおりである。

A22 杭　十条台遺跡群南橋遺跡王子・王子母子アパート地区 0 基点座標

世界測地系（日本測地系 2000）　X=-27065.000　Y=-9395.000

北緯 35° 45′ 21.46243″　東経 139° 43′ 45.99369″　真北 0° 03′ 38.54″

16　発掘調査及び整理・報告書作成作業に関して、下記の方々と機関にご指導・ご協力を賜った。記して深謝いたします。（順不同・敬称略）

牛山英昭　東京都住宅政策本部東部住宅建設事務所　東京都教育庁地域教育支援部管理課

北区教育委員会事務局教育振興部飛鳥山博物館事業係

17　本報告書内で用いた遺構の略称記号は以下のとおりである。なお、竪穴住居跡等に伴う柱穴等にも、P を使用している。

SI：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物跡　SK：土坑　SD：溝跡　SX：方形周溝墓　P：柱穴

18　各挿図中で用いた主なスクリーントーンは以下のとおりである。

遺構　ローム層　カマド・袖　カマド火床面

焼土範囲　柱痕

遺物　繊維　赤彩　石器磨面・付着物

炭化材

19　各挿図中で用いた主なドットは以下のとおりである。

●　土器　▲　土製品　△　石器・礫　□　鉄器

◆　炭化材　◇　炭化種子

目　次

十条台遺跡群南橋遺跡（王子・王子母子アパート地区）の調査
Summary
序言
例言

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の方法 …… 1
3　調査の経過 …… 4
Ⅱ　層序 …… 6
Ⅲ　遺構と遺物 …… 9
1　縄文時代 …… 11
1）遺構 …… 11
A　住居跡 …… 11
B　柱穴 …… 11
C　土坑 …… 11
2）遺物 …… 13
A　遺構内出土遺物 …… 13
B　遺構外出土遺物 …… 13
2　弥生時代後期から古墳時代初頭 …… 18
1）遺構 …… 18
A　住居跡 …… 18
B　掘立柱建物跡 …… 20
C　柱穴 …… 21
D　土坑 …… 21
E　溝跡 …… 21
2）遺物 …… 22
A　遺構内出土遺物 …… 22
B　遺構外出土遺物 …… 23
3　古代 …… 38
1）遺構 …… 38
A　住居跡 …… 38
B　柱穴 …… 42
2）遺物 …… 43

A　遺構内出土遺物…… 43
B　遺構外出土遺物…… 45
C　石器…… 45
D　鉄器…… 45
Ⅳ　自然科学分析…… 71
Ⅴ　調査の成果と課題…… 74
1　縄文時代…… 74
2　弥生時代後期から古墳時代初頭…… 74
3　古代…… 90
引用・参考文献…… 97
報告書抄録

巻頭図目次

写真 1　調査区全景（北から）…… i
写真 2　縄文時代の土坑（26 号土坑）（南から）… iii
写真 3　縄文時代の土器と石器…… iii
写真 4　弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡（141 号住居跡）（北から）…… iii
写真 5　同住居跡内土器出土状態（北から）…… iii
写真 6　同住居跡内直口壺出土状態（南から）…… iii
写真 7　同住居跡内出土直口壺正面（1/5）…… iv
写真 8　同住居跡内出土直口壺内面（1/5）…… iv
写真 9　弥生時代後期から古墳時代初頭の掘立柱建物跡（7 号掘立柱建物跡）（南から）……iv
写真 10　弥生時代後期から古墳時代初頭の溝跡（4 号溝跡）（西から）……iv
写真 11　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器……iv
写真 12　古代の竪穴住居跡（135 号住居跡）（東から）…… v
写真 13　古代の竪穴住居跡（126 号住居跡）土器出土状態（西から）…… v
写真 14　古代の竪穴住居跡（132 号住居跡）土師器出土状態（南から）…… v
写真 15　古代の刀子（2/3）…… v
写真 16　古代の土師器…… v

挿図目次

第 1 図　遺跡の位置（1/25,000）……1
第 2 図　調査区区割図（1/800）……3
第 3 図　基本層序実測位置（1/700）……7
第 4 図　基本層序（1/80）……8
第 5 図　発掘調査区　全体図（1/700）…… 10
第 6 図　縄文時代　遺構分布図（1/700）…… 12
第 7 図　縄文時代の竪穴住居跡・柱穴（1/60・1/40）…… 14
第 8 図　縄文時代の土坑（1/40）…… 15
第 9 図　縄文時代の土器・石器（1/3・2/3・1/1）…… 16
第 10 図　弥生時代後期から古墳時代初頭遺構分布図（1/700）…… 19
第 11 図　127 号住居跡（1）（1/30・1/60）…… 24
第 12 図　127 号住居跡（2）・128 号住居跡（1/4・1/60）…… 25
第 13 図　129 号住居跡・138 号住居跡（1/60）…… 26
第 14 図　141 号住居跡（1）（1/20・1/60）…… 27
第 15 図　141 号住居跡（2）（1/30）…… 28
第 16 図　弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴群（1/50）…… 29
第 17 図　7 号掘立柱建物跡（1）（1/60）…… 30
第 18 図　7 号掘立柱建物跡（2）（1/40）…… 31
第 19 図　7 号掘立柱建物跡（3）・その他の柱穴（1/40）…… 32

第 20 図　その他の柱穴（2）（1/40）…… 33
第 21 図　弥生時代後期から古墳時代初頭の土坑・溝跡（1/4・1/40・1/80）…… 34
第 22 図　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器（1/3・1/4）…… 35
第 23 図　古代　遺構分布図（1/700）…… 39
第 24 図　126 号住居跡（1）（1/30・1/60）…… 46
第 25 図　126 号住居跡（2）（1/4・1/20・1/30・1/60）…… 47
第 26 図　126 号住居跡（3）・131 号住居跡（1/30・1/60）…… 48
第 27 図　132 号住居跡（1）（1/60）…… 49
第 28 図　132 号住居跡（2）（1/4・1/8・1/30・1/60）…… 50
第 29 図　134 号住居跡（1）（1/30・1/60）…… 51
第 30 図　134 号住居跡（2）（1/4・1/8・1/60）…… 52
第 31 図　135 号住居跡（1）（1/30・1/60）…… 53
第 32 図　135 号住居跡（2）（1/4・1/8・1/30・1/60）…… 54
第 33 図　136 号住居跡（1）（1/30・1/60）…… 55
第 34 図　136 号住居跡（2）（1/8・1/30・1/60）…… 56
第 35 図　137 号住居跡（1）（1/60）…… 57
第 36 図　137 号住居跡（2）（1/20・1/60）…… 58
第 37 図　140 号住居跡（1）（1/30・1/60）…… 59
第 38 図　140 号住居跡（2）（1/30・1/60）…… 60
第 39 図　143 号住居跡（1）（1/30・1/60）…… 61
第 40 図　143 号住居跡（2）（1/8・1/60）…… 62
第 41 図　古代の柱穴（1/40）…… 63
第 42 図　古代の土師器・須恵器（1）（1/4）…… 64
第 43 図　古代の土師器・須恵器（2）（1/4）…… 65
第 44 図　古代の石器・鉄器（1/2・1/3）…… 66
第 45 図　十条台遺跡群南橋遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 …… 73
第 46 図　南橋遺跡調査地点全体図（1/2,700）… 75
第 47 図　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器分類図（1/8）…… 79
第 48 図　南橋遺跡　土器編年表（1/10）…… 83
第 49 図　中十条アパート地区、王子・王子母子アパート地区　弥生時代後期から古墳時代初頭の掘立柱建物跡（1/200・1/400）…… 91
第 50 図　2 号方形周溝墓・4 号溝跡（1/100）… 93
第 51 図　中十条アパート地区　弥生時代後期から古墳時代初頭　時期別遺構分布図（1/600）…… 94
第 52 図　王子・王子母子アパート地区　弥生時代後期から古墳時代初頭　時期別遺構分布図（1/1,200）…… 95
第 53 図　中十条アパート、王子・王子母子アパート地区　古代　時期別遺構分布図（1/1,200）…… 96

表目次

第 1 表　発掘調査・整理作業工程表…… 5
第 2 表　縄文時代土器観察表 …… 17
第 3 表　縄文時代石器観察表 …… 17
第 4 表　弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡　計測値一覧表 …… 36
第 5 表　弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴計測値一覧表 …… 36
第 6 表　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器観察表（1）（2）…… 36
第 7 表　古代の竪穴住居跡　計測値一覧表 …… 66
第 8 表　古代の土師器・須恵器（1）～（4）観察表 …… 67
第 9 表　古代の石器　観察表 …… 70
第 10 表　古代の鉄器　観察表 …… 70
第 11 表　樹種同定結果 …… 71
第 12 表　南橋遺跡調査地点一覧表（1）（2）…… 76

写真図版目次

図版 1
1．王子･王子母子アパート地区着手前①（北から）
2．王子･王子母子アパート地区着手前②（北から）
図版 2
1．Ⅷ区、Ⅸ①区全景（南から）
2．Ⅸ②区全景（北から）
図版 3
1．Ⅸ③区全景（北から）
2．Ⅹ区全景（南から）
図版 4
1．Ⅺ①区全景（北から）
2．Ⅺ② -1、2 区全景（北から）
図版 5
1．Ⅺ② -3 区全景（東から）
2．Ⅻ区全景（北から）
図版 6
1．Ⅷ区基本層序（A）（南から）
2．Ⅷ区基本層序（B）（西から）
3．Ⅸ区基本層序（C）（北から）
4．Ⅹ区基本層序（D）（西から）
5．Ⅹ区基本層序（E）（東から）
6．Ⅺ区基本層序（F）（東から）
7．Ⅺ区基本層序（J）（西から）
8．Ⅻ区基本層序（L）（北から）
図版 7
1．133 号住居跡全景（西から）
2．133 号住居跡完掘（西から）
3．88 号柱穴完掘（東から）
4．88 号柱穴堆積土層（東から）
5．22 号土坑完掘（南から）
6．22 号土坑堆積土層（南から）
7．26 号土坑完掘（南から）
8．26 号土坑堆積土層（南から）
図版 8
1．127 号住居跡全景（西から）
2．127 号住居跡完掘（西から）
図版 9
1．127 号住居跡 P4 完掘（南から）
2．127 号住居跡 P4 堆積土層（東から）
3．127 号住居跡 P5 完掘（南から）
4．127 号住居跡 P5 堆積土層（東から）
5．127 号住居跡遺物出土状況（南から）
6．127 号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）
7．128 号住居跡完掘（南から）
8．128 号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）
図版 10
1．129 号住居跡全景（南から）
2．129 号住居跡完掘（南から）

３．129 号住居跡 A-A' 堆積土層（西から）
４．129 号住居跡 C-C' 堆積土層（南から）
５．138 号住居跡全景（南から）
６．138 号住居跡完掘（南から）
７．138 号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）
８．138 号住居跡 B-B' 堆積土層（東から）

図版 11
１．141 号住居跡全景（北から）
２．141 号住居跡完掘（北から）

図版 12
１．141 号住居跡遺物出土状態（北から）
２．141 号住居跡土器出土状態①（北から）
３．141 号住居跡土器出土状態②（北から）
４．141 号住居跡 P1 完掘（南から）
５．141 号住居跡 P2 完掘（北から）

図版 13
１．弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴群(南から)
２．60 号柱穴完掘（東から）
３．60 号柱穴堆積土層（東から）
４．61 号柱穴完掘（東から）
５．61 号柱穴堆積土層（東から）

図版 14
１．65 号柱穴完掘（東から）
２．65 号柱穴堆積土層（東から）
３．62・65 号柱穴完掘（東から）
４．62 号柱穴堆積土層（東から）
５．63 号柱穴完掘（東から）
６．63 号柱穴堆積土層（東から）
７．64 号柱穴完掘（東から）
８．64 号柱穴堆積土層（東から）

図版 15
１．66 号柱穴完掘（南から）
２．66 号柱穴堆積土層（南から）
３．67 号柱穴完掘（東から）
４．67 号柱穴堆積土層（東から）
５．68 号柱穴完掘（西から）
６．68 号柱穴堆積土層（西から）
７．69 号柱穴完掘（東から）
８．69 号柱穴堆積土層（東から）

図版 16
１．70 号柱穴完掘（南から）
２．70 号柱穴堆積土層（南から）
３．73 号柱穴完掘（東から）
４．73 号柱穴堆積土層（東から）
５．75 号柱穴 A-A' 堆積土層（東から）
６．75 号柱穴 B-B' 堆積土層（東から）
７．76 号柱穴完掘（北から）
８．76 号柱穴堆積土層（北から）

図版 17
１．77・78・79 号柱穴完掘（北から）
２．77 号柱穴堆積土層（南から）
３．78 号柱穴堆積土層（西から）
４．79 号柱穴堆積土層（南から）
５．80 号柱穴完掘（南から）
６．80 号柱穴堆積土層（南から）
７．81・82 号柱穴完掘（西から）
８．81・82 号柱穴堆積土層（西から）

図版 18
１．84 号柱穴完掘（東から）
２．84 号柱穴堆積土層（東から）
３．21 号土坑完掘（東から）
４．21 号土坑堆積土層（北から）
５．23 号土坑完掘（南から）
６．23 号柱穴堆積土層（東から）
７．24 号土坑完掘（南から）
８．25 号土坑堆積土層（東から）

図版 19
１．4 号溝跡完掘①（東から）
２．4 号溝跡完掘②（西から）
３．4 号溝跡 A-A' 堆積土層（東から）
４．4 号溝跡 B-B' 堆積土層（東から）

図版 20
１．126 号住居跡全景（西から）
２．126 号住居跡完掘（西から）

図版 21
１．126 号住居跡カマド全景（西から）
２．126 号住居跡カマド完掘（西から）
３．126 号住居跡カマド N-N' 堆積土層（西から）

4．126 号住居跡カマド M-M' 堆積土層（南から）
5．126 号住居跡土師器出土状態（西から）
6．126 号住居跡須恵器出土状態（西から）
7．126 号住居跡鉄器出土状態（南から）
8．126 号住居跡 B-B' 堆積土層（東から）

図版 22
1．131 号住居跡全景（西から）
2．131 号住居跡完掘（西から）
3．131 号住居跡焼土範囲（西から）
4．131 号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）
5．131 号住居跡 B-B' 堆積土層（西から）

図版 23
1．132 号住居跡全景（東から）
2．132 号住居跡完掘（東から）

図版 24
1．132 号住居跡カマド全景（南から）
2．132 号住居跡カマド完掘（南から）
3．132 号住居跡カマド J-J' 堆積土層（西から）
4．132 号住居跡カマド内土師器出土状態(西から)
5．132 号住居跡土師器出土状態（西から）
6．132 号住居跡鉄器出土状態（北から）
7．132 号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）
8．132 号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）

図版 25
1．134 号住居跡全景（西から）
2．134 号住居跡完掘（西から）

図版 26
1．134 号住居跡カマド焼土範囲（西から）
2．134 号住居跡カマド完掘（西から）
3．134 号住居跡カマド I-I' 堆積土層（西から）
4．134 号住居跡カマド H-H' 堆積土層（南から）
5．134 号住居跡 P1 完掘（西から）
6．134 号住居跡 P1 堆積土層（西から）
7．134 号住居跡鉄器出土状態（西から）
8．134 号住居跡 B-B' 堆積土層（西から）

図版 27
1．135 号住居跡全景（東から）
2．135 号住居跡完掘（東から）

図版 28
1．135 号住居跡カマド全景（南から）
2．135 号住居跡カマド完掘（南から）
3．135 号住居跡 P3 完掘（南から）
4．135 号住居跡 P3 堆積土層（南から）
5．135 号住居跡 P7 完掘（南から）
6．135 号住居跡 P7 堆積土層（東から）
7．135 号住居跡鉄器出土状態（南から）
8．135 号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）

図版 29
1．136 号住居跡全景（西から）
2．136 号住居跡完掘（西から）

図版 30
1．136 号住居跡カマド全景（西から）
2．136 号住居跡カマド完掘（西から）
3．136 号住居跡 P1 完掘（西から）
4．136 号住居跡 P1 堆積土層（西から）
5．136 号住居跡土師器出土状態①（西から）
6．136 号住居跡土師器出土状態②（西から）
7．136 号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）
8．136 号住居跡 B-B' 堆積土層（東から）

図版 31
1．137 号住居跡全景（西から）
2．137 号住居跡完掘（西から）

図版 32
1．137 号住居跡焼土範囲全景（南から）
2．137 号住居跡焼土範囲堆積土層（西から）
3．137 号住居跡 P1 完掘（東から）
4．137 号住居跡 P2 完掘（東から）
5．137 号住居跡 P3 完掘（東から）
6．137 号住居跡 P4 完掘（東から）
7．137 号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）
8．137 号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）

図版 33
1．140 号住居跡全景（南から）
2．140 号住居跡完掘（南から）

図版 34
1．140 号住居跡カマド全景（南から）
2．140 号住居跡カマド完掘（南から）

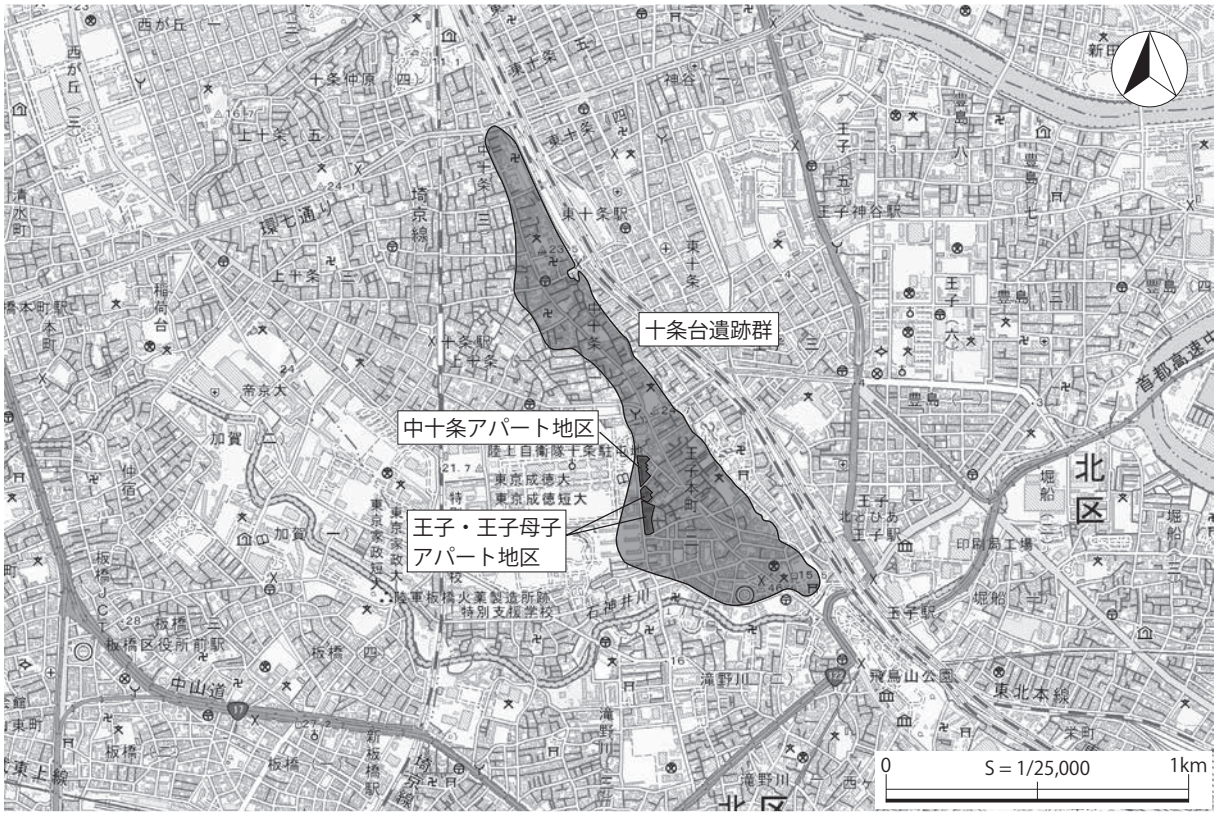
３．140 号住居跡 P1 完掘（南から）
４．140 号住居跡 P1 堆積土層（東から）
５．140 号住居跡 P2 完掘（南から）
６．140 号住居跡 P2 堆積土層（南から）
７．140 号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）
８．140 号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）
図版 35
１．143 号住居跡全景（南から）
２．143 号住居跡完掘（南から）
図版 36
１．143 号住居跡カマド全景（南から）
２．143 号住居跡カマド完掘（南から）
３．143 号住居跡カマド H-H' 堆積土層（南から）
４．143 号住居跡カマド G-G' 堆積土層（東から）
５．143 号住居跡カマド石製支脚出土状態(南から)
６．143 号住居跡カマド石製支脚出土状態 - 近接（南から）
７．143 号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）
８．143 号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）
図版 37
１．83 号柱穴完掘（西から）
２．83 号柱穴堆積土層（西から）
３．85 号柱穴完掘（南から）
４．85 号柱穴堆積土層（南から）
５．86 号柱穴完掘（東から）
６．86 号柱穴堆積土層（東から）
７．87 号柱穴完掘（東から）
８．87 号柱穴堆積土層（南から）
図版 38
縄文時代の土器・石器
図版 39
弥生時代後期から古墳時代初頭の土器
図版 40
古代の土師器・須恵器（126 号住居跡）
図版 41
古代の土師器・須恵器（126 号住居跡以外）
図版 42
古代の石器・鉄器

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経緯

本発掘調査は、東京都住宅政策本部東部住宅建設事務所（以下「事業者」という。）による、都営王子・王子母子アパートの撤去等事業に伴い、事前に実施したものである。今回調査対象となった地区は、東京都北区王子本町二丁目に所在しており、当該地区とその周辺は南橋遺跡にあたり、十条台遺跡群（北区 No.19 遺跡）として包括されている。本事業による発掘調査の対象面積は、4,698㎡である。

本事業に先立ち、埋蔵文化財保護法 94 条に基づく届出、試掘調査等の経緯を踏まえ、本発掘調査の実施が決定した。調査は除却工事完了後に開始されることとなり、令和 2 年 10 月 28 日付で東京都埋蔵文化財センター（以下「都埋文」という。）から東京都教育委員会（以下「都教委」という。）へ発掘届（2 ス文事埋文 2378 号）を提出し、令和 2 年 11 月 25 日付で都教委から通知（2 教地管理第 2802 号）を受け取った。令和 2 年 11 月より準備工を行い、12 月より発掘調査に着手した。



※電子地形図 25000（国土地理院）を加工して作成

第 1 図　遺跡の位置（1/25,000）

2　調査の方法

調査対象地は、東京都遺跡地図に「十条台遺跡群（北区 No.19 遺跡）」として登録された遺跡内の南西側に位置し、十条台遺跡群の中でも特に南橋遺跡と呼ばれる範囲に該当する。十条台遺跡群は複数の遺跡で構成されており、南橋遺跡の南側には宿遺跡、南東側には亀山遺跡が位置する。

調査の方法は都教委と北区教育委員会（以下「区教委」という。）との協議・指導の上決定した。住居跡や土坑等の遺構番号は、中十条アパート地区の調査で使用した番号の続きから付番している。また、遺構調査の方法や作図、遺物の取り上げ方法や写真撮影等の記録については、これまでの調査と互換性を保持できるようおおよそ準拠している。

発掘調査の作業手順については、東京都埋蔵文化財センターの作業工程水準表及び掘削作業標準に従って実施した。

また調査にあたり月に一回程度、事業者・都教委・区教委と都埋文の四者で北区王子アパート（王子本町）分室において定例会議を行い、発掘調査の進捗状況や調査工程等を確認し、調査状況を把握・共有し、調査を円滑に進めるための協議を行った。

調査区設定

調査区の設定は、調査区の軸線方向を国土座標に準拠させた 5 × 5m 方眼で区画し、その方眼 1 単位を 1 グリッドとした。グリッド名は北西隅を基点に、東西軸にアルファベットを D ～ M、南北軸にアラビア数字を 21 ～ 54 まで付した。また調査区内は、発生残土の場内処理や出入口の関係で、Ⅷ区～Ⅻ区に区分し、さらにⅨ区は①～③、Ⅺ区は①と② -1 ～ 3 に分割して調査を行った。区分けのローマ数字は中十条アパート地区の調査で使用した数字の続きから付番している（第 2 図）。

座標軸の基点（原点）は、調査区を包括するグリッド域北東端の A22 杭を 0 基点原点杭とし、世界測地系（日本測地系 2000）に基づく座標値は、平面直角座標 X=-27065.000・北緯 35° 45′ 21.46243″、Y=-9395.000・東経 139° 43′ 45.99369″、真北 0° 03′ 38.54″を示す。

遺物の取り上げ

遺物の取り上げ方法は、遺構出土の遺物は光波測量機器（トータル・ステーションシステム）を利用して、その出土位置を記録している。遺構等の実測に関しても光波測量機器を活用し、そこで得られた 3 次元データについては、発掘調査整理支援システムで処理する方法を採択して、作業の省力化とデータの信頼性確保を図った。

本遺跡はこれまでの調査や試掘成果から、弥生時代から古墳時代初頭と古代を中心とした遺構・遺物が遺存している可能性が高いため、調査は基本的に、表土掘削を重機を用いて行い、遺構の掘削や図化作業を段階的に人力で行った。

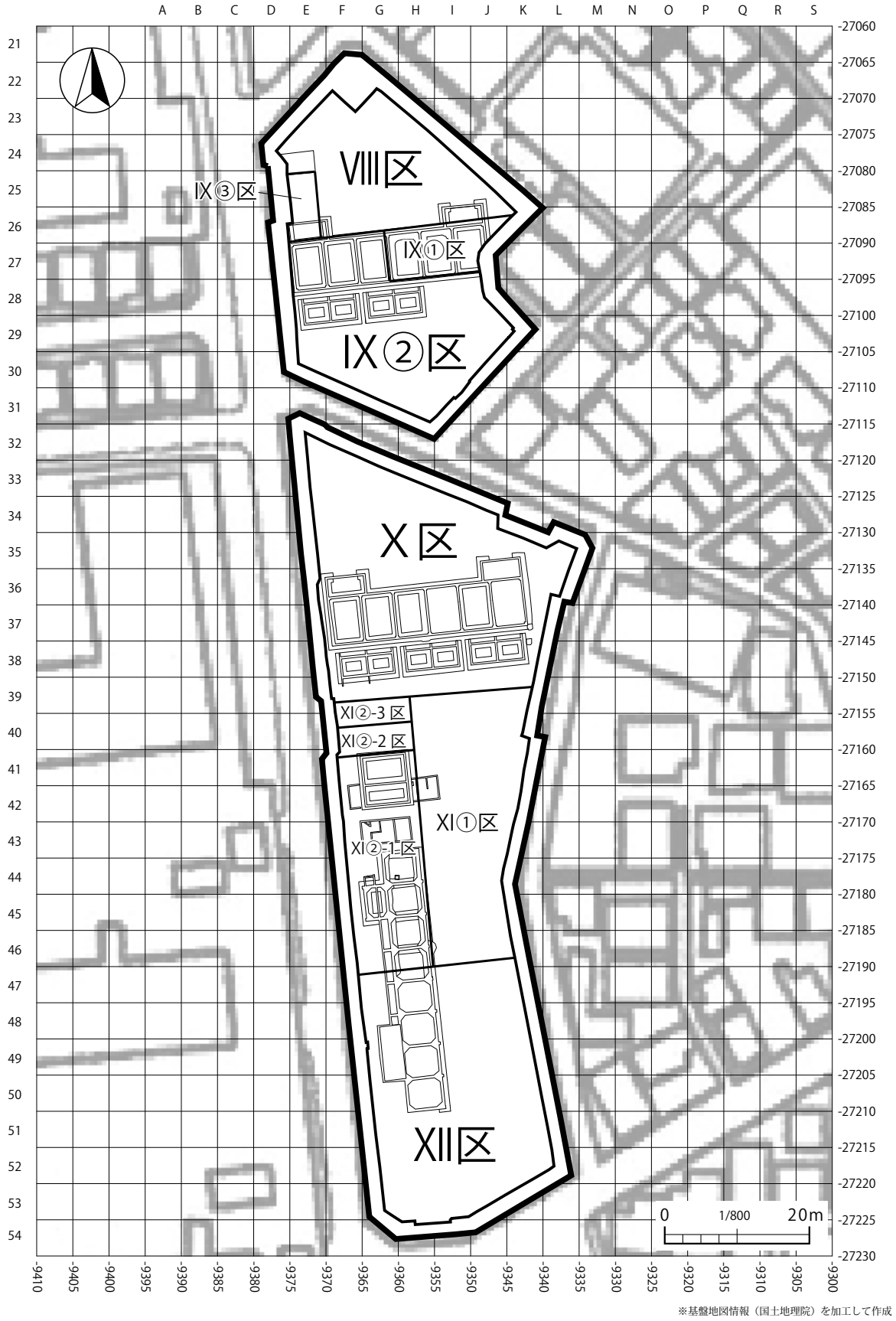
遺構図の作成は、平面図は遣り方測量による手描作図とトータル・ステーションシステムによる測量を併用して図化を行っている。土層堆積状態等の断面図は基本的には手描きによる作図である。

出土遺物の取り上げは、トータル・ステーションシステムにより出土地点を記録して取り上げることを基本としているが、表土や攪乱層、明らかに混在していると判断される遺物については、一括して取り上げている。

写真撮影

記録写真の撮影は 35mm フィルムカメラ、デジタルカメラを併用して撮影を行っている。また、それらのカメラを用いて高所作業車による撮影を適宜実施した、調査区全体の写真は、発生残土を場内で処理を行う関係上、調査区をⅧ区～Ⅻ区に区分したため、一度に全てを撮影することは不可能で、各区について高所作業車を適宜用いて撮影を行っている。

遺構・遺物精査



※基盤地図情報（国土地理院）を加工して作成

第 2 図　調査区区割図（1/800）

検出された遺構と遺物は調査時と整理作業時に精査し、出土遺物やその配置から帰属時期を決定している。さらに遺構の性格や帰属時期における特性を踏まえて報告書への掲載を判断し、個別遺構図・遺構全体図・遺物分布図及び各種観察表を作成している。

出土遺物については、各時期の遺構や出土層位等を鑑みて器種分類し、遺存状態が良好な資料を中心に抽出して掲載している。

報告書作成

報告書の作成は、挿図・図版・表等全てパソコン上で作業を行った。遺構図版は、手描き図面はスキャナーで取り込み、それを下図としてドローソフト（Adobe Illustrator CC）に取り込みトレース及び版組みを行った。遺物図面は、手描きにより作成した実測図をスキャナーで取り込みトレースし、拓本画像と合わせて版組みを行った。

これらのデータは編集ソフト（Adobe Indesign CC）に貼り付け、文章とともにレイアウトして編集したものを、印刷業者に入稿した。

3　調査の経過

令和２年 11 月下旬より準備工を行い、11 月 30 日までに完了した。調査事務所となる仮設建物はⅪ② -1 区に設置した。発掘作業は令和２年 12 月１日から令和４年２月 28 日まで行い、整理作業は令和４年２月１日から令和５年５月 31 日まで行った（第１表）。

調査区内は全体的に攪乱により大きく削られており、遺構の遺存状態は良いとは言えず、当初予定よりも遺構・遺物の検出数は少なかった。アパート基礎内でも遺構確認作業を行い、わずかに遺構が遺存している状態が確認された。また、各調査区に点在する樹木根については、表土掘削時及び遺構調査終了時に 0.35㎥バックホウを用いて抜根した。

発掘調査に伴う排土は場内に仮置きし、調査区の終了とともに埋戻し作業を行った。排土仮置き場については、防塵シートを設置し、水撒きを適宜行って、近隣への粉塵の飛散防止に努めた。

また、新型コロナウイルス感染症の対策を行ないながら調査することに留意した。発掘調査中は新たに作業員休憩所を増設して三密にならないよう調整し、マスク着用、手洗い・うがいを励行した。

令和２年度は、Ⅷ・Ⅸ区の調査を行った。Ⅷ区の調査を令和２年 12 月１日から、Ⅸ①区の調査を令和３年１月７日から開始した。北側から表土掘削を行って、排土はⅨ②区に仮置きし、調査終了後の令和３年２月 12 日から埋め戻しを行い、令和３年３月９日に終了した。

Ⅸ②区は令和３年２月 17 日から、Ⅸ③区は令和２年３月 16 日から調査を開始した。北側から表土掘削を行い、排土はⅧ・Ⅸ①区に仮置きして、調査終了後の令和３年３月 19 日から埋め戻しを開始し、令和３年３月 26 日に終了した（図版１～３）。

令和４年度は、Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ区の調査を行った。調査事務所をⅫ区に移動する関係上、最初はⅫ区の調査から開始した。令和３年４月１日に北側から表土掘削を行い、排土はⅪ区に仮置きして、調査終了後の令和３年５月 17 日から埋め戻しを開始し、令和３年５月 31 日に終了した。

Ⅹ区は令和３年５月 11 日から調査を開始した。北側から表土掘削を行い、排土はⅪ区に仮置きした。北側の調査が終了した後の７月７日に、調査事務所をⅪ② -1 区からⅫ区へ移動した。その後Ⅹ区南側の調査を開始し、Ⅹ区の調査が完全に終了したのは令和３年９月 10 日である。埋め戻しを令

和３年９月 14 日から開始し、令和３年 10 月 15 日に終了した。

XI区は、まずXI①区の調査を令和３年９月 21 日から開始した。北側から表土掘削を行い、排土はXII区に仮置きして、調査終了後の令和３年 11 月 25 日から埋め戻しを開始し、令和３年 12 月７日に終了した。XI② -1 区の表土掘削は、XI①区の埋め戻しと同時の令和３年 11 月 25 日から開始した。南側から掘削し、令和４年１月 12 日からはXI② -2 区の表土掘削も開始した。排土はＸ区へ仮置きし、調査終了後の令和４年１月 24 日から両地区の埋め戻しを開始し、令和４年１月 27 日に終了した。XI② -3 区は令和４年１月 31 日から表土掘削を開始し、排土はＸ区に仮置きして、調査終了後の令和４年２月 21 日に埋め戻しを開始して同日中に終了した（図版３～５）。

その後、調査区内の整備・保全作業等を行い、令和４年２月 28 日に全ての発掘調査が終了した。

発掘調査終了後、東京都教育委員会教育長宛に令和４年３月２日付で終了報告（３ス文事埋文第 2455 号）、埋蔵文化財保管証（３ス文事埋文第 2454 号）、発掘調査の概要（３ス文事埋文第 2456 号）、警視庁王子警察署宛に令和４年３月２日付で発見届（３ス文事埋文第 2454 号）を提出した。令和４年３月 16 日付で東京都教育委員会教育長より文化財認定（３教地管理第 4728 号）を受けた。

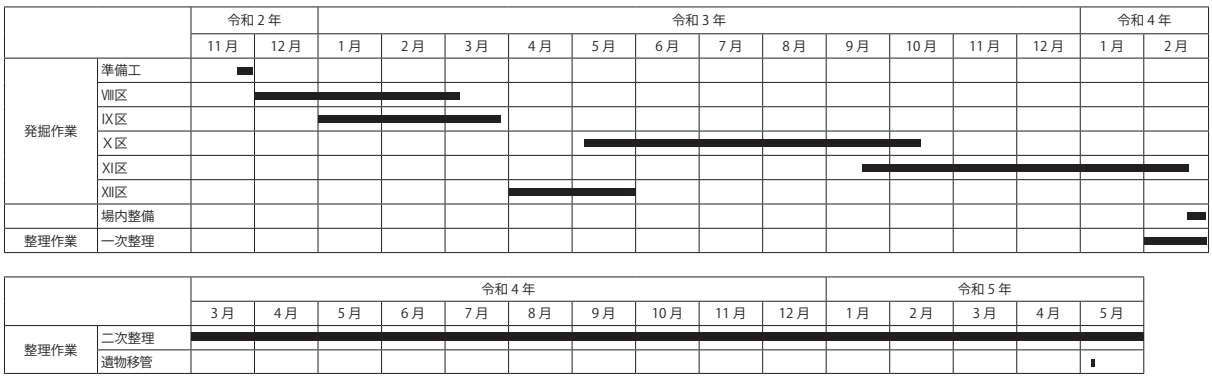
整理作業は、遺物の水洗い・注記の一次整理作業を現地事務所にて令和４年２月１日から開始し、令和４年２月 28 日に終了した。

二次整理作業は令和４年３月１日から開始し、令和４年４月１日以降の令和４年度は二次整理作業を中心に行った。主な作業は、測量データ処理、遺構図面の修正・トレース、遺物の分類、接合・復元、遺構写真整理、各種台帳作成等である。なお、調査地を事業者へ返還するため、令和４年７月１日より整理作業場を東京都埋蔵文化財センター大塚分室へ移動した。

令和５年度は、引き続き大塚分室にて二次整理作業を行った。主な作業は、報告書の版組み・修正及び編集作業、移管準備で、令和５年５月 31 日に全ての作業を終えた。

また、令和５年５月 10 日に、北区教育委員会の管理する北区内の収蔵庫へ遺物や記録類を移管した。

第１表　発掘調査・整理作業工程表



Ⅱ　層　序

南橋遺跡が属する十条台遺跡群は、武蔵野台地東縁部の本郷台地縁辺部にあたる十条台に立地する。台地の標高は 20m 台で、東側は急崖となり、荒川をはじめとする多くの水系によって形成された東京低地が広がる。今回の調査地の標高は、地表面で 24.0m 前後、遺構確認面で 23.0m 前後を測り、南側になるにつれて、徐々に地形が下っていく。

今回の調査では、調査区内の東・西・南・北壁と、深く掘り込まれた防空壕の壁面を利用して、堆積状態の記録作業を行った。調査区内は後世の土地利用によって地表面が平坦化し、全面に厚さ約 0.8 ～ 1.0m の盛土や攪乱が広がっていた。アパート建設・解体時に整地されたものと思われる。掘削は広範囲に及んでおり、部分的にアパート建設・解体以前のⅠ・Ⅱ層が残存していたが、ほとんどの箇所でⅢ層ソフトローム層は失われており、盛土や攪乱の下ではⅣ層ハードローム層が確認された。

ここでは、堆積状態の記録を取った箇所から比較的遺存状態の良い箇所を抽出し、基本層序として掲載する。各層の詳細は以下のとおりである（第３図、図版 6）。

Ⅰ層：黒褐色土（10YR2/2）　旧表土。径 5 ～ 10mm のローム粒子を 1 ～ 3% 含む。
締り弱い。粘性強い。

Ⅱ層：黒褐色土（10YR2/3）　耕作土。径 10㎜以上のロームブロックを 5 ～ 7％含む。
締り弱い。粘性強い。

Ⅳ層：褐色土（10YR4/6）　ハードローム層。径 1 ～ 2mm の赤色スコリアを 5 ～ 7％、径 1 ～ 2mm の黒色スコリアを 5 ～ 7％含む。
締り強い。粘性強い。

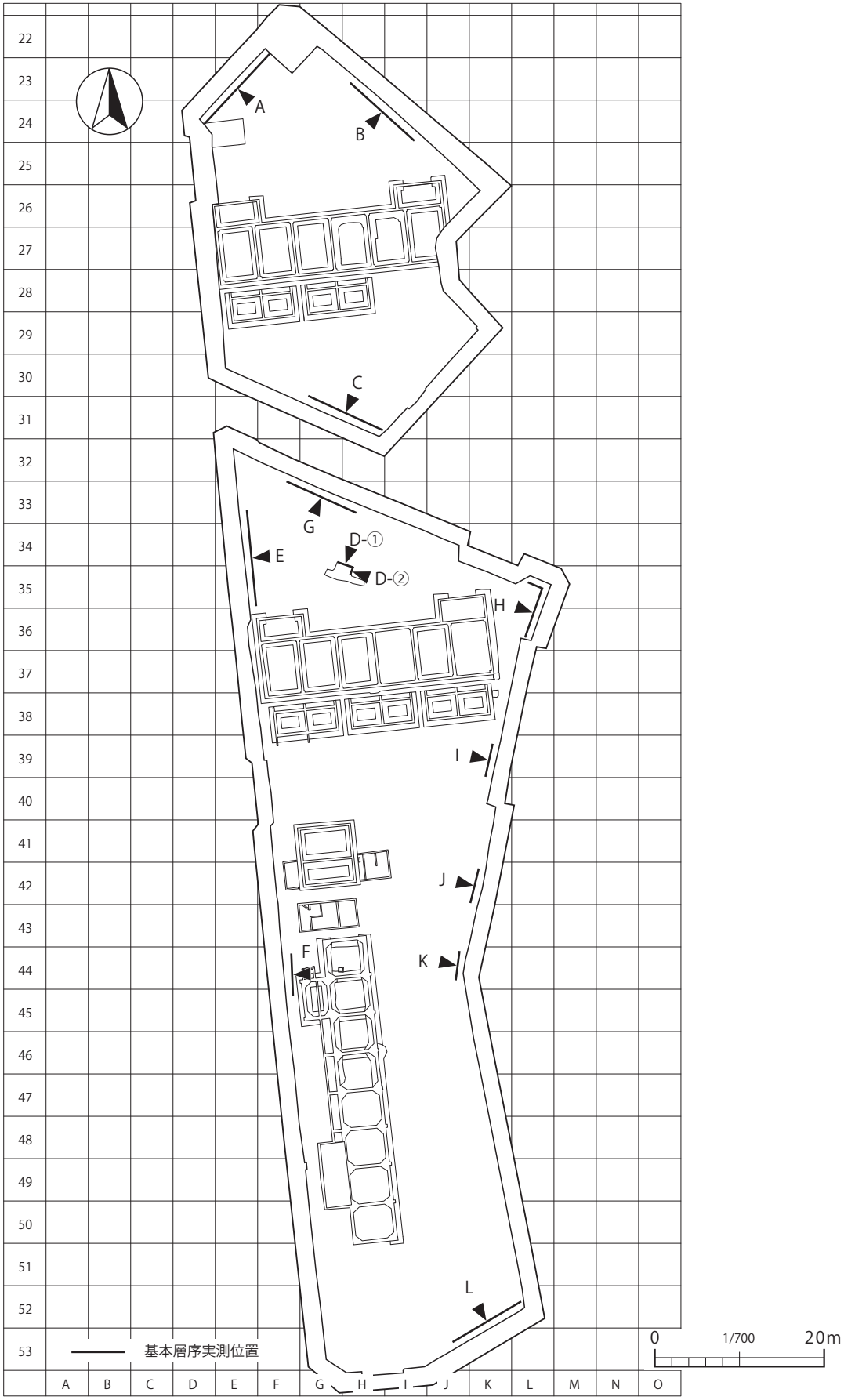
Ⅴ層：褐色土（10YR4/4）　第一黒色帯。径 1 ～ 2㎜の赤色スコリアを 5 ～ 7％、径 1 ～ 2㎜の黒色スコリアを 5 ～ 7％、径 1 ～ 2㎜の黄色スコリアを 1 ～ 2％含む。締り強い。粘性強い。

Ⅵ層：黄褐色土（10YR5/8）　AT 層。径 1 ～ 2㎜の赤色スコリアを 7 ～ 10％、径 1 ～ 2㎜の黒色スコリアを 7 ～ 10％、径 1 ～ 2㎜の黄色スコリアを 1 ～ 2％、径 1 ～ 2㎜の青灰色スコリアを 2 ～ 3％、径 1mm 以下のガラス質粒子を 1% 以下含む。締り強い。粘性強い。

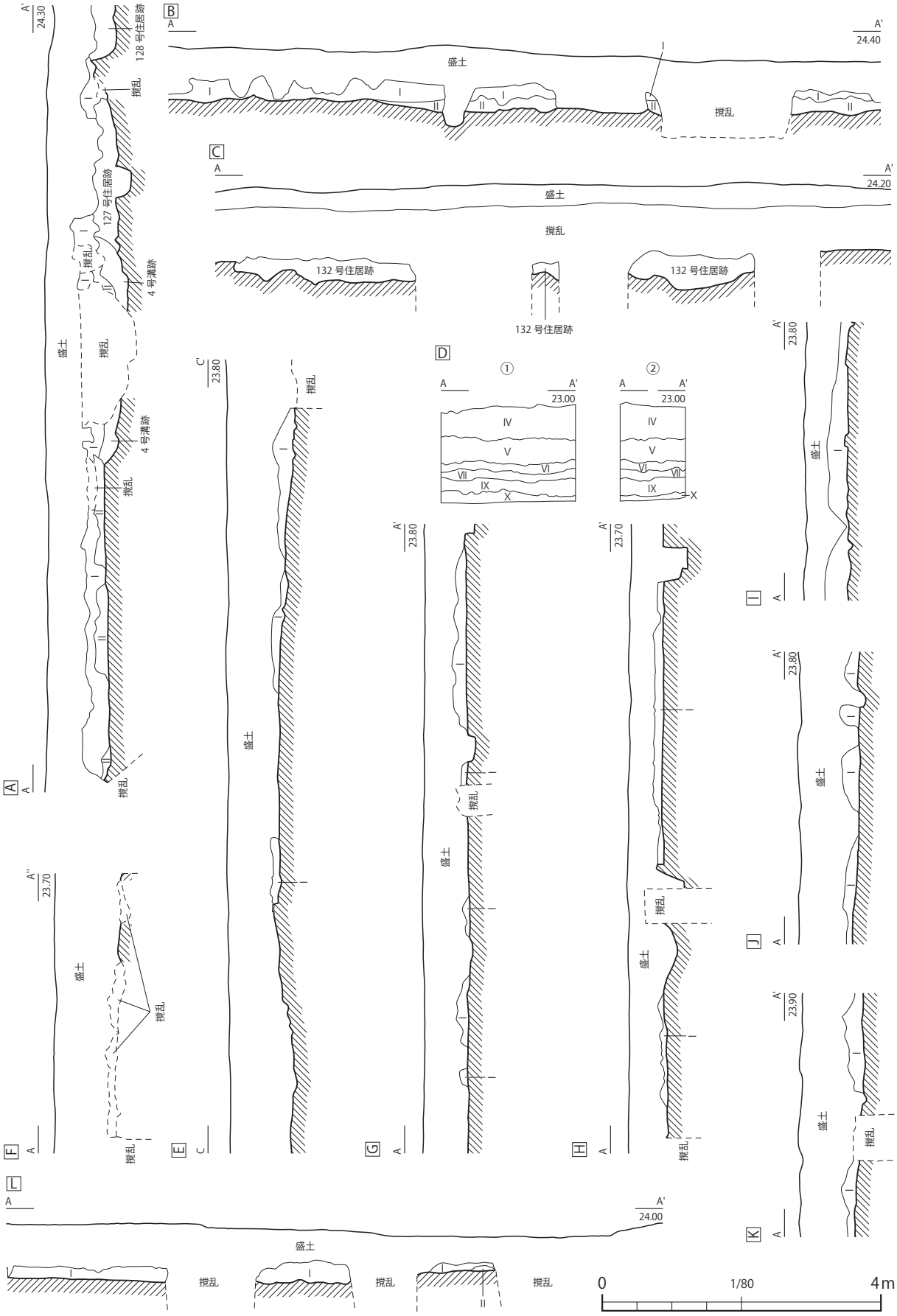
Ⅶ層：暗褐色土（10YR3/4）　第二黒色帯上層。径 1 ～ 2㎜の赤色スコリアを 10 ～ 15%、径 1 ～ 2mm の黒色スコリアを 10 ～ 15％含む。
締り強い。粘性強い。

Ⅸ層：黒褐色土（10YR2/3）　第二黒色帯下層。径 1 ～ 2㎜の赤色スコリアを 10 ～ 15%、径 1 ～ 2mm の黒色スコリアを 10 ～ 15％含む。締り強い。粘性強い。

Ⅹ層：褐色土（10YR4/6）　立川ローム最下層。径 1 ～ 2㎜赤色スコリアを 3 ～ 5%、径 1 ～ 2㎜の黒色スコリアを 3 ～ 5％含む。
締り強い。粘性強い。



第 3 図　基本層序実測位置（1/700）


A
A'
24.30
128 号住居跡
127 号住居跡
4 号溝跡
4 号溝跡
盛土
撹乱
B
A'
24.40
C
A'
24.20
132 号住居跡
D
①
②
23.00
IV
V
VI
VII
IX
X
E
C'
23.80
F
A''
23.70
G
23.80
H
23.70
I
23.80
J
23.80
K
23.90
L
24.00
0
1/80
4m

第 4 図　基本層序（1/80）

Ⅲ　遺構と遺物

今回の調査では、主に縄文時代、弥生時代後期から古墳時代初頭、古代の遺構･遺物が検出された。令和元年７月から令和２年10月まで調査が実施された北側に隣接する中十条アパート地区では、同様の遺構・遺物が数多く検出されている。今回調査が実施された王子・王子母子アパート地区は、全体的に地表面が削平されており、地形が南側に下るにつれて遺構の密度が薄くなることが試掘成果から示されていたが、遺構の検出数は少なく、前回の地区に比べ遺構分布が密でないことが窺われた。遺物も出土数は多くない（第５図）。

しかしながら今回の調査成果は、南橋遺跡が弥生時代後期から古墳時代初頭、古代の集落を形成していることを示し、南橋遺跡の過去の調査成果を補強するものと言うことができる。また、詳細はⅤ章まとめに記すが、今回の調査地点が弥生時代後期から古墳時代初頭の集落の南端に相当する部分と思われ、前回の地区を含む集落の構造の様相を把握できたことは大きな成果である。

今回の調査で検出された遺構・遺物は以下のとおりで、次頁から時代ごとの報告を行う。なお遺構の番号は、中十条アパート地区で使用した番号に続けて順に付番している。また、調査中は時代に関わらず付番しているため、時代別の報告の中で必ずしも連番ではない。整理作業段階で、遺構としての認定から外れたものは欠番としている。遺物に関しては、時代ごとに分類・実測し、主要なものを図化、掲載している。

≪縄文時代≫（第６図）

遺構　住居跡－１軒、柱穴－１基、土坑－２基

遺物　土器　　前期前葉・中葉・後葉、中期後葉、後期後葉

　　石器　　石鏃、石錐、剥片、石皿

≪弥生時代後期から古墳時代初頭≫（第10図）

遺構　住居跡－５軒、掘立柱建物跡－１棟、柱穴－８基、土坑－４基、溝跡－１条

遺物　土器　　甕、壺、高坏、器台、埦

　　土製品　焼成粘土塊

　　礫

　　その他　炭化材

≪古代≫（第23図）

遺構　住居跡－９軒、柱穴－４基

遺物　土器　　土師器甕、鉢、坏　須恵系土器坏　須恵器甕、瓶、坏

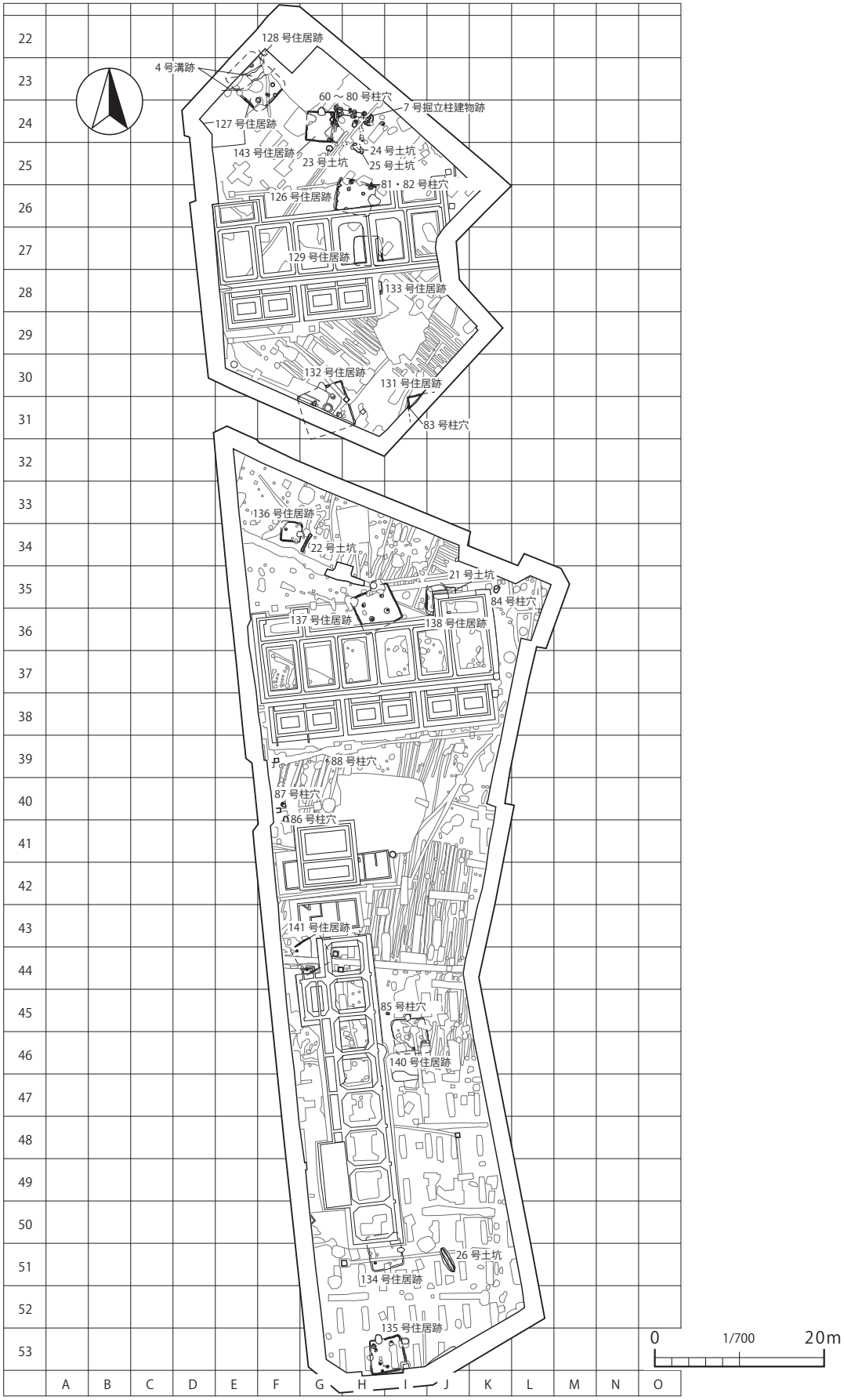
　　土製品　支脚、焼成粘土塊

　　石器　　支脚、砥石

　　礫

　　鉄器　　棒状鉄器、釘、刀子、鉄滓

　　その他　炭化種子



第 5 図　発掘調査区　全体図（1/700）

≪中世以降≫

遺構　なし

遺物　土器　土師質土器坏

1　縄文時代

1）遺構

Ａ　住居跡

133 号住居跡（第 7 図、図版 7）

調査区北側 28-H 区で検出された。アパート基礎や攪乱によりローム面まで削平を受けていることから、遺存状況は良くなく、住居跡の東壁の一部が検出されるにとどまった。残存部の長軸は 1.58m で、住居跡の南東端に長軸推定 0.45m ×短軸 0.23m ×深さ 0.20m の平面楕円形の柱穴が確認された。堆積土は 6 層に分かれ、5・6 層が貼床で、貼床の厚さは 15.0 ～ 25.0cm を測る。炉跡や貯蔵穴は検出されておらず、遺物は出土していない。

堆積土が弥生時代後期以降の遺構の土とは異なり、貼床の残存状況などから縄文時代の住居跡とした。

Ｂ　柱穴

88 号柱穴（第 7 図、図版 7）

調査区中央西側 39-G 区で検出された。規模は長軸 0.46m ×短軸 0.44m ×深さ 0.85m、平面形は円形の柱穴である。遺物は出土していない。堆積土は 2 層に分かれ、縄文時代に特徴的なもやがかかったような暗褐色土を呈していたことから、縄文時代の柱穴とした。

Ｃ　土坑

22 号土坑（第 8 図、図版 7）

調査区中央北側 34-G 区で検出された。規模は長軸 2.60m ×短軸 0.64m ×深さ 0.65m を測り、平面形は隅丸長方形、断面形は下部に向かって狭まる V 字形である。長軸の両端壁が外側に抉れ、とりわけ南側が大きく抉り込まれている。短軸の東壁に 1 箇所、5.0cm 程度の凹部が認められる（断面 C-C'）。

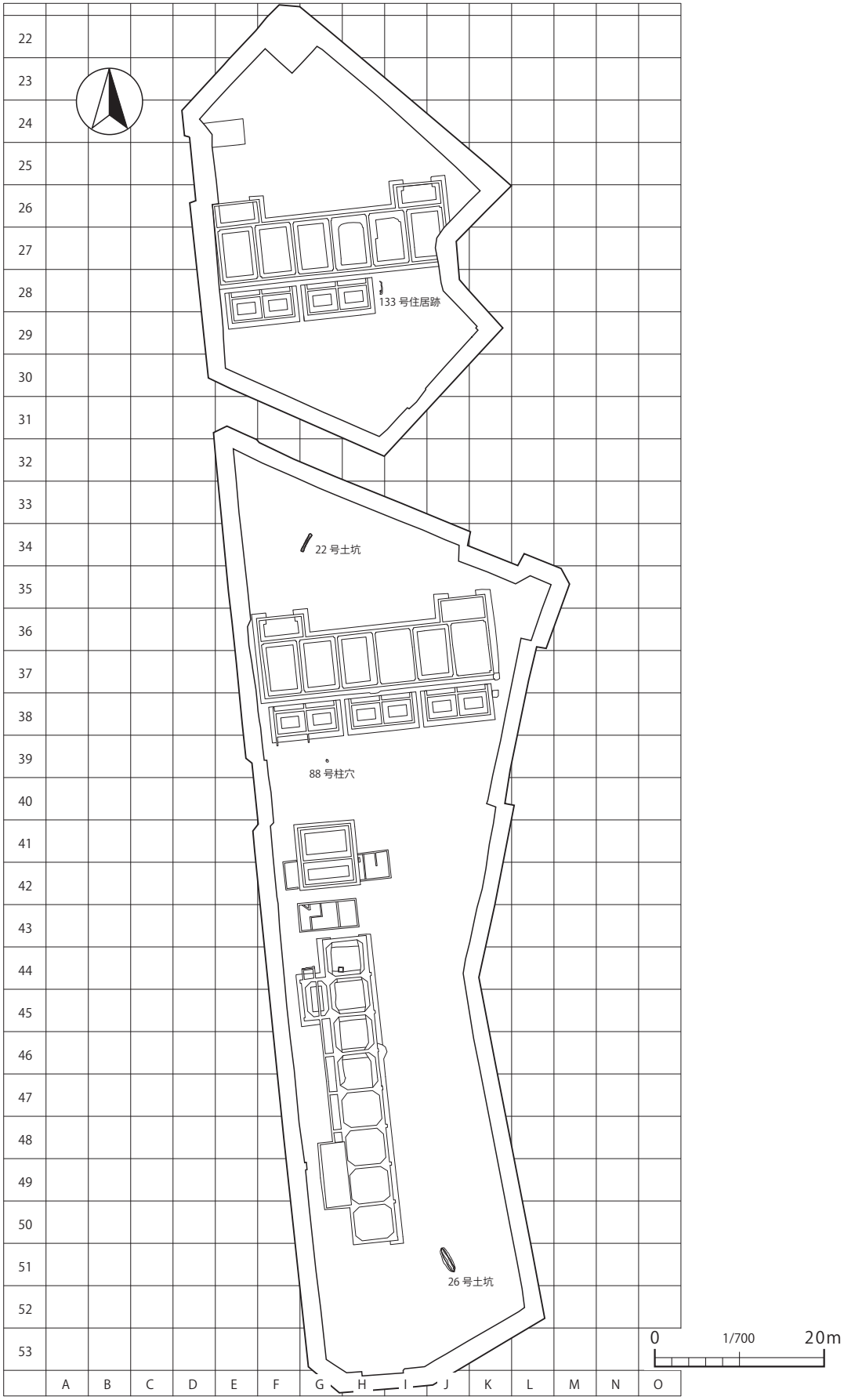
堆積土は 5 層に分かれる。遺物は出土していない。

26 号土坑（第 8 図、図版 7）

調査区南側 51-J 区で検出された。規模は長軸 3.1m ×短軸 1.1m ×深さ 1.7m を測り、平面形は楕円形、断面形は下部に向かって狭まる V 字形である。長軸の両端壁は外側に抉り込まれ、短軸の東壁に 1 箇所、西壁に 3 箇所、10.0 ～ 20.0cm の凹部が認められる（断面 C-C' ～ F-F'）。

堆積土は 7 層に分かれ、自然堆積土と埋め戻し土が交互になっている。1・2・4・7 層が土坑使用時の自然堆積土で、3・5・6 層が埋め戻し土と思われ、少なくともこの土坑は 3 回にわたって機能していたと考えられる。

遺物は、上層から縄文時代前期前葉関山式の深鉢の破片が 2 点出土した。



第 6 図　縄文時代　遺構分布図（1/700）

2）遺物

縄文時代の遺物は、遺構内外から、土器 41 点、石器 7 点が出土した。ここでは、そのうち土器 11 点、石器 4 点を報告する。

A　遺構内出土遺物

26 号土坑（第 9 図、図版 38、第 2 表）

土器が 2 点出土し、1 点を図示した。1 は前期前葉関山式の深鉢の破片で、胎土に繊維を含んでいる。単節 LR 縄文を施文し、その下にループ文を施文している。内面のミガキが顕著である。

126 号住居跡（第 9 図、図版 38、第 2 表）

古代の住居跡から土器が 2 点出土し、1 点を図示した。1 は後期前葉堀之内 2 式の深鉢の破片で、沈線区画内に単節 LR 縄文を施文している。

135 号住居跡（第 9 図、図版 38、第 2 表）

古代の住居跡から土器が 10 点出土し、4 点を図示した。1 ～ 4 は前期中葉黒浜式の深鉢の破片で、胎土に繊維を含んでいる。1 は単節 RL 縄文を施文し、2 は結束 RL 縄文を施文している。3 は単節 LR・RL 羽状縄文を施文し、縄文はタテ方向である。4 は単節 RL・LR 縄文を施文している。

B　遺構外出土遺物

土器（第 9 図、図版 38、第 2 表）

調査区の表土や攪乱から 26 点出土し、5 点を図示した。1 は前期中葉黒浜式の深鉢の破片で、胎土に繊維を含み、単節 RL 縄文を施文している。2 は前期後葉諸磯 b 式の深鉢の破片で、単節 LR 縄文を施文している。

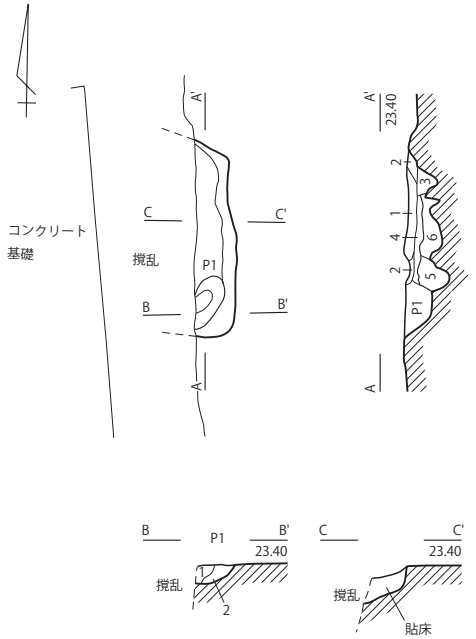
3 は中期後葉加曾利 E3 式の深鉢の口縁部で、2 本の沈線を施文している。4 は中期後葉の深鉢の破片だが、小破片であることや摩耗が著しいことから、型式は不明である。沈線による 3 本の山形文を施文し、その下に無節 L 縄文を施文している。

5 は後期前葉堀之内 1 式の深鉢の破片で、単節 LR 縄文を施文している。

石器（第 9 図、図版 38、第 3 表）

調査区の表土から 7 点出土し、4 点を図示した。1 は黒曜石製の凹基無茎石鏃で、直径約 1.1cm と非常に小さい。抉りは浅く脚部が短く、先端部は鋭角に作出している。2 はチャート製の石錐で、先端部のみ残存している。右側縁部に細かな調整加工を施している。3 は珪質頁岩製の剥片で、形状は縦長である。4 は安山岩製の石皿で、扁平円礫を用いている。片面を使用しており、使用面は緩やかなカーブを描く。側面の一部に敲打痕が認められる。

133 号住居跡

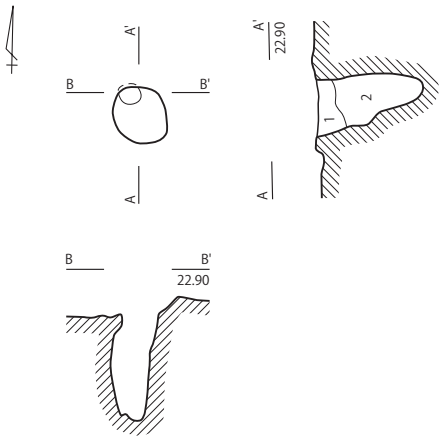


133号住居跡
1:にぶい黄褐色土(10YR4/3)　径5～10mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
2:褐色土(10YR4/6)　径2～5mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
3:褐色土(10YR4/6)　径5～10mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
4:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を3～5％含む。締りとても強い。粘性とても強い。
5:褐色土(10YR4/4)　径10mm以上のロームブロックを1～3％含む。締り強い。粘性強い。（貼床）
6:褐色土(10YR4/6)　径10mm以上のロームブロックを3～5％含む。締り強い。粘性強い。（貼床）

133号住居跡　P1
1:にぶい黄褐色土(10YR4/3)　径5～10mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。

0　1/60　2m

88 号柱穴

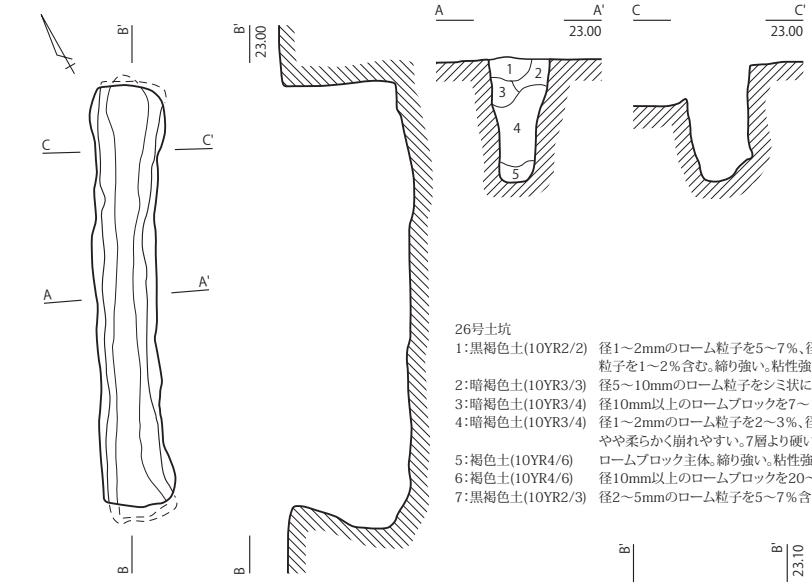


88号柱穴
1:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
2:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmローム粒子を3～5％含む。締り弱い。粘性強い。

0　1/40　2m

第 7 図　縄文時代の竪穴住居跡・柱穴（1/60・1/40）

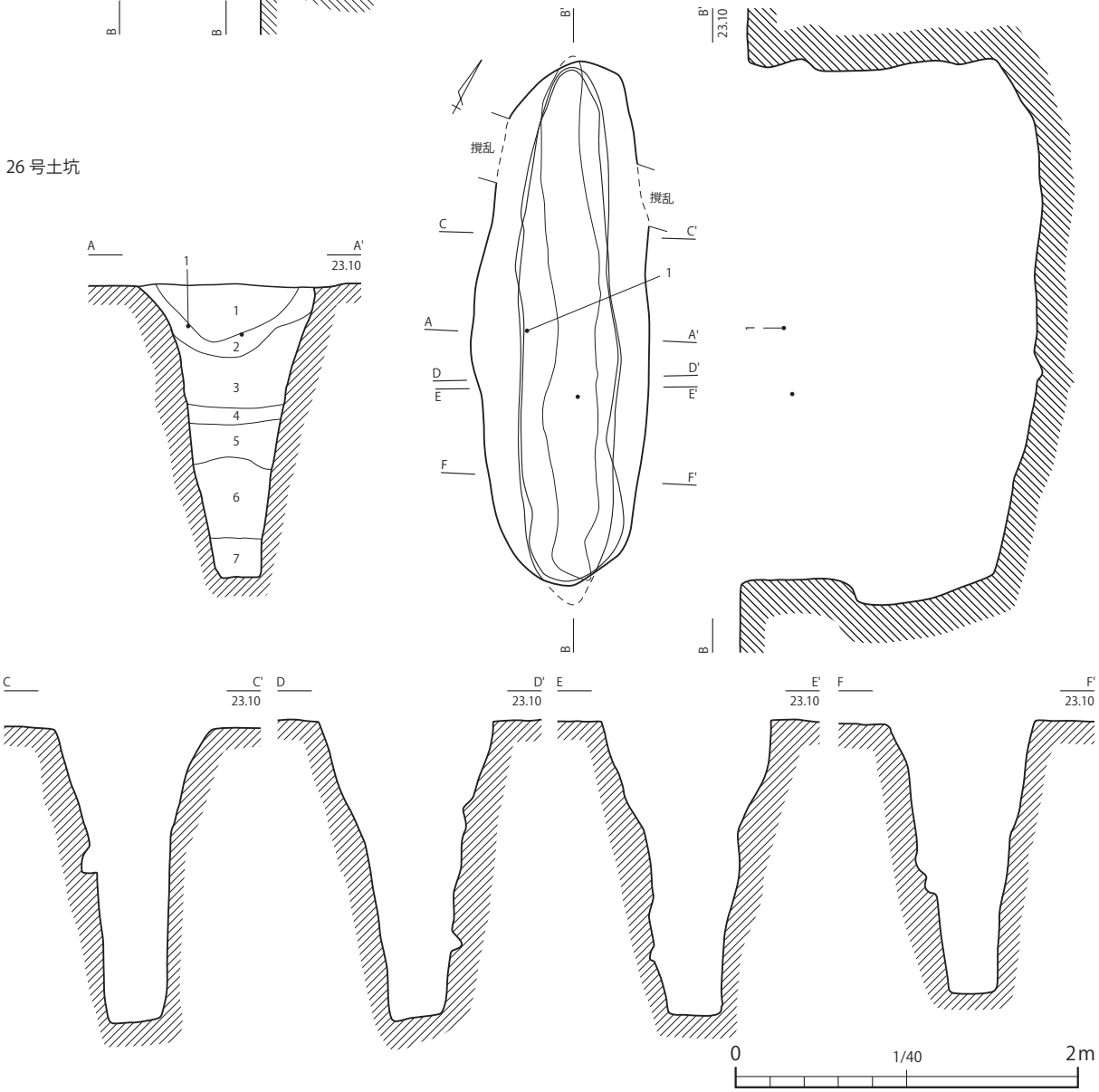
22 号土坑



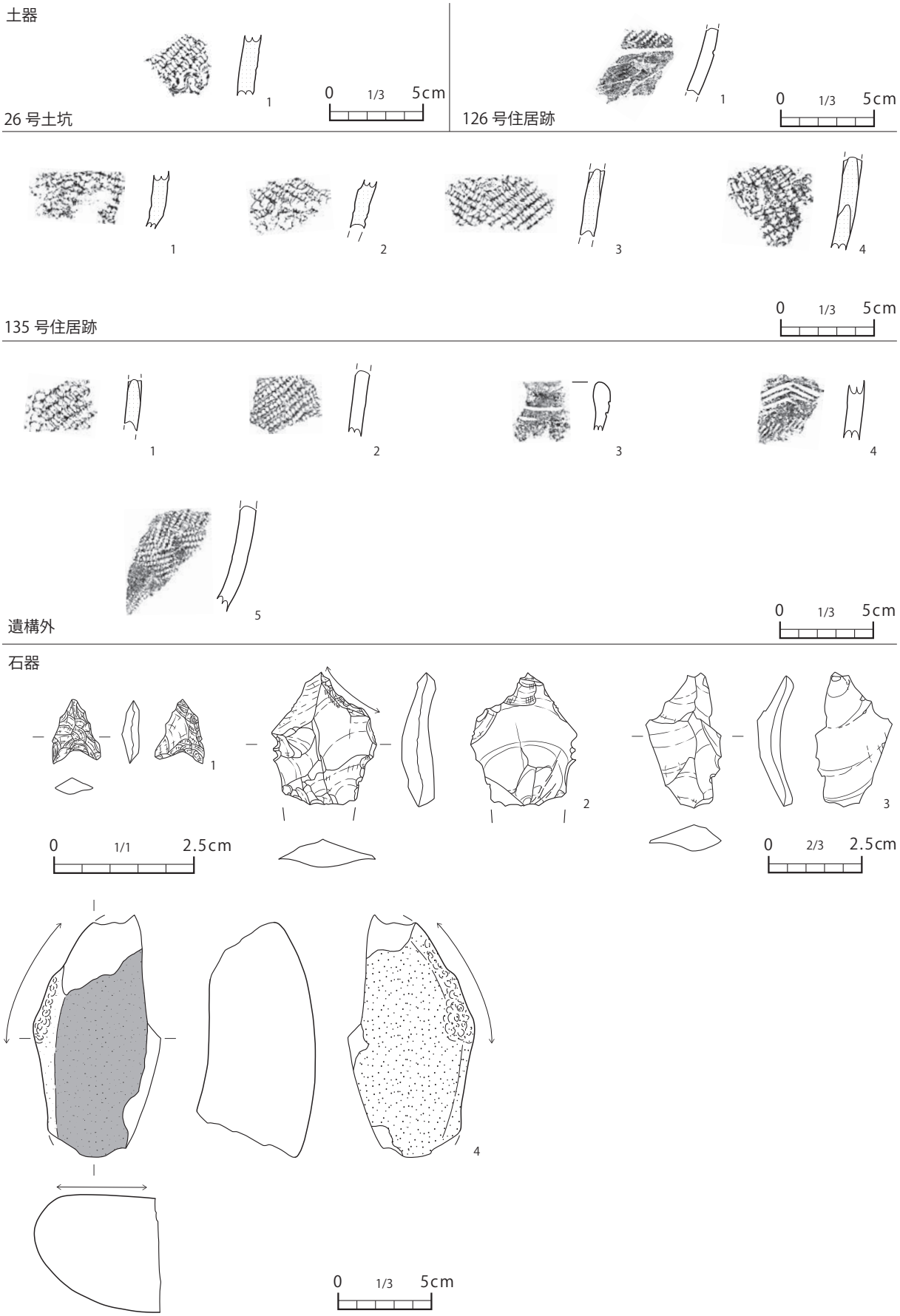
22号土坑
1:黒褐色土(10YR2/2)　径1～２mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
2:暗褐色土(10YR3/4)　径1～10mmのローム粒子を7～10%含む。締りやや弱い。粘性強い。
3:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を7~10%、径1～2mmの焼土粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
4:暗褐色土(10YR3/4)　径2～10mmのローム粒子を15～20%、径1～5mmの焼土粒子を2～3%含む。締りやや弱い。粘性強い。
5:黒色土(10YR2/1)　径1～5mmローム粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。

26号土坑
1:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を5～7%、径10mm以上のロームブロックをシミ状に2～3%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
2:暗褐色土(10YR3/3)　径5～10mmのローム粒子をシミ状に5～7%含む。締り強い。粘性強い。
3:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを7～10%含む。締りやや弱い。粘性強い。
4:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径10mm以上のロームブロックを1～2%含む。締り弱い。粘性弱い。やや柔らかく崩れやすい。7層より硬い。
5:褐色土(10YR4/6)　ロームブロック主体。締り強い。粘性強い。硬く、叩き締めている。
6:褐色土(10YR4/6)　径10mm以上のロームブロックを20～25%含む。締り弱い。粘性強い。柔らかく崩れやすい。
7:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を5～7%含む。締り弱い。粘性弱い。柔らかく崩れやすい。4層より柔らかい。

26 号土坑



第 8 図　縄文時代の土坑（1/40）



第 9 図　縄文時代の土器・石器（1/3・2/3・1/1）

第 2 表　縄文時代土器観察表

挿図番号	図版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	残存高（cm）	胎土	焼成	色調	文様	備考
9	38	26 号土坑	1	深鉢	3.2	良好。繊維含む。	良好	明褐色（7.5YR5/6）	単節 LR 縄文施文。 その下にループ文施文。	関山式 内面ミガキ顕著。
9	38	126 号住居跡	1	深鉢	3.6	良好。細砂粒含む。	良好	黒（10YR2/1）	沈線区画内に単節 LR 縄文施文。	堀之内 2 式
9	38	135 号住居跡	1	深鉢	3.1	良好。繊維含む。	良好	明褐色（5YR5/6）	単節 RL 縄文施文。	黒浜式 全体的に摩耗している。
9	38	135 号住居跡	2	深鉢	2.5	良好。繊維含む。	良好	にぶい黄褐色（10YR4/3）	結束 RL 縄文施文。	黒浜式
9	38	135 号住居跡	3	深鉢	3.6	良好。繊維含む。	良好	にぶい黄褐色（10YR5/4）	単節 LR・RL 羽状縄文施文。 縄文タテ方向。	黒浜式
9	38	135 号住居跡	4	深鉢	5.0	良好。繊維含む。	良好	赤褐色（2.5YR4/8）	単節 RL・LR 羽状縄文施文。	黒浜式
9	38	Ⅻ区 表土	1	深鉢	2.7	良好。繊維含む。	良好	にぶい黄褐色（10YR5/4）	単節 RL 縄文施文。	黒浜式
9	38	Ⅺ②区	2	深鉢	3.5	良好。細砂粒含む。	良好	暗褐色（10YR3/3）	単節 LR 縄文施文。	諸磯ｂ式
9	38	Ⅷ区 表土	3	深鉢	2.6	良好。細砂粒含む。	良好	明赤褐（2.5YR5/8）	沈線施文。	加曾利 E3 式 全体的に摩耗している。
9	38	Ⅺ区 表土	4	深鉢	3.2	良好。細砂粒含む。	良好	明黄褐（10YR7/6）	沈線による 3 本の山形文施文。以下無節 L 縄文施文。	全体的に摩耗している。
9	38	Ⅷ区 表土	5	深鉢	5.7	良好。細砂粒含む。	良好	にぶい黄褐色（10YR4/3）	単節 LR 縄文施文。	堀之内 1 式

第 3 表　縄文時代石器観察表

挿図番号	図版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	岩種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	残存率	備考
9	38	Ⅺ区 44-I	1	石鏃	黒曜石	1.2	0.8	0.3	0.2	完形	凹基無茎石鏃。
9	38	Ⅻ区 表土	2	石錐	チャート	3.5	2.6	0.7	7.7	一部分欠損	右側縁部に調整加工痕あり。
9	38	Ⅺ②区	3	剥片	珪質頁岩	3.5	1.9	0.6	3.7	完形	縦長剥片。
9	38	Ⅸ区	4	石皿	安山岩	12.6	6.8	5.7	750.7	大部分欠損	扁円形の礫を使用している。 側面に敲打痕あり。

2　弥生時代後期から古墳時代初頭

1）遺構

A　住居跡

127 号住居跡（第 11・12 図、図版 8・9、第 4 表）

調査区北側 23・24-E・F 区で検出された。南壁と西壁の範囲が検出され、東壁はごく一部を除き攪乱により消失しており、北壁側は調査区外のため調査していない。また北東側は、4 号溝跡に切られている。

長軸は柱穴の配置から北壁の位置を復元し、推定 6.0m ×短軸 4.8m の規模を測り、面積約 28㎡の平面形隅丸長方形の中型住居と考えられる。3 基の柱穴と 2 基の梯子穴が確認されており、炉跡と北西側の柱穴は検出されなかった。2 基の梯子穴の内、古い梯子穴は P4 で、規模は長軸 0.38m ×短軸 0.35m ×深さ 0.18m を測り、平面形は隅丸方形である。貼床残存面で確認した新しい梯子穴は P5 で、規模は長軸 0.50m ×短軸 0.35m ×深さ 0.40m を測り、平面形は隅丸長方形である。堆積土は 14 層に分かれ、貼床は一度貼り替えされ、6 層と 7・8・9 層に分かれる。貼床の厚さはどちらも 10.0 ～ 15.0cm である。

遺物は住居跡の北東側と南側を中心に出土した。弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 13 点、壺 24 点、礫 1 点、古代の土師器甕 4 点、坏 1 点、須恵器甕 1 点、坏 1 点である。

128 号住居跡（第 12 図、図版 9、第 4 表）

調査区北側 22-F 区で検出された。127 号住居跡の北東側にあり、南西端のみ検出され、大部分は調査区外のため調査していない。残存部の長軸は 0.80m で、平面形は隅丸方形と推測される。炉跡や柱穴は検出されていない。堆積土は 4 層に分かれ、貼床は 4 層が相当し、厚さは約 10.0cm を測る。遺物は出土していない。

129 号住居跡（第 13 図、図版 10、第 4 表）

調査区北側 27-H 区で検出された。北西端と西壁、東壁の一部が検出され、それ以外の部分はアパート基礎や攪乱により消失している。

長軸推定 3.45m ×短軸 3.4m の規模を測り、面積約 11㎡の平面形隅丸方形の小型住居と考えられる。炉跡や柱穴は検出されていない。堆積土は 5 層に分かれ、貼床は 4・5 層が相当し、厚さは 5.0 ～ 12.0cm を測る。

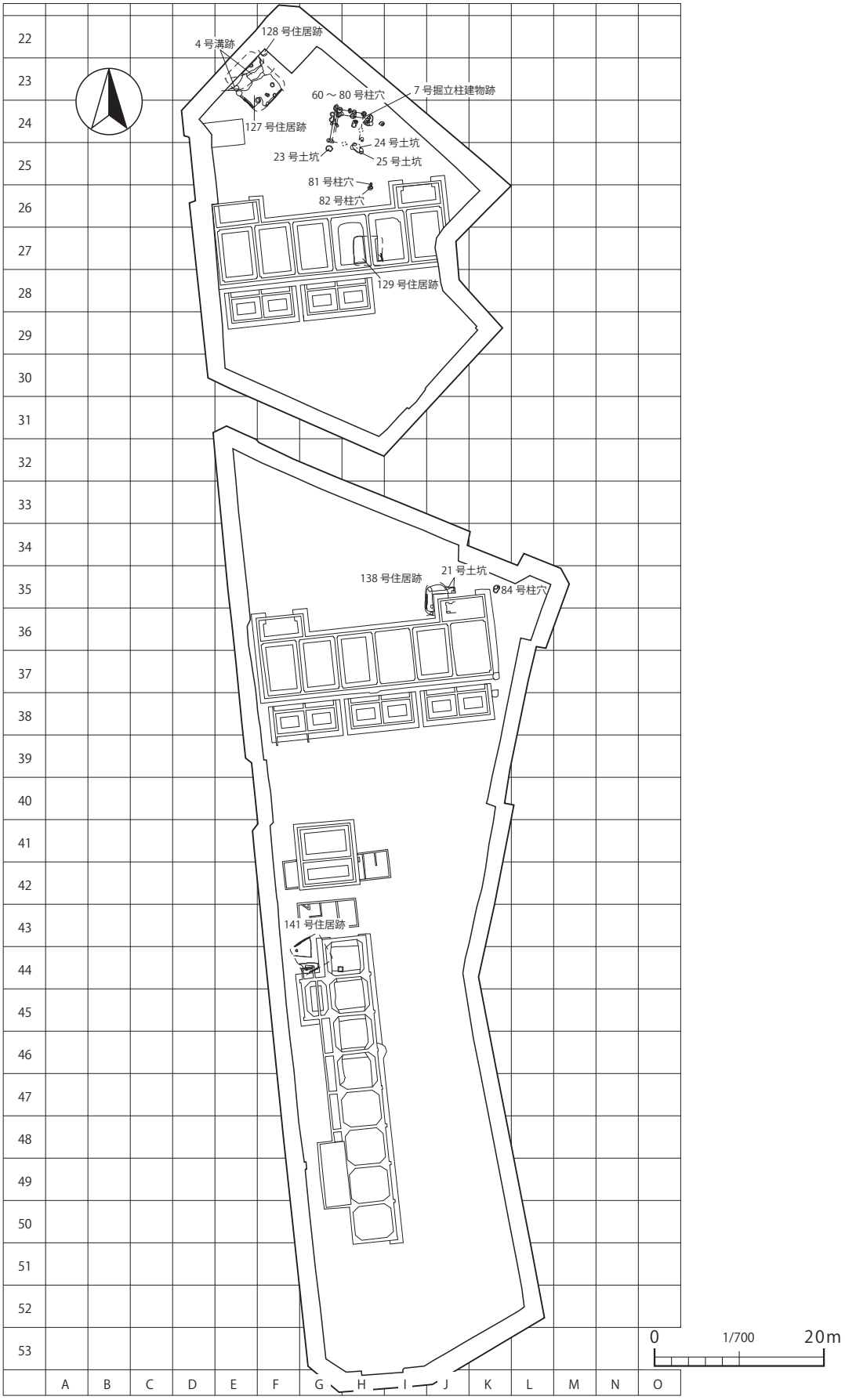
遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 2 点、壺 1 点、焼成粘土塊 1 点、古代の土師器甕 69 点、坏 2 点が出土しているが、小破片のため図示には至らなかった。

堆積土が弥生時代後期に特徴的な濃い暗褐色土であることから、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡とした。古代の遺物が多く出土しているのは、近くにある古代の 126 号住居跡の遺物が流れ込んできたものと推定される。

138 号住居跡（第 13 図、図版 10、第 4 表）

調査区中央北側 35・36-I・J 区で検出された。西側と北東側、南東側の貼床の一部が検出され、それ以外の部分はアパート基礎や攪乱により消失している。また、北東端で 21 号土坑を切っている。

残存部の短軸は 2.5m で、長軸は推定復元で約 3.8m 前後を測り、平面形は楕円形と推測される。



第 10 図　弥生時代後期から古墳時代初頭　遺構分布図（1/700）

炉跡や柱穴は検出されていない。堆積土は 5 層に分かれ、貼床は 5 層が相当し、厚さは 5.0 ～ 12.0cm を測る。

遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 7 点、古代の土師器甕 52 点、坏 6 点、須恵器甕 1 点、坏 3 点が出土しているが、小破片のため図示には至らなかった。

堆積土が弥生時代後期に特徴的な濃い黒褐色土であることから、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡とした。

141 号住居跡（第 14・15 図、図版 11・12、第 4 表）

調査区中央南側 43・44-F・G 区で検出された。北側と南側が検出され、それ以外の部分は攪乱により大きく削られている。

残存部の短軸は 3.78 m で、平面形は隅丸方形と推測される。北西側と南西側に柱穴が 2 基検出された。対になる柱穴、炉跡、貯蔵穴は検出されていない。堆積土は 7 層に分かれ、貼床は 5・6・7 層が相当し、厚さは約 10.0cm を測る。主柱穴と見られる P1 は掘方面の径 0.25m ×深さ 0.35m、P2 は掘方面の径 0.3m ×深さ 0.3m、芯々間距離は約 2.5m を測る。

遺物は主に覆土中から良好に出土した。弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 14 点、壺 61 点、炭化材 3 点、古代の土師器坏 6 点、須恵器瓶 1 点である。

壺 2 は直口壺で、上半部を欠失している。住居跡中央付近で底部を下向きに据え、細かく割れた状態で出土した。壺 3 は直口壺で、ほぼ完形である。壺 3 の北西側で口縁部を南側、胴部下半部に焼成後の穿孔があり、穿孔部を西側にして横向きに倒れ、潰れた状態で出土した。壺 4 は広口壺で、口縁部～胴部の一部が残存している。住居跡の南側付近で細かく割れ、散らばった状態で出土した。

甕 5 は台付甕の脚部で、住居跡の北側で胴部との接合部を南側にして横向きに倒れ、細かく割れ、やや散らばった状態で出土した。

炭化材 6・7・8 は樹種同定の結果、コナラ属クヌギ節とクリであることが判明している。

B　掘立柱建物跡

7 号掘立柱建物跡（第 16 ～ 19 図、図版 13 ～ 17、第 5 表）

調査区北側の柱穴群の中、24・25-G・H 区で検出された。西側の柱穴列は古代の 143 号住居跡に切られているが、一部壁の立ち上がりと掘方面を検出した。また南東部は攪乱などにより失われていた。柱間の距離と並びの方向から、①東西 63 号柱穴 -68 号柱穴 -62 号柱穴／南北 63 号柱穴 -79 号柱穴 -76 号柱穴の列、②東西 60 号柱穴 -68 号柱穴 -65 号柱穴／南北 60 号柱穴 -80 号柱穴 -76 号柱穴の列、③東西 64 号柱穴 -69 号柱穴 -61 号柱穴／南北 64 号柱穴 -80 号柱穴の列に分かれる。

重複しているため、それぞれの列が別の掘立柱建物跡になるのではなく、南北 1 棟の掘立柱建物の建て替えと思われ、143 号住居跡に切られている柱穴列は重複関係を明確にできなかったこともあるが、他の柱穴の切り合いや配置から考えて、おおむね③→①→②の順に建て替えられた可能性が高いものと考えられる。また周囲の他の柱穴も激しく切り合っているため、①～③以外にも数度の建て替えがあったと推測される。

①は梁行 2 間×桁行 2 間（約 1.7m ×約 1.8 ～ 2.1m、床面積 13.3㎡）、②は梁行 2 間×桁行 2 間（約 1.4m ～ 1.7m ×約 1.9 ～ 2.0m、床面積 12.1㎡）、③は梁行 2 間×桁行現状 1 間（約 1.8m ×約 1.4m）だが 2 間になる可能性もあり、7 号掘立柱建物跡は 2 間× 2 間の南北棟と思われる。

柱痕は 60 号柱穴、61 号柱穴、65 号柱穴で確認された。柱跡の径は、60 号柱穴が 0.24m、61 号柱穴が 0.09m、65 号柱穴が 0.26m である。

遺物は、60 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 2 点、61 号柱穴から縄文土器 1 点、弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 3 点、古代の土師器甕 1 点、坏 1 点、62 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 1 点、63 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 1 点、64 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 1 点、壺 1 点、古代の土師器坏 1 点、65 号柱穴から古代の土師器坏 1 点、須恵器坏 1 点、68 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 2 点、古代の土師器甕 1 点、69 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 2 点、壺 2 点、76 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 2 点、80 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 1 点が出土している。いずれも小破片のため、図示には至らなかった。

C　柱穴（第 16・19・20 図、図版 15 ～ 18、第 5 表）

調査区北側 24・25-G・H・I 区から、柱穴群（60 ～ 70 号柱穴、73 号柱穴、75 ～ 80 号柱穴）が検出された。このうち、60・61・62・63・64・65・68・69・76・79・80 号柱穴は 7 号掘立柱建物跡として復元され、他の柱穴も別棟の掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。

また、これらの柱穴群から約 8m 南側の 25・26-H 区からは、81・82 号柱穴が検出された。古代の 126 号住居跡に切られており、7 号掘立柱建物跡とは別棟の建物跡の可能性が想定される。82 号柱穴が 81 号柱穴を切る。調査区中央北側 35-K 区からは 84 号柱穴が検出され、柱痕が確認された。柱痕の径は、0.24m である。

遺物は 7 号掘立柱建物跡を構成する柱穴以外の柱穴からは、67 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 1 点、70 号柱穴から古代の土師器甕 1 点、78 号柱穴から弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 1 点が出土している。小破片のため、図示には至らなかった。

D　土坑

21 号土坑（第 21 図、図版 18）

調査区中央北側 35-J 区で検出された。138 号住居跡に切られている。残存部の長軸 1.06m ×短軸 0.7m ×深さ 0.18m を測り、平面形は隅丸長方形と推測される。底面は不整形で、大部分がアパート基礎や攪乱により失われているため、明確な性格は不明である。堆積土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

23 号土坑（第 21 図、図版 18）

調査区北側 25-G 区で検出された。残存部の長軸 0.73m ×短軸 0.64m ×深さ 0.21m を測り、平面形は不整円形である。堆積土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

24 号土坑（第 21 図、図版 18）

調査区北側 25-H 区で検出された。25 号土坑を切っている。長軸 1.23m ×短軸 0.73m ×深さ 0.14m を測り、平面形は隅丸長方形である。堆積土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

25 号土坑（第 21 図、図版 18）

調査区北側 25-H 区で検出された。24 号土坑に切られている。残存部の長軸 0.27m ×短軸 0.39m ×深さ 0.1m を測り、平面形は円形である。堆積土は 1 層である。遺物は出土していない。

E　溝跡

4 号溝跡（第 21・50 図、図版 19）

調査区北側 23-E・F 区で検出された。127 号住居跡を切っている。残存部の長軸 4.8m ×短軸 1.2m ×深さ 0.34m を測り、断面形は U 字形を呈する。

方形周溝墓の南側の溝跡で、中十条アパート地区の 2 号方形周溝墓と繋がる可能性が高いと考えられる（第 50 図）。しかし、明確に方形周溝墓と言い切ることは出来ないため、溝跡として報告している。堆積土は 5 層に分かれる。

遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 4 点、壺 7 点、古代の須恵器坏 1 点が出土した。

2）遺物

弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物は、遺構内外から、土器 1,522 点、焼成粘土塊 34 点、礫 1 点、炭化材 3 点が出土した。土器は小破片が多いため図示できるものが少なく、ここでは土器 20 点を報告する。

A　遺構内出土遺物

127 号住居跡（第 22 図、図版 39、第 6 表）

土器が 37 点出土し、1 点を図示した。1 は台付甕の脚部で、下半部のみ残存している。外面はヘラナデ調整、内面はナデ調整を施している。

137 号住居跡（第 22 図、図版 39、第 6 表）

古代の住居跡からの流れ込みによる土器が 8 点出土し、1 点を図示した。1 は壺の口縁部で、外面は網目状撚糸文を施文後、棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文は 2 本残存しており、刻みを施している。内面はナデ調整を施し、赤彩されている。また、口唇部に網目状撚糸文を施文している。

141 号住居跡（第 22 図、図版 39、第 6 表）

土器が 75 点出土し、5 点を図示した。1 は装飾壺の肩部で、かなり大型の壺になると思われる。外面は網目状撚糸文を全面に施文後、赤彩する部分を擦り消して沈線で区画し、区画内に赤彩を施している。内面はナデ調整である。

2 は直口壺で、胴部～底部が残存し、上半部は欠失している。外面は下から上方向のタテヘラミガキ、内面は指ナデ調整を施している。

3 は直口壺で、ほぼ完形である。外面は頸部～胴部がタテヘラミガキ、口縁部と胴部下部がヨコヘラミガキを施している。調整は、胴部下部→頸部～胴部→口縁部の順で 3 回に分けて行っている。内面は口縁部～頸部が斜・ヨコヘラミガキ、胴部が指ナデ調整を施している。胴部下部に焼成後穿孔が認められ、意図的に孔をあけたと思われる。同様の特徴を持つ土器が、十条久保遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭の土坑と井戸址から 2 点出土している。

4 は広口壺で、口縁部～胴部の一部が残存している。外面は頸部がタテヘラミガキ、胴部がヨコヘラミガキを施し、口縁部には 3 ～ 4mm 間隔の刻みがある。頸部～胴部は赤彩されており、著しく摩耗している。内面は口縁部～頸部がヨコヘラミガキ、胴部がナデ調整を施している。また、口縁部～胴部は赤彩されている。

5 は台付甕の脚部で、脚部が高い特徴を持ち、大型の台付甕になると思われる。外面・内面ともにナデ調整を施している。

143 号住居跡（第 22 図、図版 39、第 6 表）

古代の住居跡から先行して存在した柱穴を切って築かれているため、流れ込みによる土器が 118 点出土し、5 点を図示した。1 ～ 4 は壺の破片で肩部にあたる。1 は、外面は沈線による区画内に RL 単節縄文を施文している。また、文様以外に赤彩を施している。内面はナデ調整で、全体的に摩耗している。2 は、外面は沈線による区画内に RL・LR 羽状縄文を施文し、RL 縄文と LR 縄文の間に S 字状結節が 1 段入る。また、文様以外に赤彩を施している。内面はナデ調整である。3・4 は、外面は LR・RL 羽状縄文を施文し、内面はナデ調整である。3 は全体的に摩耗している。5 は広口壺の破片である。外面はタテハケ後にナデ調整を施し、内面・口縁部はナデ調整である。また口縁部は、幅約 1mm の沈線を 1 条施している。

4 号溝跡（第 22 図、図版 39、第 6 表）

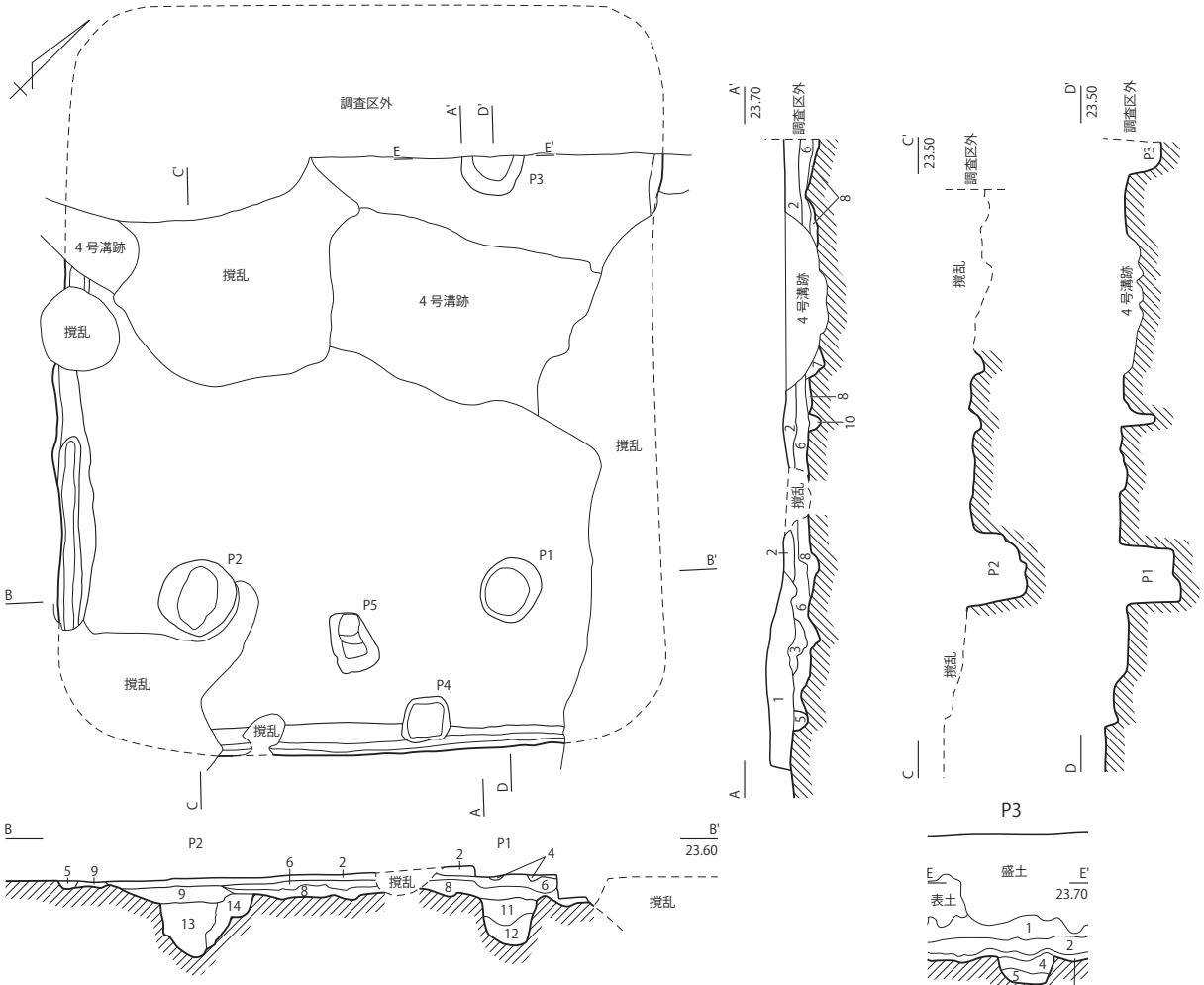
土器が 11 点出土し、1 点を図示した。1 は台付甕の脚部で、上部のみ残存している。外面はタテハケとナデ調整、内面はナデ調整を施している。

Ｂ　遺構外出土遺物（第 22 図、図版 39、第 6 表）

調査区の表土や攪乱から土器が 1,131 点出土し、7 点を図示した。1・2 は壺の口縁部で、どちらも外面は RL・LR 羽状縄文を施文し、内面はナデ調整で赤彩されている。また、口唇部に単節 LR 縄文を施文し、1 は口縁部に粘土帯を貼り付け、刻みも施されている。3 は直口壺の口縁部で、外面は単節 LR 縄文を 1 段の S 字状結節で区画している。内面はナデ調整で赤彩されている。また、口唇部に単節 LR 縄文を施文している。

4 は埦の口縁部で、外面と口唇部に網目状撚糸文を施文している。内面はナデ調整を施し、外面・内面ともに赤彩されている。5 は台付甕の口縁部で、外面はヨコハケとナデ調整、内面はナデ調整である。口唇部は 3 ～ 5mm 間隔のハケ状木工具木口による刻みが施されている。

6 は高坏で、坏部の底部のみ残存している。有稜低脚高坏の破片と考えられる。外面はタテヘラミガキ、内面はヨコ・タテヘラミガキが施されている。外面・内面ともに赤彩されており、全体的に摩耗している。7 は高坏で、坏部と脚部の接合部のみ残存している。外面は粘土帯を貼り付け、その下にタテヘラミガキを施している。内面は坏部がヨコハケ、脚部が指ナデ調整で、赤彩されている。



127号住居跡

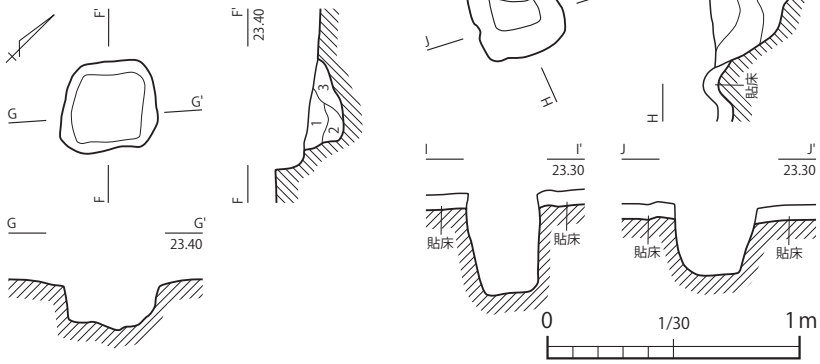
1:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性弱い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～10mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締りやや弱い。粘性やや弱い。
3:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを5～7%含む。締り強い。粘性強い。
4:暗褐色土(10YR3/4)　径2～5mmのローム粒子を2～3%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
5:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。(周溝)
6:暗褐色土(10YR3/4)　径1～10mmのローム粒子を5～7%、径10mm以上のロームブロックを3～5%、径1～5mmの焼土粒子を1～2%、径1～5mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
7:黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
8:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を3～5%、径10mm以上のロームブロックを3～5%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
9:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを5～7%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
10:黒褐色土(10YR3/2)　径2～5mmのローム粒子を1～5%含む。締り強い。粘性強い。
11:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。(埋め土。P1覆土)
12:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを3～5%含む。締りやや弱い。粘性やや弱い。(柱痕の崩落土か。P1覆土)
13:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを1～2%含む。締り強い。粘性強い。(P2覆土)
14:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。(P2覆土)

P4（梯子穴）（古）

127号住居跡　P3

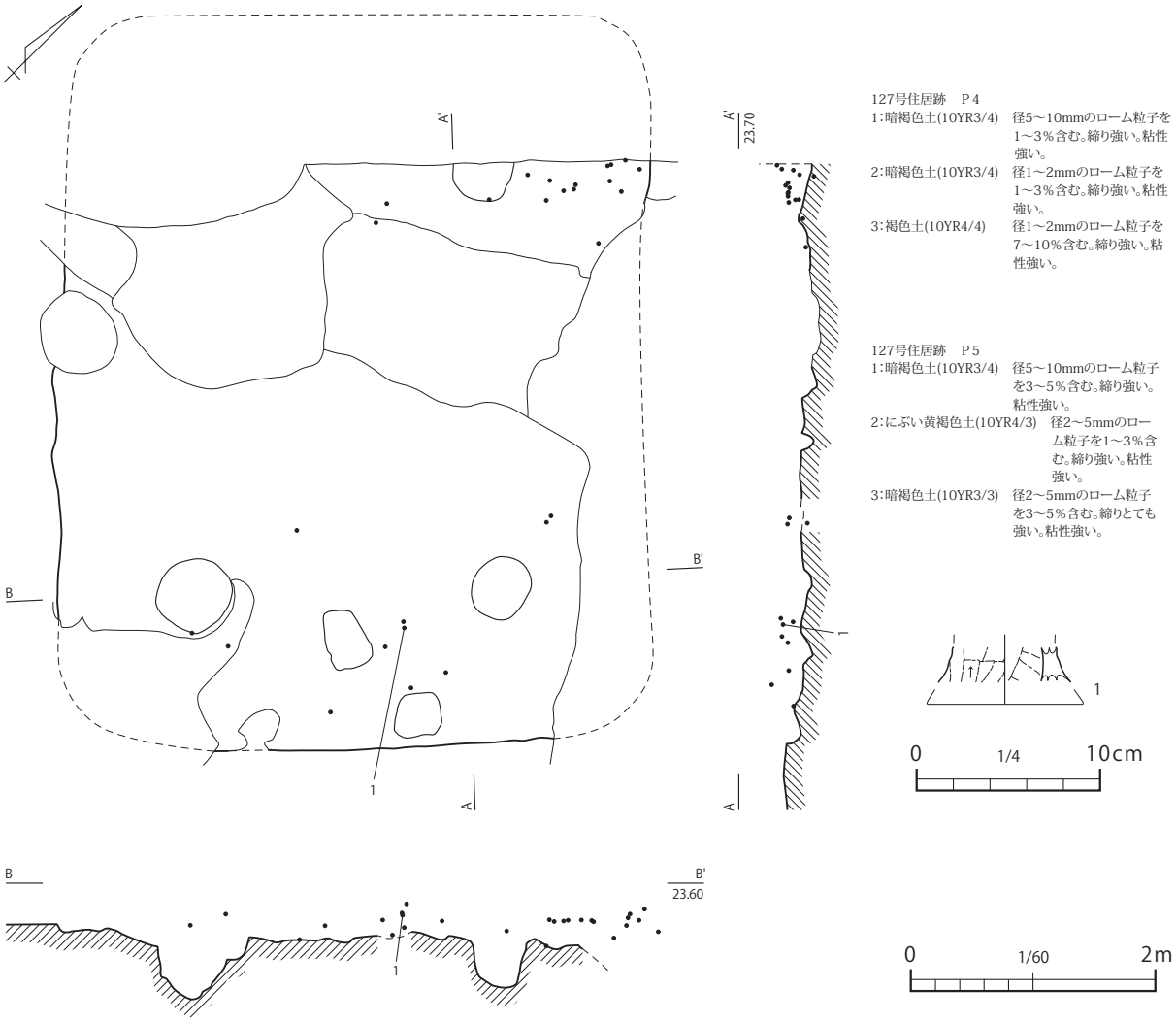
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～10mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締りやや弱い。粘性やや弱い。
2:暗褐色土(10YR3/4)　径1～10mmのローム粒子を5～7%、径10mm以上のロームブロックを3～5%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～5mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
3:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を3～5%、径10mm以上のロームブロックを3～5%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
4:暗褐色土(10YR3/3)　径2～10mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
5:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。

P5（梯子穴）（新）



第11図　127号住居跡（1）（1/30・1/60）

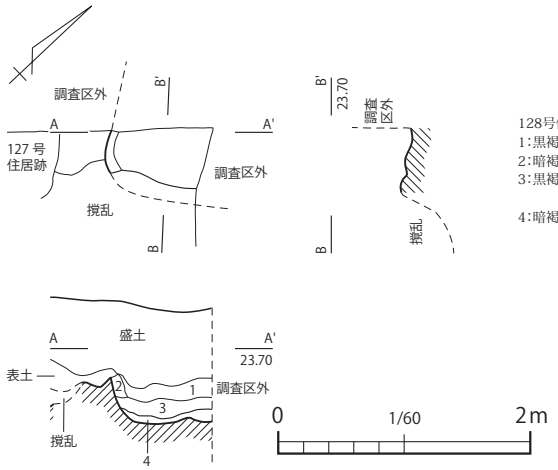
127 号住居跡



127号住居跡　P４
1：暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
2：暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
3：褐色土(10YR4/4)　径1～2mmのローム粒子を7～10％含む。締り強い。粘性強い。

127号住居跡　P５
1：暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。
2：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　径2～5mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
3：暗褐色土(10YR3/3)　径2～5mmのローム粒子を3～5％含む。締りとても強い。粘性強い。

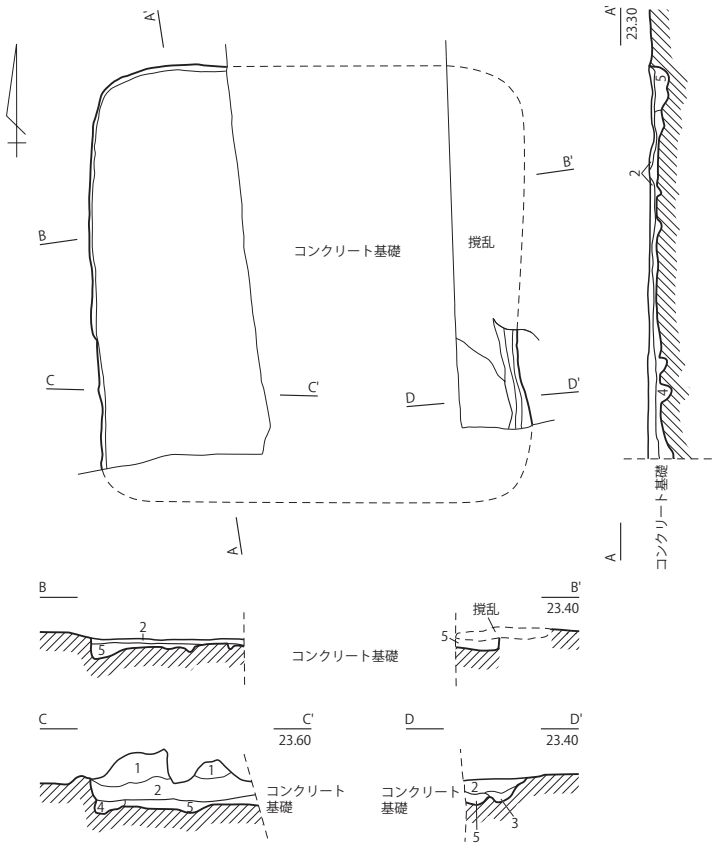
128 号住居跡



128号住居跡
1：黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を3～5％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
2：暗褐色土(10YR3/4)　径2～5mmのローム粒子を2～3％含む。締り弱い。粘性弱い。
3：黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を1～2％、径10mm以上のロームブロックを2～3％含む。締り強い。粘性強い。
4：暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを3～5％含む。締り強い。粘性強い。（貼床）

第 12 図　127 号住居跡（2）・128 号住居跡（1/4・1/60）

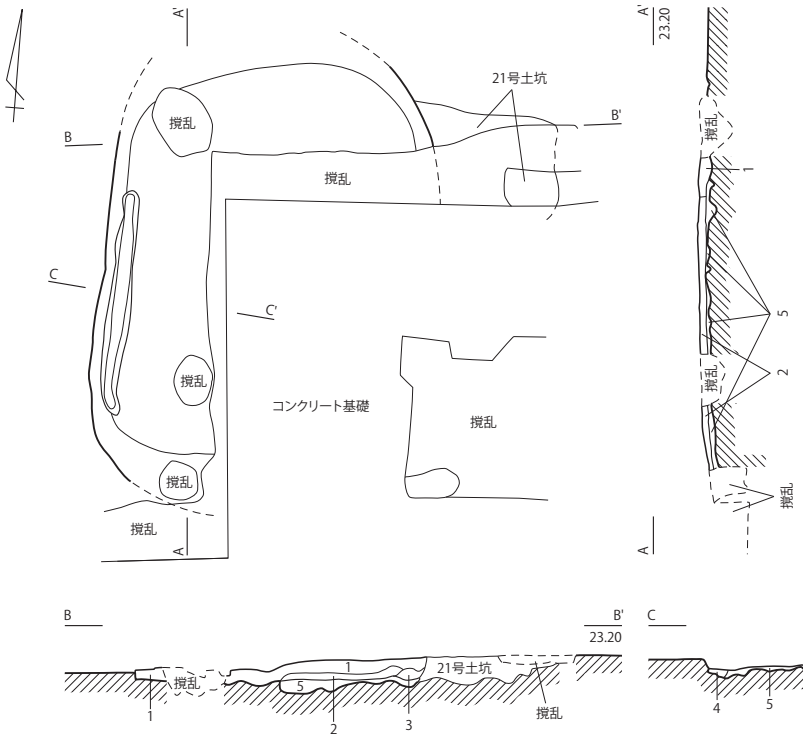
129 号住居跡



129号住居跡
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を1～3%含む。締り弱い。粘性弱い。
2:暗褐色土(10YR3/3)　径2～5mmのローム粒子を1～3%含む。締り強い。粘性強い。
3:にぶい黄褐色土(10YR4/3)　径2～5mmのローム粒子を1～3%含む。締り強い。粘性強い。(周溝)
4:褐色土(10YR4/4)　径2～5mmのローム粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
5:褐色土(10YR4/6)　径5～10mmのローム粒子を1～3%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)

0　1/60　2m

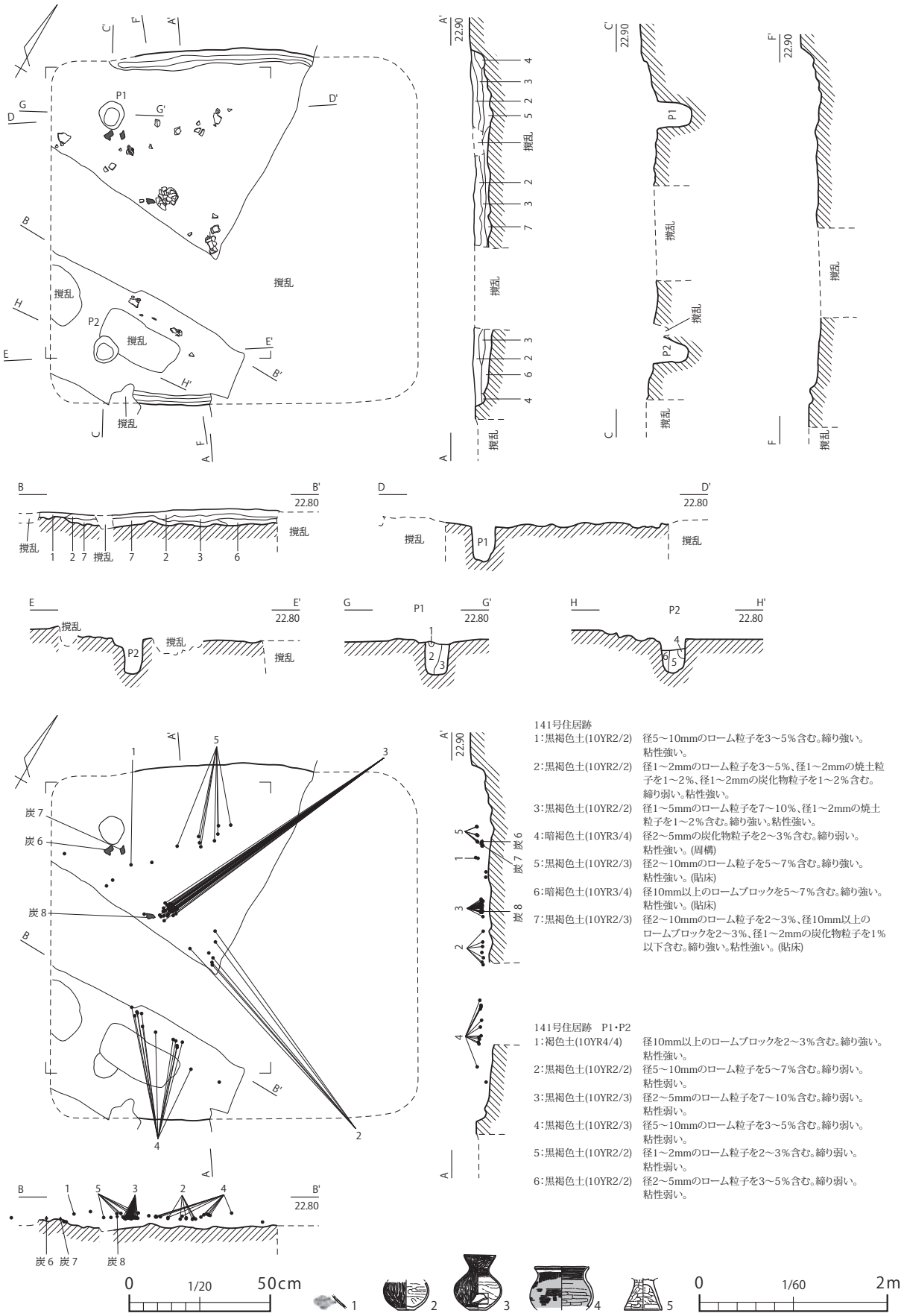
138 号住居跡



138号住居跡
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を1～2%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
3:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
4:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。(周構)
5:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを3～5%含む。締り弱い。粘性弱い。(貼床)

0　1/60　2m

第 13 図　129 号住居跡・138 号住居跡（1/60）



141号住居跡

1:黒褐色土(10YR2/2)　径5～10mmのローム粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。

2:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を3～5%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り弱い。粘性強い。

3:黒褐色土(10YR2/2)　径1～5mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

4:暗褐色土(10YR3/4)　径2～5mmの炭化物粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性強い。(周構)

5:黒褐色土(10YR2/3)　径2～10mmのローム粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)

6:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを5～7%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)

7:黒褐色土(10YR2/3)　径2～10mmのローム粒子を2～3%、径10mm以上のロームブロックを2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1%以下含む。締り強い。粘性強い。(貼床)

141号住居跡　P1・P2

1:褐色土(10YR4/4)　径10mm以上のロームブロックを2～3%含む。締り強い。粘性強い。

2:黒褐色土(10YR2/2)　径5～10mmのローム粒子を5～7%含む。締り弱い。粘性弱い。

3:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を7～10%含む。締り弱い。粘性弱い。

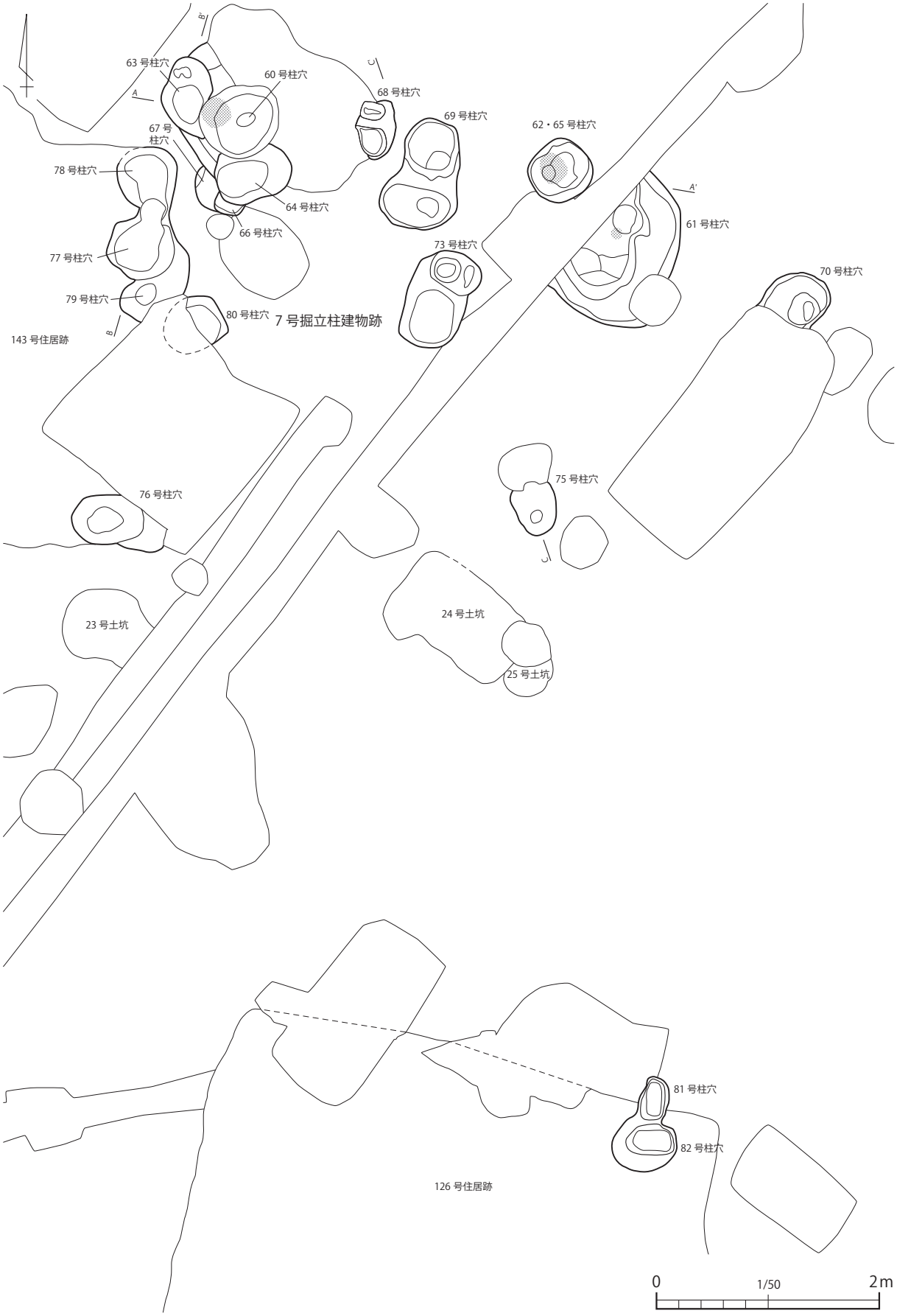
4:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を3～5%含む。締り弱い。粘性弱い。

5:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性弱い。

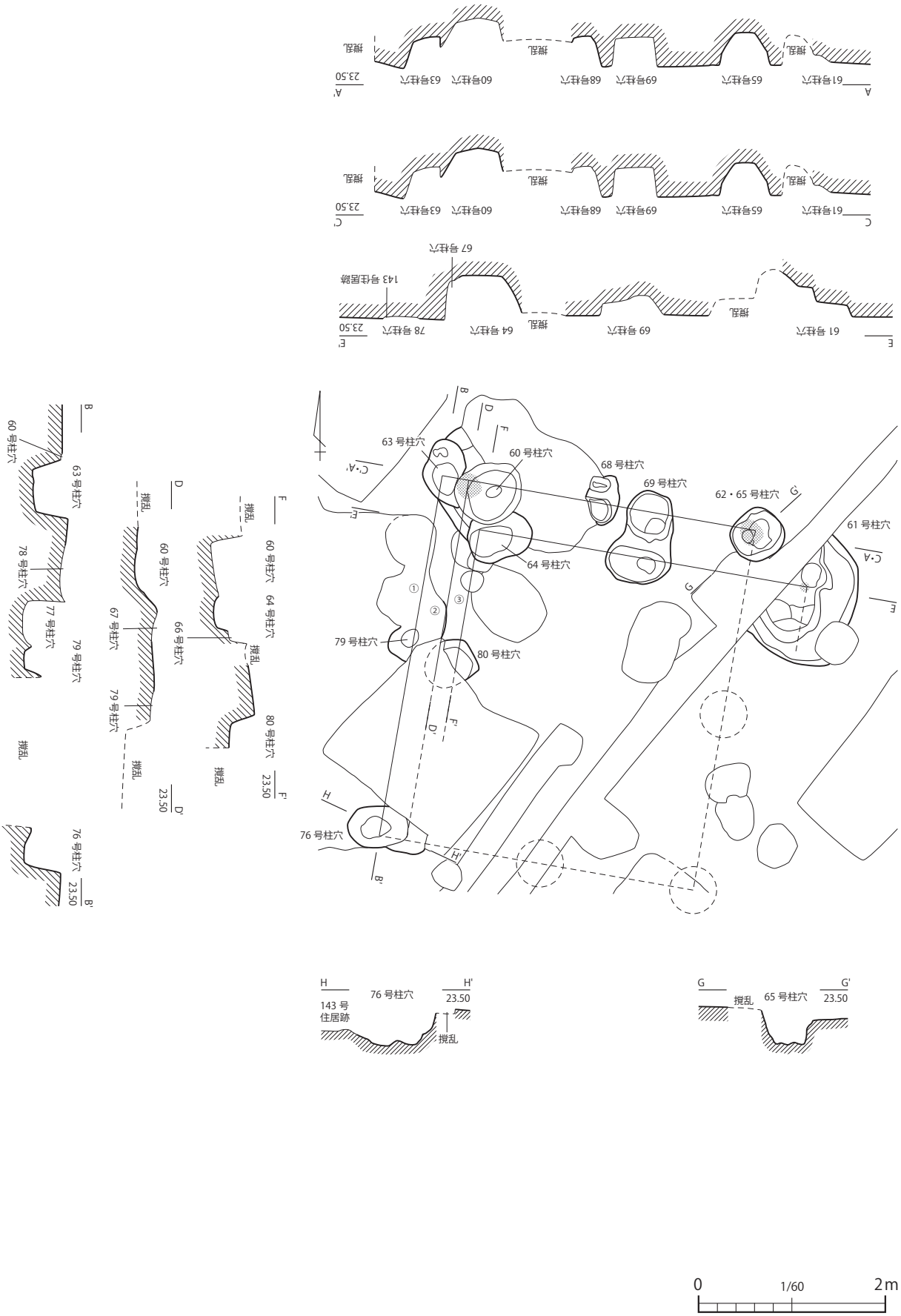
6:黒褐色土(10YR2/2)　径2～5mmのローム粒子を3～5%含む。締り弱い。粘性弱い。

第 14 図　141 号住居跡（1）（1/20・1/60）

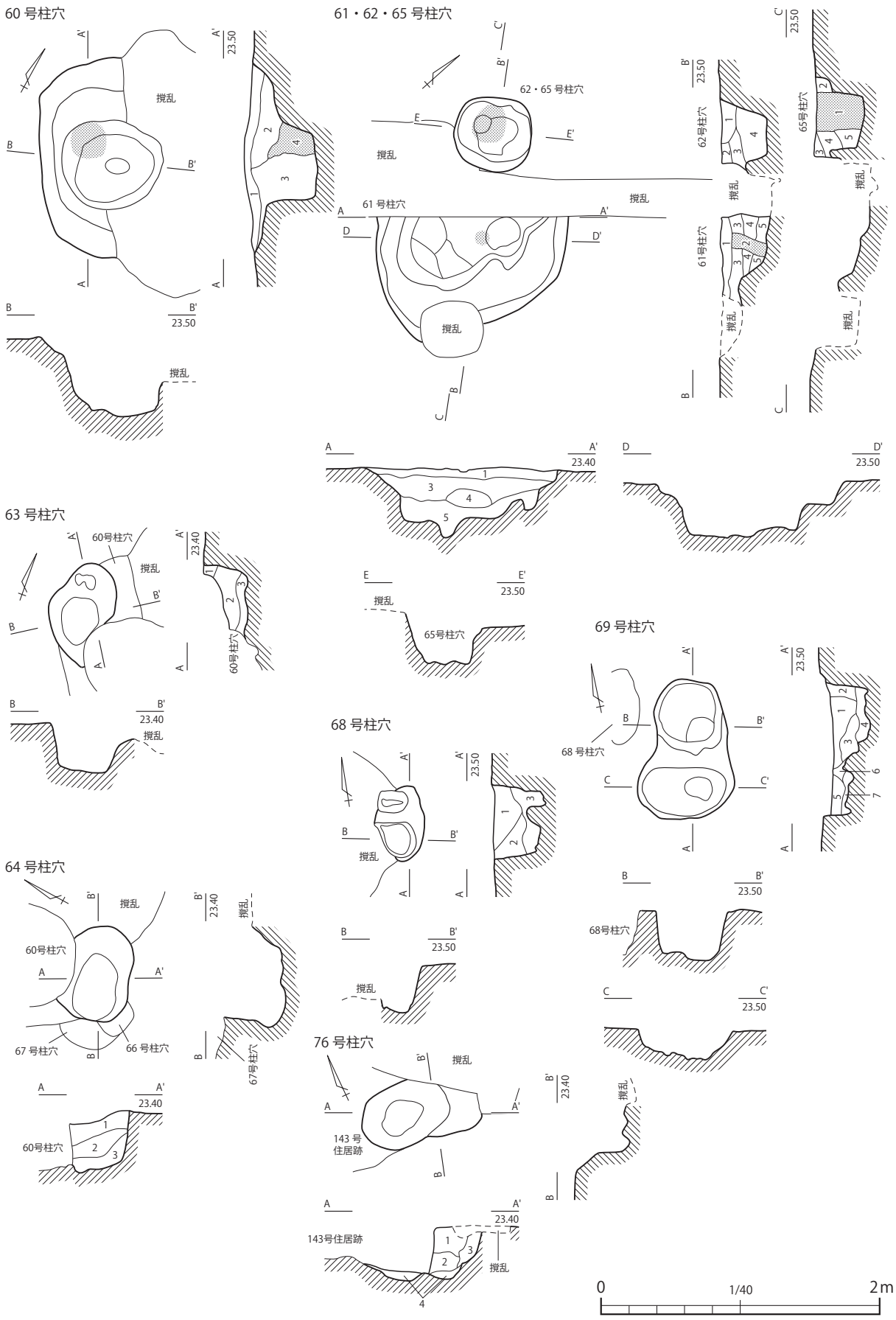
第 15 図　141 号住居跡（2）（1/30）



第 16 図　弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴群（1/50）

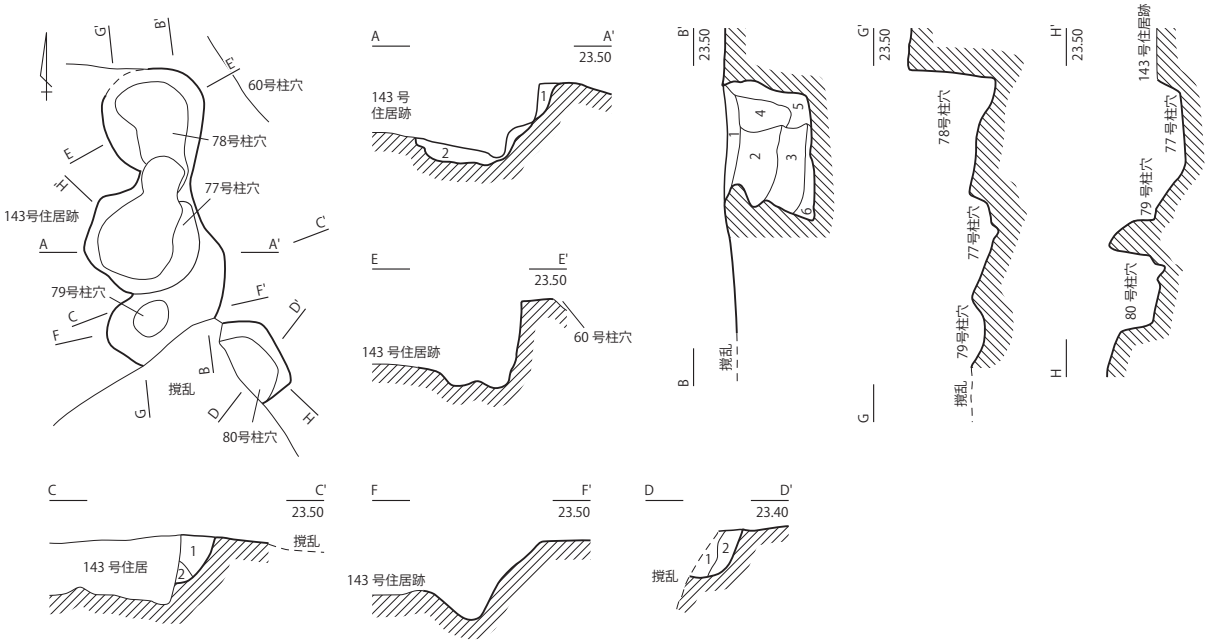


第 17 図　7 号掘立柱建物跡（1）（1/60）

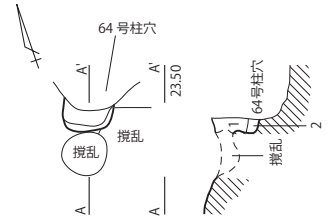


第 18 図　7 号掘立柱建物跡（2）（1/40）

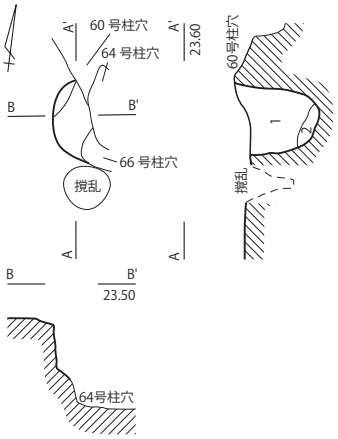
77・78・79・80 号柱穴



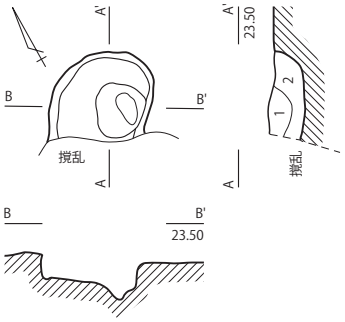
66 号柱穴



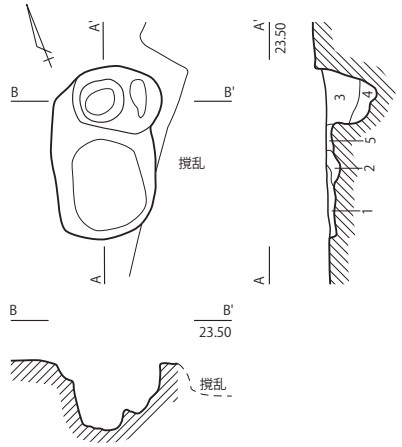
67 号柱穴



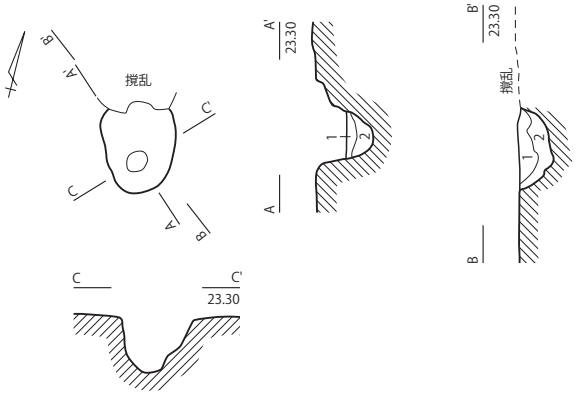
70 号柱穴



73 号柱穴



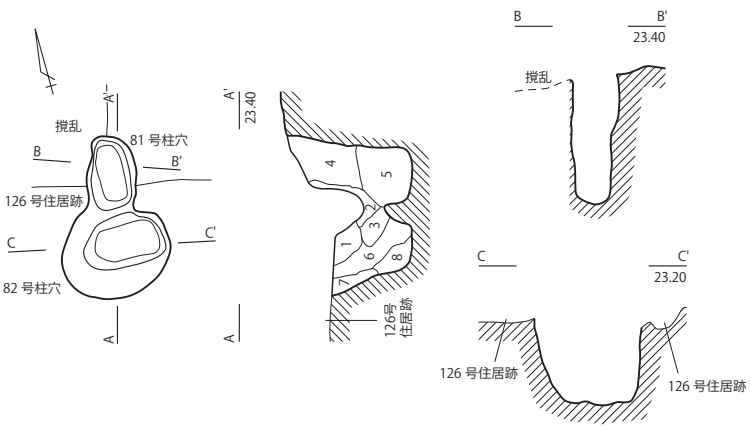
75 号柱穴



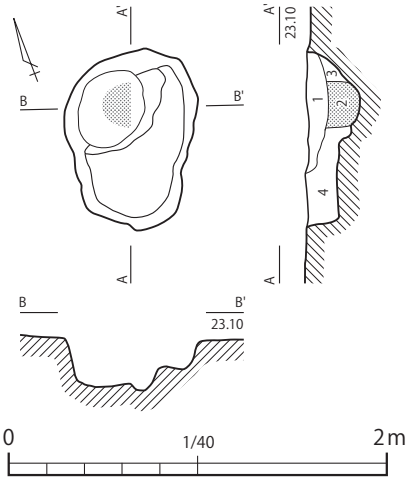
0 1/40 2m

第 19 図　7 号掘立柱建物跡（3）・その他の柱穴（1）（1/40）

81・82 号柱穴



84 号柱穴



弥生時代後期から古墳時代初頭の掘立柱建物跡・柱穴　土層説明

7号掘立柱建物跡

60号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を5～7％含む。締りやや強い。粘性弱い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性やや弱い。
3:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を7～10％、10mm以上のロームブロックを5～7％含む。締り強い。粘性やや弱い。(埋め土)
4:黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を5～7％、径10mm以上のロームブロックを1～2％含む。締り強い。粘性やや弱い。(柱痕)

61号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/3)　径2～10mmのローム粒子を5～7％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を7～10％、径10mm以上のロームブロックを1～2％含む。締りやや強い。粘性やや強い。(柱痕)
3:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を3～5％、径10mm以上のロームブロックを3～5％含む。締り弱い。粘性強い。
4:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを5～7％含む。締り弱い。粘性弱い。
5:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを2～３％含む。締り強い。粘性強い。

62号柱穴
1:暗褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を7～10％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を3～5％、径10mm以上のロームブロックを3～5％含む。締り弱い。粘性強い。
3:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを5～7％含む。締り弱い。粘性弱い。
4:黒褐色土(10YR2/2)　径2～10mmローム粒子を3～5.％、径10mm以上のロームブロックを1～2％含む。締り弱い。粘性やや強い。

63号柱穴
1:暗褐色土(10YR3/3)　径5～10mmのローム粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
2:暗褐色土(20YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
3:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を1～2％、径10mm以上のロームブロックを2～3％含む。締り強い。粘性強い。

64号柱穴
1:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を5～7％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
3:黒褐色土(10YR2/2)　径1～10mmのローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。

65号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を7～10％含む。締り強い。粘性強い。(柱痕)
2:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を10～15％、径1～2mmの焼土粒子を1％以下含む。締りやや弱い。粘性やや弱い。
3:黒褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を3～5％、径10mm以上のロームブロックを3～5％含む。締り弱い。粘性強い。
4:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを5～7％、含む。締り弱い。粘性弱い。
5:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを2～3％含む。締り強い。粘性強い。

68号柱穴
1:にぶい黄褐色土(10YR4/7)　径5～10mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
2:褐色土(10YR4/6)　径5～10mmのローム粒子を5～7％含む。締り強い。粘性強い。
3:褐色土(10YR4/4)　径10mm以上のロームブロックを2～3％含む。締り強い。粘性強い。

69号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を5～7％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
3:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
4:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを3～5％含む。締り強い。粘性強い。
5:黒褐色土(10YR2/2)　径1～5mmのローム粒子を7～10％含む。締り強い。粘性強い。
6:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
7:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを2～3％含む。締り強い。粘性強い。

76号柱穴
1:黒褐色土(10YR3/2)　径2～5mm大のローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
2:暗褐色土(10YR3/3)　径5～10mm大のローム粒子を1～3％含む。粘性強い。締り強い。
3:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mm大のローム粒子を2～5％含む。締り強い。粘性強い。
4:黒褐色土(10YR3/2)　径1～2mm大のローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。

79号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを2～3％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。

80号柱穴
1:黒褐色土(10YR3/2)　径5～10mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
2:暗褐色土(10YR3/4)　径2～5mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。

柱穴

66号柱穴
1:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3％、径10mm以上のロームブロックを2～3％含む。締り強い。粘性強い。

67号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を2～3％、径1～2mmの黒色粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを2～3％含む。締りやや強い。粘性やや強い。

70号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を7～10％含む。締り強い。粘性強い。
2:褐色土(10YR4/6)　径5～10mmのローム粒子を5～7％締り強い。粘性強い。

73号柱穴
1:暗褐色土(10YR3/3)　径2～5mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を7～10％含む。締り強い。粘性強い。
3:黒褐色土(10YR2/2)　径1～10mmのローム粒子を7～10％含む。締り強い。粘性弱い。
4:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを2～3％含む。締り強い。粘性弱い。
5:褐色土(10YR4/6)　径10mm以上のロームブロックを1～2％含む。締り強い。粘性強い。

75号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を1～3％含む。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR3/3)　径2～5mmのローム粒子を1～3％含む。粘性強い。

77号柱穴
1:暗褐色土(10YR3/3)　径1～2mm大のローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR3/2)　径1～2mm大のローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。

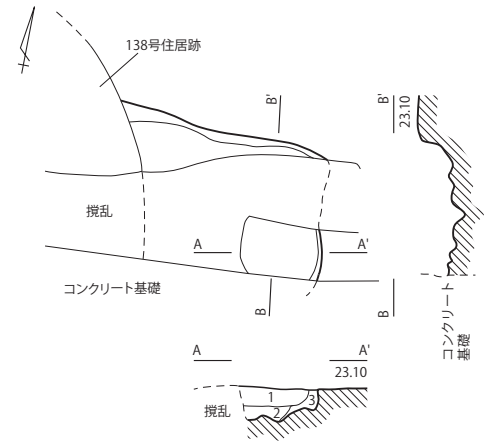
78号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR3/2)　径10mm以上のロームブロックを3～5％含む。締り強い。粘性強い。
3:黒褐色土(10YR3/2)　径1～2mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
4:にぶい黄褐色土(10YR4/3)　径1～2mmのローム粒子を7～10％含む。締り強い。粘性強い。
5:褐色土(10YR4/4)　径2～5mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
6:黒褐色土(10YR3/2)　径2～5mmのローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。

81･82号柱穴
1:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。
2:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmローム粒子を2～3％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％含む。締り弱い。粘性弱い。
3:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを2～3％含む。締り強い。粘性強い。
4:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を2～3％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％含む。
5:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを1～2％含む。締り弱い。粘性やや強い。
6:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を7～10％、径１～2mmの焼土粒子を1～2％含む。
7:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
8:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを1～2％含む。締り弱い。粘性弱い。

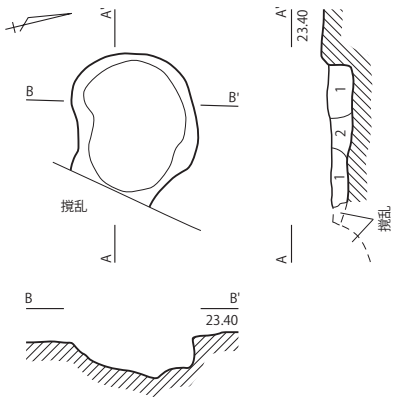
84号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/2)　径2～5mmのローム粒子を5-7％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。(柱痕)
3:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を1～2％含む。締りやや弱い。粘性強い。
4:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを7～10％含む。締り強い。粘性強い。

第 20 図　その他の柱穴（2）（1/40）

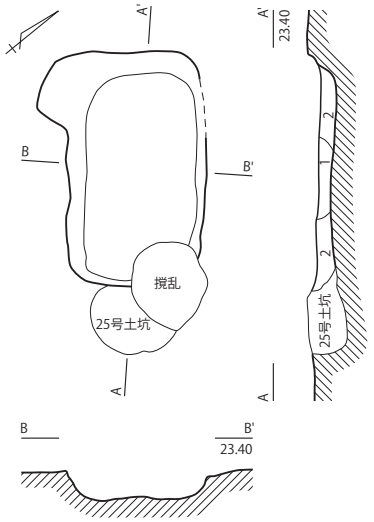
21 号土坑



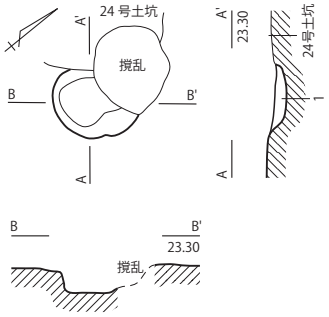
23 号土坑



24 号土坑



25 号土坑



21号土坑
1:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を5～7%、径１～2mmの焼土粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～10mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
3:暗褐色土(10YR3/3)　径5～10mmのローム粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

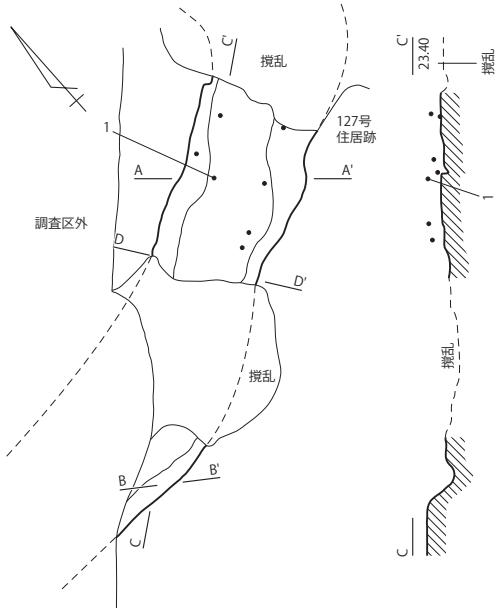
23号土坑
1:黒褐色土(10YR3/2)　径2～5mmのローム粒子を1～3%含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/2)　径2～5mmのローム粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。

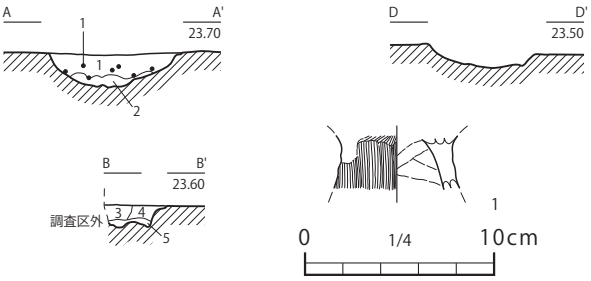
24号土坑
1:暗褐色土(10YR3/3)　径2～5mmのローム粒子を1～3%含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。

25号土坑
1:褐色土(10YR4/4)　径1～2mmのローム粒子を1～3%含む。締り強い。粘性強い。

0　1/40　2m

4 号溝跡

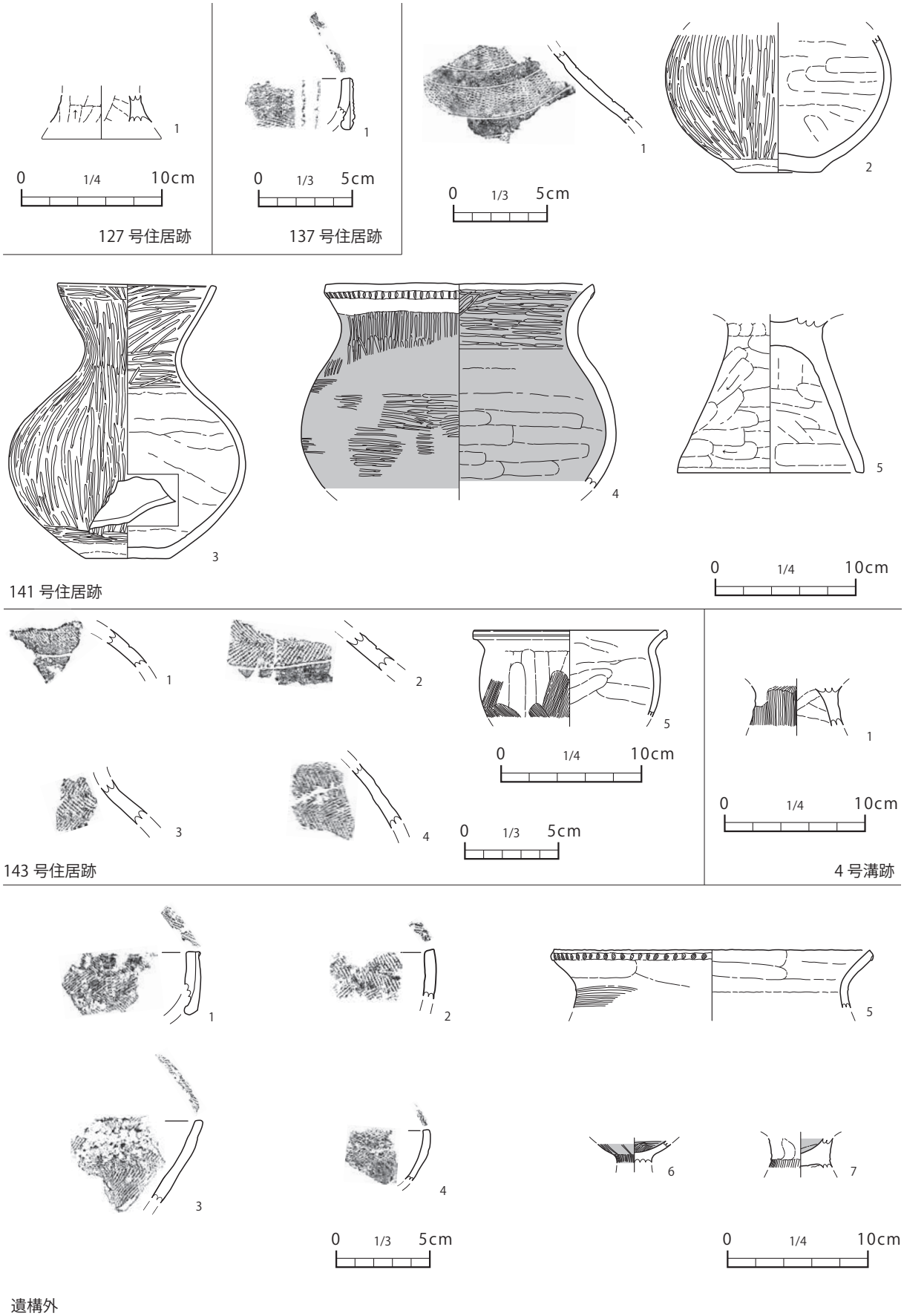




4号溝跡
1:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り弱い。粘性弱い。
2:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを5～7%含む。締り強い。粘性弱い。
3:黒褐色土(10YR2/2)　径1～5mmのローム粒子を5～7%含む。締りやや強い。粘性やや強い。
4:黒褐色土(10YR2/3)　径1～10mmのローム粒子を7～10%含む。締りやや強い。粘性やや強い。
5:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を5～7%含む。締り強い。粘性弱い。

0　1/80　4m

第 21 図　弥生時代後期から古墳時代初頭の土坑・溝跡（1/4・1/40・1/80）



第 22 図　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器（1/3・1/4）

第 4 表　弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡　計測値一覧表

挿図番号	図版番号	住居番号	調査区	グリッド	平面形 ※（）内は推定	長軸（m） ※（）内は推定	短軸（m） ※（）内は推定	壁高（m）	主軸方向	付属施設	柱穴	備考
11・12	8・9	127	Ⅷ	23・24-E・F	（隅丸長方形）	（6.0）	（4.8）	0.11	N 49°W	梯子穴（2 基）	3	中型住居 梯子穴の造り替え、貼床の貼り替えを行っている。 4 号溝跡に切られる。
12	9	128	Ⅷ	22-F	（隅丸方形）	—	—	0.35	—	—	—	南西端のみ検出
13	10	129	Ⅸ①	27-H	隅丸方形	（3.45）	3.4	0.25	—	—	—	小型住居
13	10	138	Ⅹ	35・36-I・J	（楕円形）	—	2.5	0.15	—	—	—	おそらく小型住居
14・15	11・12	141	Ⅺ②-1	43・44-F・G	（隅丸方形）	—	3.78	0.14	—	—	2	おそらく小型住居

第 5 表　弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴　計測値一覧表

挿図番号	図版番号	柱穴番号	調査区	グリッド	平面形 ※（）内は推定	長軸（cm） ※（）内は推定	短軸（cm） ※（）内は推定	深さ（cm）	備考
16 ～ 18	13	60	Ⅷ	24-G・H	—	144	—	58	7 号掘立柱建物跡 63・64・66・67 号柱穴を切る。
16 ～ 18	13	61	Ⅷ	24-H	—	137	—	40	7 号掘立柱建物跡
16 ～ 18	13・14	62	Ⅷ	24-H	（隅丸方形）	（55）	（53）	32	7 号掘立柱建物跡 65 号柱穴を切る。
16 ～ 18	13・14	63	Ⅷ	24-G	不整楕円形	75	46	40	7 号掘立柱建物跡 60 号柱穴に切られる。
16 ～ 18	13・14	64	Ⅷ	24-G・H	楕円形	69	—	34	7 号掘立柱建物跡 60 号柱穴に切られる。 66・67 号柱穴を切る。
16 ～ 18	13・14	65	Ⅷ	24-H	隅丸方形	55	53	24	7 号掘立柱建物跡 62 号柱穴に切られる。
16・19	13・15	66	Ⅷ	24-G	—	27	—	24	60・64 号柱穴に切られる。 67 号柱穴を切る。
16・19	13・15	67	Ⅷ	24-G	—	43	—	47	60・64・66 号柱穴に切られる。
16 ～ 18	13・15	68	Ⅷ	24-H	不整楕円形	52	36	33	7 号掘立柱建物跡
16 ～ 18	13・15	69	Ⅷ	24-H	不整楕円形	98	50	37	7 号掘立柱建物跡
16・19	13・16	70	Ⅷ	24-H	—	—	53	20	
16・19	13・16	73	Ⅷ	24-H	隅丸方形	93	55	35	
16・19	13・16	75	Ⅷ	24-H	楕円形	—	35	29	
16 ～ 18	13・16	76	Ⅷ	24・25-G	（不整楕円形）	—	43	38	7 号掘立柱建物跡
16・19	13・17	77	Ⅷ	24-G	（不整円形）	—	54	44	78・79 号柱穴を切る。
16・19	13・17	78	Ⅷ	24-G	（円形）	—	54	46	77 号柱穴に切られる。
16・17・19	13・17	79	Ⅷ	24-G	（不整楕円形）	76	—	42	7 号掘立柱建物跡 77 号柱穴に切られる。
16・17・19	13・17	80	Ⅷ	24-G	—	—	46	27	7 号掘立柱建物跡
16・20	17	81	Ⅷ	25・26-H	楕円形	34	26	69	
16・20	17	82	Ⅷ	26-H	円形	57	50	47	
20	18	84	Ⅹ	35-K	楕円形	96	70	26	

第 6 表　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器　観察表（1）

挿図番号	図版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	a：口径（cm） b：底径（cm） c：器高（cm） d：残存高（cm） ※（）内は推定値	胎土	焼成	色調 ※（）内は赤彩	成形・調整	残存率	備考
22	39	127 号住居跡	1	台付甕	b：(8.0) d：1.9	良好。細砂粒含む。	良好	暗赤褐 5YR3/4	外面：ヘラナデ。 内面：ナデ。	5%	脚部の下部のみ残存。
22	39	137 号住居跡	1	壺	d：3.7	良好。細砂粒含む。	良好	にぶい黄褐 10YR5/3 （暗赤 10R3/6）	外面：網目状撚糸文施文後、棒状浮文貼付（2 本残存）。棒状浮文に刻みあり。 内面：ナデ。 口唇部：網目状撚糸文施文。	5%	

第６表　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器　観察表（2）

挿図番号	図版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	a：口径（cm） b：底径（cm） c：器高（cm） d：残存高（cm） ※（）内は推定値	胎土	焼成	色調 ※（）内は赤彩	成形・調整	残存率	備考
22	39	141 号住居跡	1	装飾壺	d：6.9	良好。細砂礫を微量に含む。	良好	明赤褐 5YR5/8 （暗赤 7.5R3/6）	外面：網目状撚糸文を全面に施文後、赤彩部分を擦り消して沈線で区画し赤彩。 内面：ナデ。	5%	肩部のみ残存。 大型の直口壺。
22	39	141 号住居跡	2	直口壺	b：6.0 d：9.8	良好。細砂粒含む。	良好	赤褐 5YR4/6	外面：タテヘラミガキ。 内面：指ナデ。	35%	胴部～底部のみ残存。
22	39	141 号住居跡	3	直口壺	a：11.3 b：6.0 c：19.6	良好。細砂粒含む。	良好	暗褐 7.5YR3/3	外面：タテ・ヨコヘラミガキ。 内面：口縁部～頸部ヨコヘラミガキ。口縁部斜方向のヨコヘラミガキ。	95%	胴部下部穿孔あり。
22	39	141 号住居跡	4	広口壺	a：19.0 d：14.5	良好。細砂粒含む。	良好	明赤褐 5YR5/8 （暗赤 10R3/6）	外面：タテ・ヨコヘラミガキ 頸部～胴部赤彩。 内面：ヨコヘラミガキ・ナデ。 口縁部～胴部赤彩。 口縁部刻み（3 ～ 4mm 間隔）あり。	25%	著しく摩耗している。
22	39	141 号住居跡	5	台付甕	b：13.2 d：10.8	良好。細砂礫を微量に含む。	良好	黒褐 10YR3/2	外面：ナデ。 内面：ナデ。	25%	脚部のみ残存。
22	39	143 号住居跡	1	壺	d：2.5	良好。細砂粒含む。	良好	にぶい黄橙 10YR6/4 （極暗赤褐 10YR3/4）	外面：沈線による区画内を、RL 単節縄文。 内面：ナデ。	5%	肩部のみ残存。 全体的に摩耗している。
22	39	143 号住居跡	2	壺	d：1.4	良好。細砂粒含む。	良好	にぶい黄褐 10YR5/4 （暗赤 10YR3/4）	外面：沈線による区画内を RL・LR 羽状縄文施文。RL と LR の間に S 字状結節が 1 段入る。 内面：ナデ。	5%	肩部のみ残存。
22	39	143 号住居跡	3	壺	d：2.6	良好。細砂粒含む。	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	外面：LR・RL 羽状縄文施文。 内面：ナデ。	5%	頸部～肩部の一部のみ残存。 全体的に摩耗している。
22	39	143 号住居跡	4	壺	d：4.6	良好。細砂粒含む。	良好	にぶい黄褐 10YR5/3	外面：LR・RL 羽状縄文施文。 内面：ナデ。	5%	肩部のみ残存。
22	39	143 号住居跡	5	広口壺	a：13.6 d：6.2	良好。細砂粒含む。	良好	暗赤褐 5YR3/3	外面：タテハケ後ナデ。 内面：ナデ。 口縁部：ナデ。沈線。	10%	
22	39	4 号溝跡	1	台付甕	d：2.8	良好。細砂粒含む。	良好	にぶい黄褐 10YR4/3	外面：タテハケ。ナデ。 内面：ナデ。	5%	脚部の上部のみ残存。
22	39	Ⅷ区 表土	1	壺	d：3.3	良好。細砂粒含む。	良好	黒褐 10YR3/2 （明赤褐 2.5YR5/8）	外面：RL・LR 羽状縄文施文。 内面：ナデ。赤彩。 口唇部：LR 単節縄文施文。刻みあり。	5%	口縁部のみ残存。
22	39	Ⅷ区 表土	2	壺	d：2.6	良好。細砂粒含む。	良好	褐 7.5YR4/6 （暗赤 10YR3/4）	外面：RL・LR 羽状縄文施文。 内面：ナデ。赤彩。 口唇部：LR 単節縄文施文。	5%	口縁部のみ残存。
22	39	Ⅺ区 表土	3	直口壺	d：4.4	良好。細砂粒含む。	良好	明褐 10YR5/6 （赤 10R4/6）	外面：単節 LR 縄文を S 字状結節で区画。 内面：ナデ。赤彩。 口唇部：単節 LR 縄文施文。	5%	口縁部のみ残存。
22	39	Ⅷ区 表土	4	埦	d：2.3	良好。細砂粒含む。	良好	（暗褐 7.5YR3/4）	内面：ナデ。赤彩。 口縁部・口唇部：網目状撚糸文施文。赤彩。	5%	口縁部のみ残存。
22	39	Ⅷ区 表土	5	台付甕	a：22.4 d：4.1	良好。細砂礫を微量に含む。	良好	明赤褐 5YR5/6	外面：ヨコハケ。 口唇部：ハケ状工具木口による刻みあり。 内面：ナデ。 口縁部：ナデ。	5%	口縁部のみ残存。
22	39	Ⅷ区 表土	6	高坏	d：1.3	良好。細砂礫を微量に含む。	良好	（暗赤 10YR3/6）	外面：タテヘラミガキ。赤彩。 内面:タテ･ヨコヘラミガキ。赤彩。	5%	有稜低脚高坏。 全体的に摩耗している。
22	39	Ⅹ区 36-G	7	高坏	d：2.0	良好。細砂礫を微量に含む。	良好	暗赤褐 2.5YR5/6 （暗赤褐 7.5YR3/3）	外面：粘土帯貼り付け。タテヘラミガキ。 内面：坏部　ヨコハケ。 脚部　指ナデ。赤彩。	10%	接合部のみ残存。

3　古代

1）遺構

A　住居跡

126 号住居跡（第 24 ～ 26 図、図版 20・21、第 7 表）

調査区北側 25・26-G・H 区で検出された。南側がアパート基礎に削られ、北東側では 81・82 号柱穴を切っている。

長軸は 4.55m で、短軸は柱穴の配置等から復元し推定 3.96m の規模を測り、床面積約 28㎡の平面形長方形の中型住居と考えられる。柱穴は 3 基検出され、南東側の柱穴や貯蔵穴は検出されていない。主柱穴 P1 ～ P3 は掘方上面の径 0.3 ～ 0.5m、深さ 0.5m を測る。P4 は梯子穴と考えられ、北壁側に楕円形に一段深く掘り込みを持つ。地表からの深さは 0.7m を測る。堆積土は 9 層に分かれ、貼床は 8・9 層が相当し、厚さは 5.0 ～ 10.0cm を測る。

カマドは東壁中央に位置し、全長約 1.4m ×左右幅約 1.2m を測る。袖と天井が大きく潰れ、粘土を含む構築土が広範囲に広がった状態で検出された。煙道がやや角度を急にして立ち上がり、火床面はカマドの中央で長軸約 0.5m ×短軸約 0.4m ×厚さ約 0.03m の範囲で、不整楕円形に広がっていた。

遺物はカマドを中心に、住居跡の全面で良好に出土した。縄文時代の深鉢 2 点、弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 11 点、壺 32 点、焼成粘土塊 28 点、古代の土師器甕 625 点、坏 20 点、須恵系土器坏 30 点、須恵器甕 8 点、瓶 13 点、坏 50 点、石器 1 点、礫 7 点、鉄器 1 点、鉄滓 1 点である。

土師器甕 11・12・13・17・18 はカマドとカマドから西側にかけて広がり、覆土中から細かく割れて重なった状態で出土した。住居廃絶後に投げ入れて遺棄されたものと思われる。甕の時期は 9 世紀初頭～中葉にわたる。甕 20 は台付甕の脚部で、重なり合った甕の破片の側から、脚部を斜め上に向けて割れた状態で出土した。

土師器甕から、9 世紀前半～中葉の住居跡と思われる。

131 号住居跡（第 26 図、図版 22、第 7 表）

調査区北側 30・31-I 区で検出された。北西端のみ検出され、その他の範囲は調査区外のため調査していない。また、83 号柱穴に切られている。正確な平面形や規模は不明である。柱穴等は検出されていない。堆積土は 9 層に分かれ、貼床は 8・9 層で、厚さは 5.0 ～ 15.0cm を測る。

カマドも検出されていないが、住居跡の北側の調査区外壁に焼土粒子の分布が認められたことから、カマドは北壁にあると推測される。また、住居跡の床面西壁側に、長軸約 0.4m ×短軸約 0.2m ×厚さ約 0.1m の半円形の焼土の分布が確認された。

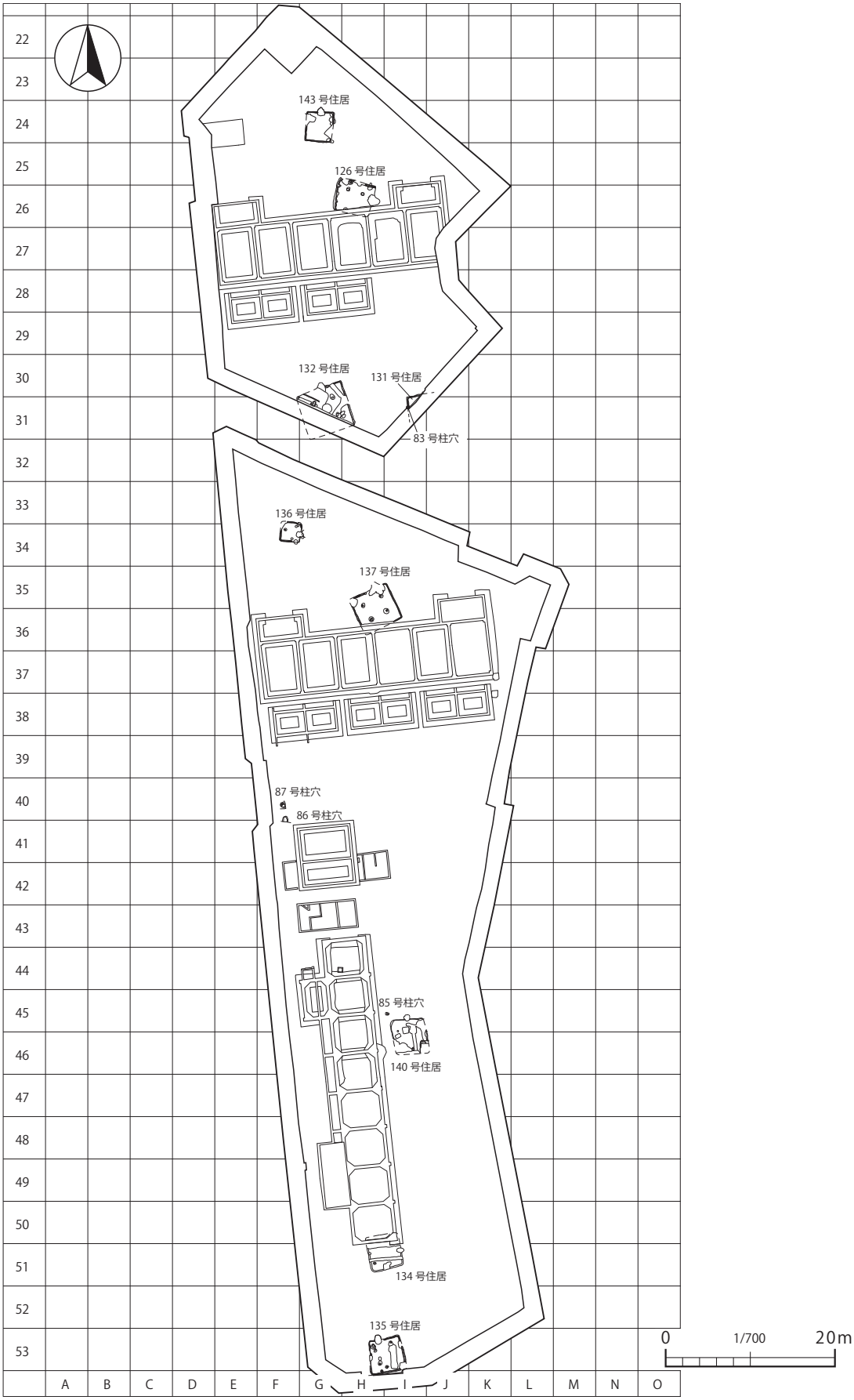
遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の壺 2 点、古代の土師器甕 12 点、坏 6 点、須恵器坏 1 点、土製支脚 1 点、焼成粘土塊 4 点が出土しているが、小破片のため図示には至らなかった。

出土した土師器坏が 8 世紀前半のものであることから、8 世紀前半の住居跡と思われる。

132 号住居跡（第 27・28 図、図版 23・24、第 7 表）

調査区北側 30・31-F・G・H 区で検出された。北東側が検出され、南西側は調査区外であり、検出された北東側も攪乱により削られている部分が多く、住居跡の残存部は多くない。

東西 5.7m ×南北推定 5.5m の規模を測り、床面積約 31㎡の平面形方形の中型住居と考えられる。



第 23 図　古代　遺構分布図（1/700）

柱穴が 3 基検出され、南西側の柱穴や貯蔵穴・梯子穴は検出されていない。堆積土は 11 層に分かれ、貼床は 8 ～ 11 層が相当し、厚さは 10.0 ～ 20.0cm を測る。

カマドは北壁のほぼ中央部に位置し、掘方の規模は全長約 1.0m ×左右幅約 0.9m を測る。1 ～ 4 層の後世の掘り込みや攪乱により遺存状態は悪く、袖は東側に極わずかに残存していた。白色粘土ブロックで構築され、被熱しており、最大幅約 0.18m ×高さ 0.19m を測る。火床面は確認することが出来なかった。

遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 8 点、壺 5 点、古代の土師器甕 82 点、坏 82 点、須恵器甕 1 点、坏 3 点、焼成粘土塊 2 点、鉄器 1 点が出土している。土師器坏 1 はほぼ完形で、住居跡の北東端の覆土中から割れた状態で出土し、破片の半分は見込みを上向きにしていた。

7 世紀後半の土師器坏が多く出土していることから、7 世紀後半の住居跡と思われる。

134 号住居跡（第 29・30 図、図版 25・26、第 7 表）

調査区南側 50･51-H･I 区で検出された。南側が検出され、北側はアパート基礎と攪乱により削られ、北壁のごく一部のみ残存している。

南北推定 4.2m ×東西 3.93m の規模を測り、床面積約 16㎡の平面形隅丸方形の中型住居と考えられる。柱穴・貯蔵穴・梯子穴は検出されていない。堆積土は 5 層に分かれ、貼床は 5 層に相当し、厚さは 5.0 ～ 10.0cm を測る。

カマドは東壁中央部に位置し、掘方の規模は全長約 0.8m ×左右幅約 0.5m を測る。カマドの上に攪乱が被っていたため残存状態は良くなく、袖は検出されなかった。火床面はカマドの中央で、長軸 0.4m ×短軸約 0.35m ×厚さ約 0.01m の範囲で、不整円形に広がっていた。

遺物は縄文時代の石器 1 点、古代の土師器甕 63 点、坏 8 点、須恵器坏 19 点、鉄器 1 点が出土した。

出土した土師器坏のうち 1 点は暗文が施されている破片で、7 世紀後半のものとみられ、流れ込みによるものと考えられる。同じような暗文が施された土師器坏の破片は、135 号住居跡から 1 点、調査区の表土から 2 点出土している。

9 世紀初頭の須恵器坏の破片が多く出土していることから、9 世紀初頭の住居跡と思われる。

135 号住居跡（第 31・32 図、図版 27・28、第 7 表）

調査区南端 53・54-H・I 区で検出された。東・西・南壁の一部が、攪乱により削られている。

東西 4.25m ×南北 4.1m の規模を測り、床面積約 17㎡の平面形隅丸方形の中型住居であるが、南壁が北壁より長い特徴をもつ。柱穴 4 基（P1・P2・P4・P6）と梯子穴が検出され、南東側の柱穴と貯蔵穴は検出されていない。堆積土は 11 層に分かれ、貼床は 9 ～ 11 層が相当し、厚さは 5.0 ～ 15.0cm を測る。

P3 は住居跡の南側中央に位置し、長軸 0.41m ×短軸 0.34m ×深さ 0.18m を測る。平面形は不整楕円形である。また、P3 の南西に P7 がある。深さが約 0.65m あり、梯子穴や貯蔵穴にするには深すぎるため通常の柱穴として扱っているが、性格は不明である。

カマドは北壁西寄りに位置し、掘方は全長約 1.1m ×左右幅約 0.9m を測る。袖はローム土と粘土により構築され、左右に部分的に残存し、右袖は外側に大きく広がっている。右袖は最大幅約 0.15m ×高さ 0.22m、左袖は最大幅約 0.2m ×高さ 0.16m を測る。煙道が残存し、火床面は確認されなかった。

遺物は縄文時代の深鉢 10 点、弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 1 点、壺 2 点、古代の土師器甕 202 点、坏 11 点、焼成粘土塊 4 点、須恵器瓶 1 点、坏 19 点、礫 1 点、鉄器 1 点、中世以降の土師質土器 1 点が出土している。

縄文時代の土器が他の遺構よりもやや多く出土しており、型式は前期前葉黒浜式である。同様の土器が住居跡の北東にある縄文時代の 26 号土坑からも出土している。このことから、135 号住居跡やその周辺には縄文時代の何らかの遺構があった可能性が考えられる。

また、出土した土師器坏のうち破片の 1 点は暗文が施されている破片で、7 世紀後半のものと考えられる。

土師器坏 1 などから、7 世紀後半の住居跡と思われる。

136 号住居跡（第 33・34 図、図版 29・30、第 7 表）

調査区中央北側 33・34-F・G 区で検出された。北西端やカマドの一部が攪乱により削られている。

一辺 2.4m の規模を測り、面積約 5㎡の平面形隅丸方形の極小型住居と考えられる。主柱穴・貯蔵穴・梯子穴は検出されていない。堆積土は 9 層に分かれ、貼床は 7 ～ 9 層が相当し、厚さは 5.0 ～ 20.0cm を測る。

P1 は住居跡の西側中央寄りで検出された。貼床面での径 0.3m ×深さ約 0.6m を測り、梯子穴や貯蔵穴にするには深すぎるため通常の柱穴として扱っている。堆積土層を見ると、3 層が堆積した後に 1・2 層が混入しており、上層部を何かに利用していたことが分かるが、性格は不明である。

カマドは東壁中央部に位置し、掘方は全長約 0.7m ×左右幅約 0.9m を測る。袖は粘土により構築され、左右にわずかに残存していた。右袖は最大幅約 0.4m ×高さ 0.08m、左袖は最大幅約 0.3m ×高さ 0.09m を測る。両袖の間に、長軸約 0.4m ×短軸約 0.2m ×厚さ約 0.04m の不整長方形に広がる火床面が確認された。

遺物はカマドを中心に出土した。弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 49 点、壺 3 点、古代の土師器甕 129 点、坏 8 点、須恵器坏 1 点、焼成粘土塊 3 点である。

甕 1 はカマドの火床面よりやや上層から、口縁部を西側の焚口に向けて押し潰された状態で出土した。9 世紀初頭の甕で、住居廃絶後に遺棄されたものと思われる。

甕 1 をはじめ、9 世紀初頭の土師器甕の破片が多く出土していることから、9 世紀初頭の住居跡と思われる。また、規模がかなり小さい住居跡であることから、居住用ではなく、掘立柱建物跡等に付属した煮炊き用施設の可能性も考慮すべきである。

137 号住居跡（第 35・36 図、図版 31・32、第 7 表）

調査区中央北側 35・36-H・I 区で検出された。北西・南西端とカマドがアパート基礎や攪乱により削られている。

東西 4.9m ×南北 4.55m の規模を測り、面積約 22㎡の平面形方形の中型住居と考えられる。カマドは消滅しており、貯蔵穴・梯子穴は検出されていない。カマドは北壁の東寄りに位置していたものと推定される。堆積土は 13 層に分かれ、貼床は 13 層が相当し、厚さは 2.0 ～ 5.0cm と薄い。

主柱穴は 4 基検出され、それぞれ柱痕も残存していた。貼床面の径は 0.4 ～ 0.5m、深さ 0.5 ～ 0.8m を測る。柱痕による芯々間距離は、P1 ～ P4：2.5m、P3 ～ P4：2.3m、P1 ～ P3：2.0m、P2 ～ P4：2.0m を測る。また、住居跡の東側床面に長軸約 3.8m ×短軸約 0.7m の範囲に広がる焼土が

確認された。これは、住居廃絶時に土で埋める際、たまたま東側部分を焼土で埋めたものと思われる。

遺物は住居跡の南東側を中心に出土した。弥生時代から古墳時代初頭の甕 2 点、壺 6 点、古代の土師器甕 45 点、鉢 1 点、坏 17 点、須恵系土器坏 1 点、須恵器甕 1 点、坏 3 点である。

7 世紀後半の坏や鉢などから、7 世紀後半の住居跡と思われる。

140 号住居跡（第 37・38 図、図版 33・34、第 7 表）

調査区中央 45･46-I･J 区で検出された。住居跡の広範囲に攪乱が及んでおり、遺存状態は良くない。

長軸推定 4.2m ×短軸 4.15m を測り、面積 17㎡の平面形隅丸方形の中型住居と考えられる。柱穴は検出されていない。堆積土は 6 層に分かれ、貼床は 5 層が相当し、厚さは 2.0 ～ 5.0cm と薄い。

梯子穴 P1 は住居跡の南側中央に位置し、長軸 0.32m ×短軸 0.26m ×深さ 0.27m を測る。平面形は不整円形である。貯蔵穴 P2 は住居跡の南東部に位置し、南側は攪乱により失われており、長軸 0.69m ×残存部の短軸 0.3m ×深さ 0.42m を測る。平面形は隅丸長方形と推測される。

カマドは北壁中央に位置し、全長約 0.7m ×左右幅約 0.7m を測る。袖はローム土と粘土により構築され、左右にわずかに残存していた。右・左袖ともに、最大幅約 0.05m ×高さ 0.05m を測る。煙道が角度をやや急にして残存し、火床面はカマドの中央で長軸約 0.3m ×短軸約 0.15m ×厚さ約 0.05m の範囲で、不整長方形に広がっていた。

遺物は住居跡の北側を中心に出土した。弥生時代初頭から古墳時代初頭の甕 4 点、古代の土師器甕 17 点、坏 14 点、須恵系土器坏 2 点、須恵器坏 2 点である。

床面から出土した土師器坏 1 などから、7 世紀後半の住居跡と思われる。

143 号住居跡（第 39・40 図、図版 35・36、第 7 表）

調査区北側 24-G 区で検出された。東・西壁の一部が攪乱により削られ、また、7 号掘立柱建物跡の 76 ～ 79 号柱穴を切っている。

長軸 3.6m ×短軸 3.15m の規模を測り、面積約 11㎡の平面形方形の小型住居と考えられる。柱穴は検出されていない。堆積土は 12 層に分かれ、貼床は 11 層が相当し、厚さは 2.0 ～ 5.0cm と薄い。

カマドは北壁中央に位置し、全長約 1.0m ×左右幅約 1.1m を測る。袖はローム土と粘土により構築され、袖構築土内部にはわずかに砂利が含まれている。右袖は最大幅約 0.4m ×高さ 0.22m、左袖は最大幅約 0.3m ×高さ 0.19m を測る。煙道が残存し、北壁から北側に約 0.5m 程張り出し、煙道近くに長軸約 0.4m ×短軸約 0.3m ×厚さ約 0.03m の楕円形に広がる火床面が確認された。

遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の甕 25 点、壺 90 点、高坏 3 点、古代の土師器甕 72 点、坏 7 点、須恵器坏 6 点、石器 1 点、炭化種子 1 点が出土した。

石器 2 は支脚で、カマドの火床面上から横向きに倒れた状態で出土した。

9 世紀後半代の土師器甕の破片が多く出土していることから、9 世紀後半の住居跡と思われる。また古代の遺物のほかに、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が多量に出土しているが、これは住居跡の近くに弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴群があり、その遺物が紛れ込んだためだと考えられる。

B　柱穴

柱穴はまとまることなく分布しており、堆積土から古代に含まれる柱穴と判断された。遺物は出土せず、性格は不明である。

83 号柱穴（第 41 図、図版 37）

調査区北側 31-I 区で検出された。131 号住居跡を切っている。長軸 0.4m ×短軸推定 0.39m ×深さ 0.35m を測り、平面形は円形になると思われる。堆積土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

85 号柱穴（第 41 図、図版 37）

調査区中央 45-I 区で検出された。長軸 0.43m ×短軸 0.33m ×深さ 0.29m を測り、平面形は楕円形である。堆積土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

86 号柱穴（第 41 図、図版 37）

調査区中央 40・41-F 区で検出された。長軸 0.64m ×残存部の短軸 0.63m ×深さ 0.19m を測り、平面形は楕円形になると思われる。堆積土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

87 号柱穴（第 41 図、図版 37）

調査区中央 40-F 区で検出された。残存部の長軸 0.67m ×短軸 0.59m ×深さ 0.35m を測り、平面形は不整方形になると思われる。堆積土は 6 層に分かれる。遺物は古代の土師器甕が 1 点出土した。

2）遺物

古代の遺物は、遺構内外から、土師器 2,202 点、須恵系土器 65 点、須恵器 482 点、土製支脚 1 点、焼成粘土塊 13 点、石器 2 点、礫 8 点、鉄器 5 点、炭化種子 1 点が出土した。遺物は小破片が多いため図示できるものが少なく、ここでは土師器 28 点、須恵系土器 3 点、須恵器 21 点、石器 2 点、鉄器 4 点を報告する。

A　遺構内出土遺物

126 号住居跡（第 42 図、図版 40、第 8 表）

土師器 645 点、須恵系土器 30 点、須恵器 71 点、石器 1 点、鉄器 2 点が出土し、ここでは土師器 14 点、須恵系土器 3 点、須恵器 4 点を図示した。

1 は 7 世紀後半の土師器坏で、外面はヨコ方向のケズリとナデ調整、内面はナデ調整を施し、底部に丸みをもつ。2 ～ 4 は 9 世紀初頭の須恵系土器坏で、4 は底部回転糸切り後未調整である。

5 は須恵器瓶で、胴部下半のみ残存していた。外面にススのような付着物が見られる。6 は 9 世紀前半～中葉の須恵器瓶で、底部のみ残存していた。底部回転糸切り後、外周へラケズリを施し、高台を取り付け、ナデ調整をしている。高台の接合面は外側である。7・8 は 9 世紀前半の須恵器坏で、8 は底部回転糸切後未調整である。

9 ～ 21 は土師器甕で、9 ～ 14 は口縁部が「く」の字形から「コ」の字形へ変わる移行期の 9 世紀初頭、15 ～ 18 は口縁部「コ」の字形が成立した 9 世紀中葉のものである。それぞれ、外面はケズリ、内面・口縁部はナデ調整が施されている。16 は口縁部に粘土帯の輪積み痕が一部残る。19 は平底の底部、20 は小型の台付甕、21 は大型の台付甕の脚部で、脚部裾にはナデ調整が施されている。それぞれ、9 世紀初頭のものと思われる。

132 号住居跡（第 43 図、図版 41、第 8 表）

土師器 164 点、須恵器 4 点、鉄器 1 点が出土し、ここでは土師器 5 点、須恵器 1 点を図示した。

1 ～ 4 は 7 世紀後半の土師器坏で、外面はヨコ・ナナメ方向のケズリとナデ調整、内面はナデ調整を施し、底部に丸みをもつ。1 は外面上部と内面全面に、赤彩が施されている。

5 は 9 世紀前半の須恵器坏で、底部回転糸切り後未調整である。6 は 7 世紀後半の土師器甕で長胴甕と思われる。口縁部のみ残存し、粘土帯の輪積み痕が見られる。

134 号住居跡（第 43 図、図版 41、第 8 表）

土師器 71 点、須恵器 19 点、鉄器 1 点が出土し、ここでは土師器 2 点、須恵器 3 点を図示した。

1 は 8 世紀中葉の落合型と思われる土師器坏で、内面の口縁部に赤彩が残り、全体的に摩耗している。2 ～ 4 は須恵器坏で、2・3 は 9 世紀前半、4 は 8 世紀後半～ 9 世紀前半と思われる。3 は底部回転糸切り後未調整で、4 は底部回転糸切り後外周ヘラケズリを施している。

5 は 9 世紀前半と思われる台付甕の脚部で、外面・内面ともに調整痕は認められない。

135 号住居跡（第 43 図、図版 41、第 8 表）

土師器 213 点、須恵器 20 点、鉄器 1 点が出土し、ここでは土師器 1 点、須恵器 2 点を図示した。

1 は 7 世紀後半の土師器坏で、外面はヨコ方向のケズリとナデ調整、内面はナデ調整を施し、底部に丸みをもつ。また、外面上部と内面全面に赤彩が施されている。2 は 9 世紀前半と思われる須恵器坏で、内外面に火襷痕が残る。

3 は 7 世紀後半の長頸瓶で、頸部のみ残存し、胴部との接着面の直径は 5.9cm を測る。

136 号住居跡（第 43 図、図版 41、第 8 表）

土師器 137 点、須恵器 1 点が出土し、土師器 1 点を図示した。

1 は 9 世紀初頭の土師器甕で、口縁部が「く」の字形から「コ」の字形に変わる様相を呈している。外面はケズリ・内面・口縁部はナデ調整を施している。

137 号住居跡（第 43 図、図版 41、第 8 表）

土師器 63 点、須恵系土器 1 点、須恵器 4 点が出土し、土師器 3 点を図示した。

1・2 は 7 世紀後半の土師器坏で、1 は外面にナナメ方向のケズリとナデ調整、内面にナデ調整を施し、内・外面ともに口縁部に幅 1.5mm 程度の沈線が施文されている。また口唇部に幅 1mm 程度の刻みがわずかに見られる。2 は内・外面ともに調整痕不明で、底部に丸みをもつ。

3 は 7 世紀後半の土師器鉢で、外面はヨコ・ナナメ方向のケズリとナデ調整、内面はナデ調整を施している。底部に直径 6.2cm の孔が空いており、甑に転用した可能性が考えられる。

138 号住居跡（第 43 図、図版 41、第 8 表）

弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡だが、土師器 58 点、須恵器 4 点が出土し、須恵器 1 点を図示した。

1 は 9 世紀前半と思われる須恵器坏で、破片のため底部の調整痕は不明である。

140 号住居跡（第 43 図、図版 41、第 8 表）

土師器 31 点、須恵系土器 2 点、須恵器 2 点が出土し、土師器 1 点、須恵系土器 1 点を図示した。

1 は 7 世紀後半の土師器坏で、外面はナナメ方向のケズリとナデ調整、内面はナデ調整を施している。2 は 9 世紀後半と思われる須恵系土器坏で、底部回転糸切り後未調整である。

141 号住居跡（第 43 図、図版 41、第 8 表）

弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡だが、土師器 6 点、須恵器 1 点が出土しており、須恵器 1 点を図示した。

1 は 9 世紀以降の須恵器瓶で、底部回転糸切り後未調整である。

143 号住居跡（第 43 図、図版 41、第 8 表）

土師器 79 点、須恵器 6 点、石器 1 点が出土し、ここでは土師器 1 点を図示した。

1 は土師器甕の底部で、小破片のため年代は不明である。外面はヨコ・ナナメ方向のケズリ、内面はナデ調整を施している。

B　遺構外出土遺物（第 43 図、図版 41、第 8 表）

調査区の表土や攪乱から、土師器 634 点、須恵系土器 32 点、須恵器 345 点が出土した。また、出土した土師器坏のうち 2 点は暗文が施されている破片で、7 世紀後半のものとみられる。同じような暗文が施された土師器坏の破片は、134・135 号住居跡からも 1 点ずつ出土している。

ここではこれらの出土遺物のうち、須恵器 8 点を図示した。

1 ～ 8 は須恵器坏で、1・2 は 8 世紀後半のものと思われ、底部回転糸切り後外周ヘラケズリと全面ヘラケズリが見られる。3・4 は 8 世紀後半～ 9 世紀前半のもので、底部回転糸切り後外周ヘラケズリである。5･6 は 9 世紀前半のもので、底部回転糸切り後未調整と外周ヘラケズリが見られる。7･8 は 9 世紀後半のものと思われ、底部回転糸切り後未調整である。

C　石器（第 44 図、図版 42、第 9 表）

1 は 126 号住居跡から出土した、砂岩製の砥石である。大部分を欠損し、現存長・幅約 4.5cm、厚さ約 1.1cm を測る。表面に 1.5cm 程度の研磨痕が残り、研磨部分はやや凹んでいる。

2 は 143 号住居跡から出土した、砂岩製の支脚である。全面が被熱し、右下部を欠損している。また、頂部から約 7cm の範囲全面に付着物が付着している。支脚として使用した際に下部を火床内に埋めて立てたため、露出する頂部～中部に付着物が付着したと思われる。

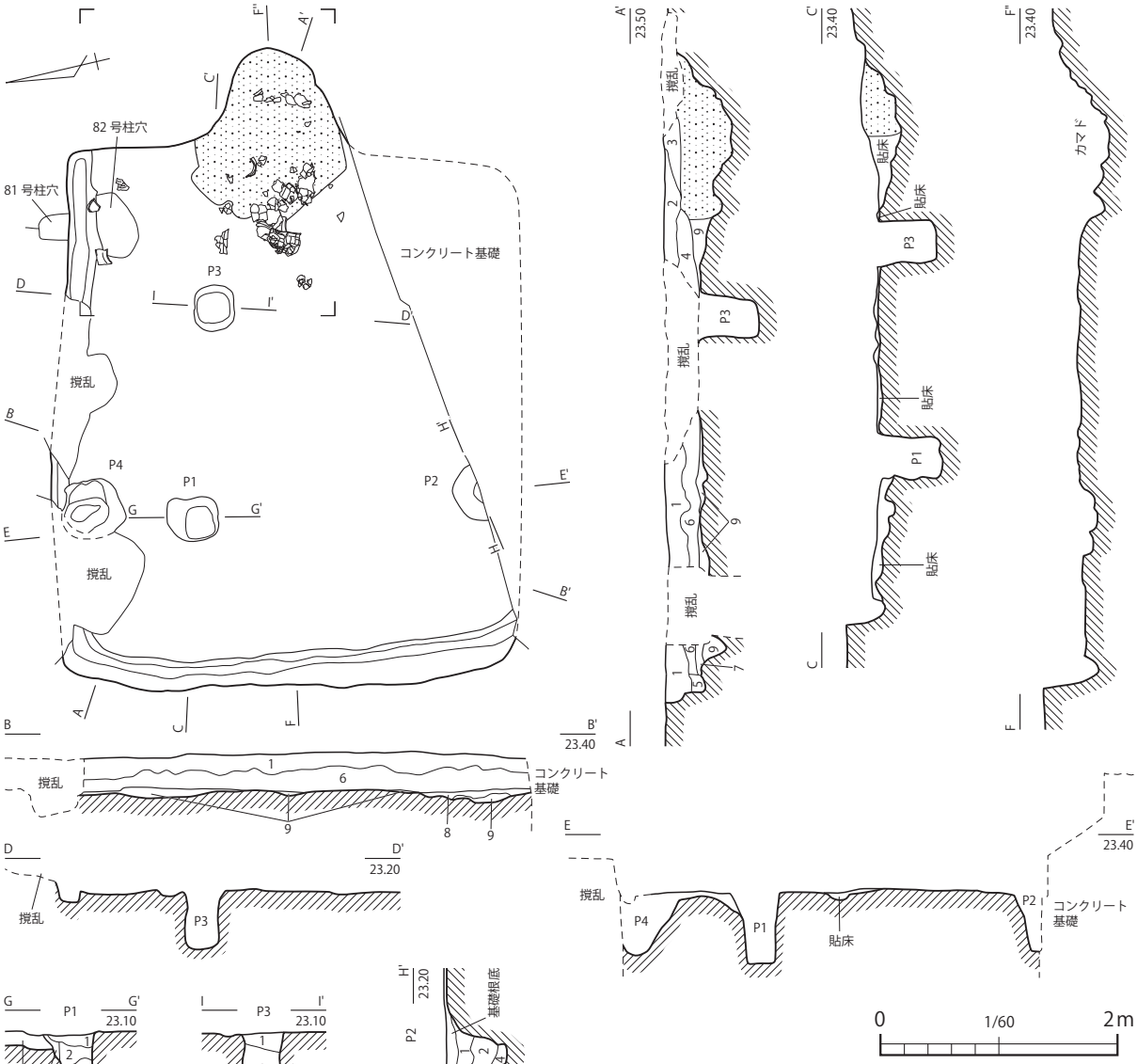
D　鉄器（第 44 図、図版 42、第 10 表）

1 は 126 号住居跡から出土した、鉄製品である。器種不明で、現存長 2.9cm、幅 0.4㎝、厚さ 0.35㎝と長細く、棒状の鉄製品と思われる。断面形は方形を呈し、下部は欠損している。

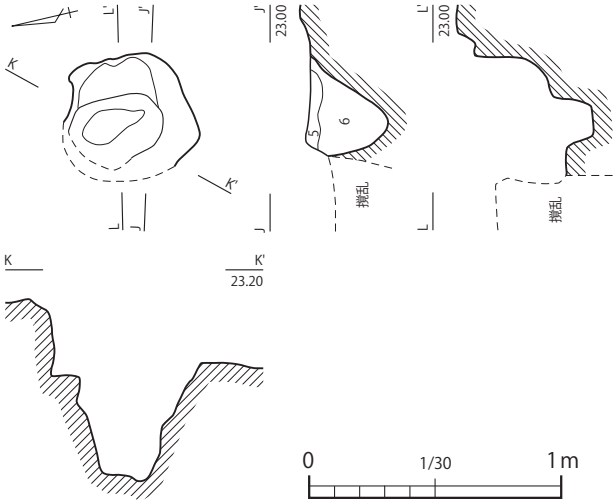
2 は 132 号住居跡から出土した、釘である。現存長 2.1cm、幅 0.4㎝、厚さ 0.5m を測り、釘頭が残存している。断面形は方形を呈する。

3 は 134 号住居跡から出土した、刀子である。平造りで、現存長 5.6㎝、幅 1.1cm、厚さ 0.3㎝を測る。刃部先端と茎部が欠損している。

4 は 135 号住居跡から出土した、刀子である。平造りで、現存長 7.6cm、幅 1.0cm、厚さ 0.3cm を測る。刃部先端と茎部が欠損し、片関を有する。



P4（梯子穴）



126号住居跡

1:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径5～10mmの粘土粒子を2～3%含む。締り強い。粘性弱い。

3:黒褐色土(10YR2/2)　径2～5mmのローム粒子を3～5%、径1～2mmの焼土粒子を1～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径10mm以上の粘土ブロックを2～3%含む。締り強い。粘性強い。

4:黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を7～10%、径1～5mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径10mm以上の粘土ブロックを2～3%含む。締り強い。粘性やや強い。

5:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を7～10%含む。締り弱い。粘性弱い。(周溝)

6:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を10～15%、径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

7:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を5～7%、径2～5mmの粘土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

8:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)

9:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを3～5%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)

126号住居跡　P1～P4

1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締りやや強い。粘性やや強い。

2:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性弱い。

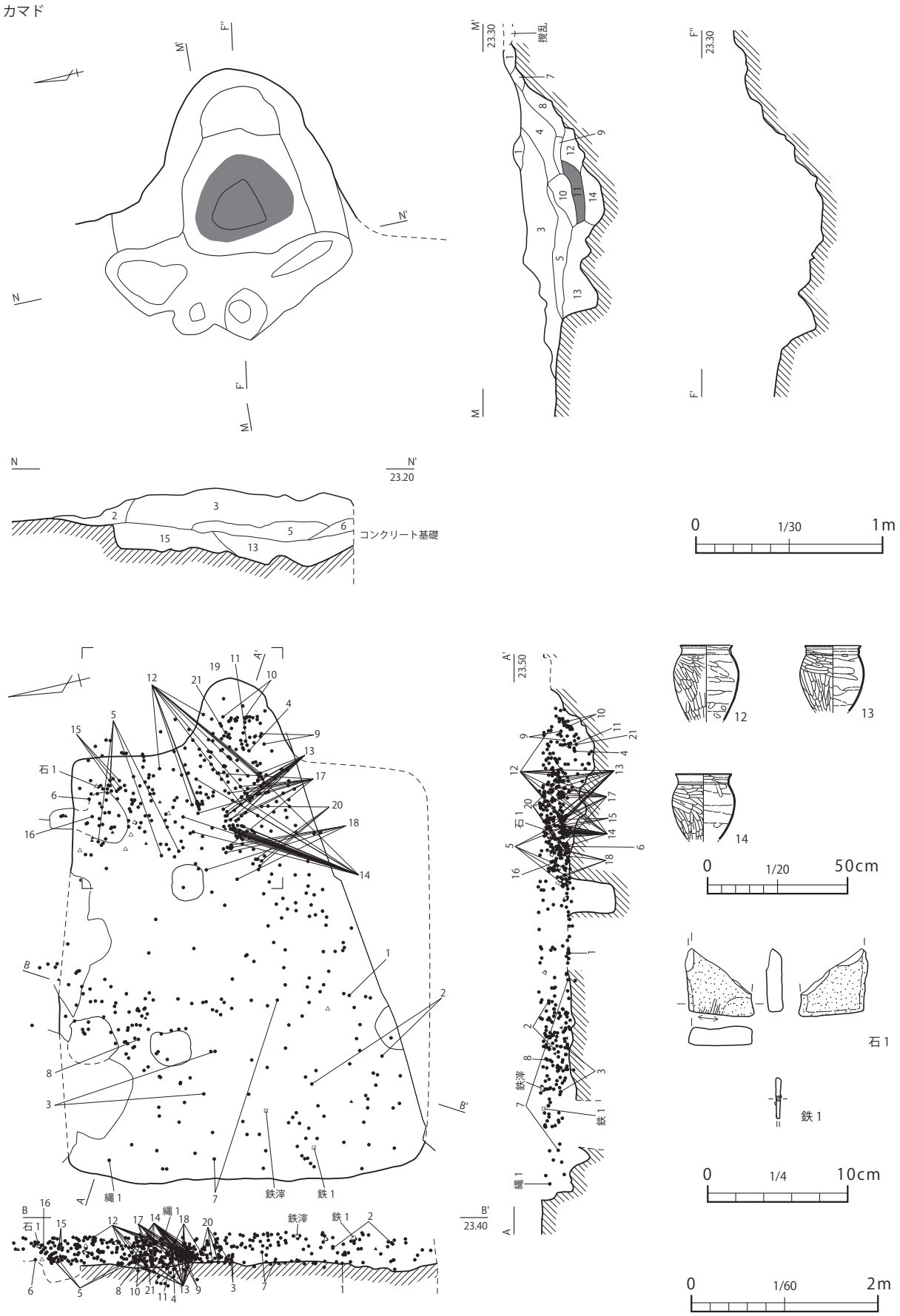
3:褐色土(10YR4/6)　径10mm以上のロームブロック主体。締り強い。粘性強い。

4:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を3～5%含む。締り弱い。粘性弱い。

5:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を3～5%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

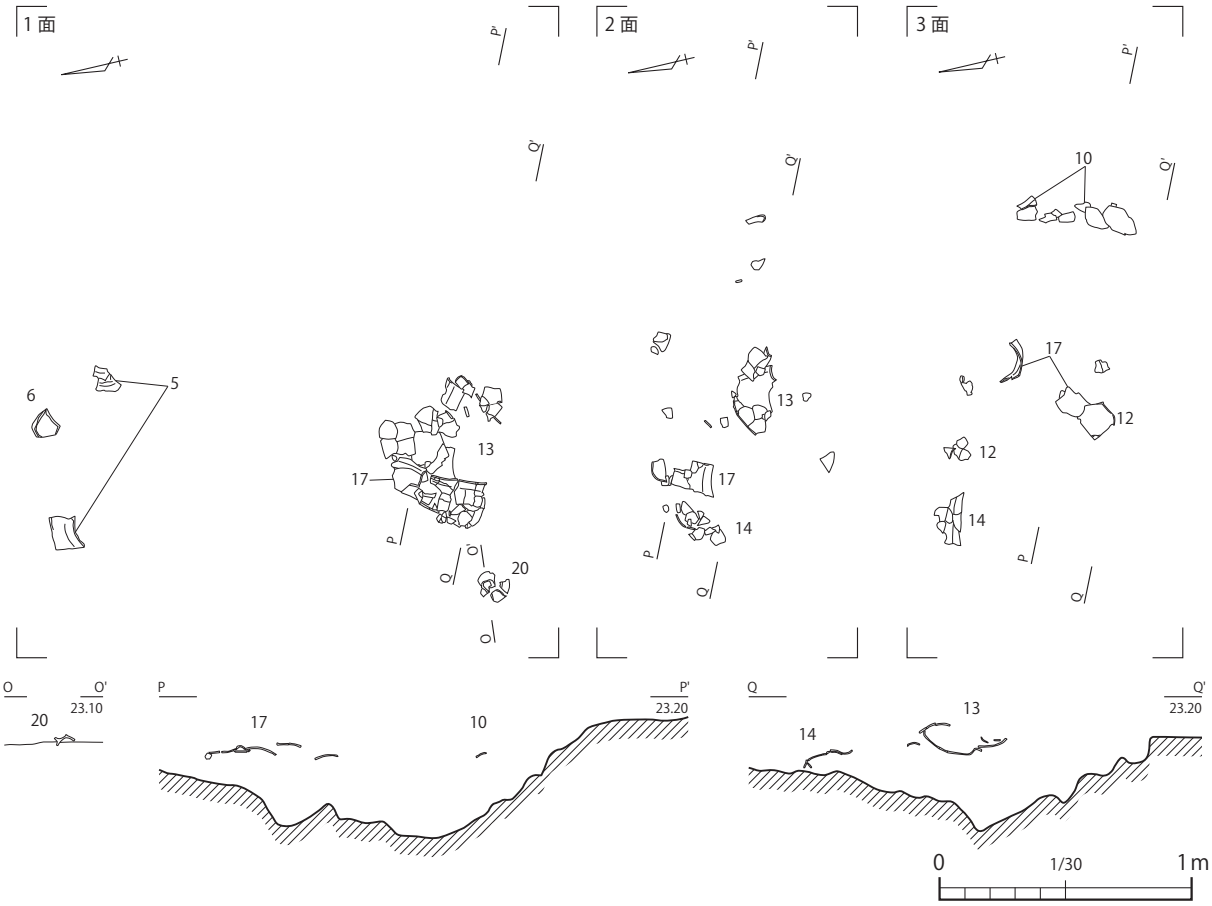
6:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

第 24 図　126 号住居跡（1）（1/30・1/60）



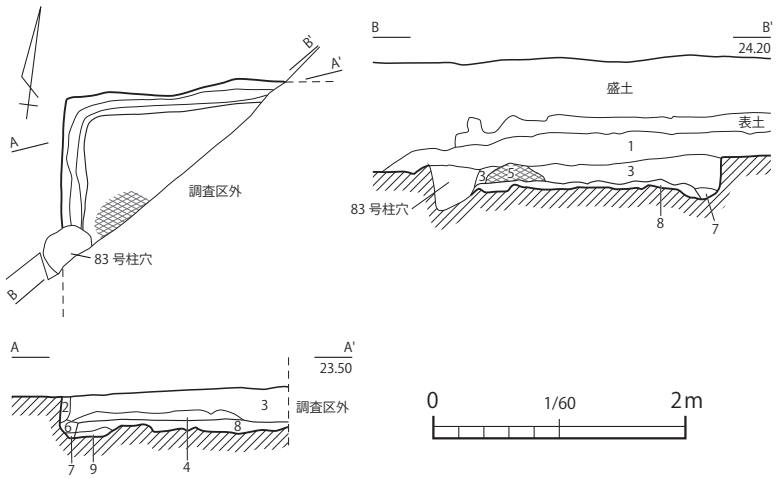
第 25 図　126 号住居跡（2）（1/4・1/20・1/30・1/60）

126 号住居跡



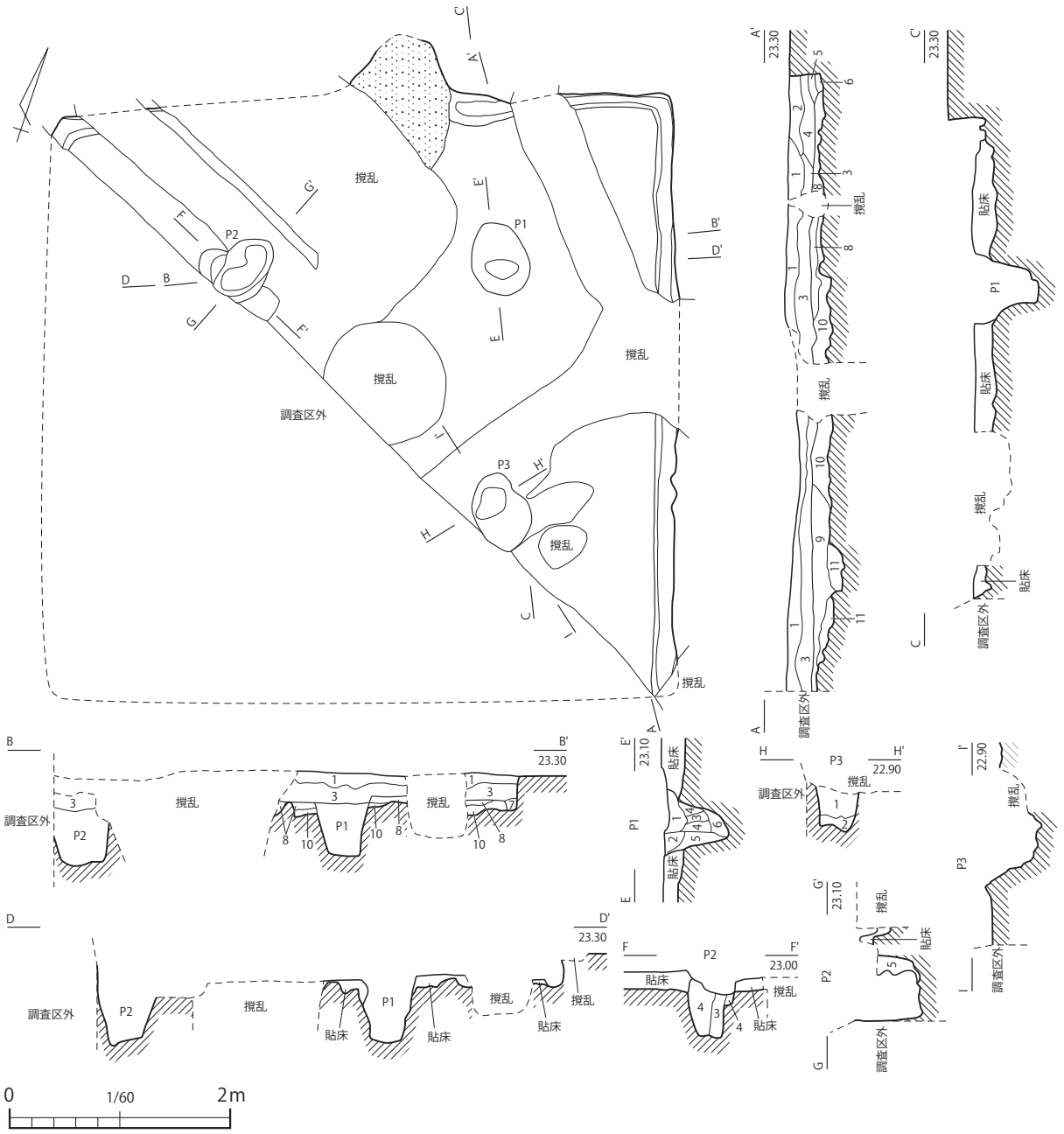
126号住居跡　カマド
1:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～5mmの粘土粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
2:暗褐色土(10YR3/3)　径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～5mmの粘土粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。
3:暗褐色土(10YR3/3)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～5mmの焼土粒子を3～5%、径1～2mmの炭化物粒子を3～5%、径10mm以上の粘土ブロックを30～40%含む。締り強い。粘性強い。（天井）
4:黒褐色土(10YR3/2)　径1～10mmの焼土粒子を3～5%、径2～5mmの粘土粒子を1～2%含む。締りやや弱い。粘性強い。
5:黒色土(10YR2/1)　径1～5mmの焼土粒子を3～5%、径1～2mmの炭化物粒子を2～3%、径1～10mmの粘土粒子を7～10%含む。締り強い。粘性とても強い。
6:にぶい黄褐色土(10YR4/3)　径1～10mmの焼土粒子を3～5%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%径10mm以上の粘土ブロックを15～20%含む。締り強い。粘性とても強い。
7:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径2～5mmの粘土粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性強い。（煙道）
8:暗褐色土(10YR3/3)　径2～5mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締りやや強い。粘性強い。（煙道）
9:黒褐色土(10YR2/2)　径2～5mmの焼土粒子を2～3%、径2～5mmの炭化物粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性弱い。
10:暗褐色土(10YR3/3)　径2～5mmの焼土粒子を3～5%、径5～10mmの粘土粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。
11:暗褐色土(7.5YR3/4)　径2～10mmの焼土粒子を7～10%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径2～5mmの粘土粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。（火床面）
12:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径2～5mmの焼土粒子を3～5%、径2～5mmの粘土粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。
13:暗褐色土(10YR3/4)　径2～5mmのローム粒子を2～3%、径5～10mmの焼土粒子を5～7%、径5～10mmの粘土粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。
14:暗褐色土(10YR3/3)　径5～10mmのローム粒子を2～3%、径2～10mmの焼土粒子を3～5%、径2～5mmの粘土粒子を5～7%含む。締り強い。粘性とても強い。
15:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性弱い。

131 号住居跡



131号住居跡
1:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性弱い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径2～10mmのローム粒子を7～10%含む。締り弱い。粘性弱い。
3:黒褐色土(10YR2/2)　径1～5mmのローム粒子を3～5%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り弱い。粘性弱い。
4:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り弱い。粘性弱い。
5:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径1～2mmの焼土粒子を5～7%含む。締り弱い。粘性やや強い。（焼土範囲）
6:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を5～7%含む。締り弱い。粘性弱い。（周溝）
7:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性弱い。（周溝）
8:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを3～5%含む。締り強い。粘性強い。（貼床）
9:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを2～3%含む。締り弱い。粘性強い。（貼床）

第 26 図　126 号住居跡（3）・131 号住居跡（1/30・1/60）



132号住居跡

1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を3～5%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性弱い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を3～5%、径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径5～10mmの粘土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性やや強い。
3:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性やや弱い。
4:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径2～5mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径5～10mmの粘土粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。
5:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
6:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を7～10%含む。締り強い。粘性強い。(周溝)
7:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性弱い。(周溝)
8:暗褐色土(10YR3/2)　径2～5mmのローム粒子を1～3%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
9:黒褐色土(10YR3/2)　径10mm以上のロームブロックを20～25%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
10:黒褐色土(10YR3/2)　径10mm以上のロームブロックを7～10%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
11:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを1～3%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)

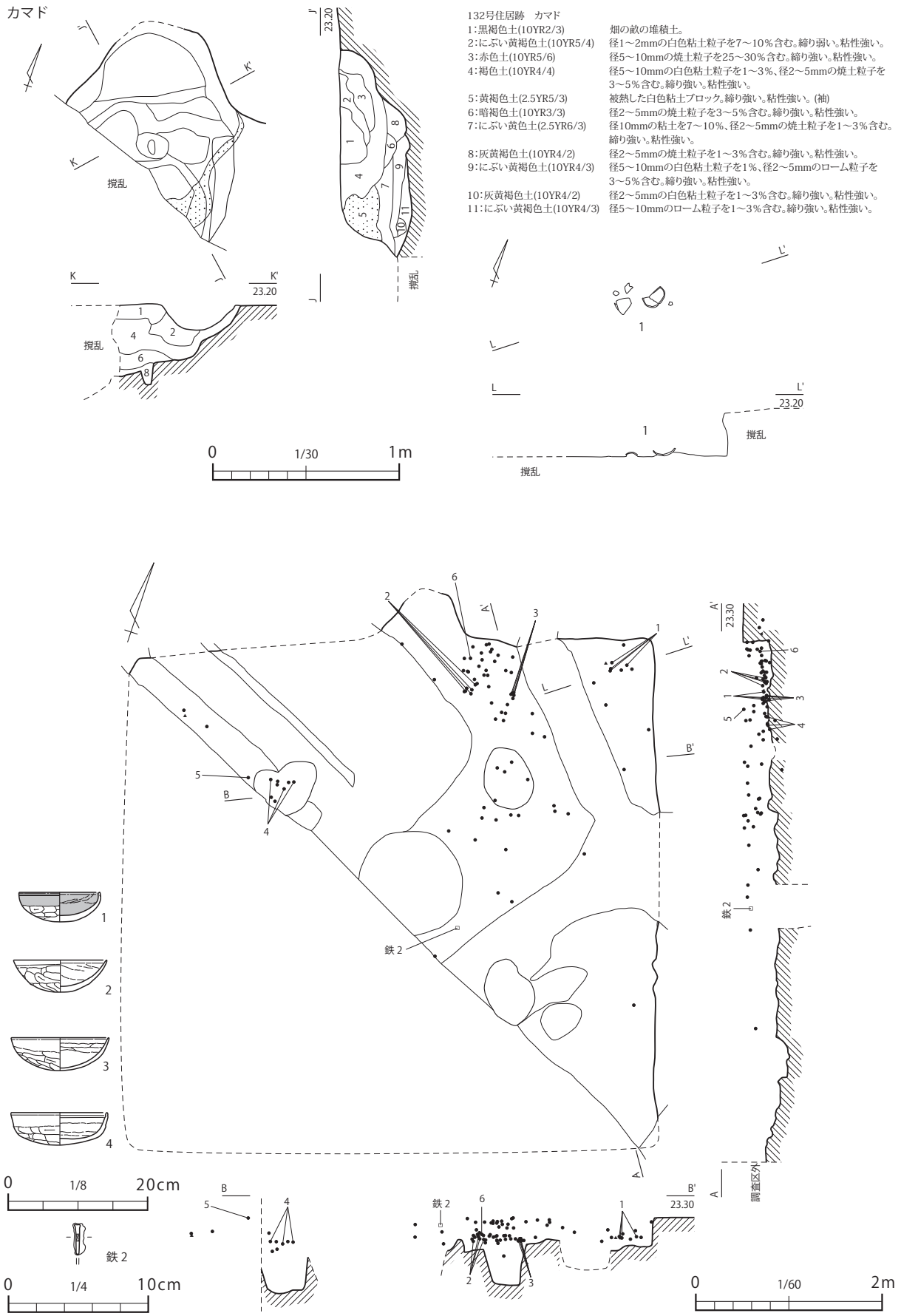
132号住居跡　P1・P2

1:暗褐色土(10YR3/3)　径5～10mmのローム粒子を1～3%含む。締り強い。粘性強い。
2:褐色土(10YR4/4)　径5～10mmのローム粒子を1～3%含む。締り強い。粘性強い。
3:暗褐色土(10YR3/3)　径2～5mmのローム粒子を1～3%含む。締り強い。粘性強い。
4:褐色土(10YR4/4)　径10mmのロームブロックを3～5%含む。締り強い。粘性強い。
5:褐色土(10YR4/6)　径10mmのロームブロックを7～10%含む。締り強い。粘性強い。(旧P2覆土を埋め戻した土)
6:褐色土(10YR4/6)　径10mmのロームブロックを1～3%含む。締りとても強い。粘性とても強い。

132号住居跡　P3

1:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを7～10%含む。締り強い。粘性強い。
2:褐色土(10YR4/4)　径2～5mmのローム粒子を1～3%含む。締り強い。粘性強い。

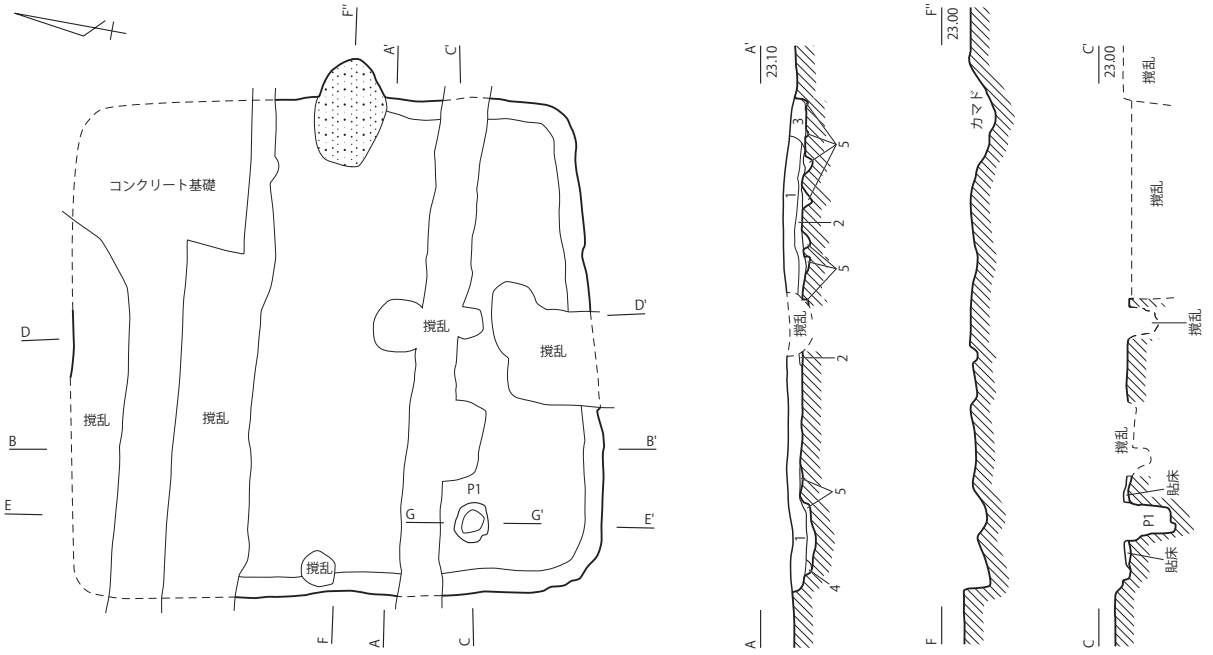
第 27 図　132 号住居跡（1）（1/60）



132号住居跡　カマド

1：黒褐色土(10YR2/3)	畑の畝の堆積土。
2：にぶい黄褐色土(10YR5/4)	径1～2mmの白色粘土粒子を7～10％含む。締り弱い。粘性強い。
3：赤色土(10YR5/6)	径5～10mmの焼土粒子を25～30％含む。締り強い。粘性強い。
4：褐色土(10YR4/4)	径5～10mmの白色粘土粒子を1～3％、径2～5mmの焼土粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。
5：黄褐色土(2.5YR5/3)	被熱した白色粘土ブロック。締り強い。粘性強い。(袖)
6：暗褐色土(10YR3/3)	径2～5mmの焼土粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。
7：にぶい黄色土(2.5YR6/3)	径10mmの粘土を7～10％、径2～5mmの焼土粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
8：灰黄褐色土(10YR4/2)	径2～5mmの焼土粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
9：にぶい黄褐色土(10YR4/3)	径5～10mmの白色粘土粒子を1％、径2～5mmのローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。
10：灰黄褐色土(10YR4/2)	径2～5mmの白色粘土粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。
11：にぶい黄褐色土(10YR4/3)	径5～10mmのローム粒子を1～3％含む。締り強い。粘性強い。

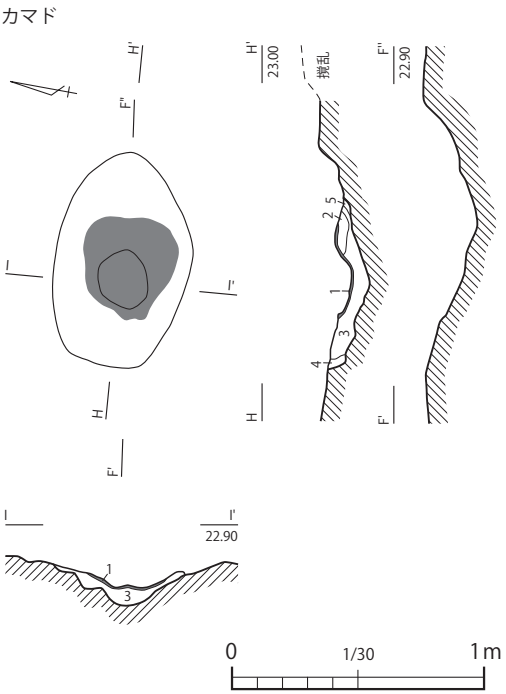
第 28 図　132 号住居跡（2）（1/4・1/8・1/30・1/60）



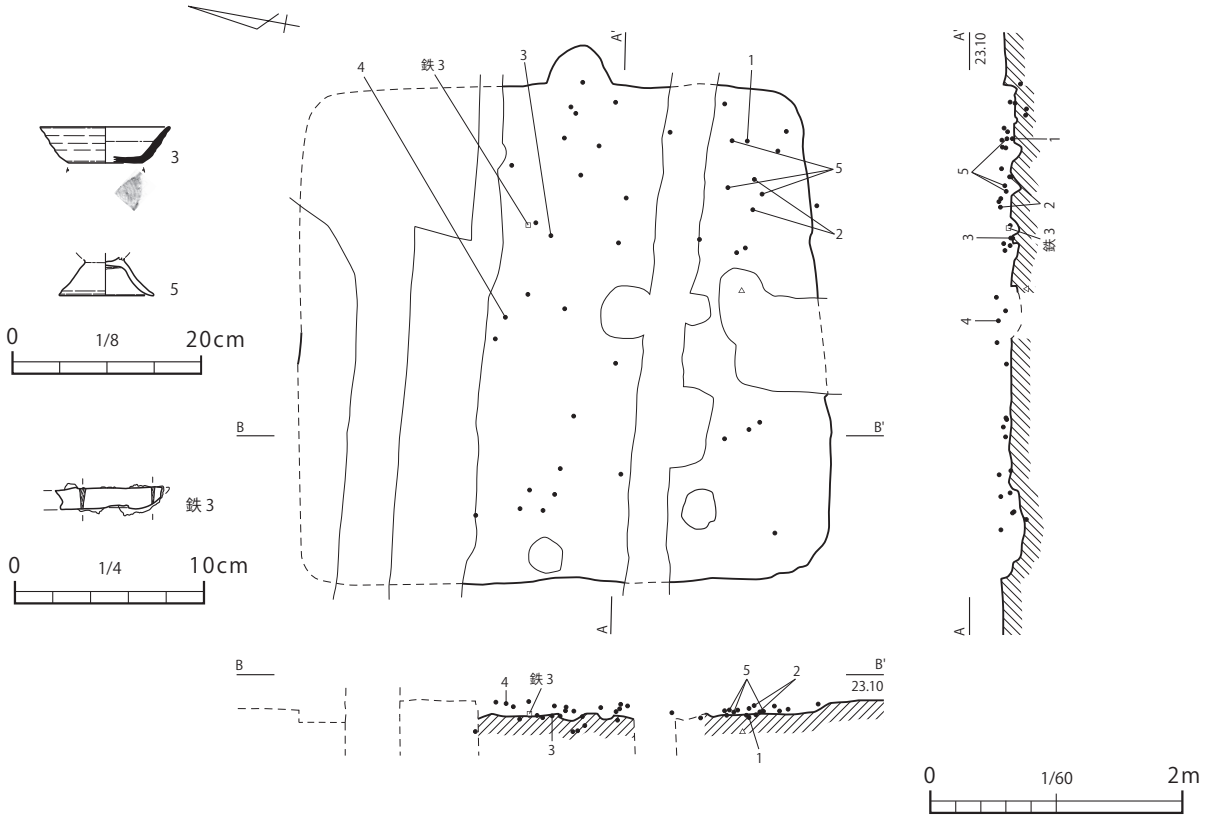
134号住居跡　P1
1：黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を7～10％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
2：黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を2～3％含む。締りやや弱い。粘性強い。

134号住居跡
1：黒褐色土(10YR2/2)　径2～5mmのローム粒子を5～7％含む。締り強い。粘性強い。
2：黒褐色土(10YR2/3)　径2～10mmのローム粒子を3～5％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％、径1～2mmの炭化物粒子を1～2％、径1～2mmの粘土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
3：黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を7～10％、径1～5mmの焼土粒子を2～3％、径1～2mmの炭化物粒子を1～2％、径2～5mmの粘土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
4：暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
5：暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを3～5％含む。締り強い。粘性強い。（貼床）

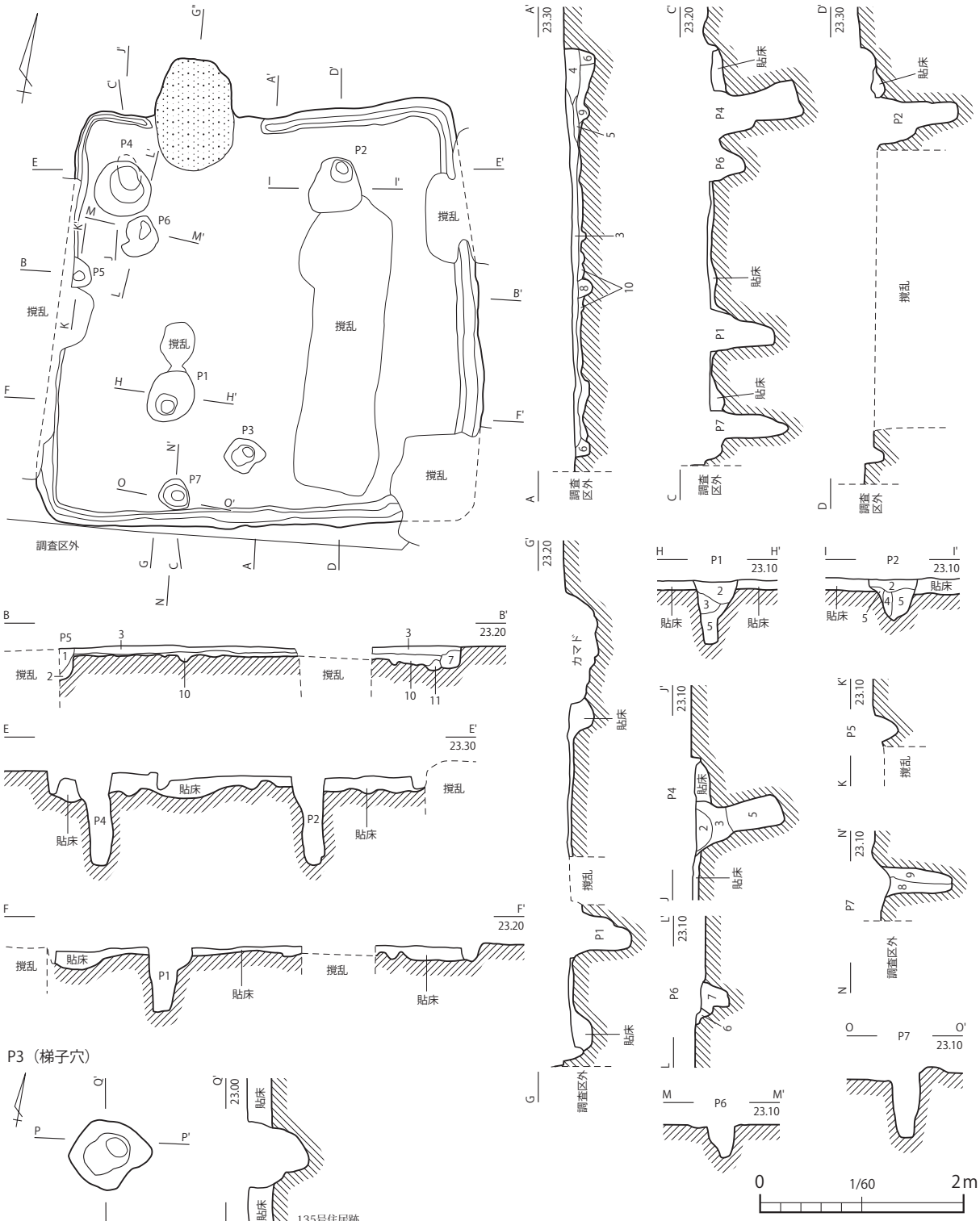
134号住居跡　カマド
1：暗赤褐色土(5YR3/6)　径5～10mmの焼土粒子を5～7％含む。締り弱い。粘性弱い。（火床面）
2：黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3％、径2～5mmの焼土粒子を2～3％含む。締り弱い。粘性弱い。
3：暗褐色土(10YR3/3)　径1～2mmのローム粒子を3～5％、径1～2mmの焼土粒子を2～3％、径5～10mmの粘土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
4：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％、径1～2mmの粘土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
5：暗褐色土(10YR3/4)　軟質のローム土主体。締り強い。粘性強い。



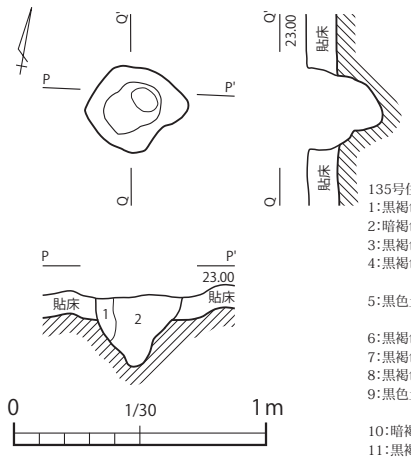
第 29 図　134 号住居跡（1）（1/30・1/60）



第 30 図　134 号住居跡（2）（1/4・1/8・1/60）



P3（梯子穴）

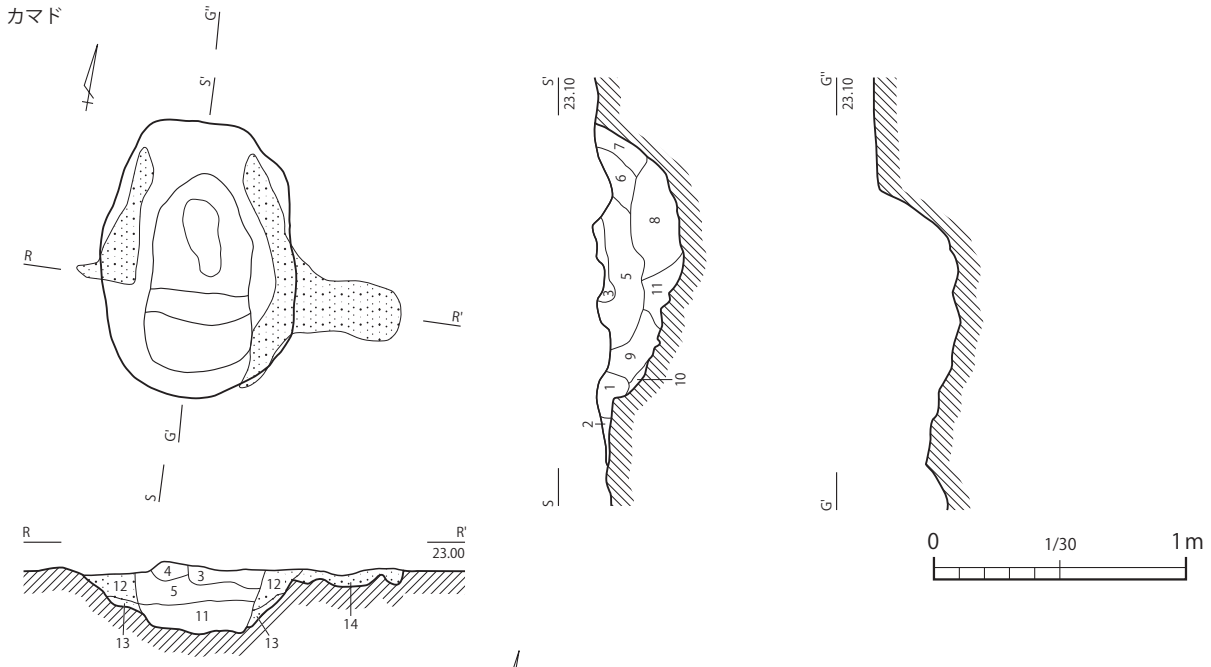


135号住居跡

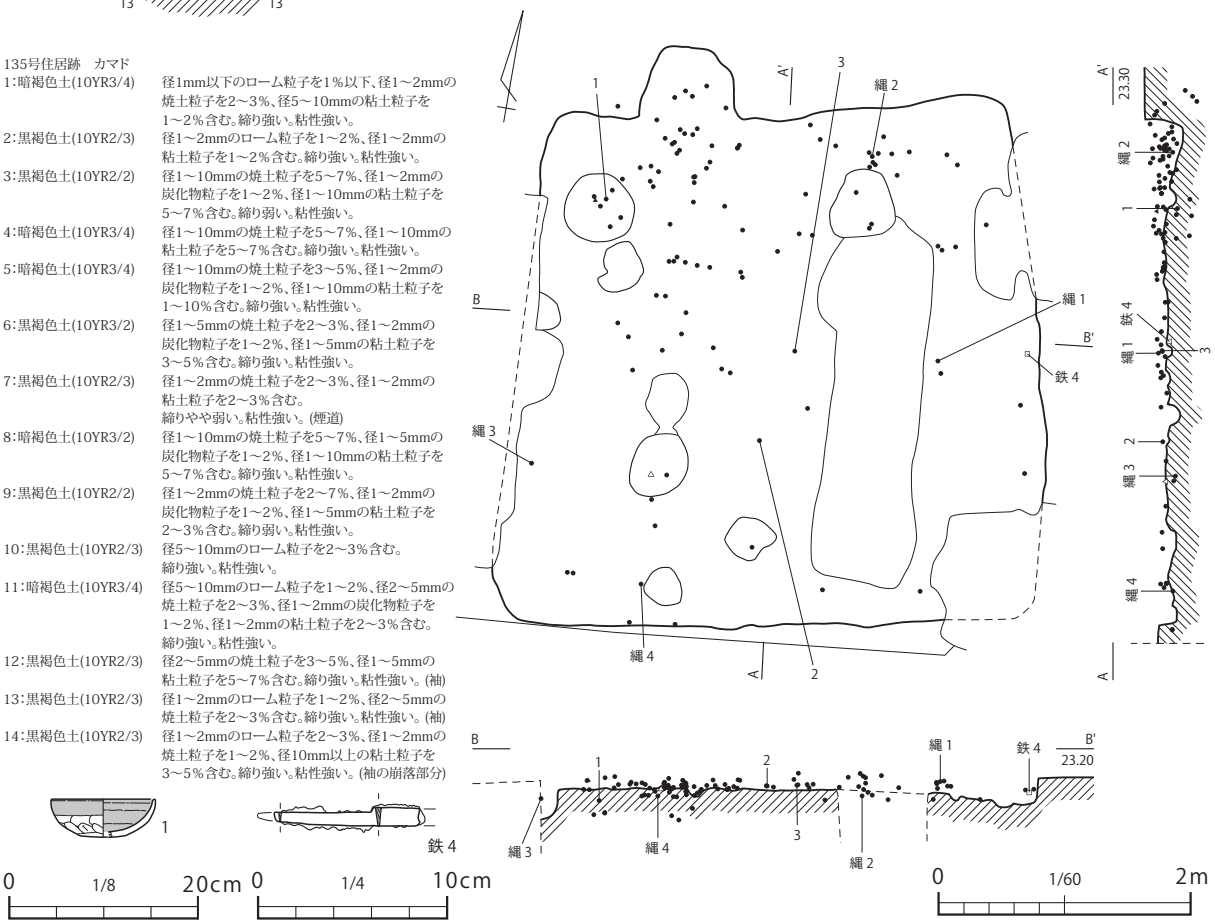
1：黒褐色土(10YR2/2)　径2～5mmのローム粒子を5～7％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。(P5覆土)
2：暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を1～2％含む。締りやや弱い。粘性やや弱い。(P5覆土)
3：黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性弱い。
4：黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を2～3％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％、径2～5mmの粘土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性弱い。
5：黒色土(10YR1.7/1)　径5～10mmのローム粒子を2～3％、径1～2mmの焼土粒子を1～2％、径1～2mmの炭化物粒子を1～2％、径1～2mmの粘土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。
6：黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を7～10％、径1～2mmの焼土粒子を1％以下含む。締り弱い。粘性弱い。(周溝)
7：黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を10～15％含む。締り強い。粘性強い。(周溝)
8：黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
9：黒色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を2～3％、径10mm以上のロームブロックを2～3％、径1～2mmの炭化物粒子を1％以下、径1～2mmの粘土粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
10：暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のローム粒子を5～7％含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
11：黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。(貼床)

第 31 図　135 号住居跡（1）（1/30・1/60）

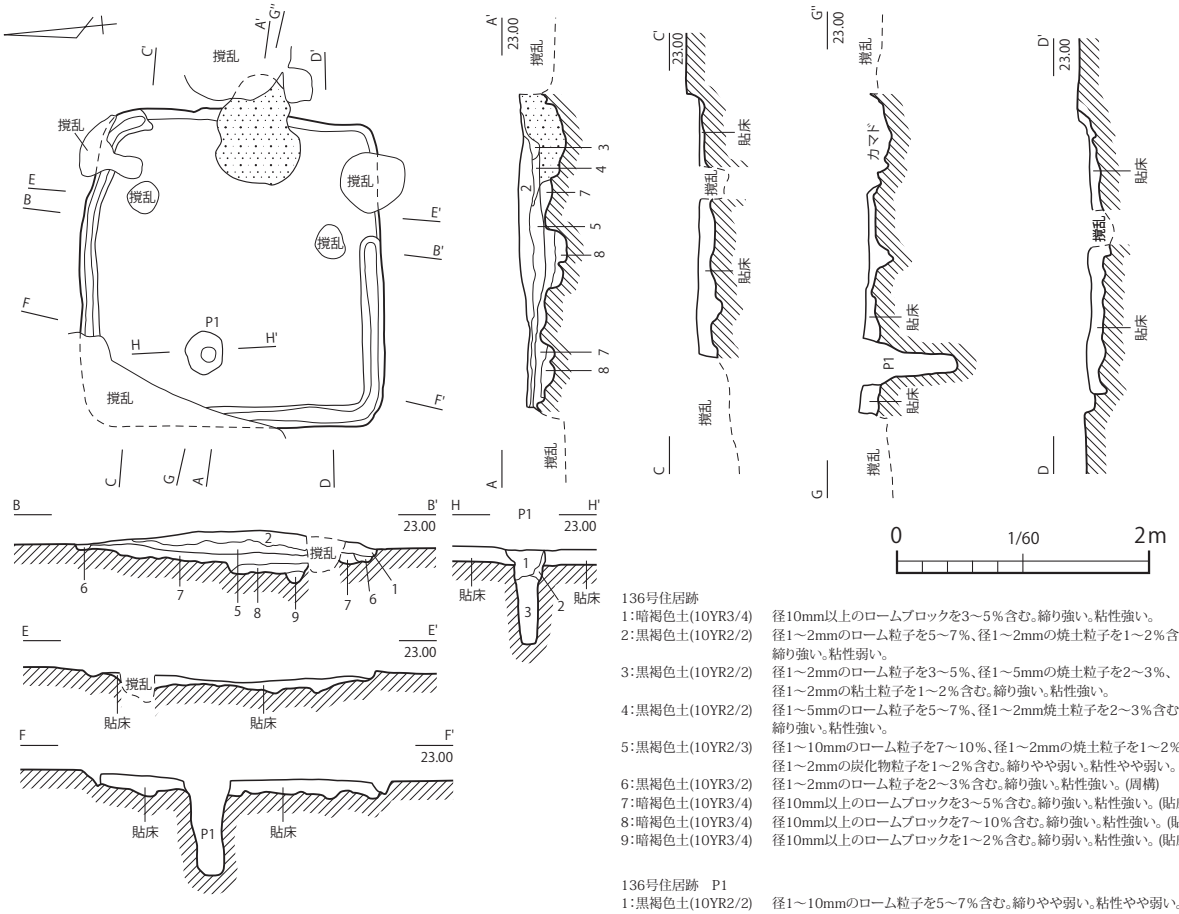
135号住居跡　P1～4・P6・P7
1:暗褐色土(10YR3/4)　径2～5mmのローム粒子を2～3%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/2)　径2～5mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り弱い。粘性弱い。
3:黒褐色土(10YR2/3)　径2～10mmのローム粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性やや弱い。
4:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性弱い。
5:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を1～2%含む。締りやや弱い。粘性やや弱い。
6:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を7～10%含む。締りやや強い。粘性やや強い。
7:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを2～3%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径2～5mmの粘土粒子を1～2%含む。締りやや強い。粘性弱い。
8:暗褐色土(10YR3/3)　径2～5mmのローム粒子を2～3%、径10mm以上のロームブロックを2～3%含む。締り強い。粘性とても強い。
9:暗褐色土(10YR3/3)　径1～5mmのローム粒子を2～3%含む。締り強い。粘性とても強い。



135号住居跡　カマド
1:暗褐色土(10YR3/4)　径1mm以下のローム粒子を1%以下、径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径5～10mmの粘土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
3:黒褐色土(10YR2/2)　径1～10mmの焼土粒子を5～7%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～10mmの粘土粒子を5～7%含む。締り弱い。粘性強い。
4:暗褐色土(10YR3/4)　径1～10mmの焼土粒子を5～7%、径1～10mmの粘土粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。
5:暗褐色土(10YR3/4)　径1～10mmの焼土粒子を3～5%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～10mmの粘土粒子を1～10%含む。締り強い。粘性強い。
6:黒褐色土(10YR3/2)　径1～5mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～5mmの粘土粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。
7:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの粘土粒子を2～3%含む。締りやや弱い。粘性強い。(煙道)
8:暗褐色土(10YR3/2)　径1～10mmの焼土粒子を5～7%、径1～5mmの炭化物粒子を1～2%、径1～10mmの粘土粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。
9:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmの焼土粒子を2～7%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～5mmの粘土粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性強い。
10:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
11:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を1～2%、径2～5mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～2mmの粘土粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
12:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmの焼土粒子を3～5%、径1～5mmの粘土粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。(袖)
13:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径2～5mmの焼土粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。(袖)
14:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径10mm以上の粘土粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。(袖の崩落部分)



第 32 図　135 号住居跡（2）（1/4・1/8・1/30・1/60）



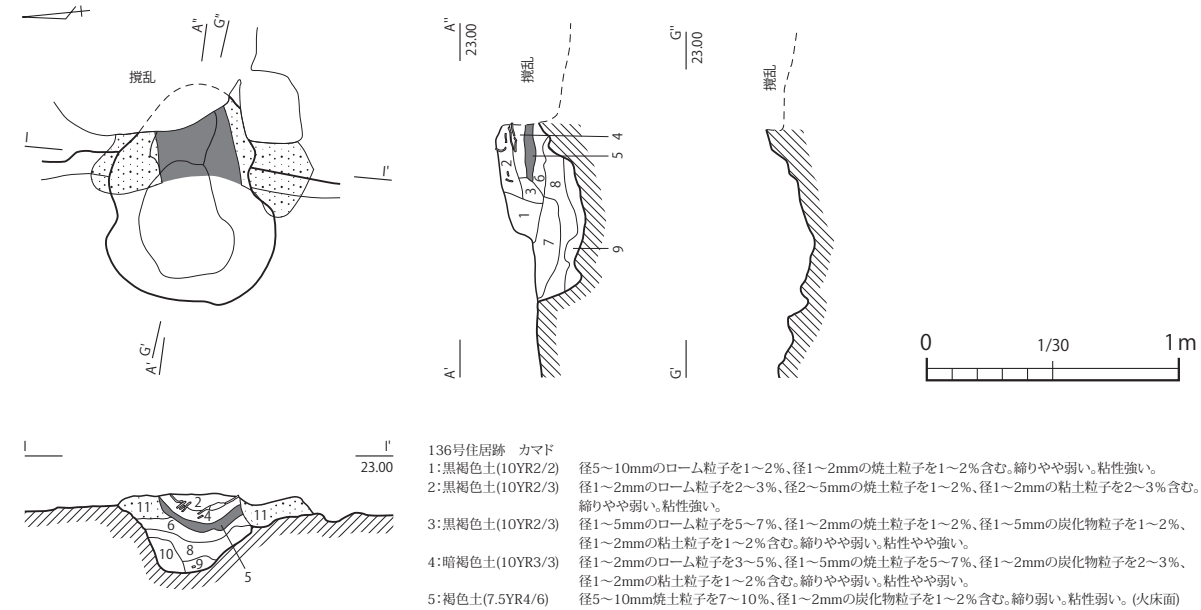
136号住居跡

1:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを3～5%含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性弱い。
3:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を3～5%、径1～5mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
4:黒褐色土(10YR2/2)　径1～5mmのローム粒子を5～7%、径1～2mm焼土粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
5:黒褐色土(10YR2/3)　径1～10mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締りやや弱い。粘性やや弱い。
6:黒褐色土(10YR3/2)　径1～2mmのローム粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。(周構)
7:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを3～5%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
8:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを7～10%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
9:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを1～2%含む。締り弱い。粘性強い。(貼床)

136号住居跡　P1

1:黒褐色土(10YR2/2)　径1～10mmのローム粒子を5～7%含む。締りやや弱い。粘性やや弱い。
2:暗褐色土(10YR3/3)　径5～10mmのローム粒子を2～3%含む。締りやや弱い。粘性強い。
3:黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を2～3%含む。締りやや弱い。粘性やや弱い。

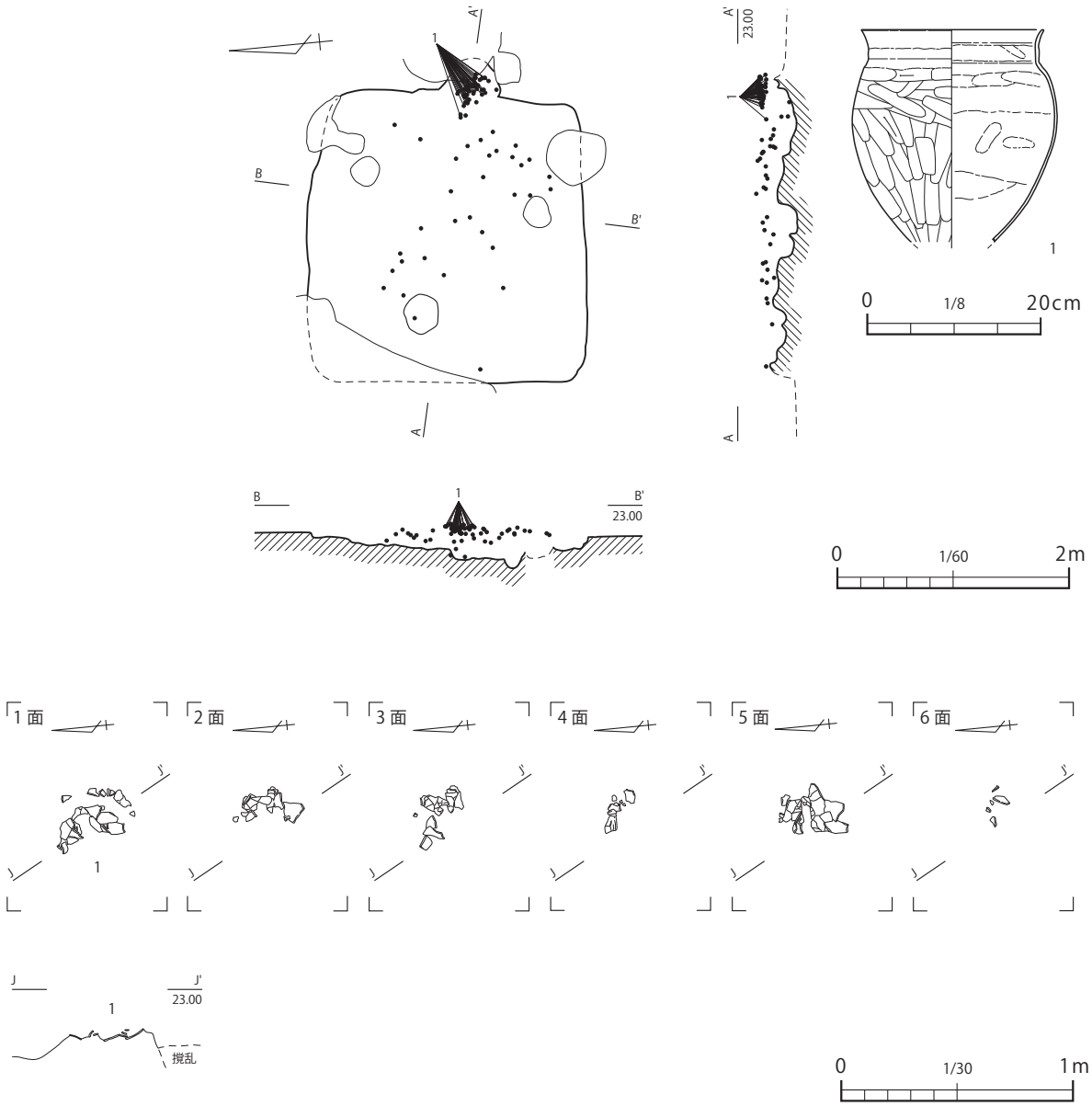
カマド



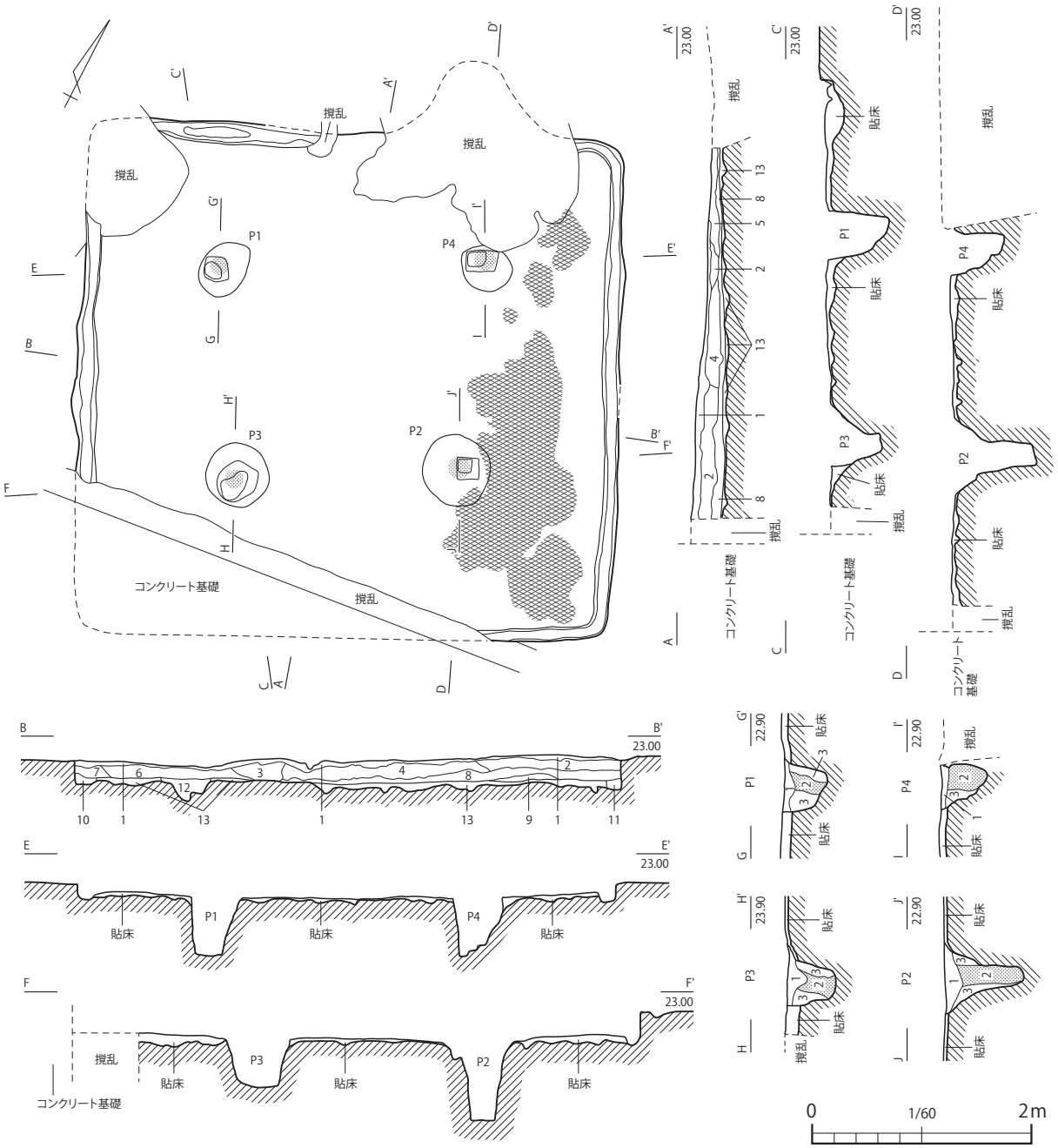
136号住居跡　カマド

1:黒褐色土(10YR2/2)　径5～10mmのローム粒子を1～2%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締りやや弱い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径2～5mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの粘土粒子を2～3%含む。締りやや弱い。粘性強い。
3:黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～5mmの炭化物粒子を1～2%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締りやや弱い。粘性やや強い。
4:暗褐色土(10YR3/3)　径1～2mmのローム粒子を3～5%、径1～5mmの焼土粒子を5～7%、径1～2mmの炭化物粒子を2～3%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締りやや弱い。粘性やや弱い。
5:褐色土(7.5YR4/6)　径5～10mm焼土粒子を7～10%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り弱い。粘性弱い。(火床面)
6:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径2～5mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～2mm粘土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性弱い。
7:黒褐色土(10YR2/3)　径1～10mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締りやや弱い。粘性やや強い。
8:黒褐色土(10YR2/3)　径1～10mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性弱い。
9:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを3～5%含む。締り強い。粘性強い。
10:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を2～3%含む。締り強い。粘性弱い。
11:黒褐色土(10YR3/2)　径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1%以下、径1～10mmの粘土粒子を7～10%含む。締り強い。粘性強い。(袖)

第 33 図　136 号住居跡（1）（1/30・1/60）



第 34 図　136 号住居跡（2）（1/8・1/30・1/60）

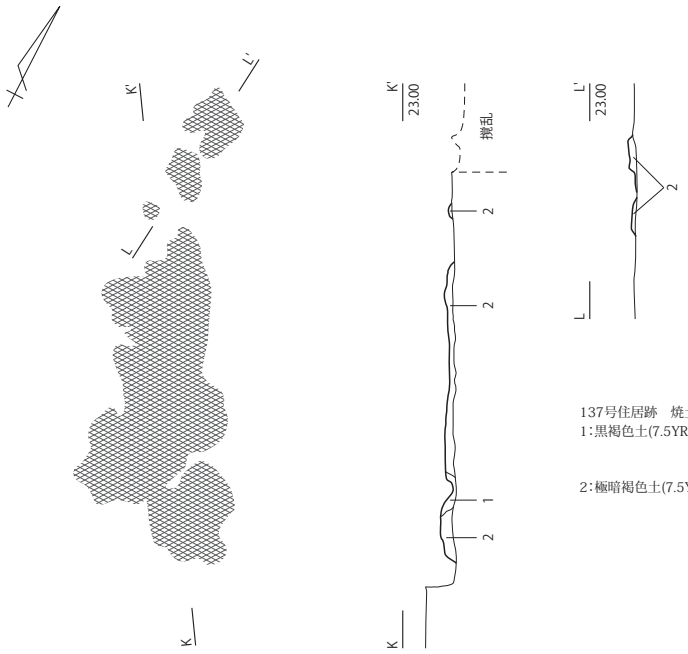


137号住居跡
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mm炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～10mmのローム粒子を5～7%、径10mm以上のロームブロックを2～3%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1~2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
3:黒褐色土(10YR2/3)　径2～10mmローム粒子を7～10%、径2～5mmの焼土粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
4:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～5%、径10mm以上のロームブロックを5～7%含む。締り強い。粘性やや弱い。
5:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を3～5%、径2～5mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの粘土粒子を7～10%含む。締り強い。粘性強い。
6:黒褐色土(10YR2/2)　径1～5mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
7:黒褐色土(10YR2/2)　径5～10mmのローム粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
8:黒色土(10YR1.7/1)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
9:極暗褐色土(7.5YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を2～3%、径1～10mmの焼土粒子を7～10%、径10mm以上の焼土ブロックを7～10%、径2～5mmの炭化物粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
10:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。(周構)
11:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性弱い。(周構)
12:黒褐色土(10YR2/2)　径10mm以上のロームブロックを5～7%含む。締り強い。粘性強い。
13:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)

137号住居跡　P1～P4
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を3～5%含む。締り弱い。粘性弱い。ボロボロと崩れやすい。(柱痕)
3:暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを2～3%含む。締り強い。粘性強い。

第 35 図　137 号住居跡（1）（1/60）

焼土範囲

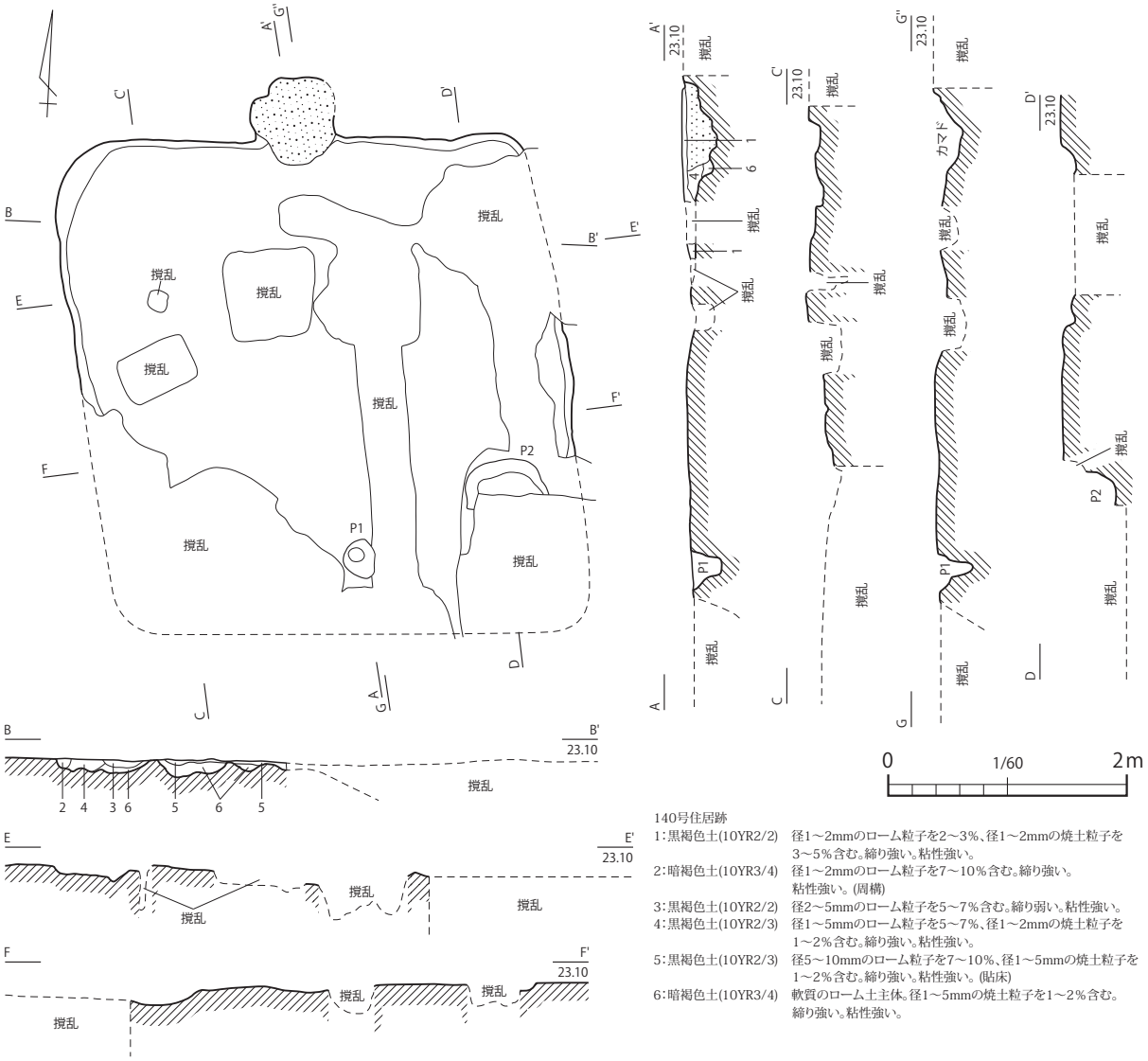


137号住居跡　焼土範囲

1：黒褐色土(7.5YR2/2)　径5～10mmの炭化物粒子を5～7％、径2～5mm焼土粒子を3～5％、径2～5mmの炭化物粒子を1～2％含む。締り強い。粘性強い。

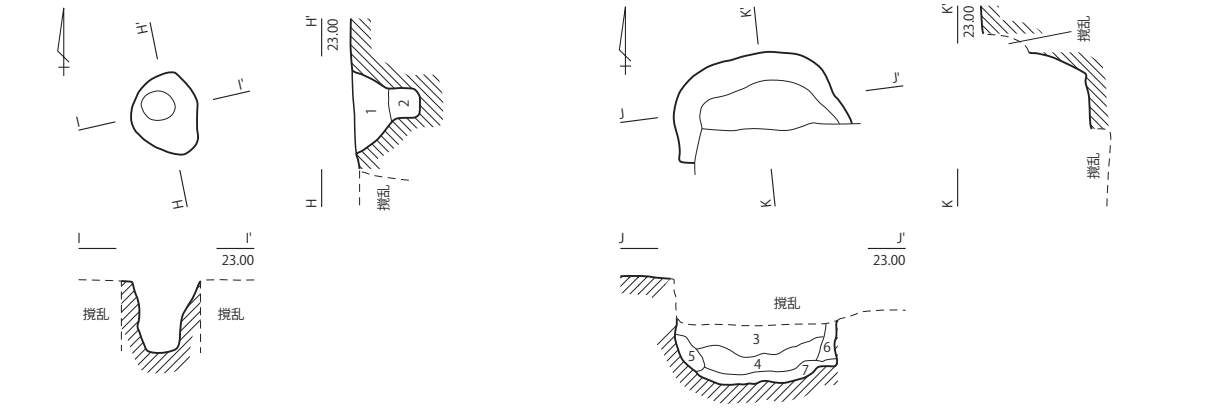
2：極暗褐色土(7.5YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を2～3％、径1～10mmの焼土粒子を7～10％、径10mm以上の焼土ブロックを7～10％、径2～5mmの炭化物粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。

第 36 図　137 号住居跡（2）（1/20・1/60）



140号住居跡
1：黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径1～2mmの焼土粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。
2：暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を7～10%含む。締り強い。粘性強い。(周構)
3：黒褐色土(10YR2/2)　径2～5mmのローム粒子を5～7%含む。締り弱い。粘性強い。
4：黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
5：黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を7～10%、径1～5mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
6：暗褐色土(10YR3/4)　軟質のローム土主体。径1～5mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

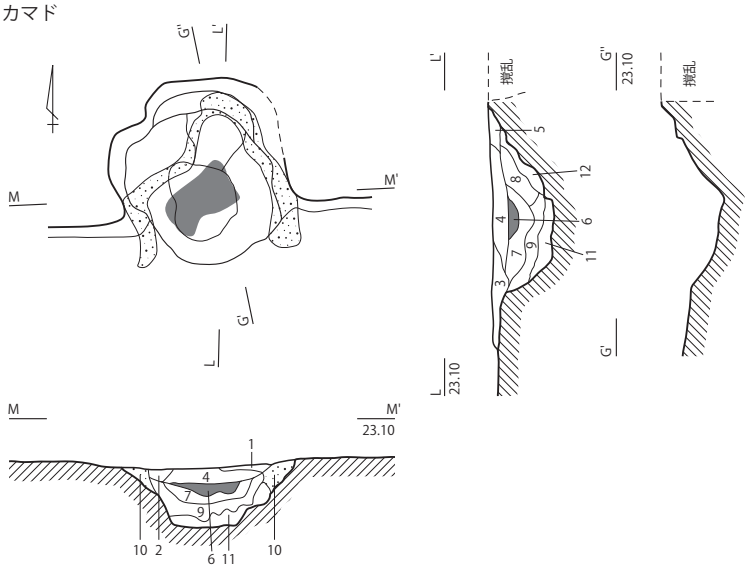
P1（梯子穴）　P2（貯蔵穴）



140号住居跡　P1・P2
1：黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を3～5%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
2：暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
3：黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を7～10%、径2～5mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り弱い。粘性弱い。
4：黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り弱い。粘性弱い。
5：暗褐色土(10YR3/4)　径10mm以上のロームブロックを1～2%含む。締り強い。粘性強い。
6：暗褐色土(10YR3/4)　径2～5mmのローム粒子を3～5%含む。締り弱い。粘性弱い。
7：黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

第 37 図　140 号住居跡（1）（1/30・1/60）

カマド



140号住居跡　カマド

1:黒色土(10YR2/1)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

2:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を1～2%、径1～2mmの焼土粒子を1%以下、径1～5mmの粘土粒子を1%以下含む。締り強い。粘性強い。

3:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締り弱い。粘性強い。

4:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmの焼土粒子を5～7%、径1～2mmの粘土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

5:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～2mm焼土粒子を1%以下、径1～2mmの粘土粒子を1%以下含む。締り強い。粘性強い。

6:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmの焼土粒子を7～10%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締り弱い。粘性弱い。(火床面)

7:暗褐色土(10YR3/3)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～5mmの焼土粒子を2～3%含む。締り弱い。粘性弱い。

8:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。

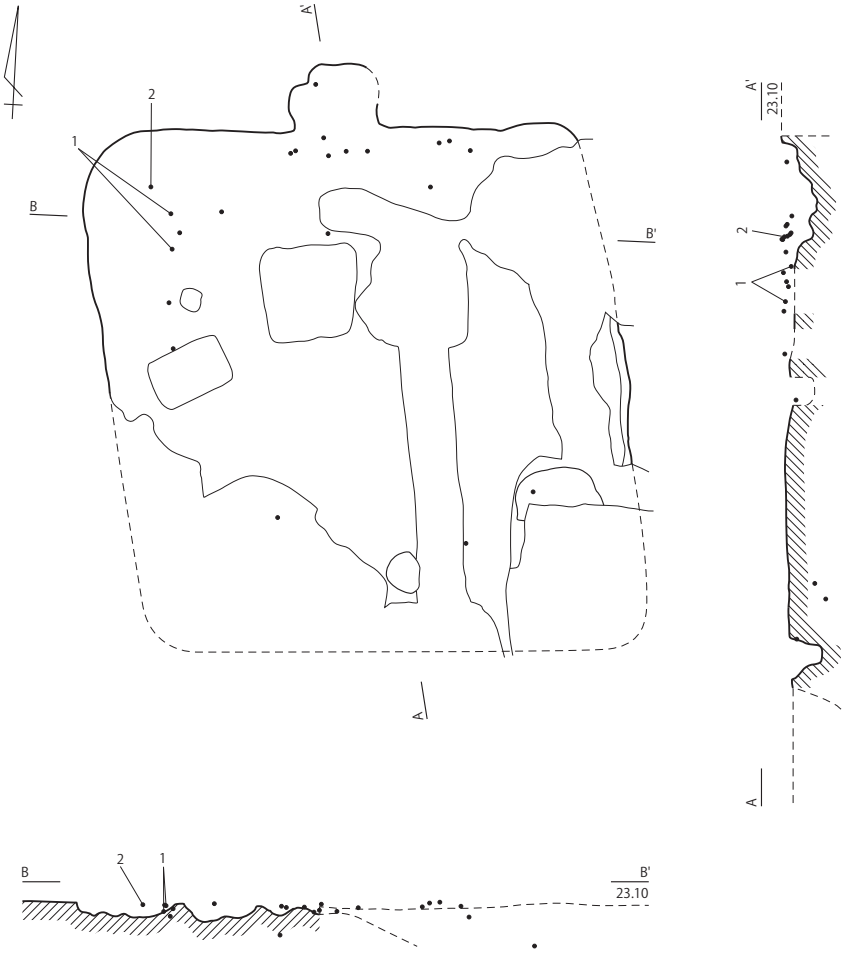
9:暗褐色土(10YR3/3)　径10mm以下のロームブロックを2～3%含む。締り強い。粘性強い。

10:にぶい黄褐色土(10YR4/3)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径1～5mmの粘土粒子を7～10mm含む。締り強い。粘性強い。(袖)

11:暗褐色土(10YR3/3)　径5～10mmのローム粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。

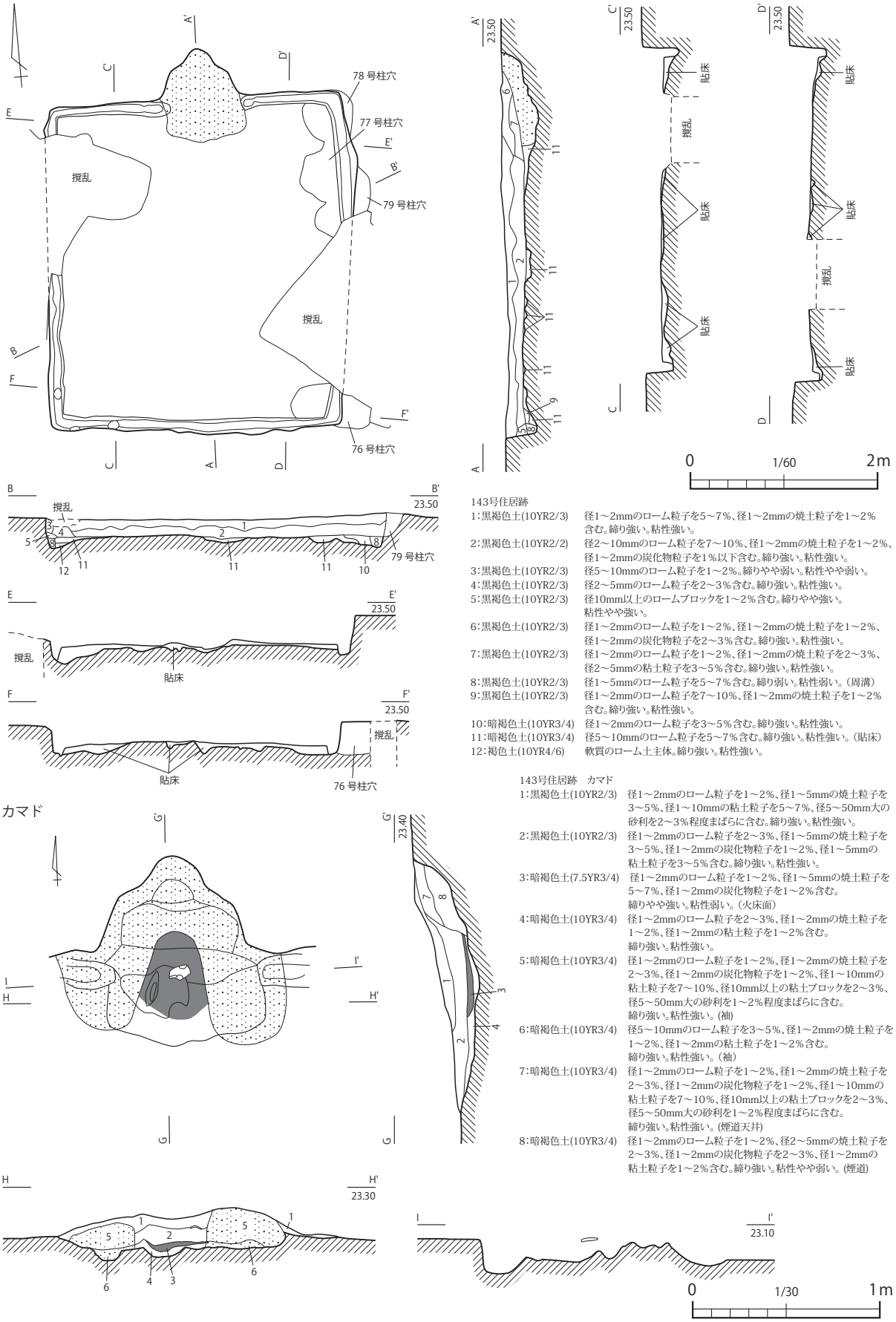
12:暗褐色土(10YR3/3)　径5～10mmのローム粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。

0　1/30　1m



0　1/60　2m

第 38 図　140 号住居跡（2）（1/30・1/60）



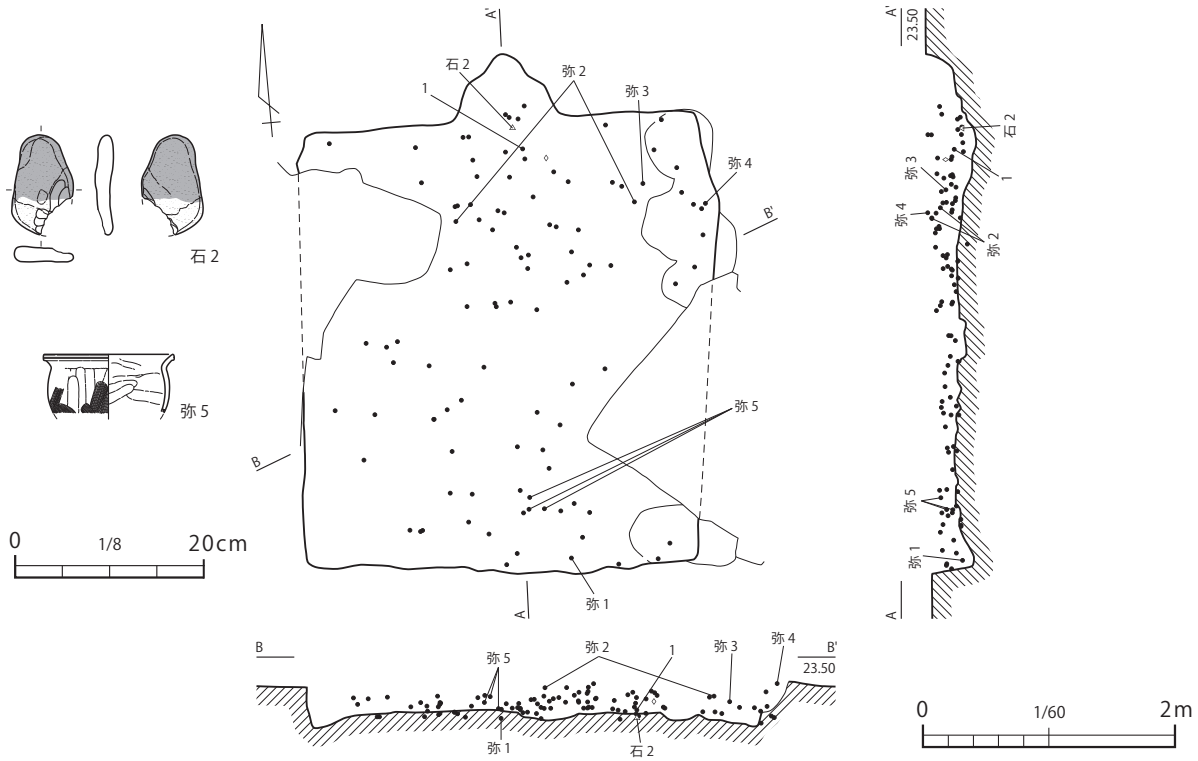
143号住居跡

1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を5～7%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/2)　径2～10mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を1%以下含む。締り強い。粘性強い。
3:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を1～2%。締りやや弱い。粘性やや弱い。
4:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
5:黒褐色土(10YR2/3)　径10mm以上のロームブロックを1～2%含む。締りやや強い。粘性やや強い。
6:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの炭化物粒子を2～3%含む。締り強い。粘性強い。
7:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径2～5mmの粘土粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。
8:黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmのローム粒子を5～7%含む。締り弱い。粘性弱い。(周溝)
9:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を7～10%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
10:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。
11:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を5～7%含む。締り強い。粘性強い。(貼床)
12:褐色土(10YR4/6)　軟質のローム土主体。締り強い。粘性強い。

143号住居跡　カマド

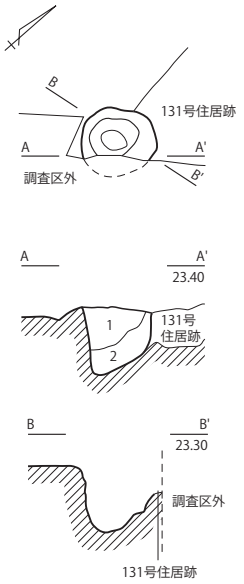
1:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～5mmの焼土粒子を3～5%、径1～10mmの粘土粒子を5～7%、径5～50mm大の砂利を2～3%程度まばらに含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径1～5mmの焼土粒子を3～5%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～5mmの粘土粒子を3～5%含む。締り強い。粘性強い。
3:暗褐色土(7.5YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～5mmの焼土粒子を5～7%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%含む。締りやや強い。粘性弱い。(火床面)
4:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を2～3%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。
5:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～10mmの粘土粒子を7～10%、径10mm以上の粘土ブロックを2～3%、径5～50mm大の砂利を1～2%程度まばらに含む。締り強い。粘性強い。(袖)
6:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を3～5%、径1～2mmの焼土粒子を1～2%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性強い。(袖)
7:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径1～2mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を1～2%、径1～10mmの粘土粒子を7～10%、径10mm以上の粘土ブロックを2～3%、径5～50mm大の砂利を1～2%程度まばらに含む。締り強い。粘性強い。(煙道天井)
8:暗褐色土(10YR3/4)　径1～2mmのローム粒子を1～2%、径2～5mmの焼土粒子を2～3%、径1～2mmの炭化物粒子を2～3%、径1～2mmの粘土粒子を1～2%含む。締り強い。粘性やや弱い。(煙道)

第 39 図　143 号住居跡（1）（1/30・1/60）

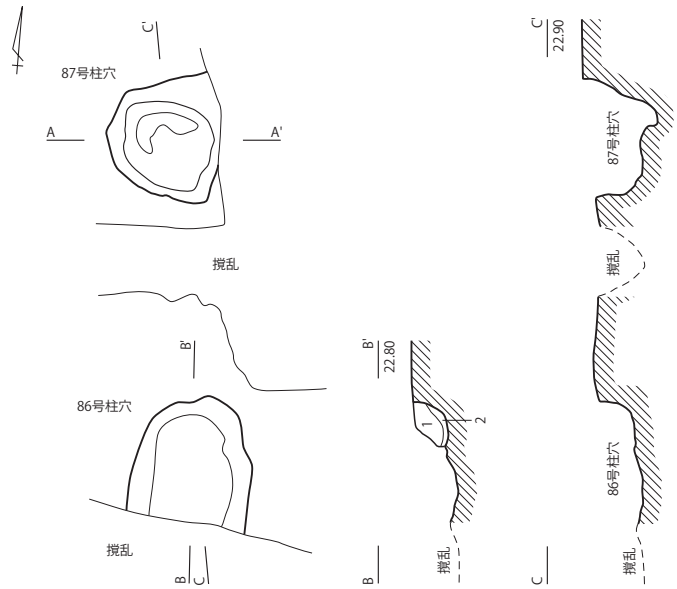


第 40 図　143 号住居跡（2）（1/8・1/60）

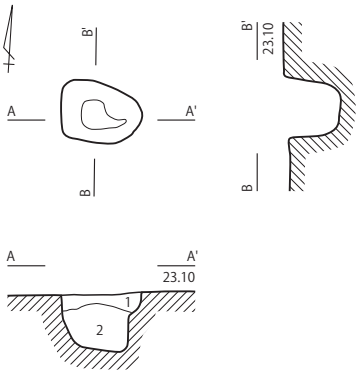
83 号柱穴

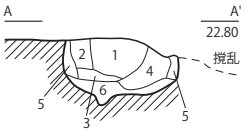


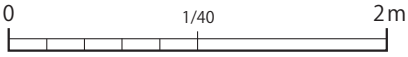
86・87 号柱穴



85 号柱穴







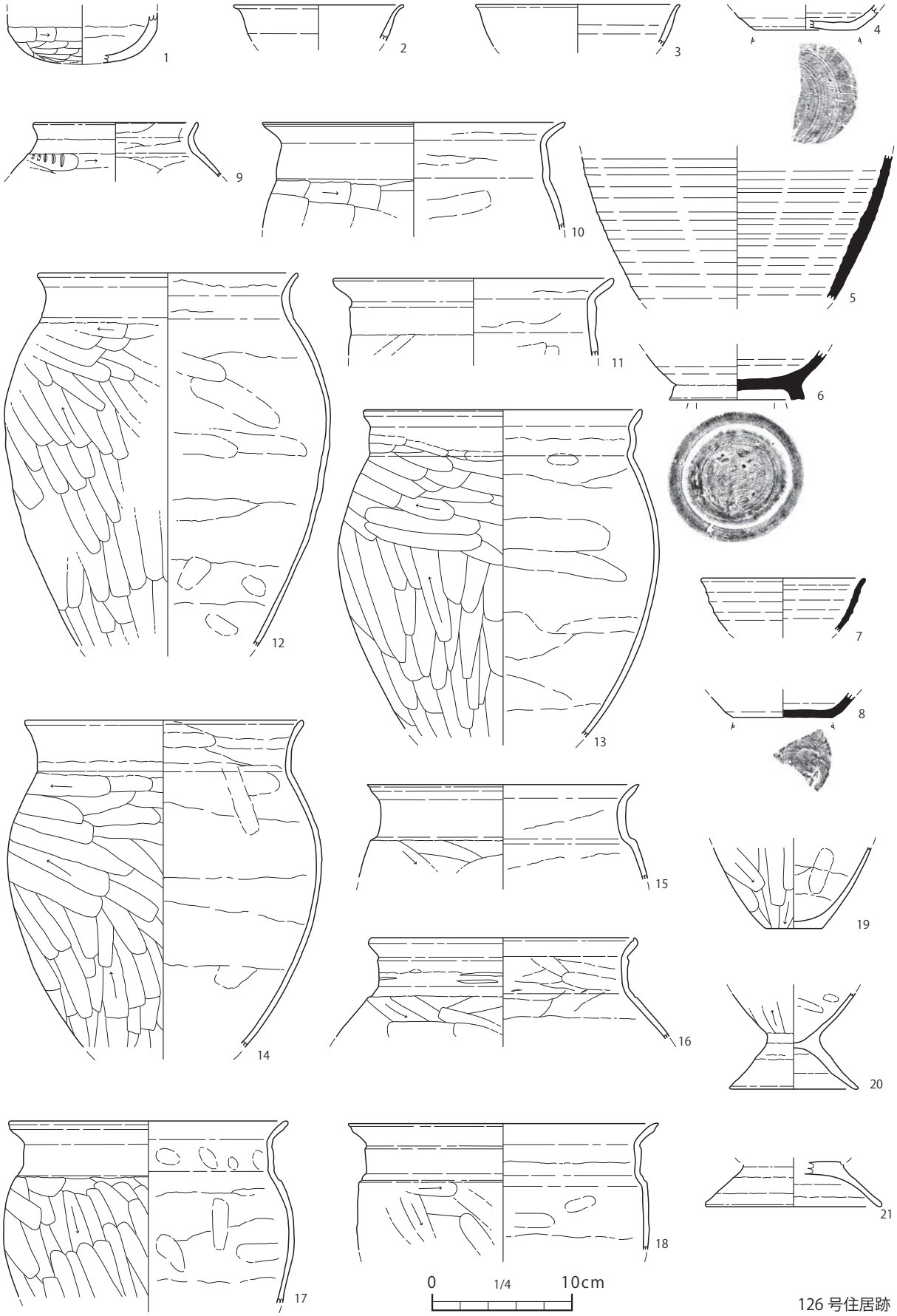
83号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を3～5％含む。締り弱い。粘性やや弱い。
2:黒褐色土(10YR2/3)　径1～2mmのローム粒子を7～10％含む。締り弱い。粘性弱い。

85号柱穴
1:暗褐色土(10YR3/3)　径1～2mmのローム粒子を5～7％含む。締り強い。粘性強い。
2:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子をシミ状に2～3％含む。締り強い。粘性強い。

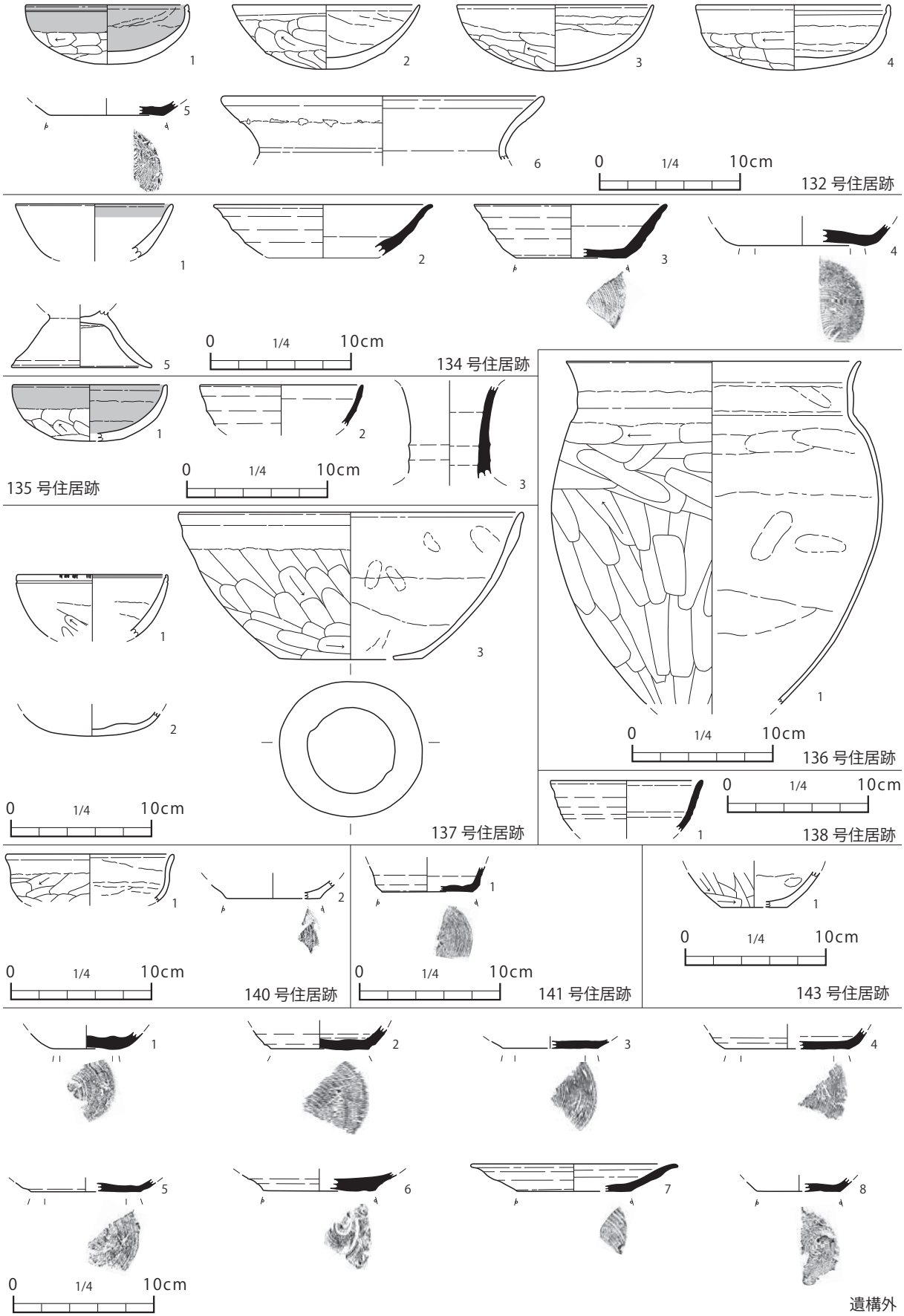
86号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を7～10％含む。締り強い。粘性強い。
2:暗褐色土(10YR3/4)　径5～10mmのローム粒子を10～15％含む。締り強い。粘性強い。

87号柱穴
1:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を2～3％含む。締り強い。粘性強い。
2:黒褐色土(10YR2/2)　径1～2mmのローム粒子を3～5％含む。締り弱い。粘性強い。
3:黒色土(10YR1.7/1)　径1～2mmのローム粒子を1～2％含む。締り弱い。粘性弱い。
4:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を3～5％含む。締り強い。粘性強い。
5:黒褐色土(10YR2/3)　径2～5mmのローム粒子を7～10％含む。締り弱い。粘性弱い。
6:黒褐色土(10YR2/3)　径5～10mmのローム粒子を5～7％含む。締り強い。粘性強い。

第 41 図　古代の柱穴（1/40）

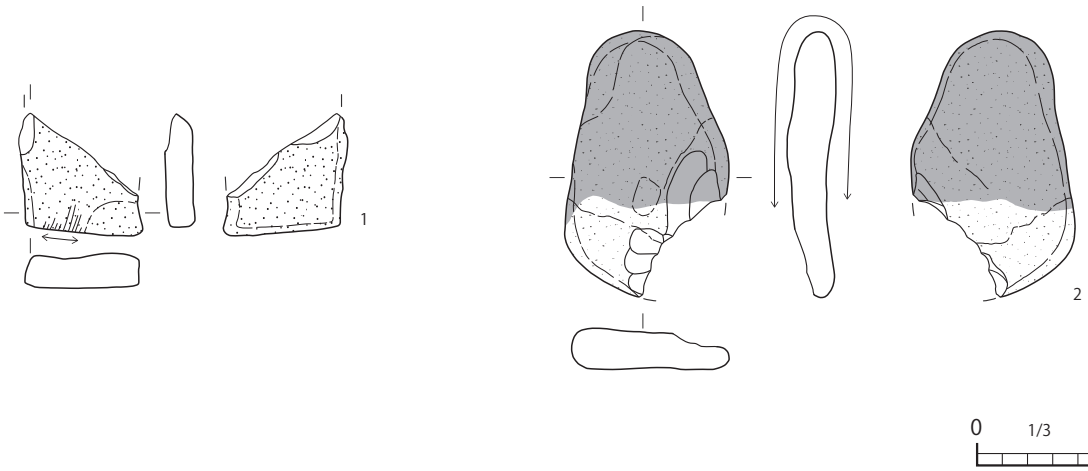


第 42 図　古代の土師器・須恵器（1）（1/4）

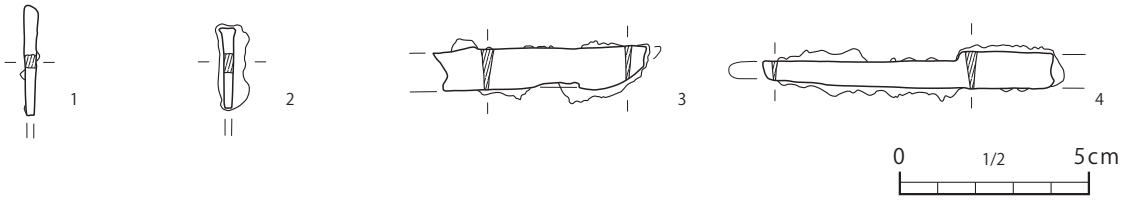


第 43 図　古代の土師器・須恵器（2）（1/4）

石器



鉄器



第 44 図　古代の石器・鉄器（1/2・1/3）

第 7 表　古代の竪穴住居跡　計測値一覧表

挿図番号	図版番号	住居番号	調査区	グリッド	平面形 ※ () 内は推定	長軸（m） ※ () 内は推定	短軸（m） ※ () 内は推定	壁高（m）	主軸方向	付属施設	柱穴	備考
24～26	20・21	126	Ⅷ	25・26-G・H	長方形	4.55	(3.96)	0.34	N 100°W	カマド（東壁中央）	3	9 世紀前半～中葉
26	22	131	Ⅸ②	30・31-I	(方形)	—	—	0.32	—	—	—	8 世紀前半 北西端のみ検出 北壁にカマドがあったと思われる。
27・28	23・24	132	Ⅸ②	30・31-F・G・H	方形	(5.7)	(5.5)	0.3	N 14°W	カマド（北壁中央）	3	7 世紀後半
29・30	25・26	134	Ⅻ	50・51-H・I	隅丸方形	(4.2)	3.93	0.1	N 76°W	カマド（東壁中央）	—	9 世紀初頭
31・32	27・28	135	Ⅻ	53・54-H・I	隅丸方形	(4.25)	4.1	0.3	N 13°W	カマド（北壁西端） 梯子穴	3	7 世紀後半
33・34	29・30	136	Ⅹ	33・34-F・G	隅丸方形	2.4	2.4	0.1	N 94°W	カマド（東壁中央）	—	9 世紀初頭 極小型住居
35・36	31・32	137	Ⅹ	35・36-H・I	方形	4.9	4.55	0.28	N 25°W	—	4	7 世紀後半 北壁東端にカマドがあったと思われる。
37・38	33・34	140	Ⅺ①	45・46-I・J	隅丸方形	(4.2)	(4.15)	0.8	N 9°W	カマド（北壁中央） 梯子穴、貯蔵穴	—	7 世紀後半
39・40	35・36	143	Ⅷ	24-G	方形	3.6	3.15	0.35	N 5°W	カマド（北壁中央）	—	9 世紀後半

第 8 表　古代の土師器・須恵器　観察表（1）

挿図番号	図版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	a：口径（cm） b：底径（cm） c：器高（cm） d：残存高（cm） ※（）内は推定値	胎土	焼成	色調 ※（）内は赤彩	成形・調整	残存率	備考
42	40	126 号住居跡	1	土師器 坏	d：3.7	良好。 細砂粒含む。	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	外面：ケズリ・ナデ。 内面：ナデ。	10%	7 世紀後半
42	40	126 号住居跡	2	須恵器 系土器 坏	a：12.2 d：2.6	良好。 細砂粒含む。	良好	橙 2.5YR6/8	回転力を利用した成形。	5%	9 世紀初頭
42	40	126 号住居跡	3	須恵器 系土器 坏	a：14.6 d：3.0	良好。 細砂粒含む。	良好	橙 5YR6/8	回転力を利用した成形。	5%	9 世紀初頭
42	40	126 号住居跡	4	須恵器 系土器 坏	b：7.4 d：1.3	良好。 細砂粒含む。	良好	明赤褐 5YR5/8	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後未調整。 糸切りの方向：右。	10%	9 世紀初頭？
42	40	126 号住居跡	5	須恵器 瓶	d：10.2	良好。 細砂礫を微量に含む。	良好	灰 5Y6/1	回転力を利用した成形。	30%	9 世紀初頭 胴部下半のみ残存。 外面にススのような付着物あり。
42	40	126 号住居跡	6	須恵器 瓶	b：9.6 d：3.3	良好。 細砂礫を微量に含む。	良好	灰 N4/0	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後外周ヘラ削りを施し、高台を取り付け、ナデ。 高台の接合面は外側。 糸切りの方向：右。	15%	9 世紀前半～ 9 世紀中葉
42	40	126 号住居跡	7	須恵器 坏	a：10.6 d：3.8	良好。 細砂礫を微量に含む。	良好		回転力を利用した成形。	10%	9 世紀前半～ 9 世紀中葉
42	40	126 号住居跡	8	須恵器 坏	b：7.1 d：1.5	良好。 細砂礫を微量に含む。	良好	灰 7.5Y6/1	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後未調整。 糸切りの方向：右。	10%	9 世紀前半
42	40	126 号住居跡	9	土師器 台付甕	a：11.6 d：3.7	良好。 細砂粒含む。	良好	赤褐 2.5YR4/8	外面：ケズリ。 内面・口縁部：ナデ。	10%	9 世紀初頭 口縁部「く」の字形から「コ」の字形への移行期。
42	40	126 号住居跡	10	土師器 甕	a：21.6 d：7.5	良好。 細砂粒含む。	良好	暗赤褐 2.5YR3/4	外面：ケズリ。 内面・口縁部：ナデ。	10%	9 世紀初頭 口縁部「く」の字形から「コ」の字形への移行期。
42	40	126 号住居跡	11	土師器 甕	a：19.9 d：5.5	良好。 細砂粒含む。	良好		外面：ケズリ。 内面・口縁部：ナデ。	5%	9 世紀初頭 口縁部「く」の字形から「コ」の字形への移行期。
42	40	126 号住居跡	12	土師器 甕	a：18.5 d：26.7	良好。 細砂粒含む。	良好	赤褐 10YR4/8	外面：ケズリ。 内面・口縁部：ナデ。	40%	9 世紀初頭 口縁部「く」の字形から「コ」の字形への移行期。 全体的に摩耗している。
42	40	126 号住居跡	13	土師器 甕	a：20.0 b：(3.9) c：(27.0) d：23.4	良好。 細砂粒含む。	良好	暗赤褐 2.5YR5/8	外面：ケズリ。 内面・口縁部：ナデ。	70%	9 世紀初頭 口縁部「く」の字形から「コ」の字形への移行期
42	40	126 号住居跡	14	土師器 甕	a：20.1 b：(3.4) c：(27.7) d：23.4	良好。 細砂粒含む。	良好	赤褐 2.5YR4/8	外面：ケズリ。 内面・口縁部：ナデ。	70%	9 世紀初頭 口縁部「く」の字形から「コ」の字形への移行期。
42	40	126 号住居跡	15	土師器 甕	a：19.4 d：6.6	良好。 細砂粒含む。	良好	黄灰 2.5Y4/1	外面：ケズリ。 内面・口縁部：ナデ。	10%	9 世紀中葉 口縁部「コ」の字形 全体的に摩耗している。
42	40	126 号住居跡	16	土師器 甕	a：18.8 d：7.1	良好。 細砂粒含む。	良好	赤褐 5YR4/6	外面：ケズリ。 内面：ナデ。 口縁部：ナデ。粘土帯の輪積み痕残る。	5%	9 世紀中葉 口縁部「コ」の字形。

第 8 表　古代の土師器・須恵器　観察表（2）

挿図番号	図版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	a：口径（cm） b：底径（cm） c：器高（cm） d：残存高（cm） ※（）内は推定値	胎土	焼成	色調 ※（）内は赤彩	成形・調整	残存率	備考
42	40	126 号住居跡	17	土師器甕	a：20.0 d：13.0	良好。細砂粒含む。	良好	明赤褐 2.5YR5/6	外面：ケズリ。 内面・口縁部：ナデ。	30%	9 世紀中葉 口縁部「コ」の字形
42	40	126 号住居跡	18	土師器甕	a：22.2 d：9.0	良好。細砂粒含む。	良好	赤褐 5YR4/6	外面：ケズリ。 内面・口縁部：ナデ。	10%	9 世紀中葉 口縁部「コ」の字形。
42	40	126 号住居跡	19	土師器甕	b：4.1 d：5.8	良好。細砂粒含む。	良好	明赤褐 2.5YR5/8	外面：ケズリ。 内面：ナデ。	10%	9 世紀初頭？
42	40	126 号住居跡	20	土師器台付甕	b：9.2 d：6.8	良好。細砂粒含む。	良好	明赤褐 2.5YR5/6	外面：胴部　ケズリ。 脚部　ナデ。 内面：ナデ。	15%	9 世紀初頭？
42	40	126 号住居跡	21	土師器台付甕	b：12.6 d：3.2	良好。細砂粒含む。	良好	橙 5YR6/8	外面：ナデ。 内面：ナデ。	5%	9 世紀初頭？
43	41	132 号住居跡	1	土師器坏	a：11.6 b：2.9 c：4.2	良好。細砂礫を多く含む。	良好	橙 7.5YR6/6 （明赤褐 2.5YR5/8）	外面：ケズリ・ナデ。 内面：ナデ。赤彩。 口縁部：ナデ。外面に沈線施文。赤彩。	95%	7 世紀後半
43	41	132 号住居跡	2	土師器坏	a：13.4 b：3.0 c：4.6	良好。細砂礫を少量含む。	良好	にぶい黄褐 10YR5/4	外面：ケズリ・ナデ。 内面：ナデ。 口縁部：ナデ。外面に沈線施文。	40%	7 世紀後半 全体的に摩耗している。
43	41	132 号住居跡	3	土師器坏	a：14.0 b：3.0 c：4.7	良好。細砂粒含む。	良好	明褐 7.5YR5/6	外面：ケズリ・ナデ。 内面・口縁部：ナデ。	20%	7 世紀後半 全体的に摩耗している。
43	41	132 号住居跡	4	土師器坏	a：13.9 b：3.5 c：4.7	良好。細砂粒含む。	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	外面：ケズリ・ナデ。 内面・口縁部：ナデ。	40%	7 世紀後半 全体的に摩耗している。
43	41	132 号住居跡	5	須恵器坏	b：8.2 d：1.0	良好。細砂礫を少量含む。	良好	灰 N4/0	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後未調整。 糸切りの方向：右。	10%	9 世紀前半
43	41	132 号住居跡	6	土師器甕	a：23.0 d：4.5	良好。細砂粒含む。	良好	明赤褐 5YR5/8	外面：ナデ。粘土帯の輪積み痕が残る。 内面：ナデ。	10%	7 世紀後半 口縁部のみ残存。 長胴甕。
43	41	134 号住居跡	1	土師器坏	a：11.2 d：3.8	良好。細砂粒含む。	良好	明黄褐 10YR7/6 （明赤褐 5YR5/8）	―	10%	8 世紀中葉？ 落合型。 全体的に摩耗している。
43	41	134 号住居跡	2	須恵器坏	a：15.6 b：（7.8） c：（3.8） d：3.6	良好。細砂粒含む。白色骨針状物質を少量含む。	良好	オリーブ褐 2.5Y4/3	回転力を利用した成形。	10%	9 世紀前半
43	41	134 号住居跡	3	須恵器坏	a：13.8 b：7.8 c：3.8	良好。細砂粒含む。	良好	オリーブ黒 5Y3/1	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後未調整。 糸切りの方向：右。	20%	9 世紀前半
43	41	134 号住居跡	4	須恵器坏	b：9.0 d：1.5	良好。細砂粒含む。白色骨針状物質を微量に含む。	良好	灰 N5/0	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後外周ヘラケズリ。 糸切りの方向：右。	10%	8 世紀後半～ 9 世紀前半
43	41	134 号住居跡	5	土師器甕	b：10.0 d：4.0	良好。細砂粒含む。	良好	黒 7.5Y1.7/1	―	20%	9 世紀前半？
43	41	135 号住居跡	1	土師器坏	a：11.0 b：（4.8cm） c：4.0	良好。細砂粒含む。	良好	にぶい黄橙 10YR7/4 （赤褐 2.5YR4/6）	外面：ケズリ・ナデ。 内面・口縁部：ナデ。赤彩。	15%	7 世紀後半

第 8 表　古代の土師器・須恵器　観察表（3）

挿図番号	図版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	a：口径（cm） b：底径（cm） c：器高（cm） d：残存高（cm） ※（）内は推定値	胎土	焼成	色調 ※（）内は赤彩	成形・調整	残存率	備考
43	41	135 号住居跡	2	須恵器 坏	a：11.6 d：2.9	良好。 細砂粒含む。	良好	灰 N4/0	回転力を利用した成形。	10%	9 世紀前半？ 内外面に火襷痕あり
43	41	135 号住居跡	3	須恵器 長頸瓶	d：6.1	良好。 細砂粒含む。	良好	オリーブ黒 7.5Y3/1	回転力を利用した成形。	10%	9 世紀前半？ 頸部のみ残存
43	41	136 号住居跡	1	土師器 甕	a：20.9 b：(3.9) c：(26.3) d：24.4	良好。 細砂粒含む。	良好	暗赤褐 5YR3/6	外面：ケズリ。 内面・口縁部：ナデ。	60%	9 世紀初頭 口縁部「く」の字形から「コ」の字形への移行期。
43	41	137 号住居跡	1	土師器 坏	a：10.8 d：4.4	良好。 細砂粒含む。	良好	橙 10YR6/6	外面：ケズリ・ナデ。 内面・口縁部：ナデ。 外面・内面ともに沈線施文。 口唇部：刻みあり。	10%	7 世紀後半
43	41	137 号住居跡	2	土師器 坏	b：5.8 d：1.6	良好。 細砂粒含む。	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	―	10%	7 世紀後半
43	41	137 号住居跡	3	土師器 鉢	a：24.6 b：10.1 c：10.4	良好。 細砂粒含む。	良好	橙 7.5YR6/8	外面：ケズリ・ナデ。 内面・口縁部：ナデ。	30%	7 世紀後半 底部穿孔。 甑に転用した可能性あり。
43	41	138 号住居跡	1	須恵器 坏	a：10.8 d：3.6	良好。 細砂粒含む。	良好	暗灰 N3/0	回転力を利用した成形。	10%	9 世紀前半？
43	41	140 号住居跡	1	土師器 坏	a：12.0 d：3.4	良好。 細砂粒含む。	良好	明褐 7.5YR5/6	外面：ケズリ・ナデ。 内面・口縁部：ナデ。	15%	7 世紀後半
43	41	140 号住居跡	2	須恵器 系土器 坏	b：6.7 d：1.0	良好。 細砂粒含む。	良好	橙 7.5YR6/6	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後未調整。	5%	9 世紀後半？
43	41	141 号住居跡	1	須恵器 瓶	b：6.4 d：1.8	良好。 細砂粒含む。	良好	灰 7.5YR5/1	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後未調整。	5%	9 世紀以降
43	41	143 号住居跡	1	土師器 甕	b：4.8 d：2.4	良好。 細砂粒含む。	良好	黒褐 7.5YR3/2	外面：ケズリ。 内面：ナデ。	10%	底部のみ残存。
43	41	Ⅸ区	1	須恵器 坏	b：4.6 d：1.1	良好。 細砂粒含む。	良好	にぶい黄褐 10YR4/3	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後外周ヘラケズリ。 糸切りの方向：右。	5%	8 世紀後半
43	41	Ⅹ区 36-G	2	須恵器 坏	b：7.0 d：1.3	良好。 細砂粒含む。	良好	暗灰 N3/0	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後全面ヘラケズリ。	5%	8 世紀後半？
43	41	Ⅷ区 表土	3	須恵器 坏	b：6.8 d：0.5	良好。 細砂粒含む。 白色骨針状物質を微量に含む。	良好	オリーブ黒 5Y3/1	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後、外周ヘラケズリ。	5%	8 世紀後半～ 9 世紀前半
43	41	Ⅺ区 表土	4	須恵器 坏	b：8.8 d：1.2	良好。 細砂粒含む。 白色骨針状物質を含む。	良好	灰 10Y6/1	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後、外周ヘラケズリ。	5%	8 世紀後半～ 9 世紀前半
43	41	Ⅺ区 表土	5	須恵器 坏	b：7.8 d：0.6	良好。 細砂粒含む。 白色骨針状物質を含む。	良好	灰 10Y5/1	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後外周ヘラケズリ。 糸切りの方向：右。	5%	9 世紀前半

第 8 表　古代の土師器・須恵器　観察表（4）

挿図番号	図版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	a：口径（cm） b：底径（cm） c：器高（cm） d：残存高（cm） ※（）内は推定値	胎土	焼成	色調 ※（）内は赤彩	成形・調整	残存率	備考
43	41	X区 36-G	6	須恵器 坏	b：8.0 d：1.1	良好。 細砂粒 含む。	良好	灰 10Y6/1	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後未調整。 糸切りの方向：右。	5%	9 世紀前半
43	41	XII区	7	須恵器 坏	a：14.7 b：8.1 c：1.9	良好。 細砂粒 含む。	良好	灰オリーブ 5Y4/2	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後未調整。	10%	9 世紀後半
43	41	XI区 表土	8	須恵器 坏	b：5.9 d：0.7	良好。 細砂粒 含む。	良好	オリーブ黒 10Y3/1	回転力を利用した成形。 底部回転糸切り後未調整。 糸切りの方向：右。	5%	9 世紀後半？

第 9 表　古代の石器　観察表

挿図番号	図版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	岩種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	残存率	備考
44	42	126 号住居跡	1	砥石	砂岩	4.8	4.5	1.1	40.2	大部分欠損	表面凹部あり。
44	42	143 号住居跡	2	支脚	砂岩	10.4	6.2	1.4	136.6	一部分欠損	全面被熱。 頂部～中部に付着物あり。

第 10 表　古代の鉄器　観察表

挿図番号	図版番号	遺構名 出土地点	番号	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	残存率	備考
44	42	126 号住居跡	1	不明	2.9	0.4	0.35	1.1	部分欠損	棒状の鉄製品。 断面方形。 下部欠損。
44	42	132 号住居跡	2	釘	2.1	0.4	0.5	1.7	部分欠損	断面方形。 釘頭残存。
44	42	134 号住居跡	3	刀子	5.6	1.1	0.3	6.8	部分欠損	刃部先端・茎部欠損。平造り。
44	42	135 号住居跡	4	刀子	7.6	1.0	0.3	10.9	部分欠損	刃部先端・茎部欠損。平造り。片関。
―	42	126 号住居跡	5	鉄滓	2.9	2.7	1.6	27.3	完形	写真図版のみ掲載。

Ⅳ　自然科学分析

北区十条台遺跡群南橋遺跡出土炭化材の樹種同定分析委託報告

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

北区十条台遺跡群南橋遺跡では、弥生時代後期～古墳時代初頭および古代の集落跡に伴う遺構が検出されている。本報告では、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡から出土した炭化材について、用材選択を明らかにするための樹種同定を実施する。

２．試料

試料は、XI②区 141 号住居跡から出土した炭化材３点 (№６～８) である。

３．分析方法

炭化材を自然乾燥させた後、横断面（木口）・放射断面（柾目）・接戦断面（板目）の３断面について割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地･伊東（1982）、Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

４．結果

樹種同定結果を表 11 に示す。炭化材は、広葉樹２分類群（コナラ属クヌギ節、クリ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

第 11 表　樹種同定結果

調査区	遺構	番号	形状	樹種
XI ②区	141 号住居跡	№６	破片	コナラ属クヌギ節
		№７	破片	コナラ属クヌギ節
		№８	破片	クリ

・コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Cerris　ブナ科

環孔材。年輪の始め (早材部) に大型の道管が１～２列配列した後、急激に道管径を減じ、単独で放射方向に配列する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1 ～ 20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科クリ属

環孔材。年輪の始め (早材部) に大型の道管が２～３列以上配列する。晩材部では小径の道管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1 ～ 15 細胞高。

５．考察

弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡（XI②区 141 号住居跡）から出土した炭化材は、コナラ属クヌギ節とクリに同定された。クヌギ節は、日本にクヌギとアベマキの２種があるが、現在の関東地方ではクヌギが広く分布するのに対し、アベマキは分布していない。また、出土種実遺体のデータベース（石田ほか ,2016）をみても、当該期の東京都や北区に隣接する埼玉県においてアベ

マキが出土した事例は確認できない。これらの点から、今回のクヌギ節はクヌギの可能性が高い。クヌギは、コナラと共に関東地方における二次林の主要な構成種となる落葉高木である。コナラが乾いた台地上によく生育するのに対し、クヌギはより湿った環境を好み、エノキ等と共に河畔林を構成することもある。クヌギの木材は、重硬で強度が高い。クリは二次林等に生育する落葉高木である。木材は重硬で強度と耐朽性が高い。

樹種同定結果から、141 号住居跡では、強度の高いクヌギ節（クヌギと考えられる）やクリが建築部材等に利用された可能性がある。伊東・山田（2012）のデータベースによれば、本遺跡周辺では、西ヶ原遺跡や飛鳥山遺跡において、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡から出土した建築部材と考えられる炭化材の樹種同定が実施されている。その結果をみると、西ヶ原遺跡では、3 軒の住居跡から出土した炭化材 5 点について同定が実施されており、Y201 号住居跡でクヌギ節とクリ、他の 2 軒から出土した 3 点は全てクヌギ節に同定されている。Y201 号住居跡の結果は、本遺跡の結果に類似する。飛鳥山遺跡では、5 軒の住居跡から出土した 24 点について同定が実施されており、クヌギ節を中心として、ムクロジ、オニグルミ、タケ亜科が僅かに混じる結果が報告されている。飛鳥山遺跡ではクリは確認されていないが、クヌギ節の多い結果は本遺跡の結果を評価する上でも注目される。

なお、クヌギ節やクリは、現在の植生や周辺の地形を考慮すれば、周囲の河川（石神井川など）沿いの河畔や台地斜面等に生育していた可能性がある。

引用文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

石田糸絵・工藤雄一郎・百原　新 ,2016, 日本の遺跡出土大型植物遺体データベース . 植生史研究 ,24(1),18-24.

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

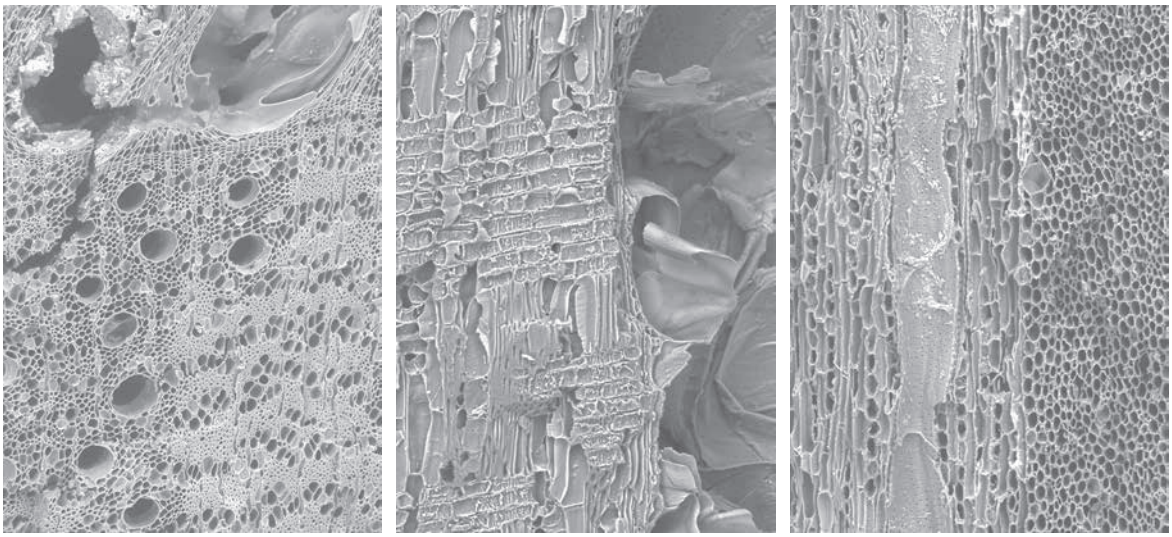
伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

伊東隆夫・山田昌久 (編),2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース . 海青社 ,444p.

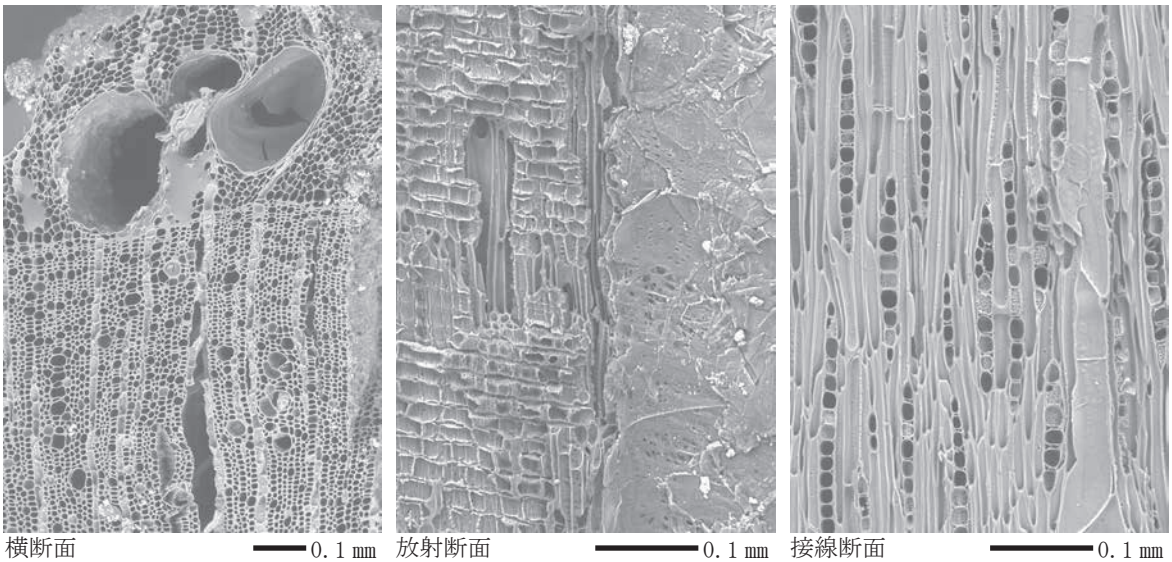
島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.



横断面　0.1 ㎜　放射断面　0.1 ㎜　接線断面　0.1 ㎜

コナラ属クヌギ節　XI②区 141 号住居跡　№6



横断面　0.1 ㎜　放射断面　0.1 ㎜　接線断面　0.1 ㎜

クリ　XI②区 141 号住居跡　№8

第 45 図　十条台遺跡群南橋遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

Ⅴ　調査の成果と課題

中十条アパート地区・王子・王子母子アパート地区の両地区を通して、各時代の調査の成果と課題についてまとめる。（第 46 図、第 12 表）

1　縄文時代

遺構は竪穴住居跡 1 軒、柱穴 1 基、土坑 6 基が検出された。弥生時代後期以降の遺構や攪乱により調査前に削平された部分もあるが、深さがある構造のため下半部が遺存していた土坑も存在した。土坑はそれぞれ距離を置いて分布し、北側では約 12 mから 34 m、南側の 26 号土坑と 22 号土坑の距離は南北約 80 mの間隔を持ち、規則性は認められない。形態は、平面形が細長く幅が狭い (9・14・18・22・26 号)、楕円形で幅がやや広い (8 号) に大きく分けられる。縦断面は 9・14 号を除き、片側はほぼ垂直に掘削されるが、反対側は上場より壁面を削り込む構造であることが確認された。壁面の遺存状態は崩落の痕跡があまり認められず、長期にわたる使用は想定されない。規模は最大の 26 号土坑で、長軸長約 3.1m ×短軸長約 1.1m ×深さ約 1.7m を測る。8 号土坑は当初の規模は長軸長約 2.3m ×短軸長約 1.5m ×深さ約 1.3m の規模であったが、土坑が完全に埋没した後に中央部を掘り返し、長軸長約 1.8m ×短軸長約 1.0m ×深さ約 1.3m の土坑を作り直した可能性が高い。この規模は約 1/2 程の調査に留まったが、推定復元でほぼ 14 号土坑の規模に相当する。

133 号住居跡は、5・6 層の褐色土による貼床が確認され、堆積土が弥生時代後期以降の遺構とは異なることから、縄文時代の竪穴住居跡として調査した。遺物が出土しておらず、帰属時期など詳細は不明である。88 号柱穴も堆積土から、縄文時代の柱穴とした。

遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構の覆土や表土から主に出土しており、土器は前期前葉・中葉・後葉、中期後葉、後期前葉のそれぞれ深鉢の破片である。石器は石鏃・石錐・剥片・石皿が出土している。

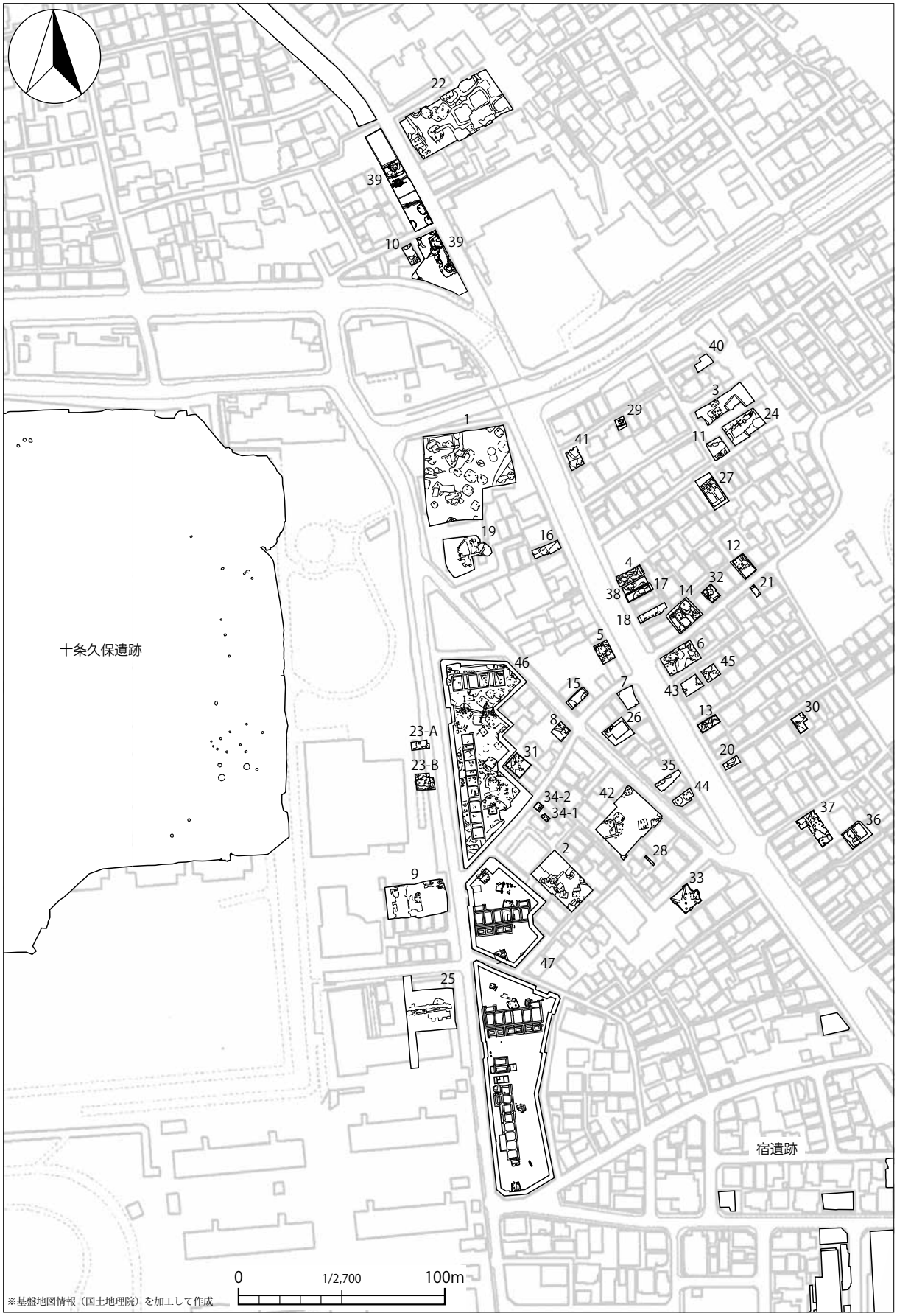
南橋遺跡では、北区教育委員会が実施してきた調査でも縄文時代の遺構の検出は少なく、今回の調査でも集落を形成した積極的な痕跡は認められなかった。

（飯塚）

2　弥生時代後期から古墳時代初頭

(1) 南橋遺跡の土器の分類 (第 47 図)

北区内の遺跡から出土した弥生時代後期の土器群は、後期中頃から後期後半を 1 ～ 3 期に分けた編年案を基にしている (黒沢 1996)。それを踏まえ道合遺跡の報告では、弥生時代後期から古墳時代初頭を 4 期に分けた編年を提示し、集落の整理を行った (丹野他 2010)。南橋遺跡の該期の土器編年は、北区教育委員会が 1996 年に刊行した『南橋遺跡Ⅱ』にて、3 地点から 9 地点出土の土器を、遺構の前後関係と一括土器をもとにⅠ期からⅥ期まで 6 期に分ける編年案が示されている (小林他 1996)。ここではその後に実施された南橋遺跡の調査により良好な資料が蓄積されており、都道補助 83 号線整備事業に伴う十条台遺跡群の調査、及び南橋遺跡と一体と考えられる十条久保遺跡の土器群の様相



第 46 図　南橋遺跡調査地点全体図（1/2,700）

第 12 表　南橋遺跡調査地点一覧表（1）

地点	所在地	調査面積（㎡）	報告書	発行年	縄文	弥生時代後期～古墳時代初頭	古代
1	中十条 1-2-18	2,000	南橋遺跡	昭和 62 年	－	住居跡 31、方形周溝墓 2	－
2	王子本町 2-11-6	430	文化財研究紀要第 3 集	平成元年	－	住居跡 7、方形周溝墓 2	住居跡 2（9 世紀初頭）
3	中十条 1-3-17	230	南橋遺跡Ⅱ	平成 8 年	－	住居跡 5	－
4	中十条 1-3-10	70	南橋遺跡Ⅱ	平成 8 年	－	住居跡 5	住居跡 3（8 世紀前半 2）
5	中十条 1-2-1	78	南橋遺跡Ⅱ	平成 8 年	－	住居跡 9	住居跡 1（9 世紀前半～中葉）
6	王子本町 2-8-8	228	南橋遺跡Ⅱ	平成 8 年	－	住居跡 8	住居跡 3（7 世紀後半 1、8 世紀中葉～後半 1、9 世紀初頭～中葉 1）
7	王子本町 2-9-9	75	南橋遺跡Ⅱ	平成 8 年	－	住居跡 2	－
8	中十条 1-1-22	45	南橋遺跡Ⅱ	平成 8 年	－	住居跡 1	住居跡 2（7 世紀後半 1）
9	十条台 1-3-16	630	南橋遺跡Ⅱ	平成 8 年	－	住居跡 2	住居跡 2（8 世紀前半～後半 1、9 世紀初頭～中葉 1）
10	中十条 1-6-3	50	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 3	住居跡 1
11	中十条 1-3-17	42	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 1、溝跡 1	住居跡 1（10 世紀前半）
12	中十条 1-3-4	60	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 4	－
13	王子本町 2-8-6	45	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 1	住居跡 6（9 世紀初頭 1、10 世紀中葉～後半 1）
14	中十条 1-3-6	109	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 9、土坑 1	溝跡 1
15	中十条 1-2-2	37	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 2	－
16	中十条 1-2-22	56	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 2	－
17	中十条 1-3-9	35	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 2	－
18	中十条 1-3-8	49	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 2	住居跡 2（7 世紀後半 1）
19	中十条 1-2-18	300	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 3、方形周溝墓 3	－
20	王子本町 2-5-8	28	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 1	住居跡 1
21	王子本町 2-8-12	14	南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ	平成 15 年	－	住居跡 2	住居跡 1
22	中十条 1-13	1,122	南橋遺跡Ⅳ	平成 16 年	－	住居跡 9、方形周溝墓 10	－
23	十条台 1-2-5	100	文化財研究紀要第 18 集	平成 17 年	－	住居跡 7、小穴 1	住居跡 2（8 世紀中葉～後半）
24	中十条 1-3-17	210	文化財研究紀要第 19 集	平成 18 年	－	住居跡 2	溝跡 3
25	十条台 1-3-20	580	十条台遺跡群南橋遺跡	平成 18 年	－	住居跡 2	住居跡 1（7 世紀後半）
26	王子本町 2-9-6	43.9	文化財研究紀要第第 23 集	平成 22 年	－	住居跡 1	－
27	中十条 1-3	58.5	文化財研究紀要第第 23 集	平成 22 年	－	住居跡 7	住居跡 3（平安）、掘立柱建物 2（平安）
28	王子本町 2-14-12	6.0	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 22 年度－	平成 24 年	－	－	－
29	中十条 1-4-6	22.8	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 22 年度－	平成 24 年	－	住居跡 1、土坑 1	－
30	王子本町 2-5-14	43.2	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 25 年度－	平成 27 年	－	住居跡 2	住居跡 1（9 世紀前半～中葉）
31	中十条 1-1-2	76.8	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 25 年度－	平成 27 年	－	住居跡 2	住居跡 2（8 世紀後半）、土坑 3（8 世紀 1、9 世紀前半以降 1、奈良・平安 1）

第 12 表　南橋遺跡調査地点一覧表（2）

地点	所在地	調査面積（㎡）	報告書	発行年	縄文	弥生時代後期～古墳時代初頭	古代
32	中十条 1-3-4	40.4	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 25 年度－	平成 27 年	－	住居跡 5	－
33	王子本町 2-14	112.6	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 26 年度－	平成 28 年	－	方形周溝墓 1	住居跡 1（10 世紀前半）、掘立柱建物 1（9 世紀後半以前）、土坑 2（奈良・平安）
34	王子本町 2-11-4	19.3	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 26 年度－	平成 28 年	－	住居跡 2	－
35	王子本町 2-9	49.8	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 26 年度－	平成 28 年	－	住居跡 1	住居跡 2（9 世紀初頭）
36	王子本町 2-4-9	64.8	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 27 年度－	平成 29 年	－	住居跡 3、性格不明遺構 1	住居跡 1（9 世紀前半～中葉）、ピット
37	王子本町 2-4	131.3	東京都北区　十条台遺跡群 南橋遺跡発掘調査報告書 －王子本町 2-4 －	平成 28 年	－	住居跡 5	住居跡 1（9 世紀前半～中葉）、掘立柱建物 1（9 世紀前半～中葉）
38	中十条 1-3-10	43.1	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 28 年度－	平成 29 年	－	住居跡 5、性格不明遺構 1	住居跡 2（8 世紀前半）
39	中十条 1-3-19	1,273	北区十条台遺跡群 －十条地区沿道一体整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－	平成 30 年	－	住居跡 10、竪穴状遺構 3、土坑 1、柱穴 20、方形周溝墓 1、溝跡 2	－
40	中十条 1-3-19	27.6	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 29 年度－	平成 31 年	－	－	－
41	中十条 1-4-6	56.9	北区埋蔵文化財調査年報 －平成 30 年度－	令和 2 年	－	住居跡 1、方形周溝墓 1	－
42	王子本町 2-10	552.2	東京都北区　十条台遺跡群 南橋遺跡－王子本町 2-10 地点－発掘調査報告書	令和元年	－	住居跡 4、方形周溝墓 1	住居跡 5（8 世紀中葉～後半 3、8 世紀後半 2）
43	王子本町 2-8-7	63.3	北区埋蔵文化財調査年報 －令和元年度－	令和 3 年	－	住居跡 1	住居跡 1（9 世紀初頭）
44	王子本町 2-9	46.3	北区埋蔵文化財調査年報 －令和元年度－	令和 3 年	－	住居跡 2	－
45	王子本町 2-8-8	55.0	北区埋蔵文化財調査年報 －令和 2 年度－	令和 4 年	－	住居跡 2	住居跡 2（9 世紀初頭 1）
46	中十条 1-1 ほか	2,774	北区十条台遺跡群南橋遺跡－都営中十条アパート及び都営王子・王子母子アパート撤去事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－　第 1 分冊	令和 4 年	土坑 4	住居跡 101、掘立柱建物 5、方形周溝墓 3、土坑 14、柱穴 46	住居跡 12（7 世紀後半 1、8 世紀中葉～後半 1、9 世紀前半～中葉 6、9 世紀後半 2、9 世紀後半～10 世紀初頭 1）、掘立柱建物 1（9 世紀後半）、土坑 2、柱穴 5
47	王子本町 2-12-2 ほか	4,698	本報告書	令和 5 年	住居跡 1、土坑 1、柱穴 1	住居跡 5、掘立柱建物 1、土坑 4、柱穴 8、溝跡 1	住居跡 9（7 世紀後半 4、9 世紀初頭 2、9 世紀前半～中葉 1、9 世紀後半 1）、柱穴 4

を踏まえ、今回の調査で出土した土器群の位置付けと集落の展開を整理することを目的とし、新たに遺跡全体の土器の器種分類と編年を行った。

分類図 (第 47 図) は今回の調査地点から出土した土器をもとにしているので、図には遺跡全体のすべての器種を網羅してはおらず、番号のないものは今回の地点からは出土していない。なお伊勢湾岸系の土器の分類・編年は (赤塚 1990・1997)、近畿の庄内式系の二重口縁壺や高坏の分類と編年は (寺沢 1986、森岡・西村 2006) に拠った。

・壺 [複合口縁装飾壺 (25 ～ 27、33･34)、複合口縁壺 (19･24)、直口壺 (18･21 ～ 23)、二重口縁壺、庄内式系二重口縁壺、無頸壺、広口壺 (28 ～ 31)、脚付広口壺 (32)、小型壺：ミニチュア (20)]。

・甕 [台付甕刷毛甕 (1・4・5)・ナデ甕 (3)・S 字状口縁台付甕 (2)、受け口状口縁甕、平底甕]。

・高坏 [縄文の文様を持つ在地系 (12・13)、口縁が大きく水平に開く搬入のもの、伊勢湾岸系の有段高坏 (16・17)、同有稜低脚高坏 (15)、埦形低脚高坏 (14)、庄内式系有段高坏、中実脚高坏]。

・埦 (6 ～ 9)。

・小型器台 (10・11)。

（飯塚）

(2) 南橋遺跡の土器編年 (第 48 図)

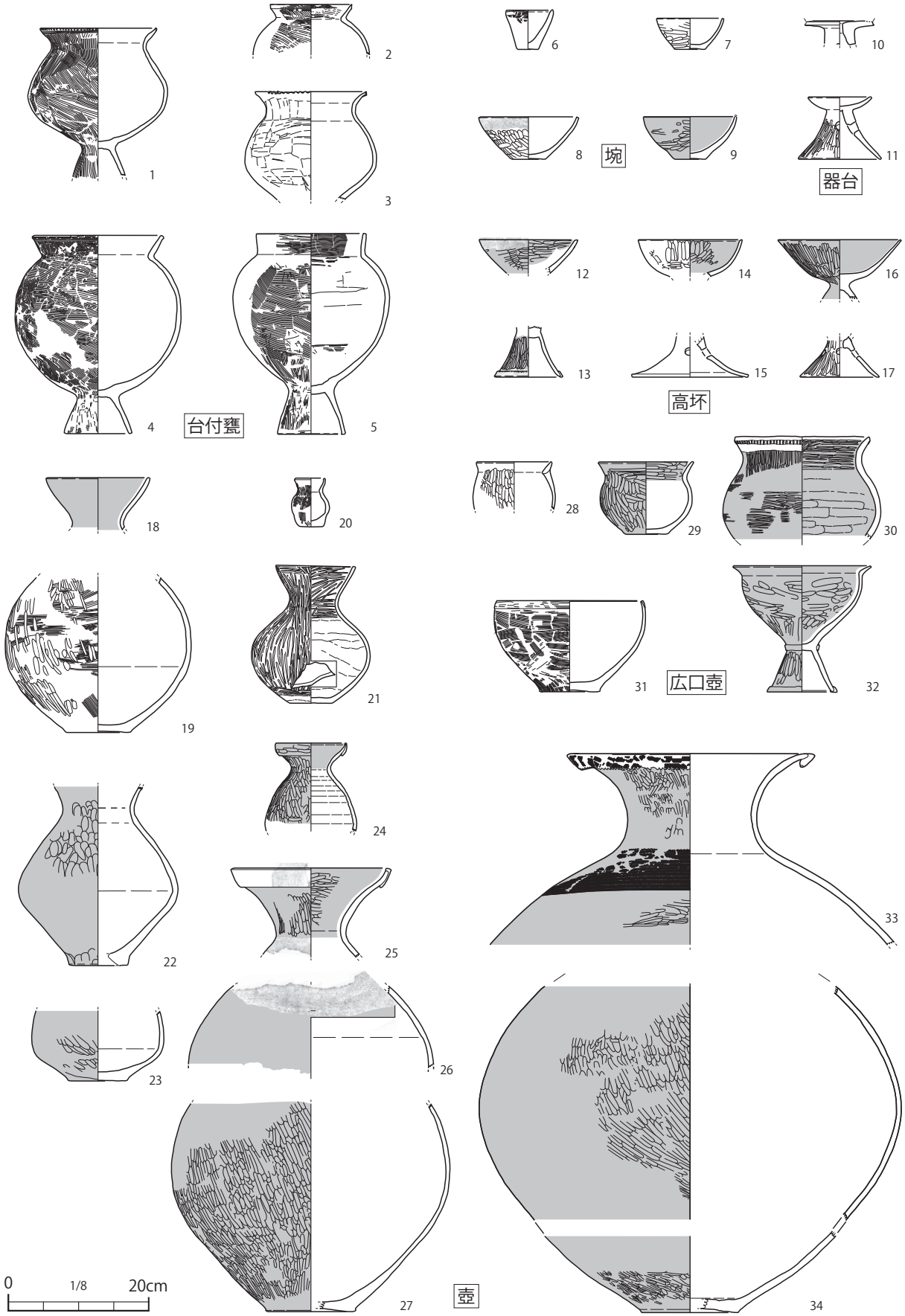
土器編年にあたり、器種分類と各器種の型式変化を元にし、一括性の高い資料を基本に、単体でも良好な資料も含め、各種土器の変化する時期をⅠ期からⅤ期の 5 期に分けて整理した。ここでは報告書のまとめとして編年の概略を示す。調査地点は、北区教育委員会による各調査地点の通し番号を用い、今回の調査区は遺物の注記に用いた中十条アパート地区：JMNA、王子･王子母子アパート地区：JMOA、また都道補助 83 号線整備事業に伴う調査地点：J ﾎ 83 として表す。

各期の土器の特徴を概略し、標識とする資料を (　) 内に示す。

Ⅰ期－複合口縁壺のうち装飾壺には大型 (1) と小型があり、肩部と口縁部の地文に羽状縄文 (1) ないしは網目状撚糸文を施し、連続山形文鋸歯文、平行沈線、縦形区画、S 字状結節により区画を設ける。文様は主に羽状縄文を主体としたものから、網目状撚糸文を主体とするものへと変化する。口縁には複数の棒状浮文を一単位として貼り付け、刻みを設けるものがある。直口壺にも肩部、口唇部に縄文ないしは櫛描文による文様を持つもの (8)、菊川式の影響が残る櫛描文を持つものも認められ、無文もみられる (9)。広口壺は丁寧なヘラミガキと赤彩で仕上げる精製土器で、大型と小型に分かれる。無頸壺はこの時期に限られ、北区内では田端西台通遺跡 SZ07（丹野他 2012）に良好な資料が認められる。

台付甕のうち刷毛甕には法量から小型と中型があり、胴部は大きく張り、口縁は大きく外反し、口唇部に刻みを持つ (13)。ナデ甕には中型のものがあり、肩部に粘土紐を貼り付け刻みをつける東京湾岸系も認められる。

高坏には在地系の坏部が半球状で、口縁部及び口唇部、脚部裾に縄文による文様を持つもの (19)、大きく口縁が水平に開くものがある。これらに加え、伊勢湾系の有段高坏は、坏部には明瞭な稜線を持ち､口縁は開きが弱く外傾して開き (20)､脚部は内湾気味である (21)。Ⅱ期の同器種の型式変化から、Ⅰ期に出現していたものと考えられる。小型器台は東海系器台 A がⅠ期の後半に出現していた可能



第 47 図　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器分類図（1/8）

性が高い。埦は小型の精製土器である。

Ⅰ期の複合口縁の装飾壺は古い段階のものは破片資料によるものが多く、文様構成や施文具の詳細な分類、高坏の型式変化とともに、1 地点などのⅠ期の遺構の重複の分析などから、今後 2 つの小期に分けられる可能性がある。北区内の資料では、七社神社前遺跡 2 号方形周溝墓（小林他 1988）、道合遺跡後期古段階とほぼ平行するものと考えられる。

(標識資料：1 地点 SI14、6 地点 3 号住居跡、10 地点 2 号住居跡、32 地点 SI01、37 地点 SI01・02、十条久保 SE34 など)。

Ⅱ期－Ⅳ期まで継続する器種組成がほぼ揃う時期である。複合口縁の大型の装飾壺は文様の簡略化が進み、この時期に消滅する (2)。直口壺は無文になり、大型と小型があり、肩部から口縁はなだらかに外反する。大型は胴部に強い張りを持ち、中位に最大径を持つ (10)。小型は胴部下半に最大径を持つ。広口壺は精製土器が主体であるが、粗製土器や、精製で脚部を持つ広口壺が出現する。

台付甕には刷毛甕とナデ甕があり、両者とも胴部は大きく張りを持ち、口唇部に刻みを持つものと持たないものがある。刷毛甕には大型が加わり、Ⅳ期まで継続する。刷毛甕の口縁は大きく「く」の字状に外反し (14)、大型・中型は胴部の伸長が認められる (15)。ナデ甕は小型のものにほぼ限られる。刷毛甕の製作は、Ⅰ期から認められる、身から口縁の外面調整を大きく 3 段階に分けて仕上げる製作技法が確立する。

高坏は伊勢湾系に限られ、有稜低脚高坏は坏部の稜は強く、有段高坏は坏部の稜は弱くなり口縁は大きく逆「ハ」の字状に開き (22)、脚部も外へ開くものへと変化する (23)。Ⅱ期後半には坏部の稜の消失と脚部の裾の開きが進む (24)。小型器台のうち東海系器台 B 類は (29)、脚部から受部が柱状で、脚部と受部は接合により貫通孔を作り出す。他の小型器台には器高が低く、受部は浅い小皿状で、脚部に透孔を 3 箇所持つものが出現し (30)、以降の型式変化が認められる。また貫通孔を持たないものも出現する。埦は縄文の文様を持つものが残り、平底で内湾して立ち上がるものと、平底で内湾して中位で屈曲して口縁が開くものに分かれる。手捏ねによるミニチュアもみられる。北区内の資料では、赤羽台遺跡八幡神社地区 H-5 号住（小林他 1990）、豊島馬場遺跡 SK11（小林他 1995）などとほぼ平行するものと考えられる。

(標識資料：1 地点 SI18・SI23、4 地点 2 号住居跡、22 地点 SI02・SI05・SH02、30 地点 SI03、Jホ 83 1B 区 4 号遺構など)

Ⅲ期－複合口縁壺は大型で、口縁帯の幅が広い (3)、狭い (4) があり、どちらも胴部の張りは強く、口縁は外傾し、口唇部でやや直立する。二重口縁壺もこの時期に出現した可能性が想定される。また二重口縁壺には、肩部に撚糸文による装飾を持つものも残る。直口壺は胴部の張りは強く、頸部から口縁は強く屈曲し立ち上がる (11)。広口壺には精製土器と粗製土器があり、簡略化した作りのものにも赤彩するものが認められる。また 37 地点 3 号住上層からは吉ヶ谷式の壺が出土しているが、吉ヶ谷式の搬入は全体に少ない。

台付甕は刷毛甕とナデ甕が継続し、刷毛甕は胴部が大きく張りを持ち、口縁が直立ぎみに立ち上がり、口唇部に刻みを持つものに加え (16)、胴の張りが弱いものが出現する。S 字甕は小型 b 類が、口縁の形状や、肩部の張りの強さから見て、この時期に含まれる可能性が高い。

高坏は伊勢湾系の有段高坏 (25)・有稜低脚高坏が継続し、埦形低脚高坏も認められる。小型器台

は縦断面がＸ字状で貫通孔を持つものと持たないものへ変化し、口径は最大になる (31)。埦は中位で屈曲するものには文様が残存し、上げ底で口縁が大きく開く。北区内の資料では、豊島馬場遺跡 SE07 とほぼ平行するものと考えられる。
(標識資料：5 地点 6 号住居跡、22 地点 SI04・SI09・SH01・SH07、23 地点 B 区 SI03、J ホ 83 1B 区 3 号遺構など)
Ⅳ期－Ⅱ期に揃った器種のうち台付甕を除き、広口壺や伊勢湾系の高坏などがこの時期で消滅する。複合口縁壺は大型が継続し、胴部の張りは弱く、口縁は外反する (6)。二重口縁壺や頸部に突帯を持つものなどがある。庄内式系の装飾文様を持つ二重口縁壺は、口縁部の開きが浅く、短く立ち上がる点などから、庄内式から布留式にかかる時期のものとし (寺沢 1986)、Ⅳ期に含めた。直口壺は最大径を胴部下半に置き (12)、頸部から口縁が屈曲して立ち上がる。墳墓からは大型のものがみられる。広口壺は小型のもので、小型の精製の脚付の広口壺も認められる。

台付甕は刷毛甕が継続し、胴部の張りは弱く、口縁の立ち上がりは直立気味で、口唇部の刻みは消失する (17)。S 字甕 b 類は小型に加え大型もみられる。

高坏のうち埦形低脚高坏の坏部は浅く、有段高坏は脚部の退化と坏部の開きが弱くなる (26)。小型器台は受部が小型化し、ほとんど立ち上がりを持たず、口径は小さくなり、貫通孔は省略される (32)。埦は中位で屈曲するものは、底部が上げ底で、口縁が内湾気味に立ち上がる。Ⅴ期に出現する小型丸底壺に似るが、Ⅱ期以降の型式組列が確認され、底部が上げ底であるなどの形態的特徴から、両者は異なるものと判断される。
(標識資料：3 地点 5 号住居跡、4 地点 6 号住居跡、6 地点 4 号住居跡、22 地点 SH04・05 など)。
Ⅴ期－複合口縁壺は大型が継続し (7)、直口壺も継続する可能性が高い。台付甕は刷毛甕が残り、胴部の張りは弱く、口縁は短く直立に立ち上がる (18)。また平底甕が出現し、その後、台付甕にとって代わる。法量は台付甕の脚部を外した大きさで､刷毛調整でナデやケズリの調整はまだ見られない。高坏には庄内式系の有段高坏と、柱状高坏 (27) があり、また新たに小型丸底壺が認められる。

庄内式系の有段高坏は埦形高坏とともに、近畿在来系の高坏群に大きな影響を与え、布留式期まで系譜が辿れる器種と位置付けられている (森岡・西村 2006)。本資料は口縁の立ち上がりが短く外傾する点などの特徴から、この器種の最終形態として、布留 0 式 (寺沢 1986)、布留式古段階 (森岡・西村 2006) に含まれるものと考えられる。Ⅴ期は遺構の減少とともに資料も少ないが、器種組成に大きな変化が認められる時期であり、集落の大きな画期となった時期である。

Ⅴ期に続く平底甕が主体となる時期の資料には第 6 地点 9 号住居跡があり、さらに荒川区町屋四丁目実揚遺跡 SD09(坂上他 2006)、田端不動坂遺跡第 17 地点 8 号土坑 (中島他 2003) などの資料に繋がる。古墳時代前期中頃から中期の土器編年は、今回の調査成果と直接的な関連を持たないためここでは最小限に触れるにとどめ、台付甕消滅直後の資料である第 6 地点 9 号住居跡を仮にⅥ期としておくことにする。
(標識資料：6 地点 7 号住居跡)。

（島﨑）

(3) 中十条アパート地区、王子・王子母子アパート地区出土土器の様相

JMNA 地区では遺構の重複が激しく、遺物の遺存状態も住居跡の廃絶後に時間を置いて廃棄したも

の、前代の土器破片が住居跡の埋め戻し土に含まれて流入したものなどがあり、図示した資料は必ずしも出土した住居跡の存続期間や廃絶時期を示すものではない。これらを踏まえた上で、今回出土した各期の土器の様相を概略する。(　) 内に出土遺構と図版番号を示した。また今回の調査区からは、Ⅴ期の資料は出土していない。

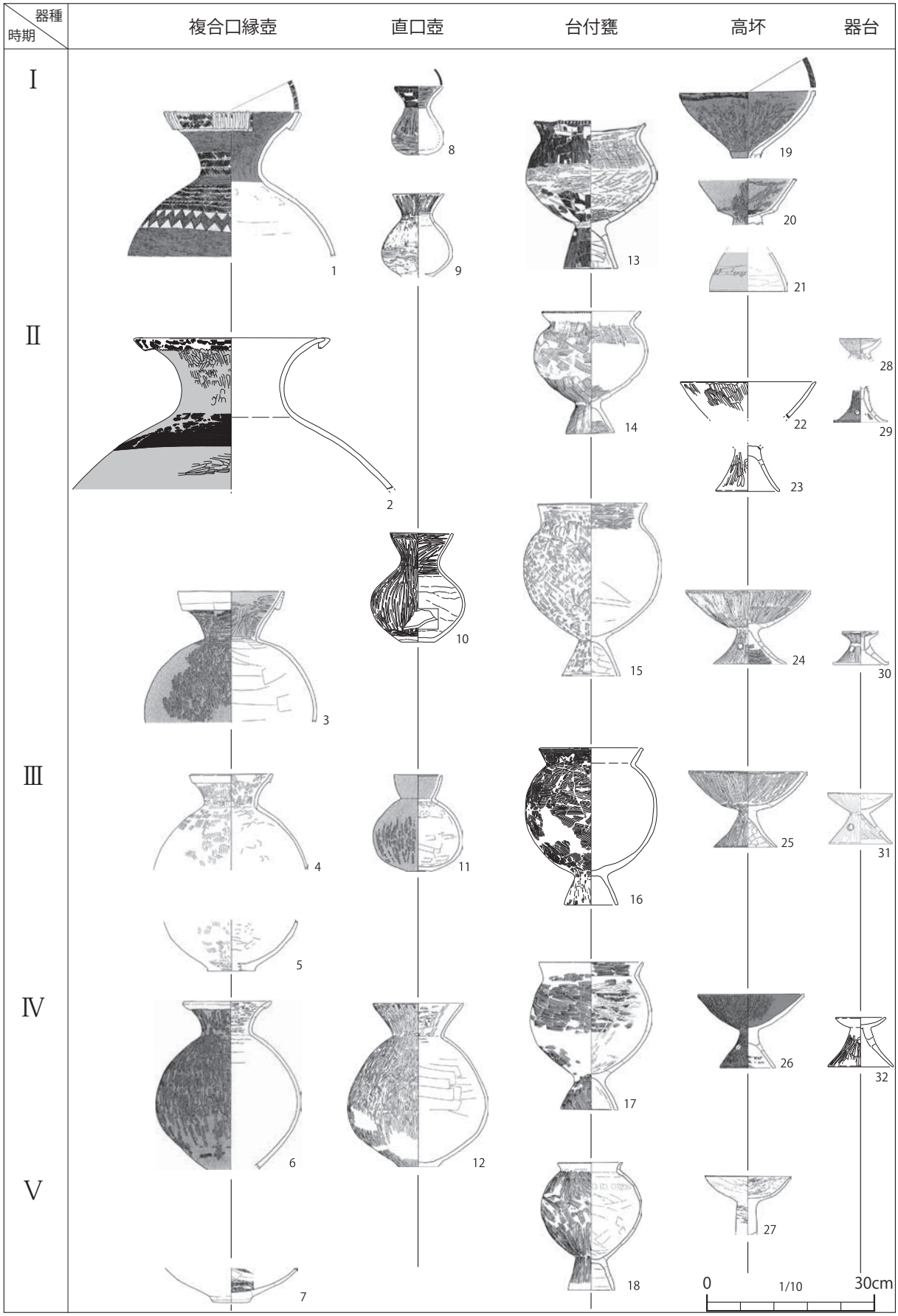
[Ⅰ期の土器]　複合口縁装飾壺は破片資料 72 点のうち、羽状縄文 27 点で、網目状撚糸文を持つものが主体で、他に櫛描文 3 点、格子状条線 1 点がある。肩部の文様は鋸歯文を主体とし (10 住 4)、平行沈線文 4 点 (92 住 1)、S 字状結節文 3 点 (41 住 23)、平行沈線文＋縦区画文 4 点が認められる。縦区画文を持つ装飾壺は、大田区久ヶ原遺跡では幾何学文壺としては新しい要素とされ、大田区の弥生土器編年では後期Ⅳ期に位置付けられており、大田区久ヶ原 4-22-4 地点 1 号住居跡出土の壺は単節縄文を沈線で区画するものである (大田区博 2017)。本調査地点の平行沈線＋縦区画文を持つものは、羽状縄文 (1 号周溝墓 23)、網目状撚糸文 (34 住 2) などがあり、この地域で文様が展開した可能性が考えられる。

台付甕 (62 住 2) は形態的特徴からこの時期に含まれる。高杯には口縁部と口唇部に縄文を持つもの (2 住 1)、脚部の裾に粘土紐を貼り付けて縄文を施文するもの (62 住 5) がある。

[Ⅱ期の土器]　複合口縁の装飾壺 (31 住 2) の底部は上げ底で、胴部が大きく張りを持ち球体に近く、外面赤彩。胴部最大径約 57cm、全長は推定復元で約 70cm に近い大型である。(35 住 1) は折り返し口縁に似るが、肩部は S 字状結節文 3 段に羽状縄文、口縁に縄文を施文し、外面を赤彩。残存部の最大径は 55cm を測る。器種は異なるが、北区内では七社神社前遺跡第 2 号方形周溝墓、田端西台通遺跡 SZ11 などの墳墓から大型の装飾壺が出土しており、本調査区では住居の廃絶後に破片が廃棄された状態で出土しており、墳墓とは異なる様相で出土した。他の複合口縁の装飾壺のうち (67 住 5) は肩部に文様帯を持ち、(12 住 1) の胴部破片などを含め、炉に埋設され転用された。(1 号周溝墓 1) は頸部が細く括れ、口縁は内湾して立ち上がる古い要素を残す。肩部の張りは弱く、S 字状結節文区画に羽状縄文、口縁部は羽状縄文、口唇部に縄文施文後、棒状浮文貼り付け、外面と口縁内面を赤彩。(2 号周溝墓 1) は胴部の張りが弱く、外面赤彩。これも縄文を持つ複合口縁の装飾壺と推定される。直口壺は (141 住 3)、胴部の張りが強く、口縁は肩部から強く屈曲して立ち上がる。広口壺の精製土器には、口縁に刻みを加え全面を赤彩する (141 住 4)、全面赤彩する (4 住 1)、外面と口縁内面を赤彩する (1 号周溝墓 2)、赤彩はないがミガキ調整仕上げの (115 住 1) も含まれ、本調査区のⅡ期の典型的な広口壺として位置付けられる。また精製土器で脚部を持つ広口壺は (113 住 1)、脚部内面を除いて赤彩する。この器種は、北区内では七社神社前 2 号方形周溝墓、Jホ 83-1B 区 25 号 (方形周溝墓)(Ⅳ期) などに類例がある。また刷毛調整でヘラミガキを省略した粗製の広口壺 (113 住 2) は、脚付広口壺 (113 住 1) の上に 2 を載せたものが転倒した状態で出土しており、粗製の広口壺がⅡ期から出現していることが明らかになった。台付甕はⅡ期の良好な資料は認められなかった。

高坏のうち、有段高坏は (31 住 1)、口縁は大きく開き、口唇で僅かに外傾する。有段低脚高坏 (1 号周溝墓 13) は、脚裾に沈線よる文様を描く精製土器で、出土層位からも方形周溝墓に伴う可能性が高い。埦 (113 住 3) は小型で、口縁及び口唇部を縄文で施文する。小型器台は (JMNA 遺構外 3)、脚部から受部が柱状で、脚部と受部の接合による貫通孔を作り出し、脚部に 3 箇所の円孔を持つ。

[Ⅲ期の土器]　壺 (36 住 13) は胴部が球体に近く、複合口縁壺の可能性が考えられる。小型の複合



第 48 図　南橋遺跡　土器編年表（1/10）

口縁壺 (122 住 3) は最大径を胴下半におき、口縁は内湾気味に立ち上がる古い要素を残し、内面胴部を除き赤彩する。直口壺とみられる (18 住 1) は器壁が厚く、胴部は算盤玉状に強い張りを持ち、頸部から口縁が直立気味で、口縁は緩やかに外傾するものと推定される。台付甕は 90 号住から中型の刷毛甕の良好な組み合わせが出土しており、(90 住 2) は胴が強く張り、口縁は「く」の字状で口唇部の刻みはない。(90 住 1) は (90 住 2) と比べ胴の張りは弱く、口縁は直立し、口唇部に刻みを持つ。(90 住 3) は脚部と口唇部を欠くが、胴が強く張り、口縁は「く」の字状である。3 個体の台付甕は次節の土器の出土状態で触れるが同時に廃棄されており、法量はほぼ同規格で、(90 住 1) の方が口唇部の刻みを除き、形態的にはⅣ期の台付甕の特徴を先取りしている。また 50 号住には刷毛甕 (50 住 2) とナデ甕 (50 住 1) があり、両者は小型で、胴部に張りを持ち、刷毛甕は口縁が直立気味に立ち上がり、ナデ甕は口縁が「コ」の字状に外反する。どちらも口唇部に刻みを持つ。

高坏には、有段高坏 (92 号柱穴 3・5)、埦形低脚高坏 (36 住 1・2、122 住 7) などがある。埦 (41 住 1・125 住 1) は、Ⅱ期の (113 住 3) と同形態であるが、文様の消失からⅢ期に含めている。またミニチュアの手捏ね土器の壺 (41 住 7) と埦 (41 住 8) などもこの時期に含まれる可能性がある。小型器台は縦断面が X 字状で、貫通孔を持つものがある (92 号柱穴 5)。

[Ⅳ期の土器]　複合口縁壺は良好な資料が見られなかった。壺 (53 住 5) は、口縁が内湾して立ち上がり口唇部で短く外傾する特徴から、伊勢湾系のヒサゴ壺の可能性があるが、胴部を欠くので断定はできない。広口壺は (119 住 1・2)、小型に限られる。台付甕は刷毛甕で (53 住 1) に中型の良好な例で、(24 住 1・4、45 住 1) などの小型のものが含まれる。S 字甕 b 類には、(24 住 25・41 住 5) などがあるが、遺存状態が良好でなく、煮沸形態としては客体的である。小型器台 (45 住 2) は、受部はほとんど立ち上がりを持たず、口径は小さく、脚部 3 箇所に円孔を持ち、貫通孔は省略されている。

(4) 住居廃絶後に廃棄された土器の出土状態

住居の廃絶後に、竪穴内に廃棄された土器の出土状態について、特徴的なあり方を整理する。

[装飾壺の廃棄]　31 号住居跡からは東南部の床面から、大型装飾壺の底部と胴部の破片が廃棄された状態で出土した。肩部から口縁部を欠き、底部と胴部が直接接合しなかったことなどから (31 住 2-1・2-2)、別の場所で打ち欠いたのち、31 号住居跡内に各部位を廃棄したものと考えられた (第 1 分冊図版 24)。

35 号住居跡からは、埋め戻し途中の住居跡の炉跡から北東部の径約 1 mの範囲にわたり、大型壺の肩部から口縁部を廃棄した状態で出土した。肩部以下は打ち欠かれており (35 住 1)、別の場所で打ち欠いたのち、埋め戻し途中の 35 号住居跡の中へ廃棄したものと解釈された (第 1 分冊図版 28)。

31 号住居跡・35 号住居跡から出土した装飾壺は大型のもので、通常では墳墓の供献用ないしは壺棺としての用途が想定される装飾壺である。ここではこれらを打ち欠いた行為の後、別の場所の住居跡に廃棄する行為が行われたことが確認された。

[壺・広口壺・高坏の廃棄]　18 号住居跡からは、完全に埋め戻した状態の主柱穴 P3 の上で、底部を穿孔し、口縁を打ち欠いた直口壺を（18 住 1)、その場で廃棄した状態で出土した (第 1 分冊図版 19)。

67 号住居跡では、廃絶した住居跡の炉跡の上に、坏部を打ち欠いた高坏の脚 (67 住 4) を正位置で置き、その上に直口壺の肩部以下を打ち欠いた口縁 (67 住 2) を口縁側を上にして重ね、さらにその

上に直口壺の肩部以下を打ち欠いた口縁部 (67 住 1) を口縁側を上にし、重ね置いた状態であったものが、堆積土の土圧などにより、壺の口縁 2 個体が西側に倒れ込んだものと判断された (第 1 分冊図版 51)。

113 号住居跡からは炉跡の北側で、脚付広口壺 (113 住 1) の上に粗製の広口壺 (113 住 2) をのせたものが、北側に倒れた状態で出土し、その東からは約 20cm 離れ、埦 (113 住 3) が正位置で置かれたままの状態で出土した (第 1 分冊図版 71)。七社神社前 2 号方形周溝墓からも、周溝北東部からまとまって出土した土器群の中に、精製の広口壺・粗製の広口壺とともに脚付広口壺が出土しており (北区 1988)、組成の共通性が窺える。

115 号住居跡からは北東隅壁直下の床面に、広口壺 (115 住 1) が正位置で置かれた状態で出土した (第 1 分冊図版 72)。

122 号住居跡からは、埋め戻し途中の住居跡西北部から、底部を打ち欠いた可能性の高い複合口縁壺 (122 住 3) が、口縁を下にして置かれたものが倒れた状態で出土した (第 1 分冊図版 77)。

92 号柱穴からは、掘立柱建物の柱材を抜き取った後、底部を打ち欠いた赤彩の高坏 (92 柱穴 3)、坏部を打ち欠いた高坏脚部 (92 柱穴 4)、胴部から肩部以上を打ち欠いた直口壺 (92 柱穴 1・2)、受部を打ち欠いた小型器台 (92 柱穴 5) を、抜き取り穴から控え土の周囲に廃棄した後、掘方全体を埋め戻している状況が確認された (第 1 分冊図版 85)。

[台付甕の廃棄]　62 号住居跡の炉跡からは、台付甕 (62 住 2) が正位置で置かれたものが、倒壊した状態で出土した (第 1 分冊図版 47)。脚部裾は欠損していることから、竪穴住居跡の廃絶後、脚部の裾を打ち欠いた台付甕を据え置いた状況が想定された。

90 号住居跡からは、北西部の床面から僅かに覆土が堆積した後、東側から脚部を打ち欠いた高坏 (90 住 5)、北壁側から台付甕 2 個体 (90 住 1・2)、西壁側から口唇部と脚部を打ち欠いた台付甕 (90 住 3) が出土した。台付甕 1 と 2 はほぼ完形に復元され、東側に 1 の個体が、西側で 2 の個体がまとまっており、それぞれが同じところで廃棄されたものと判断された (第 1 分冊図版 63)。

ここでは土器の出土状態を整理した。北区内では住居跡の廃絶に伴い「赤砂」と土器を用いた住居の廃絶儀礼が、田端不動坂遺跡第 17 地点や道合遺跡などで確認されている。しかし南橋遺跡では今回の調査区を含め「赤砂」を蒔く儀礼は確認されておらず、また十条久保遺跡の井戸跡からは、井戸の廃絶にともなう土器を用いた儀礼行為が確認されている。今後の良好な類例の増加により、それぞれの遺跡の内容の違いによる集団内の儀礼行為のあり方が明らかになるものと考えられる。

(5) 集落の構造復元

A 竪穴住居の規模と構造

竪穴住居跡は JMNA 地区で 101 軒、JM0A 地区で 5 軒の計 106 軒検出された。JMNA 地区では重複が激しいため掘方の全形を把握できた竪穴住居跡の数は少なく、JMOA 地区は遺存状態が良好でなかったが、概ね床面積の平面規模から大・中・小型の 3 つのグループに分けられる。ただし大型住居跡は 24 号住居跡を除いて、他は炉と柱穴の配置から規模を復元した数値を基にしているが、それほど大きく数値が異なることはないものと考えられる。

・大型：面積 60 ～ 50㎡前後 (19・24・41 号住居跡)

・中型：面積 28 ～ 16㎡前後 (7・10・32・36・46・50・55・61・71・87・100・127 号住居跡)

21㎡前後が 5 軒と多く、127 号住居跡が推定面積 28㎡で他の中型の中では傑出する。

・小型：面積 14 ～ 10㎡前後 (12・35・42・51・53・62・67・74・129・138・141 号住居跡)

掘方の平面形は、円形・楕円形と隅丸方形・隅丸長方形に大別され、大型・中型住居跡は土器の様相からⅠ期からⅣ期へ、平面形が前者から後者へと変遷する。

竪穴住居跡うち中型・大型は、基本的に 4 本の主柱穴、炉跡、貯蔵穴、梯子穴 (出入のための昇降用梯子を固定した柱穴) により構成される。小型は炉跡を設けるが、主柱穴の数は一定ではない。

B 掘立柱建物の構造

（1）中十条アパート地区の様相 (第 49 図)

JMNA 地区では北群から 4 箇所、JMOA 地区からは 1 箇所で、掘立柱建物を構成する柱穴群が検出され、整理作業を経て数棟の掘立柱建物を復元した。JMNA 地区から 41・44・42・47 号住居跡と重複する柱穴群から 2 号･3 号掘立柱建物跡が､41 号住居跡の西側で 4 号掘立柱建物跡が復元された。これらは遺構の重複の激しい箇所であることから、さらに数基の建物跡が存在した可能性が推定される。また復元された柱穴も、掘方内部での作り替えが確認されている。また 32 号住居跡と 34 号住居跡の間で 5 号掘立柱建物跡が復元された。

2 号掘立柱建物跡 (P15-20-16) は、梁行 1 間×桁行 1 間 (約 2.7 m× 3.0 m) の南北棟で、東南隅の柱穴掘方は 41 号住居跡により破壊され失われたものと想定された。確認面の掘方の径は 0.7 m から 0.5 m、掘方底面の標高は 23.0 mから 23.1 mであり、P15・P20 は掘方の底面に暗褐色土を層厚約 10cm 以内で硬化した面を設けた後、柱を建てた状況が確認される。柱痕の径は、P15 で約 0.2m、P20 で約 0.3m である。床面積は約 8.1㎡を測る。

3 号掘立柱建物跡 (P21-11-17) は、梁行 1 間×桁行 1 間 (約 3.1 m×約 3.6 m) の東西棟で、東南隅の柱穴掘方は 41 号住居跡により破壊され失われものと想定された。2 号掘立柱建物跡と位置的に重複し、規模は一回り大きく、前後関係は明確でない。確認面の掘り方の径は 0.6 mから 0.5 m、掘方底面の標高は 23.1 mから 23.2 mである。床面積は約 11.2㎡を測る。

4 号掘立柱建物跡 (P26-30-27-23) は、梁行 1 間×桁行 1 間 (約 2.4 m×約 3.4 m) の南北棟で、P30 は P89 に切られているため残存部での数値になるが、掘方底面の標高は 23.1 mでほぼ揃えられており、P26 は掘方底面で柱のあたるところを層厚約 5cm 程に暗褐色土で固め、その上に柱を建て周囲に控え土を入れて固定した状況が確認された。柱痕の径は約 0.2 mである。床面積は約 8.2㎡を測る。

5 号掘立柱建物跡 (P4-2-10) は、梁行 1 間×桁行 1 間 (約 2.4 m×約 4.4 m)、北東隅の柱穴堀方は攪乱により消失したことを想定したが、東西棟とすると、他の掘立柱建物跡と比べて桁行が長いので、あるいは P2-P10 の北側の延長上に柱穴が延び、1 間× 2 間の南北棟であった可能性も想定される。P10 は 34 号住居跡に切られており、34 号住居跡は P6・P7 に切られており、この地区でも掘立柱建物が建て替えられていった可能性がある。確認面での掘方の径は約 0.6 m、掘方底面の標高約 23 m で揃えられている。柱の固定の仕方には P2 のように掘方底面に黒褐色土で固めてから柱を建てるものと、固めることはしないで直接底面に柱を建て、周囲に控え土を入れて固定するものが確認された。

P89 は 2 号から 4 号掘立柱建物跡を構成する柱穴より大型で、周囲からはこれに対応するような柱穴は、攪乱部も丁寧に遺構確認したが検出されなかったことから、単独で建てた柱の柱穴の可能性

も想定される。また P59 もその可能性が推定されるが、調査区の西端からの検出であるため、掘立柱建物の東南隅の柱穴の可能性も残している。

6 号掘立柱建物跡 (P91-P92) は、19 号住居跡の覆土中から掘り込まれており、19 号住居跡は長軸推定 8 mで、主柱穴は北東部から P9 が検出されている。JMNA 地区から検出された大型竪穴住居跡の主柱穴は、24 号住居跡で径 0.4 mから 0.5 m、深さ 0.5 mから 0.7 m。41 号住居跡で径約 0.7 m、深さ約 0.7 m、柱痕径約 0.3 m。大型住居跡と推定される 39 号住居跡で径 0.6 m、深さ 0.7 mで、大型住居跡の主柱穴の規模にそれほど差は認められず、P91・P92 が卓越した規模を持つ。P91 の掘方は楕円形で、径約 1.8 m× 1.0 m、深さ 1.4 m。P92 は径約 1.6m × 1.2m、深さ約 1.4m。底面の標高は P91 が 21.4m、P92 が 21.5m で揃えられている。P91 は調査所見として西側から東側へ作り替えており、P92 も同じ掘方内での作り替えが確認され、嵩上げした底面を暗褐色土で層厚 10cm 程に固めた後、径約 0.5 mの柱を建てており、作り替え時の底面の標高はどちらも 22.0m に揃えられている。また P92 は最後に柱を抜き去った後、土器を用いた儀礼を行ってからに完全に埋め戻している状況が確認されている。これらのことから、P91・92 は通常の竪穴住居跡の主柱穴ではなく、独立した大型掘立柱建物跡の柱穴と判断した。本遺構の周囲は特に攪乱が著しく、他の柱穴を積極的に確認したが、柱筋が北に延びるかは確認できなかった。また柱間隔が 5 mと広いことから主柱穴の間に束柱が想定され、19 号住の P8 は P92 から西へ 90 度折れ、距離も西への延長約 2.5 mに位置することから、束柱の可能性も考えられる。

6 号掘立柱建物跡とした P91・P92 は類例の少ない構造であり、南橋遺跡 34 地点からは SI03 が遺跡の中で最大規模の長軸 12 mを測る竪穴住居跡で、その主柱穴は本調査地点の P92 と同様な構造を持ち、時期はⅣ期と考えられ、P92 が先行する。34 地点 SI03 の建物全体の構造復元を通じ、P91・92 の構造復元との比較を行い、P59・P89 のような単独で存在する柱穴に相当する可能も含め、位置付ける必要がある。

（飯塚）

（2）王子・王子母子アパート地区の様相 (第 49 図)

JMOA 地区では、調査区北側の柱穴群で梁行 2 間×桁行 2 間の 7 号掘立柱建物跡が復元された。①東西 63 号柱穴 -68 号柱穴 -62・65 号柱穴／南北 63 号柱穴 -79 号柱穴 -76 号柱穴の列、②東西 60 号柱穴 -68 号柱穴 -62・65 号柱穴／南北 60 号柱穴 -80 号柱穴 -76 号柱穴の列、③東西 64 号柱穴 -69 号柱穴 -61 号柱穴／南北 64 号柱穴 -80 号柱穴の列に分かれる。重複が激しいため 1 棟の掘立柱建物の建て替えと思われ、③→①→②の順での建て替えを復元したが、これら以外にも数度の建て替えがあったと推測される。また、7 号掘立柱建物跡の南側で 126 号住居により切られた状態で検出された、81・82 号柱穴も掘立柱建物跡の可能性がある。

柱穴の掘方は径 0.3 ～ 0.6m 前後、確認面からの深さは 0.7m 以内であるが、全体的に削平を受けていることから、本来はさらに深い掘り込みであったと思われる。どの柱穴もローム層をハード層中まで掘り込んでいることから、礎板などを敷いた可能性は無いと考えられる。また、68・69・76 号柱穴は、掘方内部での作り替えが確認されている。柱痕は 60・61・65 号柱穴で確認された。床面積は①で約 13.3㎡、②で約 12.1㎡を測る。

7 号掘立柱建物跡と JMNA 地区の 4 号掘立柱建物跡は、直線距離で約 80m 離れており、7 号掘立

柱建物跡と 4 号掘立柱建物跡の間には、主にⅠ・Ⅱ期の竪穴住居跡と方形周溝墓が密に分布しているため、ここに他の掘立柱建物が建っていた可能性は低いと思われる。

7 号掘立柱建物跡は同時代の竪穴住居跡と重複は無く、住居の無い空閑地に占地し、同じ場所での建て替えを繰り返していたものと思われる。これは 4 号掘立柱建物跡にも同様のことが言え、4 号掘立柱建物跡の場合、建て替えの痕跡は無いが、住居の無い空閑地に占地している。この 2 棟の掘立柱建物跡の例から、弥生時代後期から古墳時代初頭の南橋遺跡では、住居の無い広場のような場所に掘立柱建物を建てる傾向があった可能性を考えることができる。

C 墓域について

方形周溝墓のあり方（第 50 図）

周溝墓は南西隅にまとまっており、それぞれⅡ期の竪穴住居跡を切っているが、1 号周溝墓の周溝下層の出土土器 (1・13) や、2 号周溝墓の上層の壺棺の可能性の高い壺形土器などから、3 号周溝墓は時期の限定を明確にし得ないが、ほぼⅡ期の後半に構築されたものと判断した。

1 号方形周溝墓は北溝の北東部が東に向かって立ち上がっており、北東隅に陸橋部を想定して南東に折れるものとみても、推定で東西径 19 mを測る大型の方形周溝墓となる。周溝の断面は箱形で、幅は確認面で約 2.2 m、深さは 0.5 mから 0.7 mを測る。規模は 1 地点の SH02 とほぼ同規模と見ることができる。

2 号方形周溝墓は JMOA 地区の 4 号溝跡と繋がる可能性が高いものと考えられる。その場合の規模は、南北径約 13m を測り、東西径は約 14m と推定される。

3 号方形周溝墓は北側の陸橋部の位置から、東西径が約 10 mと推定される。

（島﨑）

D 集落の展開

（1）中十条アパート地区 (第 51 図)

JMNA 地区では特に遺構の重複が著しく、同じ場所ないしは直ぐ横に、前の竪穴住居を埋め戻し、新しく竪穴住居を作り替える例が多く確認された。北東部の 12 号住居跡周辺や中央部の 67 号住居跡周辺では、8 ～ 9 軒の竪穴住居が次々と作り替えられていた状況が判明し、またアパートの基礎内部からも、調査前に煙滅していた箇所を除いても、124 号住居跡周辺では多数の重複関係が認められる。竪穴住居と掘立柱建物の同時に存在した遺構を特定し、集落の推移を完全な形で復元することは難しい。

土坑は全体で 10 基検出され、平面形は 10・17 号が円形、他は方形・長方形で、分布は竪穴住居跡の重複の激しい箇所に偏在していた。時期は竪穴住居跡との重複関係から、1 号がⅠ期、4 号がⅡ期、5 号がⅣ期と時期が限定されるものもあるが、10・11 号土坑はⅡ期以降、12・16・17 号土坑がⅢ期以降で、13・15 号土坑の時期は不明である。他に竪穴住居跡との重複や攪乱などにより消失したものも存在したものと推定しても、集落の存続期間から各時期に 2 ～ 3 基ほどが構築されたものと推定され、竪穴住居の付属施設である可能性が想定された。

ここでは南橋遺跡の土器編年により設定された時期区分に基づき、遺構の展開を整理する。しかし同じ時期区分の中にも重複があるため、完全な同時存在の遺構を示すものではない。なお遺構の分布が比較的薄い 51 号住居跡から 4 号掘立柱建物跡と 85 号住居跡と 13 号土坑を結んだ範囲より北側

を北群、それより南側を南群として分ける。54 号住居跡は南群に含める。また南群の東に隣接する 31 地点の調査成果も合わせることとした。

[Ⅰ期]（南群)61・62・63・73・76・77 号住居跡。（北群)44・46・49 号住居跡、5 号掘立柱建物跡。1 号土坑。その後の遺構の重複からみて、これらがこの時期に含まれるものと判断した。南群では小型の住居が散在し、同一地点での建て替えがすでに認められ、南群の 31 地点では 1 軒の竪穴住居跡 (SI02) が位置する。北群には中型の 46 号住居跡を含むが、小型が主体である。

[Ⅱ期]（南群)55・64・67・71・95・100・113・115・123 号住居跡。1 ～ 3 号方形周溝墓（北群)2・4・12・13・14・19・34・35・79・131 号住居跡、2 号・3 号掘立柱建物跡。4 号土坑。調査区全面に住居の分布が広がる。同一地点での建て替えも多くなり、隣接する 31 地点 SI01 は中型の住居と推定される。南群では中型の 71 号住居跡に接して 113 号住居跡、55 号住居跡、31 地点 SI01 などの中型住居の周囲に 67 号住居跡などの小型住居が分布する。またアパート建物基礎内で検出された、重複の激しい竪穴住居跡もいくつか含まれる可能性がある。北群では大型住居の 19 号住居跡が北西隅に位置し、34・35・4 号住居跡との間に、ある程度の空閑地を設けて分布した可能性がある。また南群と北群の間の空閑地は顕在化し、またⅡ期後半には南端に 1・2・3 号周溝墓が築かれ墓域となる。周溝墓の立地は、大型住居の成立とともに集落が大きく展開し、その広がりと関わった可能性があり、南橋遺跡の集落全体の中で位置付ける必要がある。

[Ⅲ期]（南群)90・122 号住居跡。(北群)7・9・18・36・41・50 号住居跡。4・6 号掘立柱建物跡。また北群の 79 号住居跡を切って造られた P59 もこの時期に含まれる。北群の 41 号住居跡の主に北側と南側に竪穴住居跡が分布し、入口を南側、炉を北側に設置して方向をほぼ揃えている。41 号住居跡の西側には接するように 4 号掘立柱建物跡が位置する。また 41・36・18 号住居跡の間で建て替えが頻々に行われたことが想定された。南群では遺構は薄くなる。

[Ⅳ期]（南群)119 号住居跡。(北群)24・32・39・45・51 号住居跡。5 号土坑。南群は遺構が薄い状況が継続する。北群では、39 号住居跡は炉と主柱穴の構造と配置から判断して、24 号住居跡と同規模の大型住居に復元され、また同時期の 45 号住居跡を壊している。北群では、24・32・39・51 号住居跡の間に空閑地を設けている。また単独で存在した P89 もこの時期と考えられる。

本調査地点では隣接する 31 地点を含め、Ⅱ期に大きく集落が発展し、Ⅱ期からⅢ期が集落の盛期であるが、減少傾向であるⅣ期も遺構数は少なくなるが、北群で大型住居跡は継続しており、大型住居を核として発展してきた集団関係に大きな変化ないまま集落が収束していく様相が指摘される。

（飯塚）

（2）王子・王子母子アパート地区 (第 52 図)

遺物はⅠ期のものも出土するが、遺構は明確でない。平面形態が 138 号住居跡がこの時期に含まれる可能性がある。Ⅱ期になると、127 号住居跡が作られ、JMNA 地区南群の竪穴住居跡の広がりが、JMOA 地区北端まで延びていたことが確認された。JMNA 地区 71 号住居跡のまとまりに含まれる形で 127 号住居跡が作られたと思われる。しかし、Ⅱ期後半以降、当該地は墓域になったため、本来構築された竪穴住居跡の基数を復元することはできない。またⅡ期後半には、141 号住居跡が作られた。

7 号掘立柱建物跡は 127 号住居跡の東側に位置しており、おそらく、JMNA 地区南群の竪穴住居

跡の広がるⅡ期のものであると思われる。しかし同じ地点で複数回の建て替えが認められ、明確な構築時期は不明である。

JMOA 地区は、JMNA 地区と比べ当該期の遺構の検出数が全体的に少なく、JMOA 地区が南橋遺跡の集落の南端となる可能性がある。北端は 22 地点であると考えられ、東端を 24 地点、西端を 9 地点として、現時点で南橋遺跡は南北約 500m、東西約 200m の規模の集落であると考えられる（第 46 図）。

掘立柱建物跡は、JMNA 地区ではⅠ期の 5 号掘立柱建物跡は構造が明確でなく、またⅢ期の大型の 6 号掘立柱建物跡は今後の類例を踏まえた上での検討が必要である。他は 1 間× 1 間で床面積が約 8 ㎡から 11㎡の小型の倉と推定される掘立柱建物跡 (2 ～ 4 号) が、Ⅰ期からⅢ期に大型の竪穴住居跡を含む竪穴住居跡群に囲まれた広場的な空閑地に場所を移して構築している。特にⅢ期には大型住居である 41 号住居跡と棟を揃えて近接していることが特徴として挙げられる。

一方南側の JMOA 地区では、7 号掘立柱建物跡は 127 号住居跡の東南部で、JMNA 地区南群の竪穴住居跡群の遺構を構築しない開放的な空閑地に占地し、同じ場所での複数回の建て替えが確認されており、さらにその南側にも別の掘立建物跡が存在した可能性も想定される。7 号掘立柱建物跡は 2 間× 2 間で、①の段階で約 13.3㎡、②の段階で 12.1㎡であり、JMNA 地区の掘立柱建物跡より床面積が広い。時期的にもⅠ期からⅡ期にかけてのものと推定される。

今回の調査では、南橋遺跡の JMNA 地区と集落の南端にあたる JMOA 地区では、掘立柱建物跡の構造や規模、占地やあり方が異なる点が指摘される。

南橋遺跡から西側に 150 ～ 200m の所に位置する十条久保遺跡からは、当該期の井戸址が検出されており、南橋遺跡の人々の水場であった可能性が高い。十条久保遺跡の第 14 号土坑、第 206 号井戸址と JMOA 地区の 141 号住居跡から下部に焼成後の穿孔がある直口壺が出土していることからも、儀礼行為の共通性も窺われる。今後、集落の詳細な分析を通じて、墓制を含め、祭礼・儀礼のあり方を復元する必要がある。

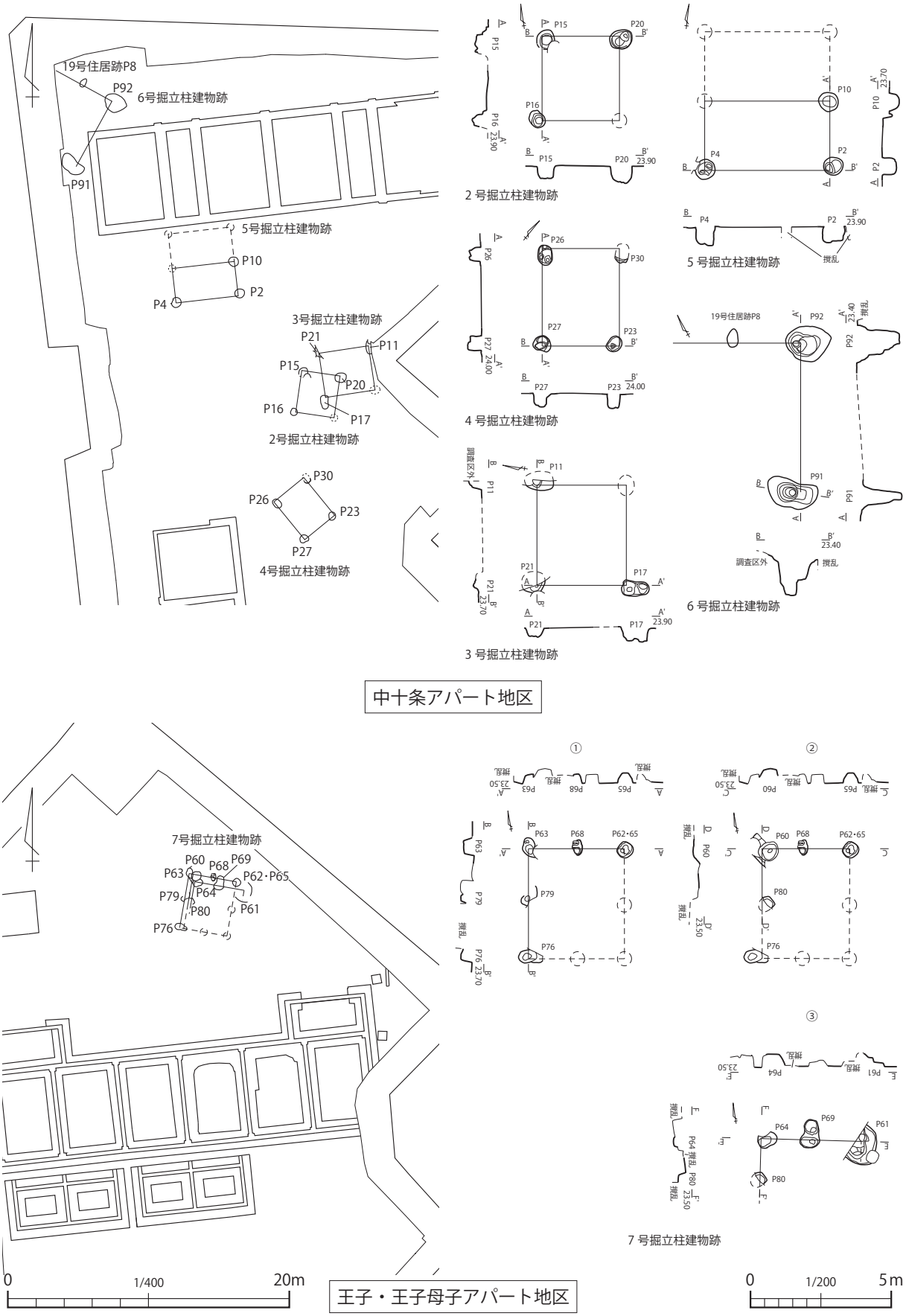
3　古代

(1) 中十条アパート地区、王子・王子母子アパート地区の集落の様相（第 53 図）

古代の土器編年は基本的に (穐田 2000) に拠り、7 世紀から 8 世紀初頭については (山内 2012) を参照した。

JMNA 地区で竪穴住居跡 11 軒、掘立柱建物跡 1 棟、JMOA 地区で竪穴住居跡 9 軒が検出され、概ね以下に含まれる。

・7 世紀後半 (5 期) ― 58・132・135・137・140 号住居跡
・8 世紀前半 (6 期) ― 131 号住居跡
・8 世紀中葉から後半 (7 期) ― 28 号住居跡
・9 世紀初頭 (9 期) ― 134・136 住居跡
・9 世紀前半から中葉 (10 期) ― 57・59・72・104・120・126・142 号住居跡
・9 世紀後半 (11 期) ― 60・69・143 号住居跡、1 号掘立柱建物跡
・9 世紀後半から 10 世紀初頭 (11 から 12 期) ― 101 号住居跡

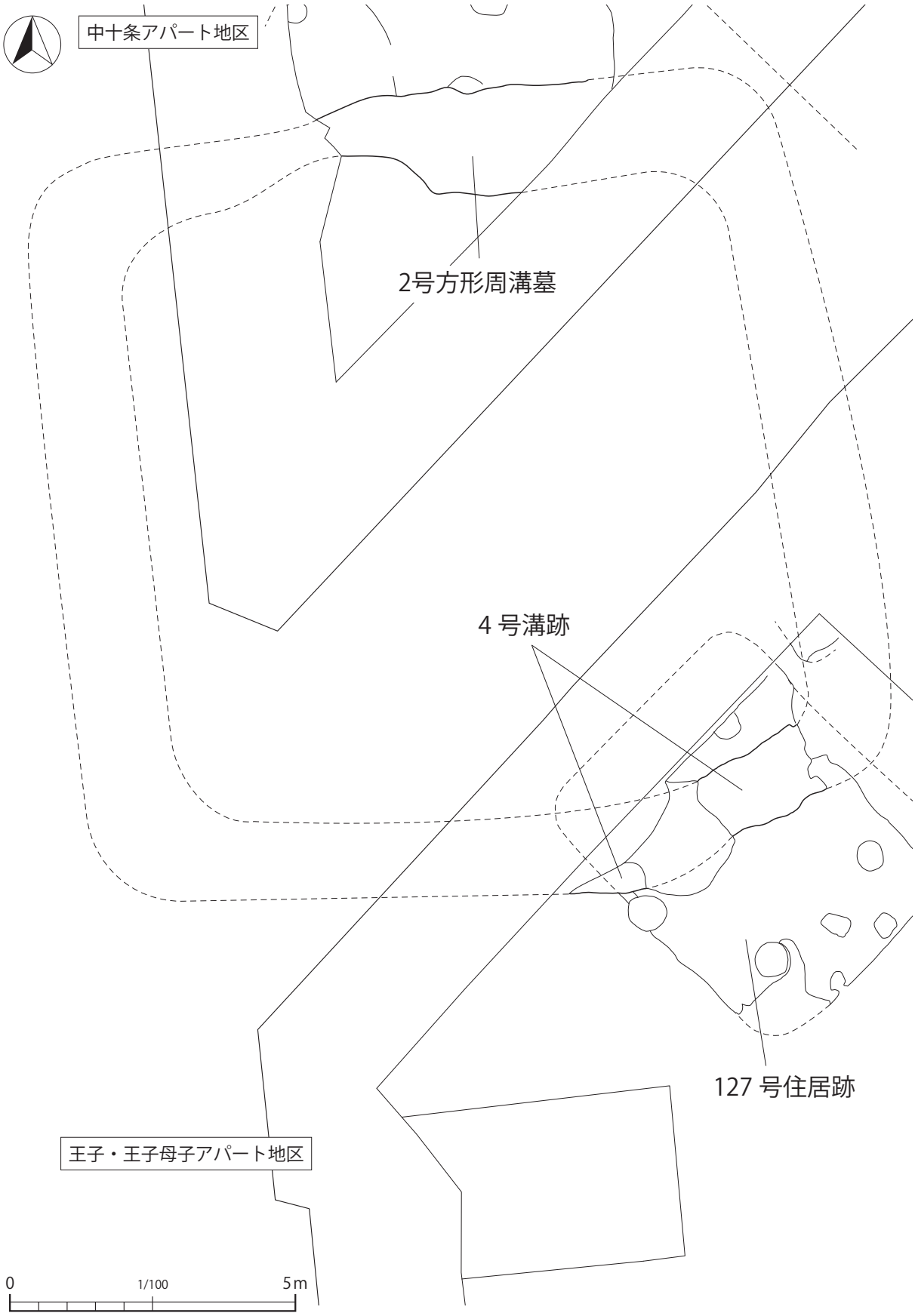


第 49 図　中十条アパート地区、王子・王子母子アパート地区　弥生時代後期から古墳時代初頭の掘立柱建物跡（1/200・1/400）

JMNA 地区では 120・72・60 号住居跡や 142・59・57 号住居跡は、同じ場所で切り合いを持ち、構築を繰り返し、さらに 57 号住居跡は 1 度、60 号住居跡は 2 度の作り替えが認められた。比較的新たに住居を建てる空閑地が存在するにも関わらず、同じ地点での建て替えや同じ住居の複数回の作り替えが認められる点、9 世紀後半代に 1 号掘立柱建物跡が、北側の 69 号住居跡と南西側の 60 号住居跡に挟まれた空間に構築しており、一つのまとまりを形成している点が JMNA 地区の古代の集落の特徴である。

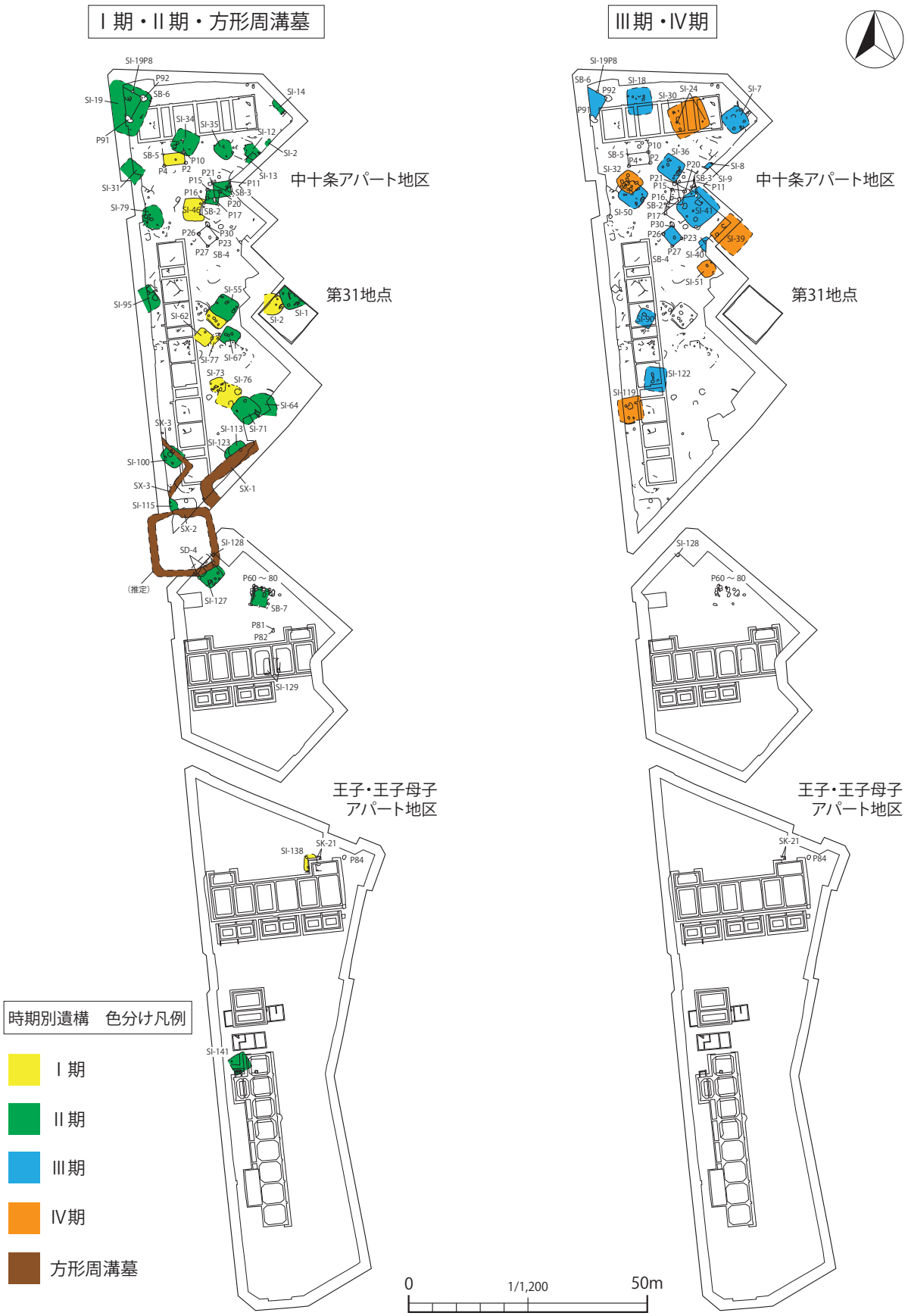
JMOA 地区では、それぞれの時代で空閑地を利用した竪穴住居を構築している点、竪穴住居を構築する範囲が南北にわたって広範囲である点が、古代の集落の特徴である。

（島﨑）



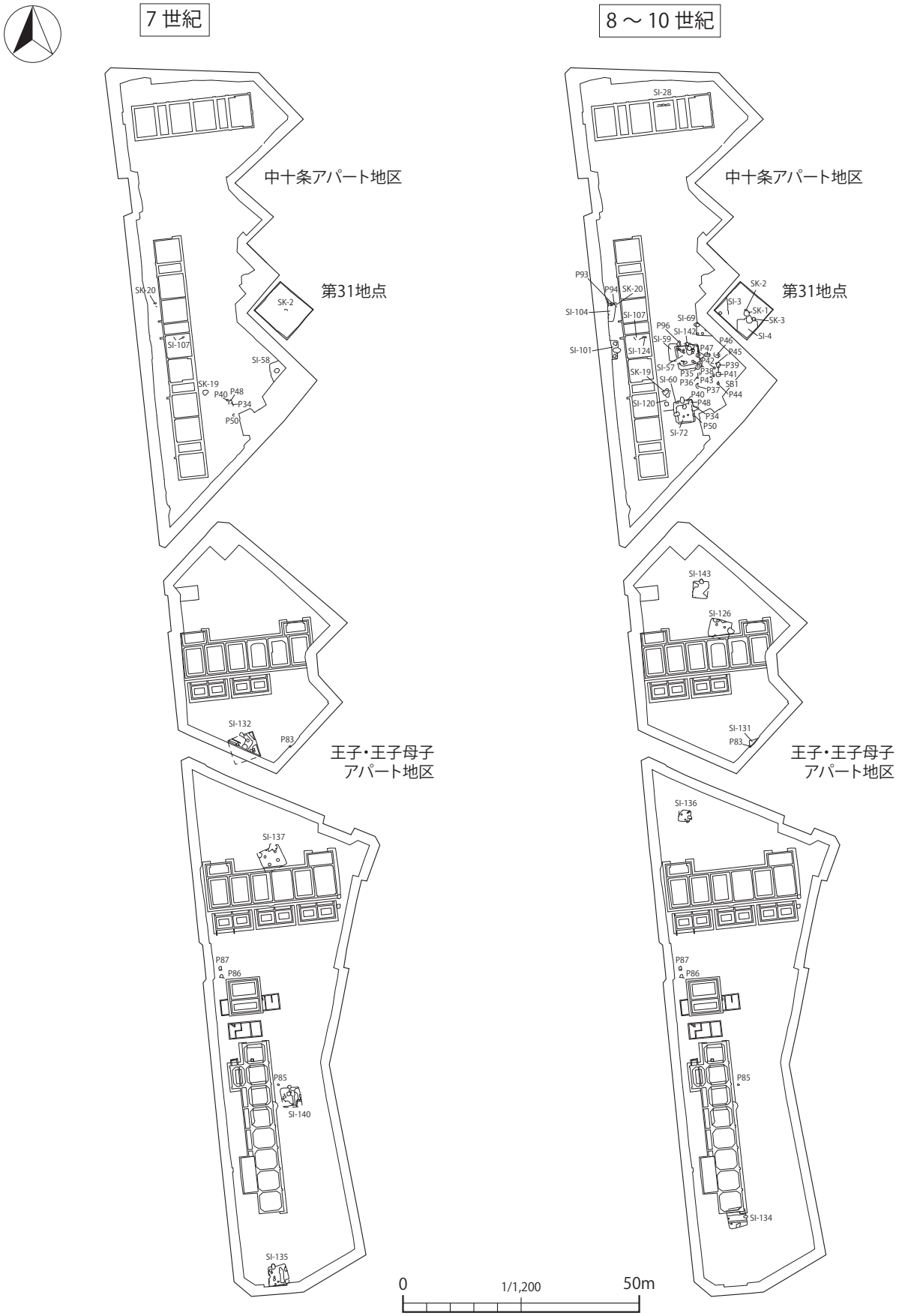
第 50 図　2 号方形周溝墓・4 号溝跡（1/100）

第 51 図　中十条アパート地区　弥生時代後期から古墳時代初頭　時期別遺構分布図（1/600）



第 52 図　王子・王子母子アパート地区　弥生時代後期から古墳時代初頭　時期別遺構分布図

（1/1,200）



第 53 図　中十条アパート、王子・王子母子アパート地区　古代　時期別遺構分布図（1/1,200）

引用・参考文献

相原正人　2005 「南橋遺跡第 23 地点発掘調査報告」『文化財研究紀要』第 18 集　東京都北区教育委員会

赤塚次郎　1990 「Ⅴ 考察 1 廻間式土器」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター

1997 「付論 2 廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター

穐田千花　2000 「第Ⅵ章 成果と課題 第 2 節 豊島郡衙周辺の古代における集落と遺物」『中里峡上遺跡Ⅱ・田端西台通遺跡Ⅳ・田端不動坂遺跡Ⅳ・田端町遺跡Ⅱ』 東京都北区教育委員会

穐田千花・牛山英昭　1999 『十条久保遺跡』 十条久保遺跡調査会

新井悟・坂上直嗣　2003 『南橋遺跡Ⅲ・宿遺跡Ⅱ』 東京都北区教育委員会

飯塚武司・島崎瑛美ほか　2018 『十条台遺跡群Ⅰ　十条地区沿道一体整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』 東京都埋蔵文化財センター

五十嵐祐介　2006 「南橋遺跡第 24 地点発掘調査報告」『文化財研究紀要』第 19 集　東京都北区教育委員会

板倉歓之・髙橋直子　2006 『十条台遺跡群　南橋遺跡　－十条台一丁目 3 番地 20 号地点－』 共和開発株式会社

岩崎岳彦・宅間清公ほか　2021 『北区埋蔵文化財調査年報』－令和元年度－　東京都北区教育委員会

牛山英昭　2006 「古墳時代中期の区画溝と高坏　－南橋遺跡第 24 地点の調査から－」『文化財研究紀要』第 19 集　東京都北区教育委員会

牛山英昭・新井悟　2001 『十条久保遺跡Ⅱ』 十条久保遺跡調査会

牛山英昭・髙坂勇佑ほか　2022 『北区埋蔵文化財調査年報』－令和 2 年度－　東京都北区教育委員会

牛山英昭・宮川和也ほか　2016 『東京都北区　十条台遺跡群　南橋遺跡　王子本町 2-4 地点』 株式会社 CEL

大田区郷土博物館　2017 『土器から見た大田区の弥生時代 －久ケ原遺跡発見、90 年－』展示図録　大田区郷土博物館

北区飛鳥山博物館　2012 『北区埋蔵文化財調査年報』－平成 22 年度－　東京都北区教育委員会

2015 『北区埋蔵文化財調査年報』－平成 25 年度－　東京都北区教育委員会

2017 『北区埋蔵文化財調査年報』－平成 27 年度－　東京都北区教育委員会

黒沢浩　1996 「第二章 米づくりと人びとの生活　第二節 土器と人びとの交流」『北区史　通史編　原始古代』 東京都北区

小林三郎ほか　1988 『七社神社前遺跡Ⅰ』北区教育委員会

1995 『豊島馬場遺跡』東京都北区教育委員会

小林三郎・中島広顕ほか　1996 『南橋遺跡Ⅱ』 東京都北区教育委員会

小林重義・鈴木敏弘ほか　1990 『赤羽台遺跡－八幡神社地区－』東北新幹線赤羽地区遺跡調査会

坂上直嗣ほか　2006『町屋四丁目実揚遺跡』大成エンジニアリング株式会社

宅間清公・遠竹陽一郎ほか　2019 『北区埋蔵文化財調査年報』－平成 29 年度－　東京都北区教育委員会

2020 『北区埋蔵文化財調査年報』－平成 30 年度－　東京都北区教育委員会

丹野雅人・松崎元樹ほか　2012『田端西台通遺跡』東京都埋蔵文化財センター

丹野雅人・飯塚武司　2010 『道合遺跡』 東京都埋蔵文化財センター

寺沢 薫　1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡 国道 24 号線橿原バイパス建設に伴う遺跡調査報告（Ⅱ）』 奈良県教育委員会

東京都北区教育委員会　1989 「北区埋蔵文化財調査報告」『文化財研究紀要』第 3 集　東京都北区教育委員会

2010 「平成 20 年度　区内遺跡本発掘調査・確認調査・試掘調査報告」『文化財研究紀要』第 23 集 東京都北区教育委員会

遠竹陽一郎　2017 「十条台遺跡群　南橋遺跡　－中十条 1-3-10 地点－発掘調査報告」『北区埋蔵文化財調査年報』－平成 28 年度－　東京都北区教育委員会

遠竹陽一郎・伊藤和人　2016 「十条台遺跡群　南橋遺跡　－王子本町 2-9 地点－確認調査報告」『北区埋蔵文化財調査年報』－平成 26 年度－　東京都北区教育委員会

遠竹陽一郎・伊藤和人ほか　2016 「十条台遺跡群　南橋遺跡　－王子本町 2-14 地点・王子本町 2-11-4 地点－発掘調査報告」『北区埋蔵文化財調査年報』－平成 26 年度－　東京都北区教育委員会

遠竹陽一郎・遠藤知成ほか　2019 『東京都北区　十条台遺跡群　南橋遺跡　－王子本町 2-10 地点－発掘調査報告』株式会社東京航業研究所

富田健司　2004 『南橋遺跡Ⅳ』 東京都北区教育委員会

中島広顕・新井悟　2003『田端不動坂遺跡Ⅴ』北区教育委員会

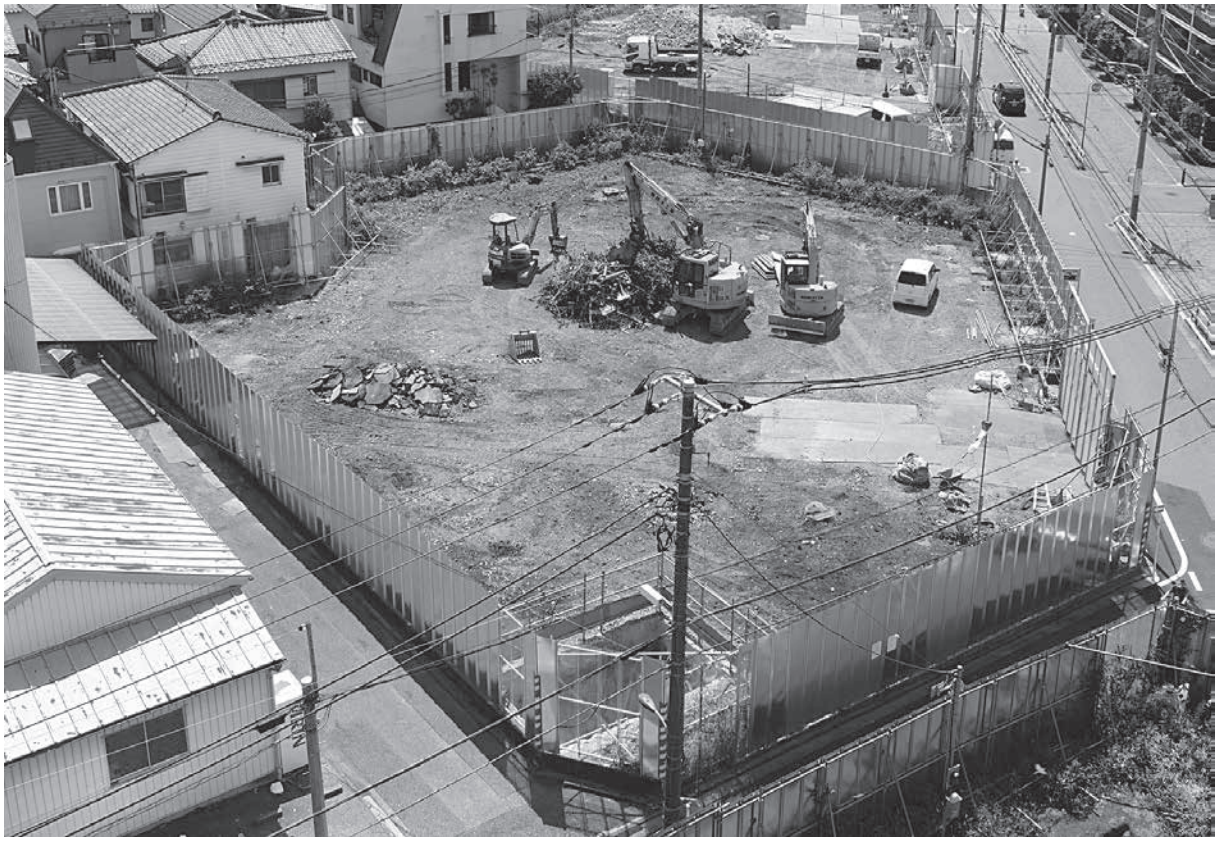
中島広顕・陣内康光ほか　1987 『南橋遺跡』 東京都北区教育委員会

森岡秀人・西村 歩　2006 「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として－」『古式土師器の年代学』(財) 大阪府文化財センター

山内淳司　2012 「第 7 章 まとめ 第 3 節 古墳時代後期～古代」『東京都北区 御殿前遺跡』 独立行政法人 国立印刷局 大成エンジニアリング株式会社

山﨑太郎　2022 『十条台遺跡群南橋遺跡　都営中十条アパート及び都営王子・王子母子アパート撤去等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』第 1 分冊　東京都埋蔵文化財センター

図版 1

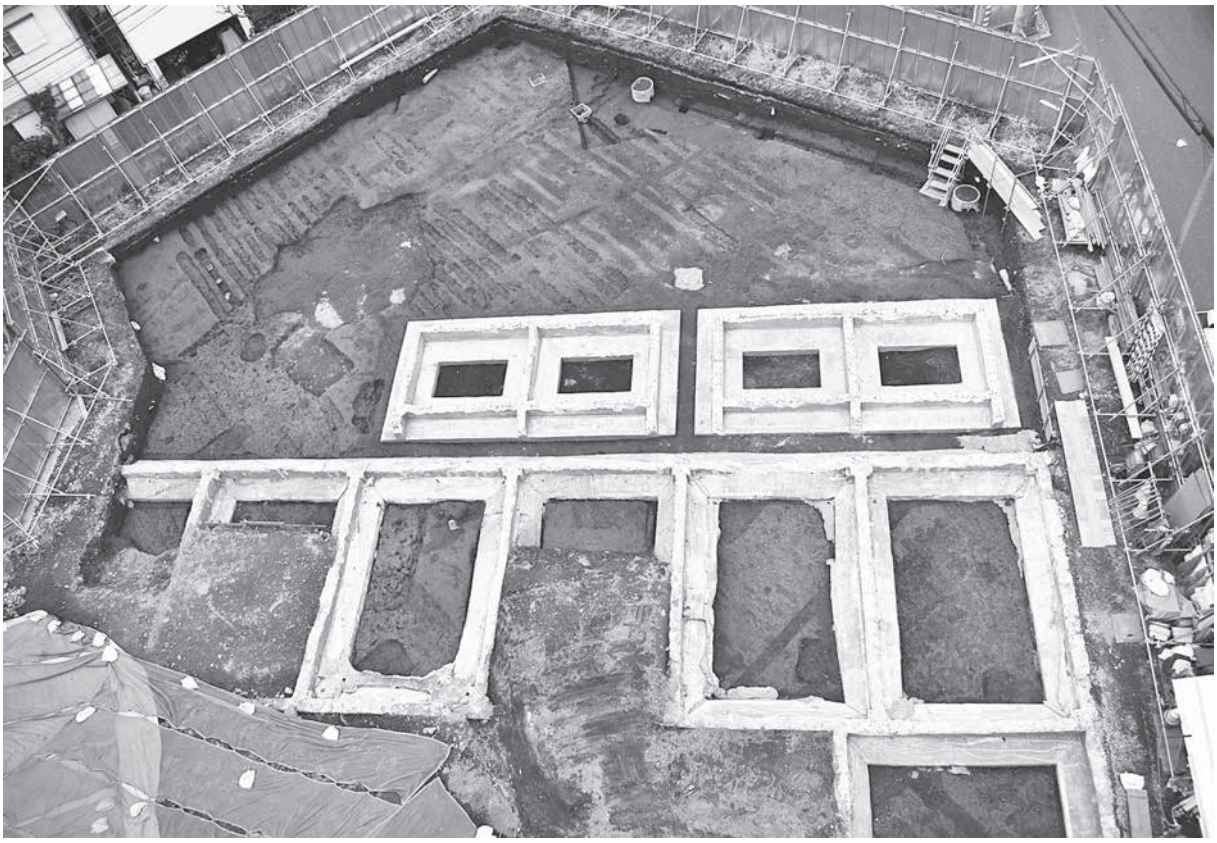


1．王子・王子母子アパート地区着手前①（北から）

2．王子・王子母子アパート地区着手前②（北から）

図版 2

1．Ⅷ区、Ⅸ①区全景（南から）



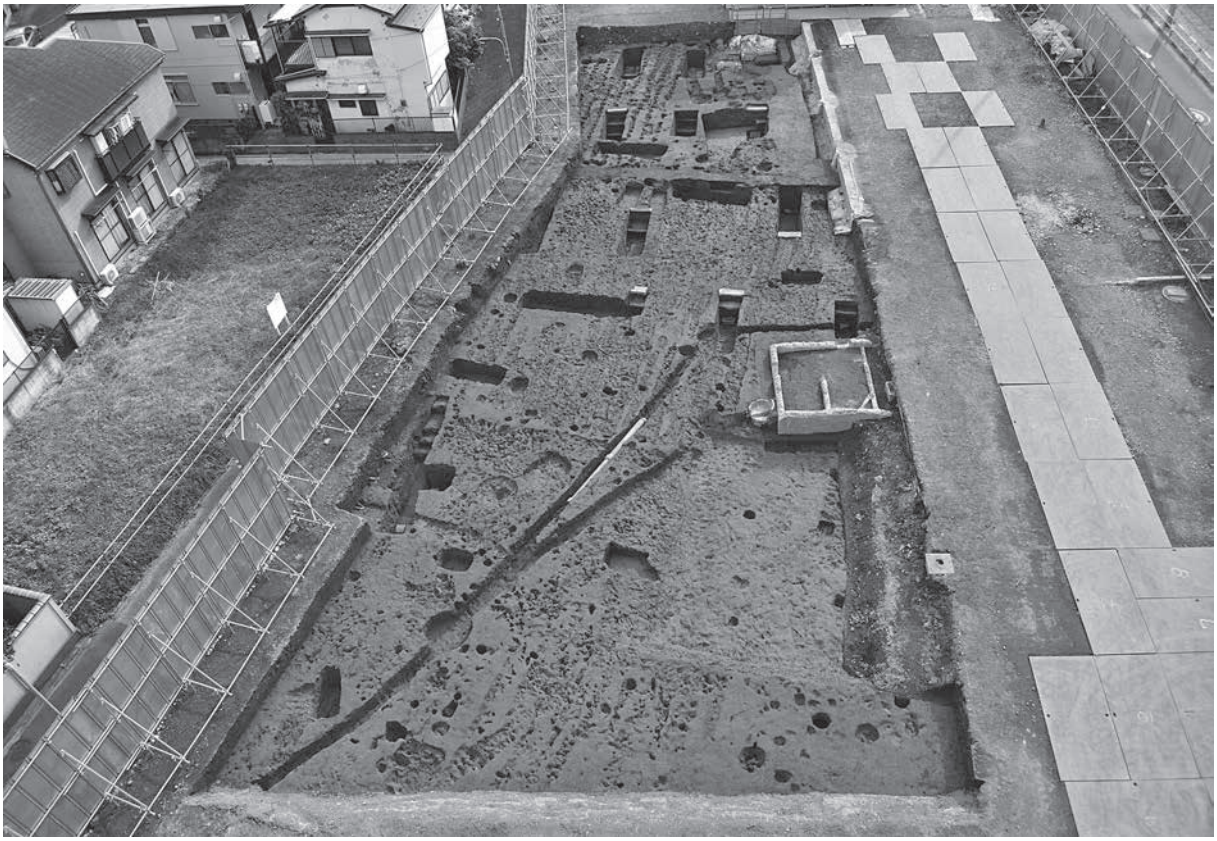
2．Ⅸ②区全景（北から）

図版 3

1．IX③区全景（北から）

2．X区全景（南から）

図版 4

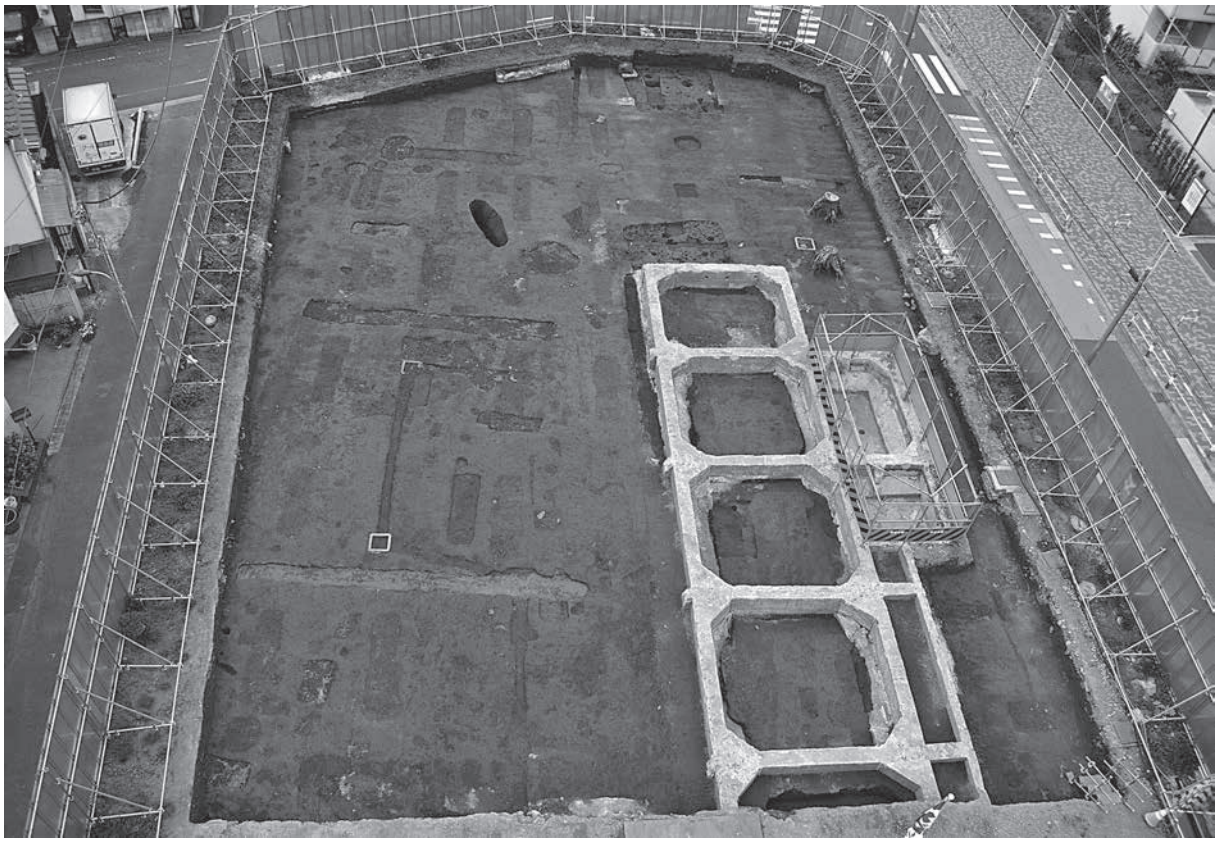


1．XI①区全景（北から）

2．XI② -1、2 区全景（北から）

図版 5

1．XI② -3 区全景（東から）



2．XII区全景（北から）

図版６

１．Ⅷ区基本層序（A）（南から）

２．Ⅷ区基本層序（B）（西から）

３．Ⅸ区基本層序（C）（北から）

４．Ⅹ区基本層序（D）（西から）

５．Ⅹ区基本層序（E）（東から）

６．Ⅺ区基本層序（F）（東から）

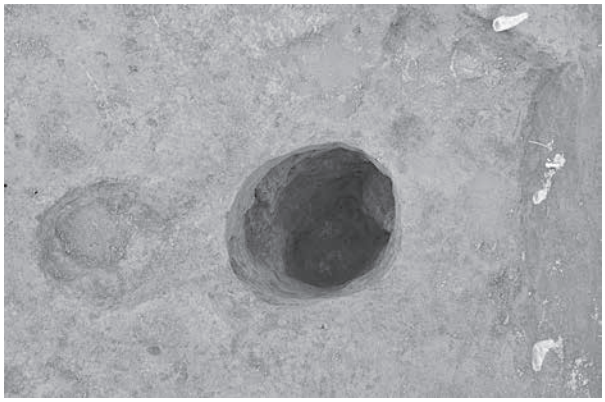
７．Ⅺ区基本層序（J）（西から）

８．Ⅻ区基本層序（L）（北から）

図版 7

1．133 号住居跡全景（西から）

2．133 号住居跡完掘（西から）



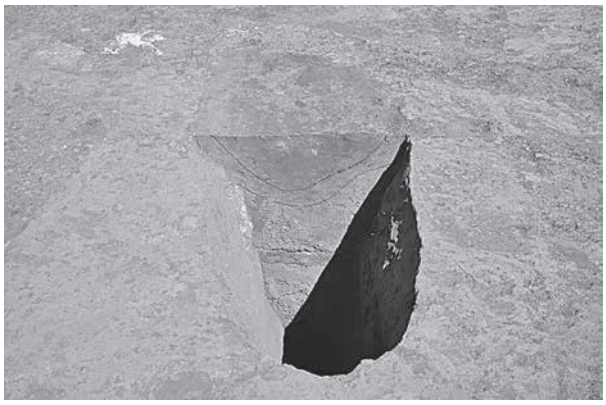
3．88 号柱穴完掘（東から）

4．88 号柱穴堆積土層（東から）

5．22 号土坑完掘（南から）

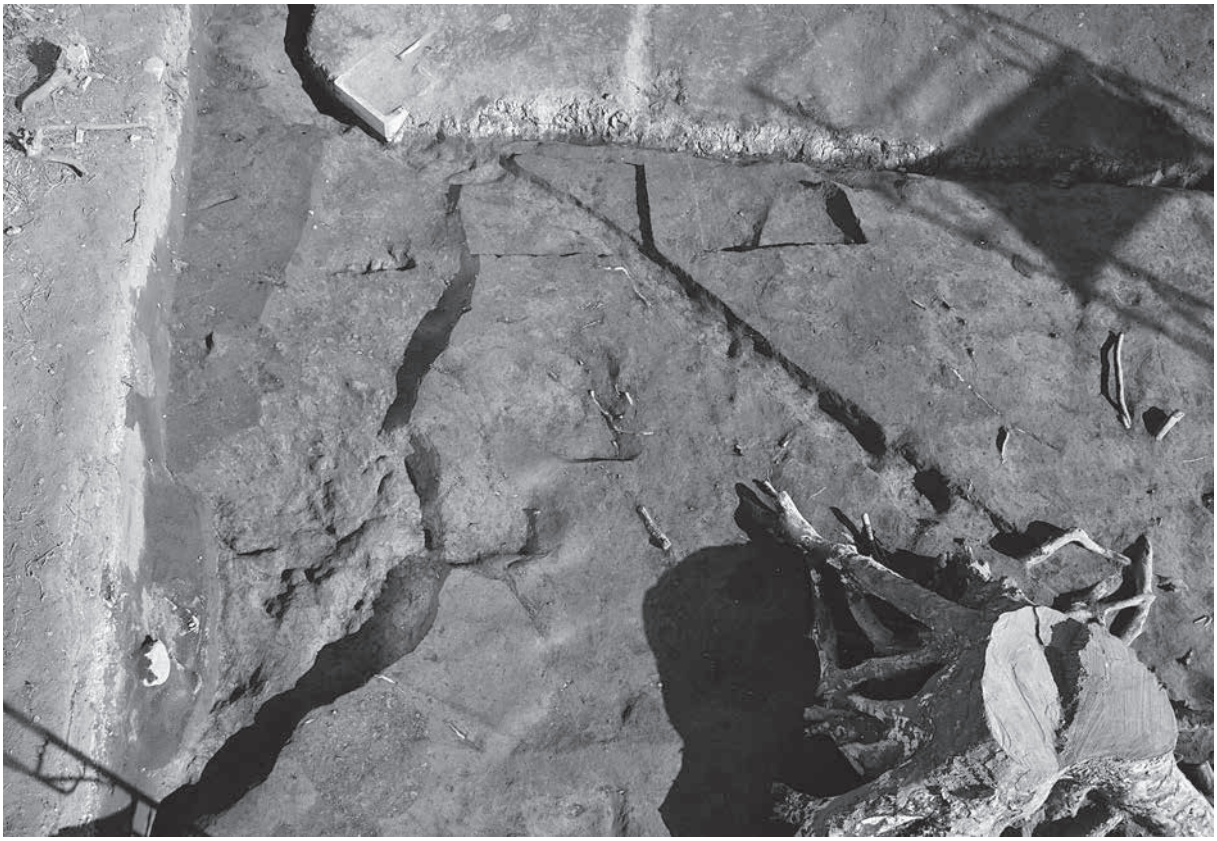
6．22 号土坑堆積土層（南から）

7．26 号土坑完掘（南から）

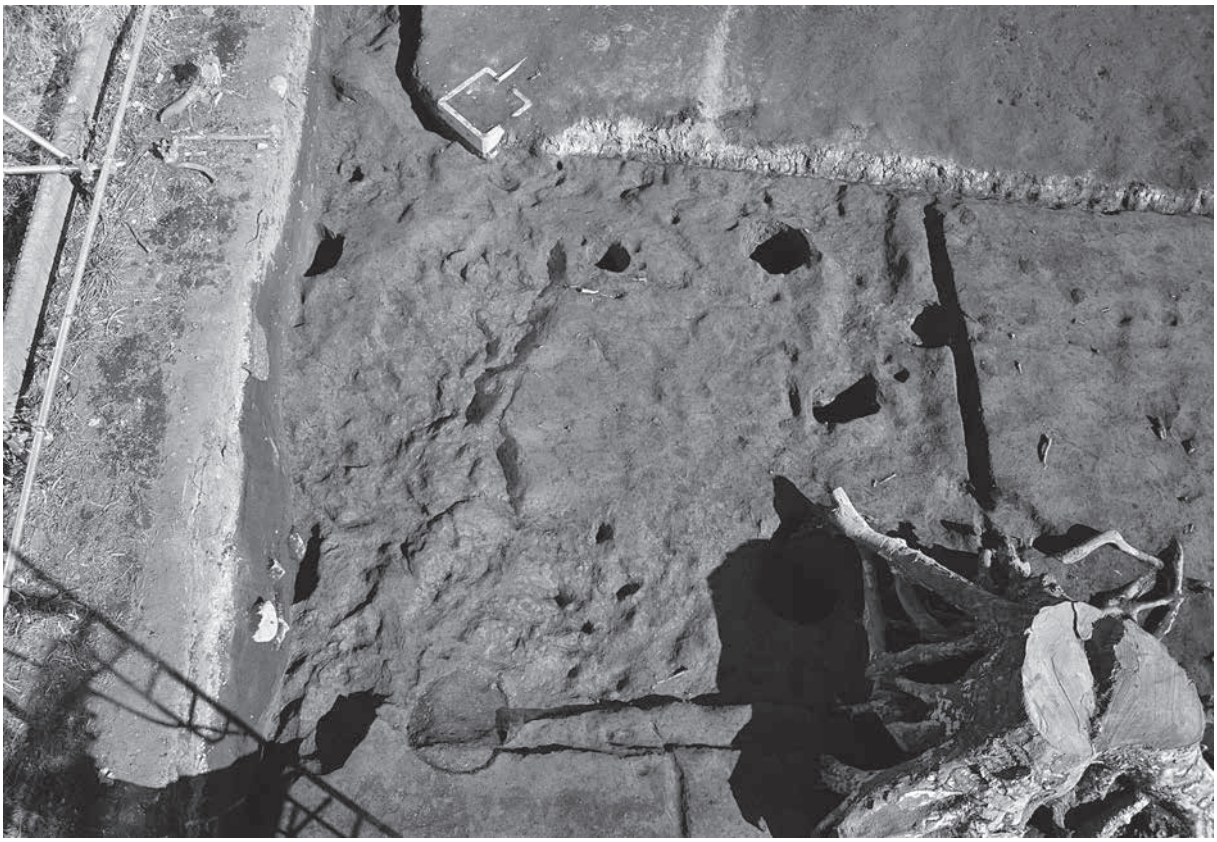


8．26 号土坑堆積土層（南から）

図版 8



1．127 号住居跡全景（西から）



2．127 号住居跡完掘（西から）

図版 9

1．127 号住居跡 P4 完掘（南から）

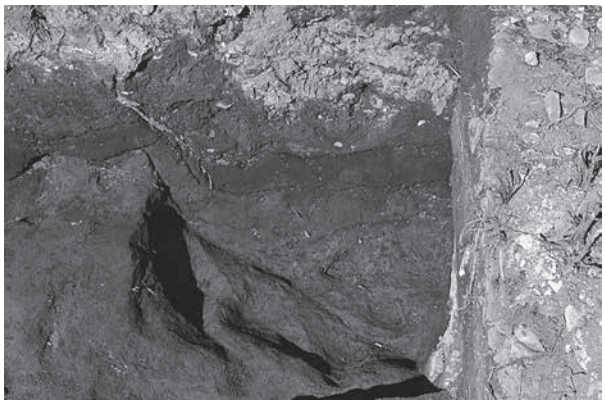
2．127 号住居跡 P4 堆積土層（東から）

3．127 号住居跡 P5 完掘（南から）

4．127 号住居跡 P5 堆積土層（東から）

5．127 号住居跡遺物出土状況（南から）

6．127 号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）



7．128 号住居跡完掘（南から）

8．128 号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）

図版 10

1．129 号住居跡全景（南から）

2．129 号住居跡完掘（南から）

3．129 号住居跡 A-A' 堆積土層（西から）

4．129 号住居跡 C-C' 堆積土層（南から）

5．138 号住居跡全景（南から）

6．138 号住居跡完掘（南から）

7．138 号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）

8．138 号住居跡 B-B' 堆積土層（東から）

図版 11

1．141 号住居跡全景（北から）

2．141 号住居跡完掘（北から）

図版 12

1．141 号住居跡遺物出土状態（北から）

2．141 号住居跡土器出土状態①（北から）

3．141 号住居跡土器出土状態②（北から）

4．141 号住居跡 P1 完掘（南から）

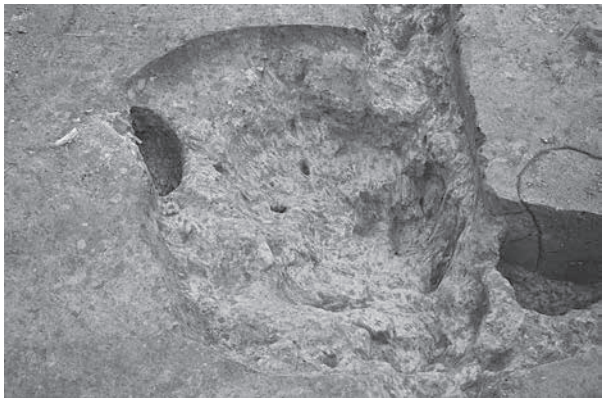
5．141 号住居跡 P2 完掘（北から）

図版 13

1．弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴群（南から）

2．60 号柱穴完掘（東から）

3．60 号柱穴堆積土層（東から）

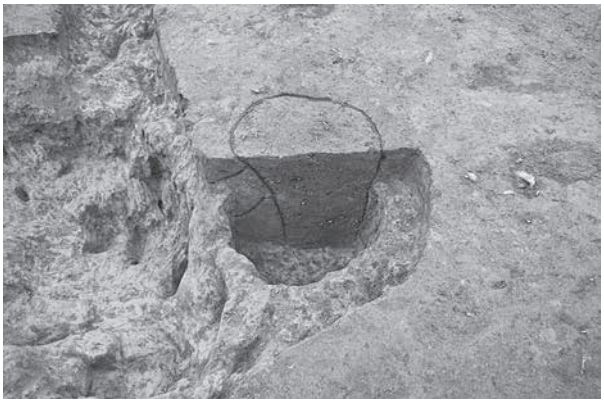


4．61 号柱穴完掘（東から）

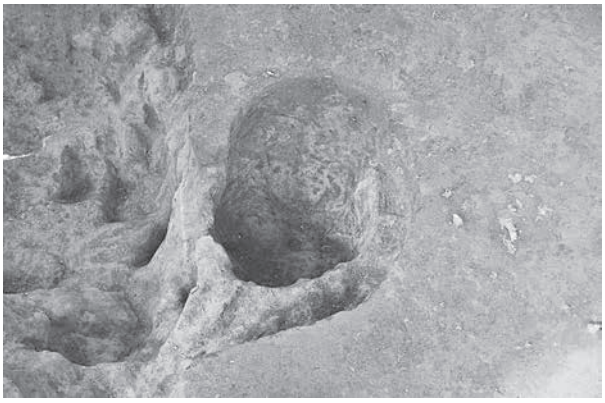
5．61 号柱穴堆積土層（東から）

図版 14

1．65 号柱穴完掘（東から）



2．65 号柱穴堆積土層（東から）



3．62・65 号柱穴完掘（東から）

4．62 号柱穴堆積土層（東から）

5．63 号柱穴完掘（東から）

6．63 号柱穴堆積土層（東から）

7．64 号柱穴完掘（東から）

8．64 号柱穴堆積土層（東から）

図版 15

1．66 号柱穴完掘（南から）

2．66 号柱穴堆積土層（南から）

3．67 号柱穴完掘（東から）

4．67 号柱穴堆積土層（東から）

5．68 号柱穴完掘（西から）

6．68 号柱穴堆積土層（西から）

7．69 号柱穴完掘（東から）

8．69 号柱穴堆積土層（東から）

図版 16

1．70 号柱穴完掘（南から）

2．70 号柱穴堆積土層（南から）

3．73 号柱穴完掘（東から）

4．73 号柱穴堆積土層（東から）

5．75 号柱穴 A-A' 堆積土層（東から）

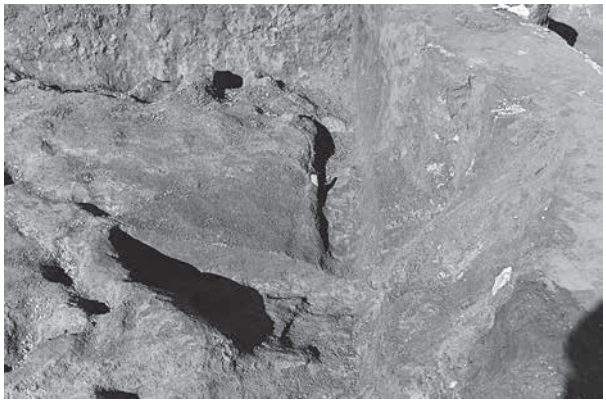
6．75 号柱穴 B-B' 堆積土層（東から）

7．76 号柱穴完掘（北から）

8．76 号柱穴堆積土層（北から）

図版 17

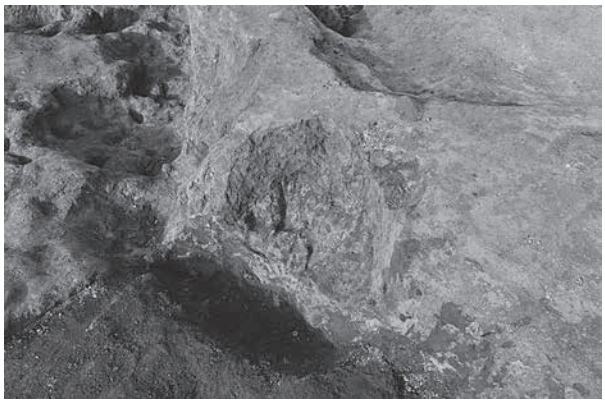
1．77・78・79 号柱穴完掘（北から）



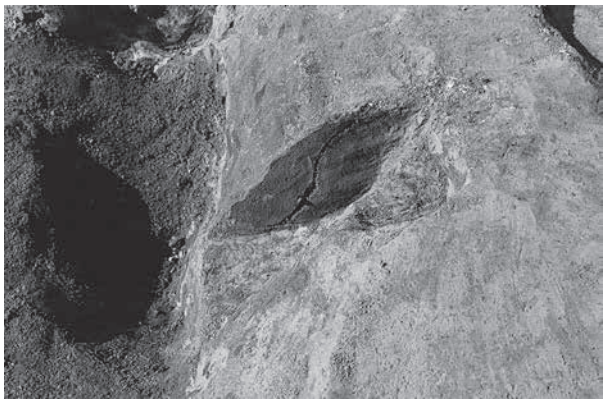
2．77 号柱穴堆積土層（南から）

3．78 号柱穴堆積土層（西から）

4．79 号柱穴堆積土層（南から）



5．80 号柱穴完掘（南から）

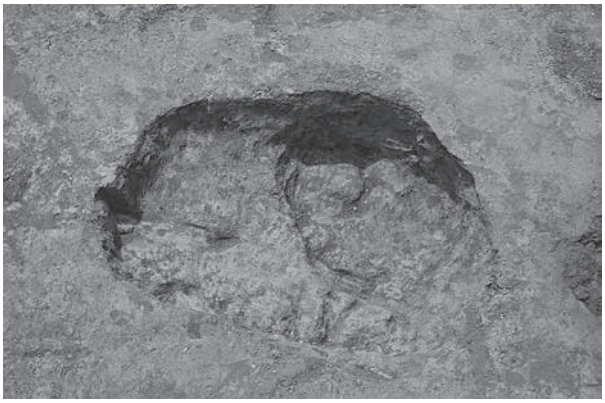


6．80 号柱穴堆積土層（南から）

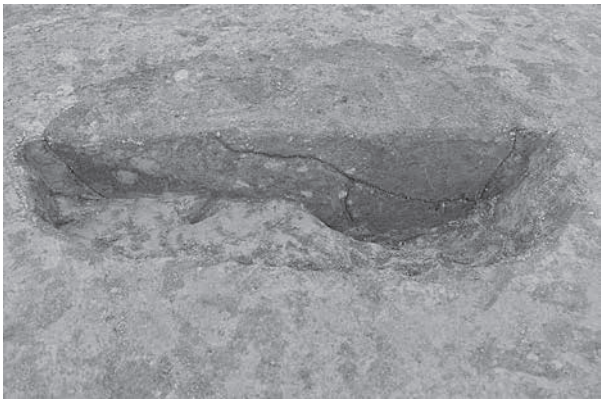
7．81・82 号柱穴完掘（西から）

8．81・82 号柱穴堆積土層（西から）

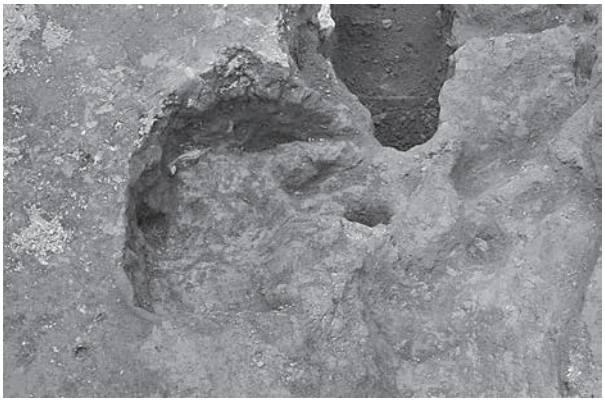
図版 18



1．84 号柱穴完掘（東から）



2．84 号柱穴堆積土層（東から）



3．21 号土坑完掘（東から）

4．21 号土坑堆積土層（北から）

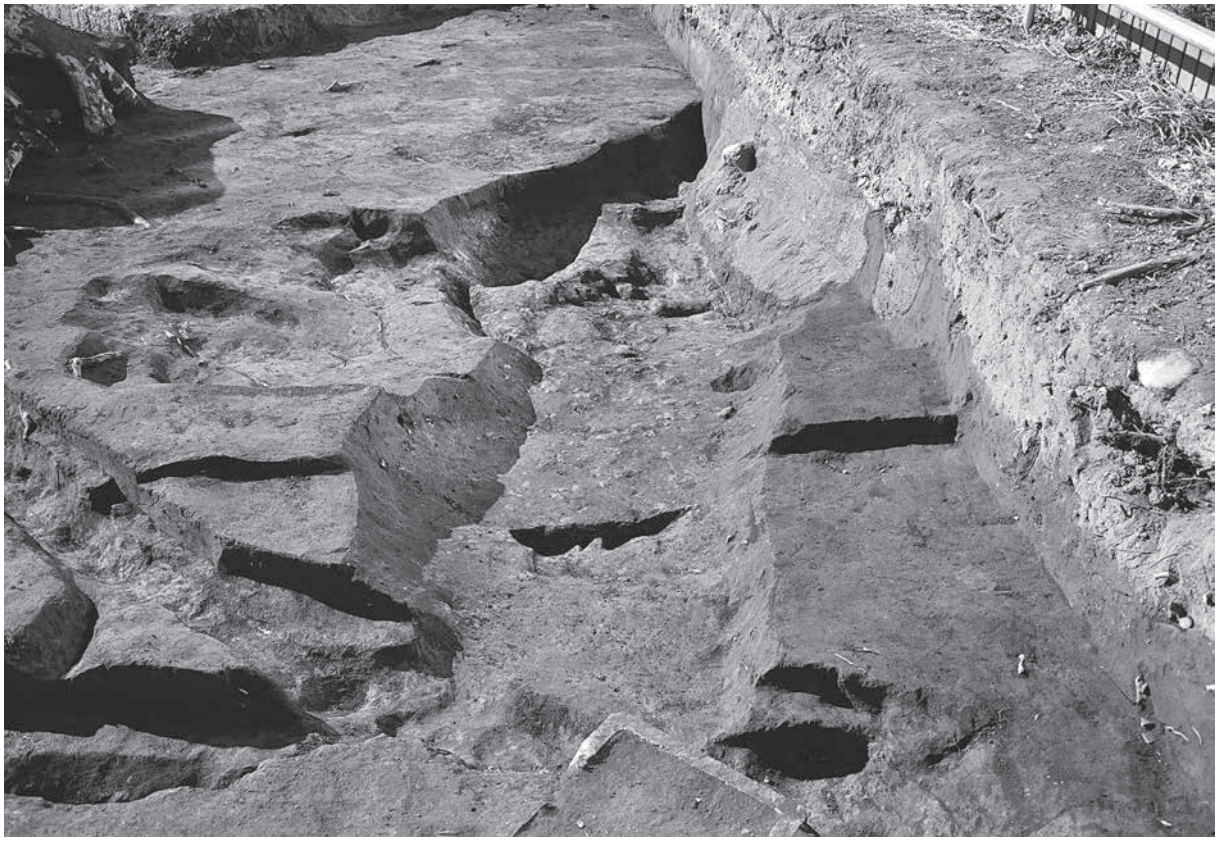
5．23 号土坑完掘（南から）

6．23 号柱穴堆積土層（東から）

7．24 号土坑完掘（南から）

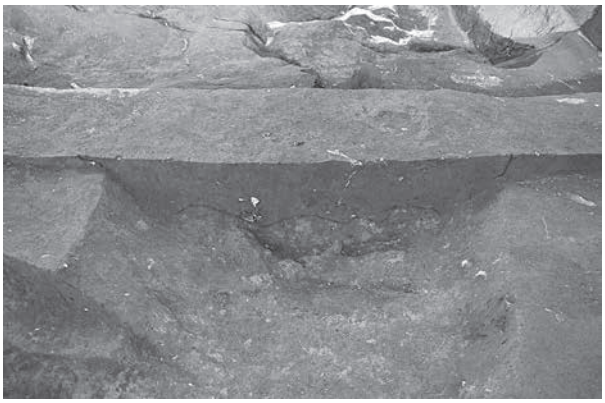
8．25 号土坑堆積土層（東から）

図版 19



1．4 号溝跡完掘①（東から）

2．4 号溝跡完掘②（西から）



3．4 号溝跡 A-A' 堆積土層（東から）

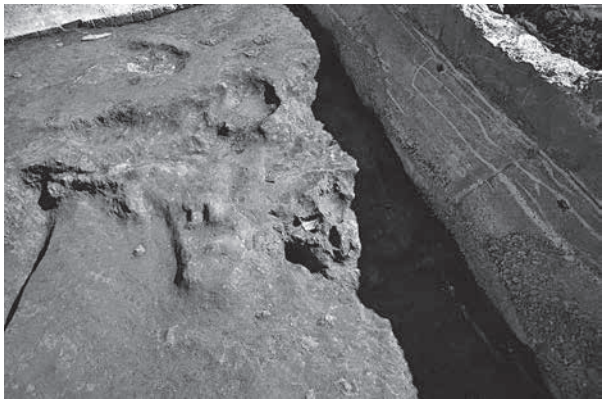
4．4 号溝跡 B-B' 堆積土層（東から）

図版 20

1．126 号住居跡全景（西から）

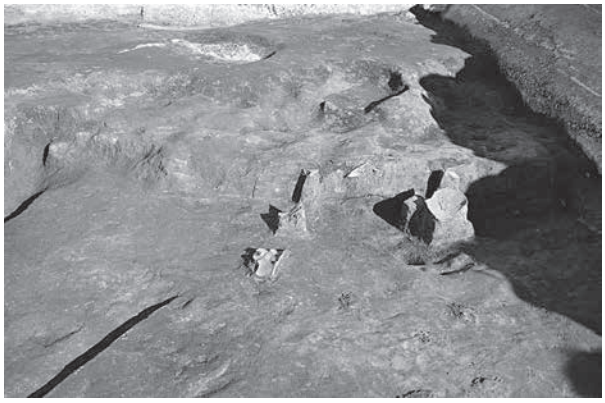
2．126 号住居跡完掘（西から）

図版 21



1．126 号住居跡カマド全景（西から）

2．126 号住居跡カマド完掘（西から）



3．126 号住居跡カマド N-N' 堆積土層（西から）

4．126 号住居跡カマド M-M' 堆積土層（南から）

5．126 号住居跡土師器出土状態（西から）

6．126 号住居跡須恵器出土状態（西から）

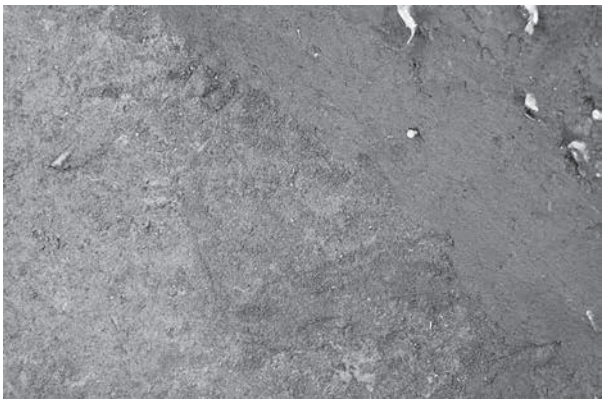
7．126 号住居跡鉄器出土状態（南から）

8．126 号住居跡 B-B' 堆積土層（東から）

図版 22

1．131 号住居跡全景（西から）

2．131 号住居跡完掘（西から）



3．131 号住居跡焼土範囲（西から）

4．131 号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）

5．131 号住居跡 B-B' 堆積土層（西から）

図版 23

1．132 号住居跡全景（東から）

2．132 号住居跡完掘（東から）

図版 24

1．132 号住居跡カマド全景（南から）

2．132 号住居跡カマド完掘（南から）

3．132 号住居跡カマド J-J' 堆積土層（西から）

4．132 号住居跡カマド内土師器出土状態（西から）

5．132 号住居跡土師器出土状態（西から）

6．132 号住居跡鉄器出土状態（北から）

7．132 号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）

8．132 号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）

1．134 号住居跡全景（西から）

2．134 号住居跡完掘（西から）

図版 26

1．134 号住居跡カマド焼土範囲（西から）

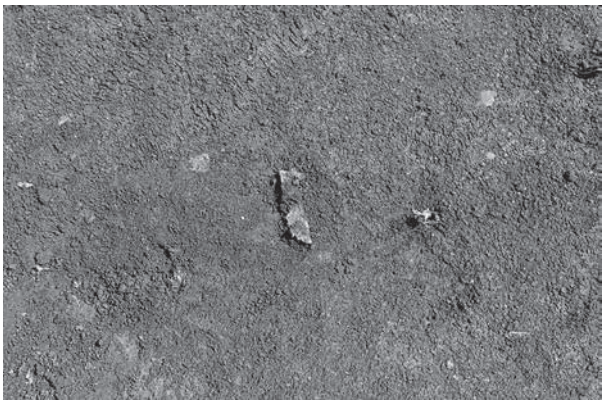
2．134 号住居跡カマド完掘（西から）

3．134 号住居跡カマド I-I' 堆積土層（西から）

4．134 号住居跡カマド H-H' 堆積土層（南から）

5．134 号住居跡 P1 完掘（西から）

6．134 号住居跡 P1 堆積土層（西から）



7．134 号住居跡鉄器出土状態（西から）

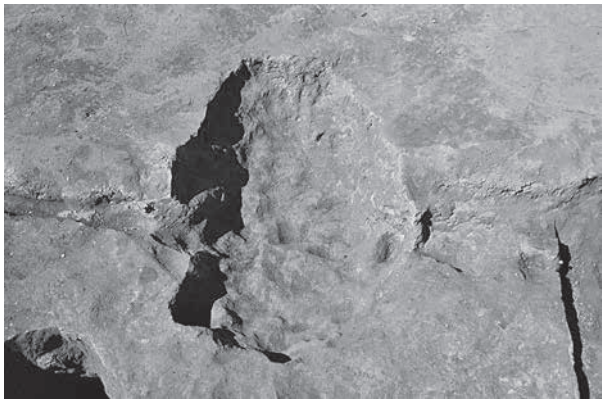
8．134 号住居跡 B-B' 堆積土層（西から）

図版 27

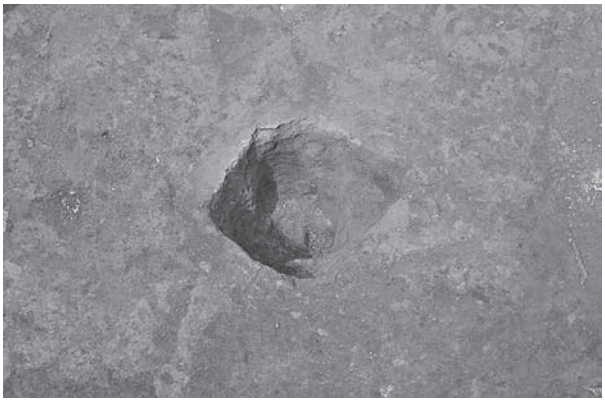
1．135 号住居跡全景（東から）

2．135 号住居跡完掘（東から）

1．135 号住居跡カマド全景（南から）



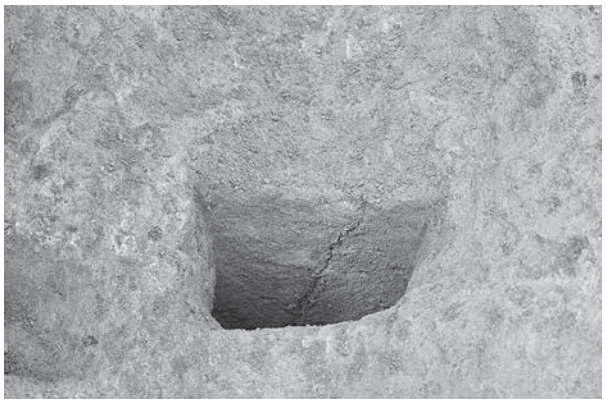
2．135 号住居跡カマド完掘（南から）



3．135 号住居跡 P3 完掘（南から）

4．135 号住居跡 P3 堆積土層（南から）

5．135 号住居跡 P7 完掘（南から）



6．135 号住居跡 P7 堆積土層（東から）

7．135 号住居跡鉄器出土状態（南から）

8．135 号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）

1．136 号住居跡全景（西から）

2．136 号住居跡完掘（西から）

1．136 号住居跡カマド全景（西から）

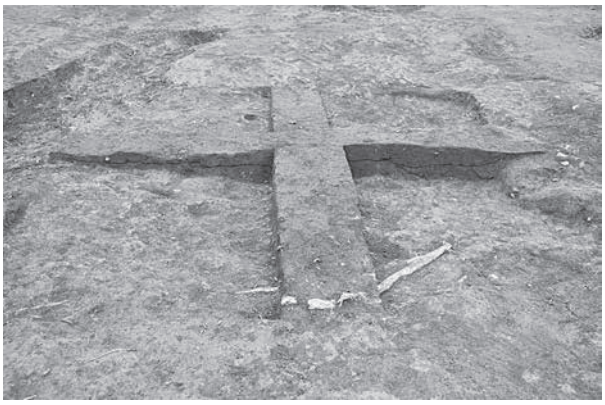
2．136 号住居跡カマド完掘（西から）

3．136 号住居跡 P1 完掘（西から）

4．136 号住居跡 P1 堆積土層（西から）

5．136 号住居跡土師器出土状態①（西から）

6．136 号住居跡土師器出土状態②（西から）



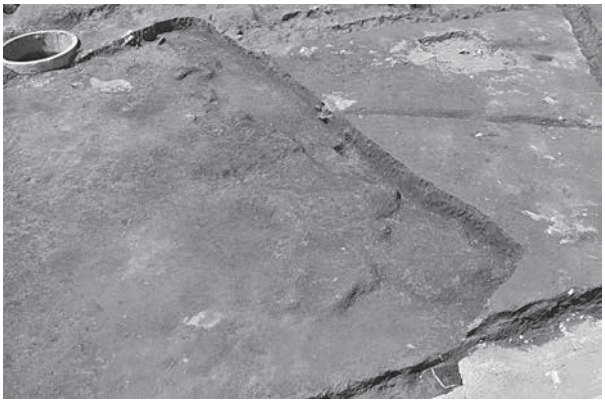
7．136 号住居跡 A-A' 堆積土層（南から）

8．136 号住居跡 B-B' 堆積土層（東から）

図版 31

1．137 号住居跡全景（西から）

2．137 号住居跡完掘（西から）

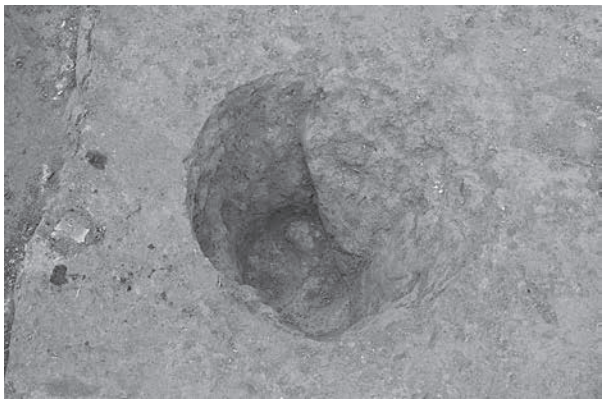


1．137 号住居跡焼土範囲全景（南から）

2．137 号住居跡焼土範囲堆積土層（西から）

3．137 号住居跡 P1 完掘（東から）

4．137 号住居跡 P2 完掘（東から）



5．137 号住居跡 P3 完掘（東から）

6．137 号住居跡 P4 完掘（東から）

7．137 号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）

8．137 号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）

図版 33

1．140 号住居跡全景（南から）

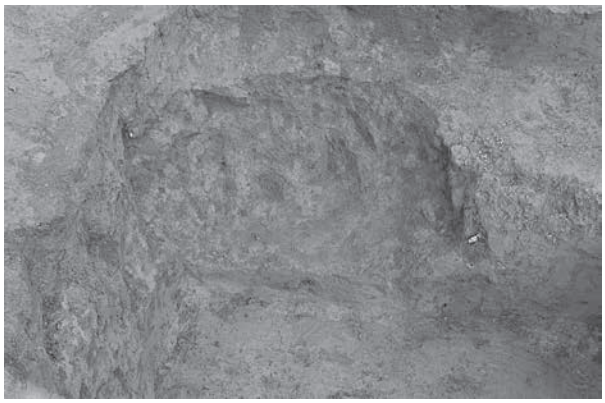
2．140 号住居跡完掘（南から）

1．140 号住居跡カマド全景（南から）

2．140 号住居跡カマド完掘（南から）

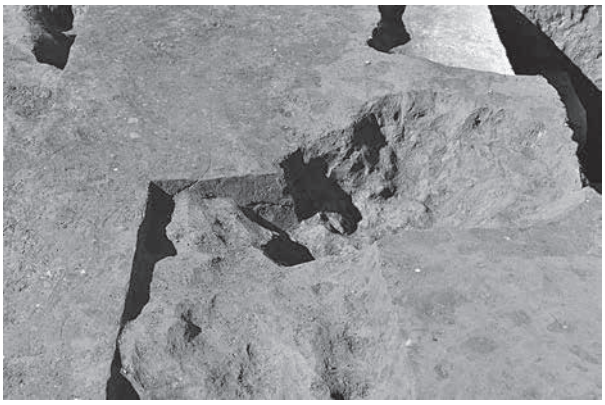
3．140 号住居跡 P1 完掘（南から）

4．140 号住居跡 P1 堆積土層（東から）

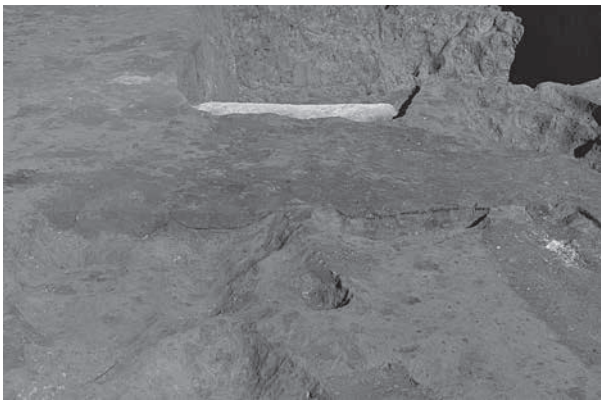


5．140 号住居跡 P2 完掘（南から）

6．140 号住居跡 P2 堆積土層（南から）

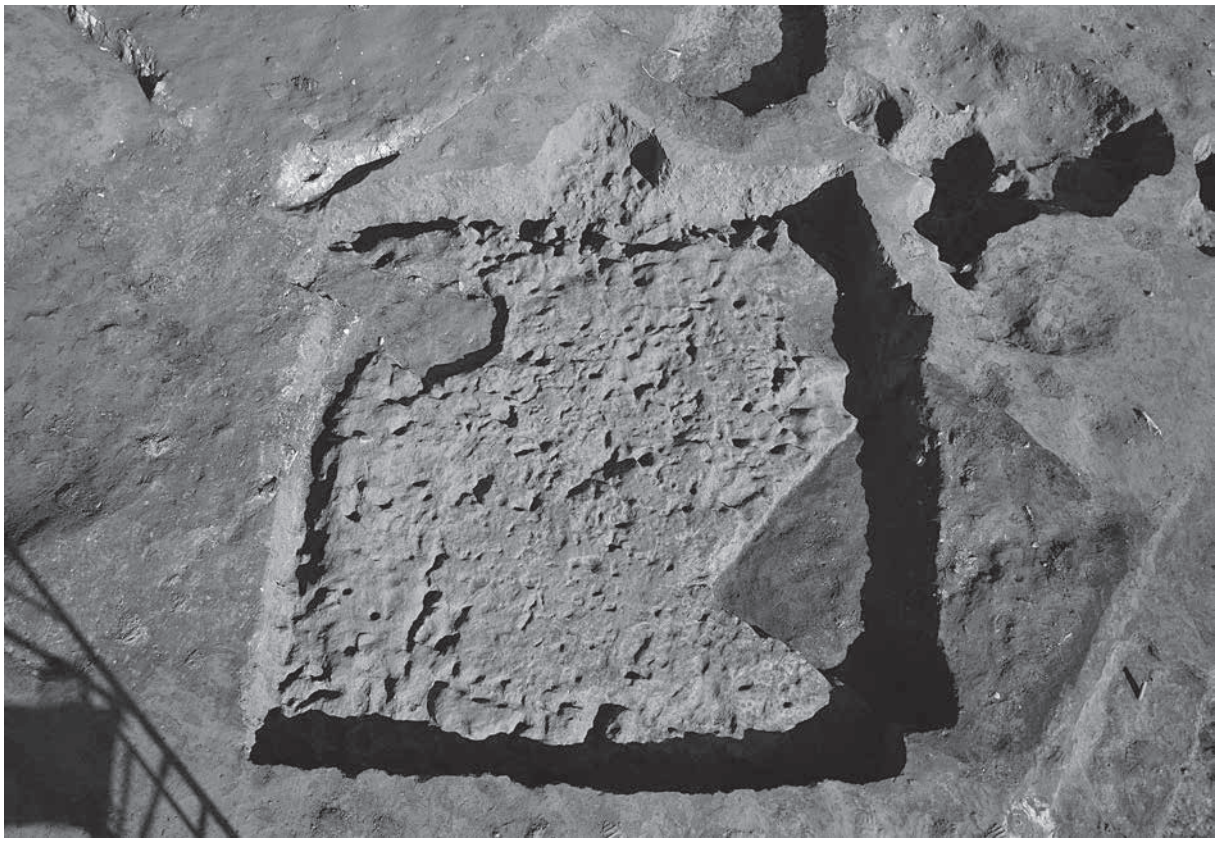


7．140 号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）



8．140 号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）

1．143 号住居跡全景（南から）



2．143 号住居跡完掘（南から）

1．143 号住居跡カマド全景（南から）

2．143 号住居跡カマド完掘（南から）

3．143 号住居跡カマド H-H' 堆積土層（南から）

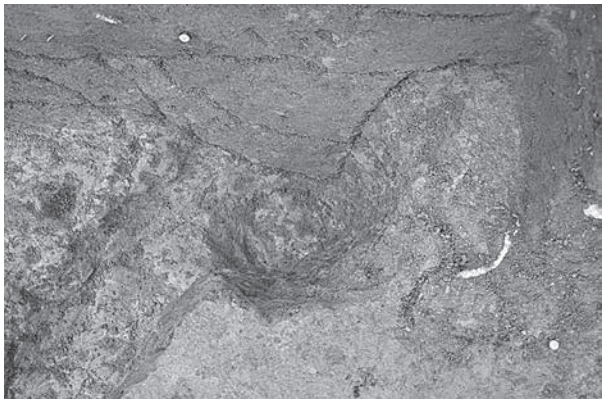
4．143 号住居跡カマド G-G' 堆積土層（東から）

5．143 号住居跡カマド石製支脚出土状態（南から）

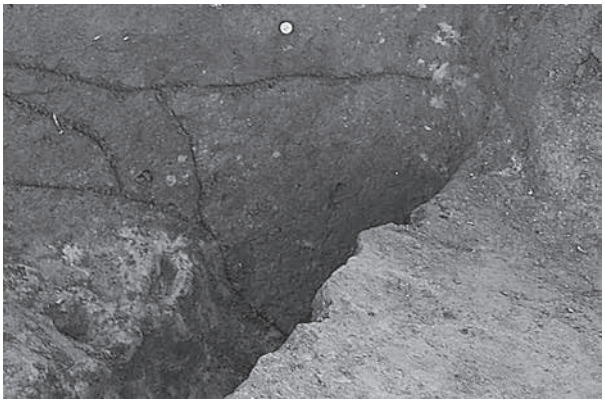
6．143 号住居跡カマド石製支脚出土状態 - 近接（南から）

7．143 号住居跡 A-A' 堆積土層（東から）

8．143 号住居跡 B-B' 堆積土層（南から）



1．83 号柱穴完掘（西から）



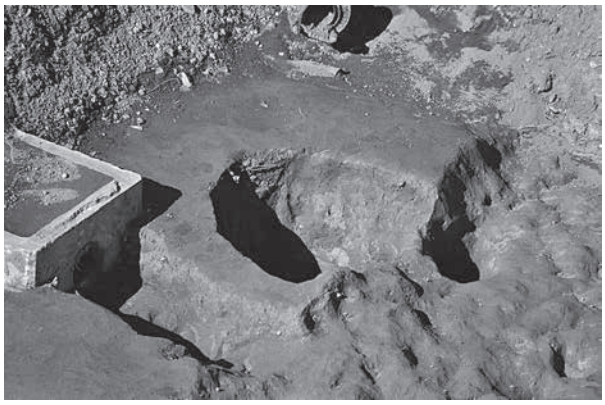
2．83 号柱穴堆積土層（西から）

3．85 号柱穴完掘（南から）

4．85 号柱穴堆積土層（南から）

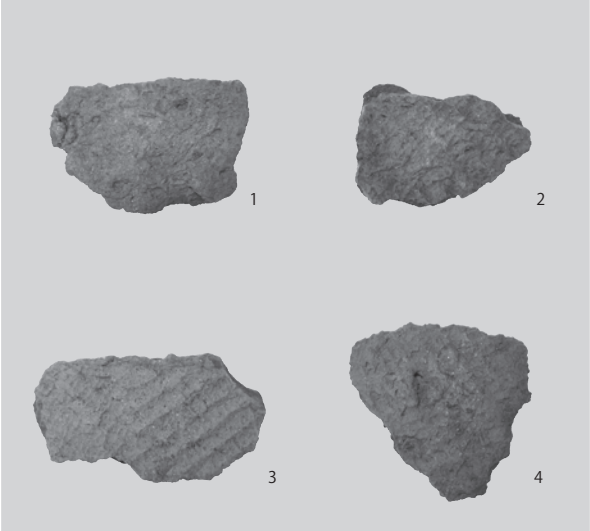
5．86 号柱穴完掘（東から）

6．86 号柱穴堆積土層（東から）



7．87 号柱穴完掘（東から）

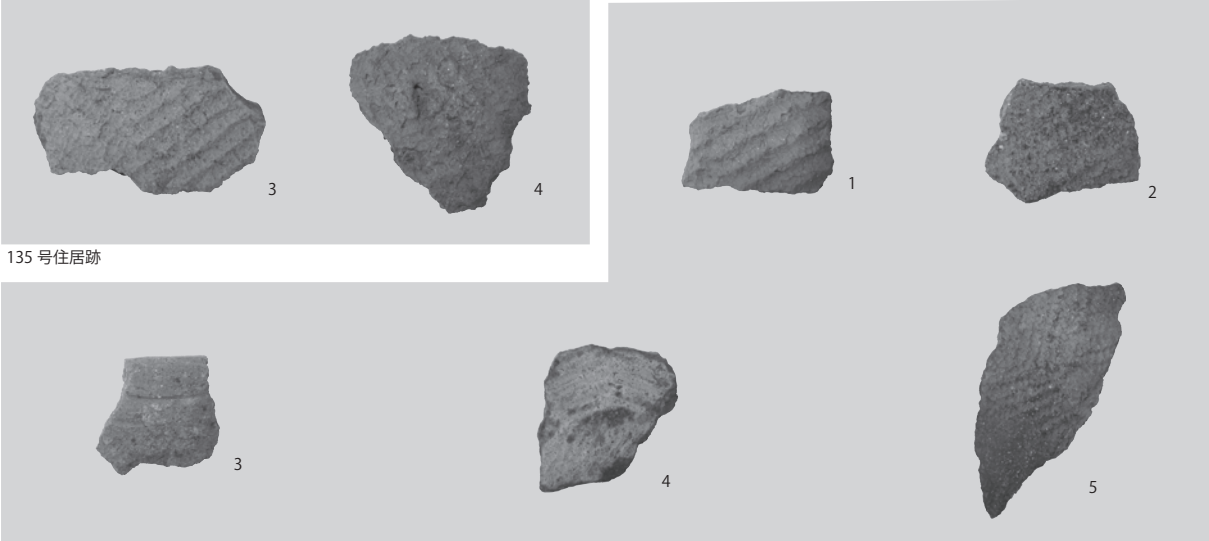
8．87 号柱穴堆積土層（南から）



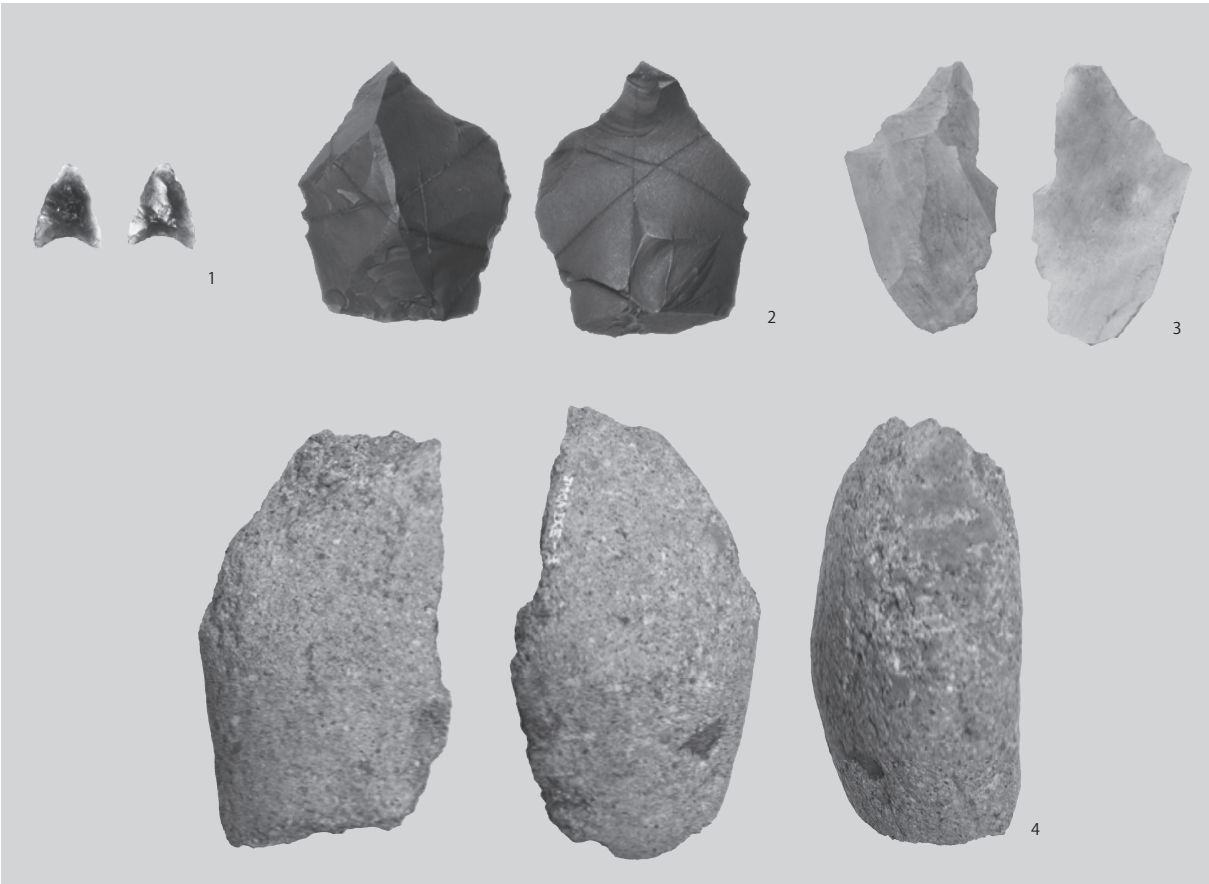
135 号住居跡

26 号土坑

126 号住居跡



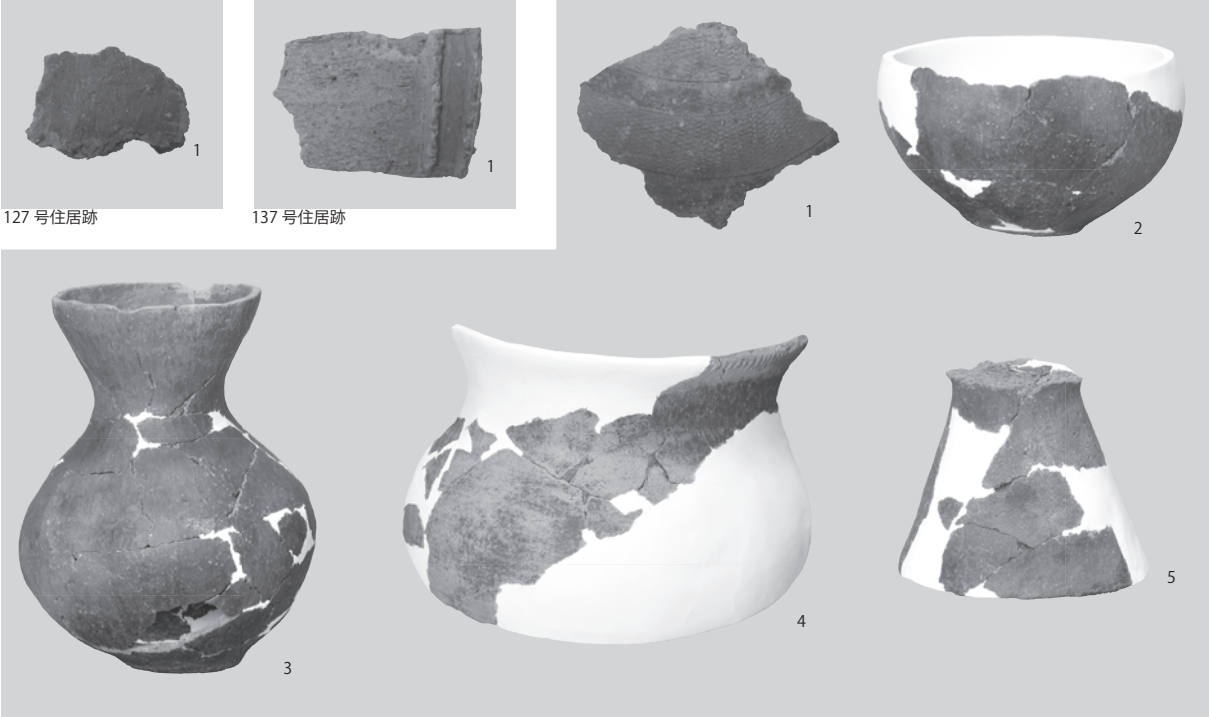
遺構外



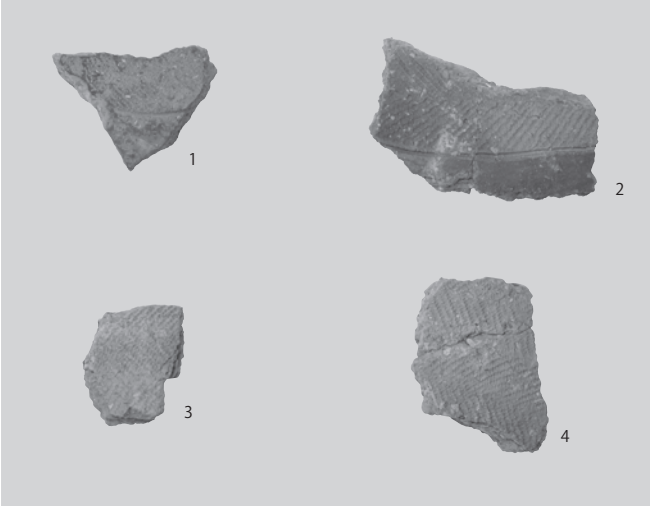
縄文時代の土器・石器

127 号住居跡

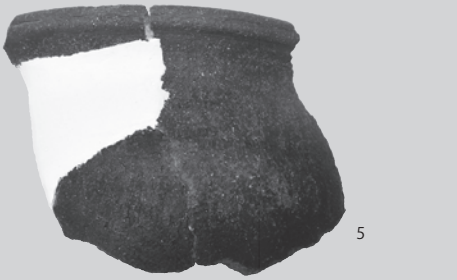
137 号住居跡



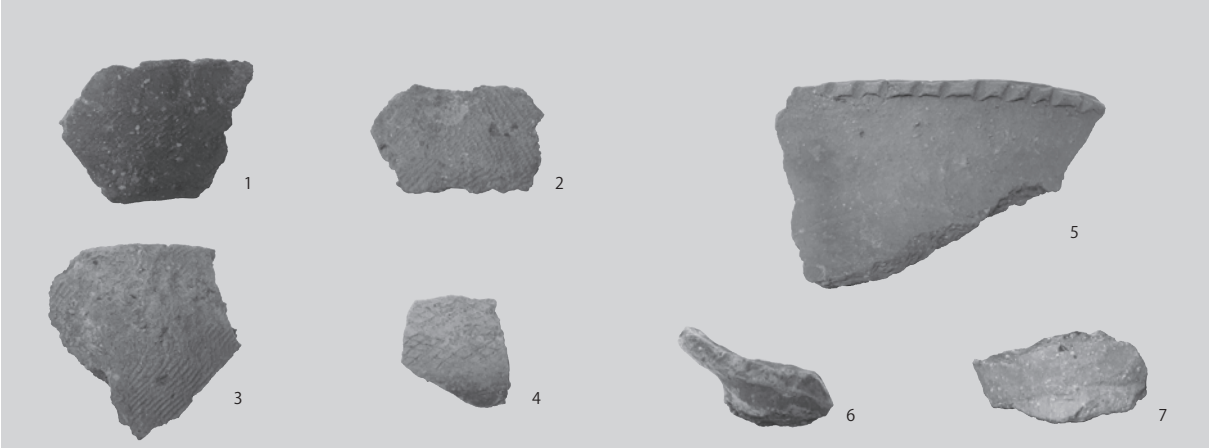
141 号住居跡



143 号住居跡



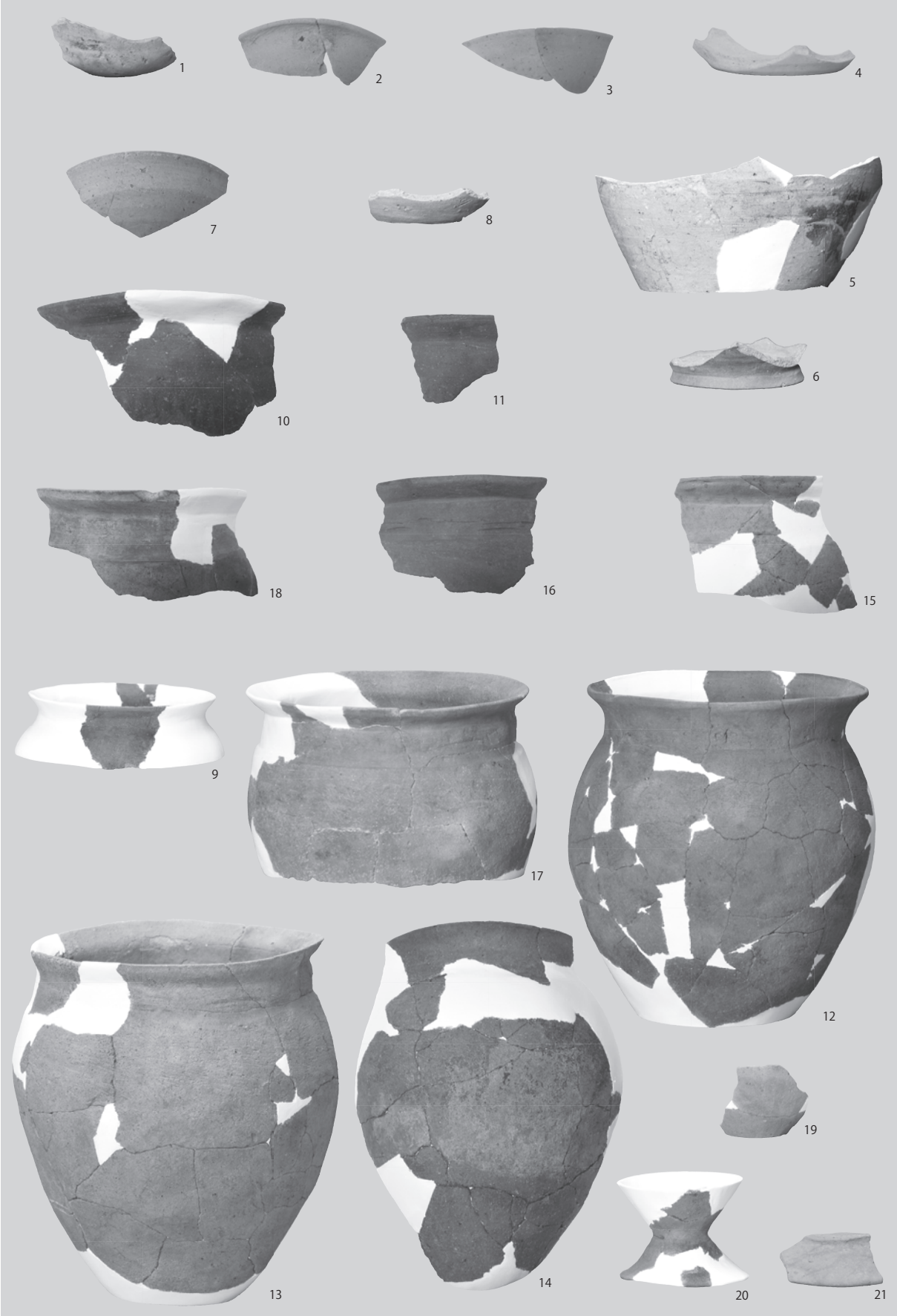
4 号溝跡



遺構外

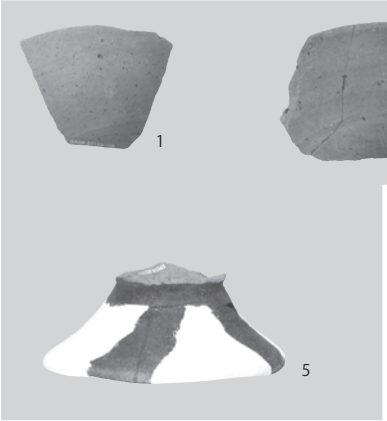
弥生時代後期から古墳時代初頭の土器

図版 40

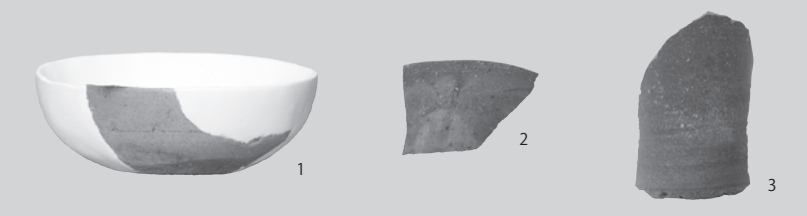


古代の土師器・須恵器（126 号住居跡）

132 号住居跡

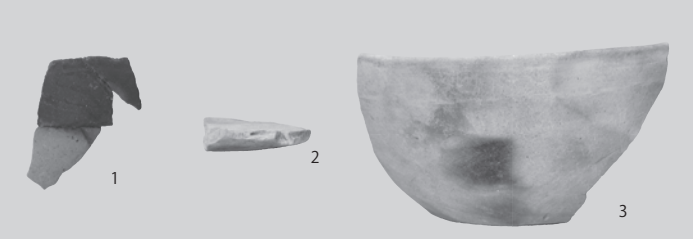


134 号住居跡

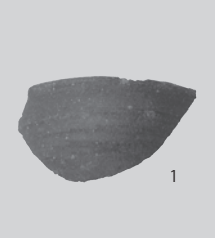


135 号住居跡

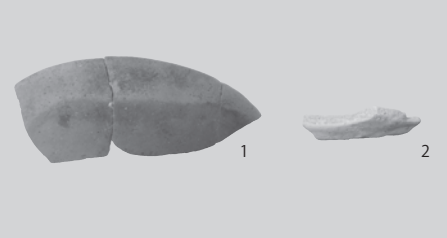
136 号住居跡



137 号住居跡



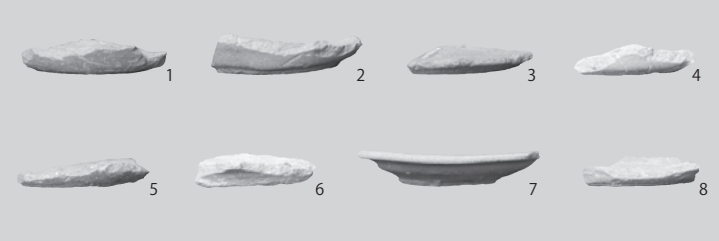
138 号住居跡



140 号住居跡

141 号住居跡

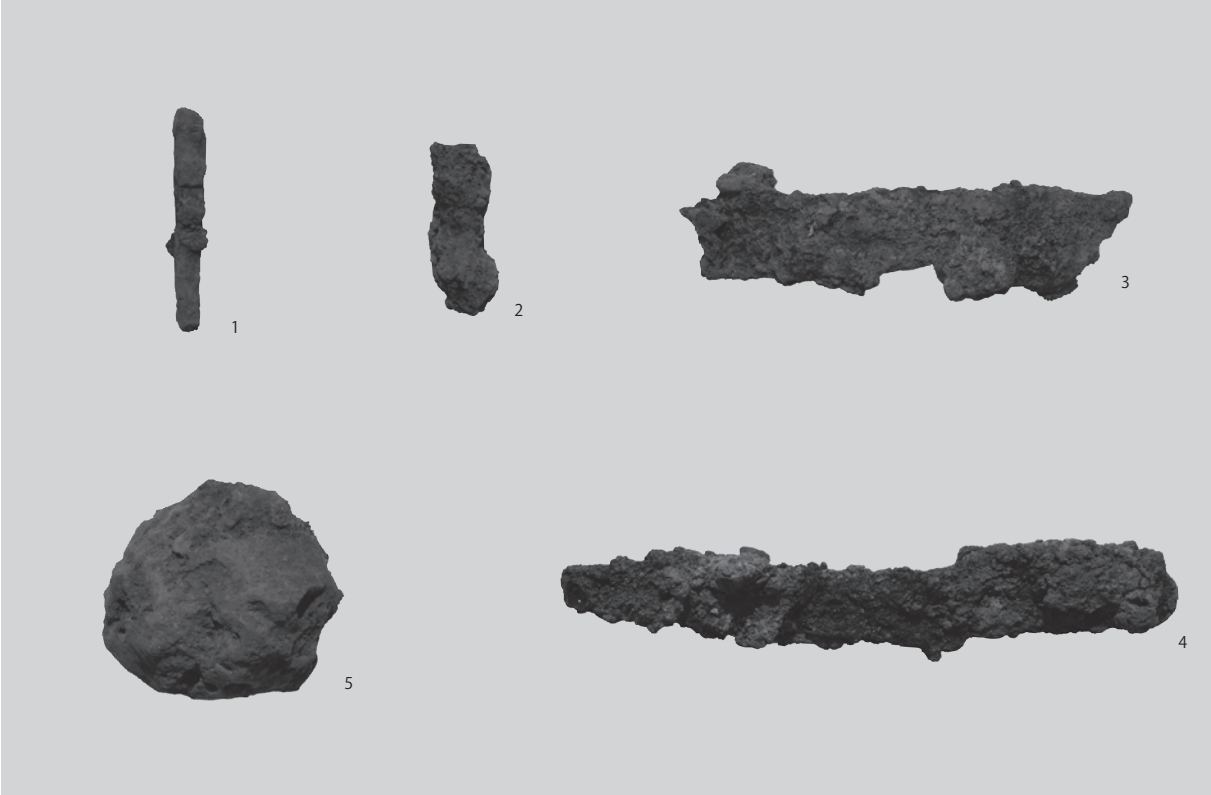
143 号住居跡



遺構外

古代の土師器・須恵器（126 号住居跡以外）

図版 42



古代の石器・鉄器

報　告　書　抄　録

ふりがな	じゅうじょうだいいせきぐんみなみばしいせき
書名	十条台遺跡群南橋遺跡
副書名	都営中十条アパート及び都営王子・王子母子アパート撤去等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	第２分冊
シリーズ名	東京都埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 372 集
編著者名	島﨑瑛美　飯塚武司　株式会社古環境研究所
編集機関	公益財団法人東京都教育支援機構　東京都埋蔵文化財センター
所在地	〒 206-0033　東京都多摩市落合一丁目 14 番２　　TEL 042 - 374 - 8044
発行年月日	西暦　2023 年　9 月　29 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じゅうじょうだいいせきぐん 十条台遺跡群 みなみばしいせき 南橋遺跡	とうきょうときたくおうじほんちょう 東京都北区王子本町 にちょうめ 12 ばん 2 ほか 二丁目 12 番２ほか	13117	10	35°45′20″	139°43′47″	20201201 ～ 20220228	4,698㎡	都営王子・王子母子アパート撤去等事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南橋遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡 1 軒 柱穴 1 基 土坑 2 基	土器 41 点 石器：石鏃 1 点、石錐 1 点、剥片 4 点、石皿 1 点	
		弥生時代後期～古墳時代初頭	竪穴住居跡 5 軒 掘立柱建物跡 1 棟 柱穴 8 基 土坑 4 基 溝 1 条	土器：甕 628 点、壺 860 点、高坏 37 点、器台 1 点、埦 1 点 土製品：焼成粘土塊 34 点 礫 1 点 炭化材 3 点	
		古代	竪穴住居跡 9 軒 柱穴 4 基	土師器：甕 1,703 点、鉢 1 点、坏 498 点 須恵器系土器：坏 65 点 須恵器：甕 43 点、瓶 36 点、坏 403 点 土製品：支脚 1 点、焼成粘土塊 13 点 石器：支脚 1 点、砥石 1 点 鉄器：棒状鉄器 1 点、鉄滓 1 点、釘 1 点、刀子 2 点 礫 8 点、炭化種子 1 点	
		中世以降		土師質土器：坏 1 点	

要　約

本遺跡は十条台遺跡群を構成する遺跡の一つで、武蔵野台地東縁部の本郷台地縁辺部にあたる十条台の崖線付近に立地している。今回の調査では、縄文時代・弥生時代後期から古墳時代初頭・古代の遺構・遺物が検出され、複数の時代にまたがる複合遺跡であることが再確認された。

縄文時代では、土坑等の遺構が少数検出され、本遺跡における縄文時代の人々の活動の痕跡を確認した。

弥生時代後期から古墳時代初頭では、主に竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の遺構が検出された。検出数が過去の調査区と比べ稀薄であり、今回の調査区が本遺跡における当該期の集落の南端となる可能性がある。

古代では、竪穴住居跡と柱穴が検出された。各住居跡の年代は 7 世紀後半から 9 世紀前半にわたり、本遺跡では当該期においても人々の連続的な居住があったことが明らかになった。

印刷仕様

表紙	レザック	215kg（四六判）
見返し	上質紙	135kg（四六判）
巻頭	マットコート紙	90kg（四六判）
本文	上質紙	70kg（四六判）
写真図版	マットコート紙	90kg（四六判）
印刷方式	オフセット印刷	
使用インク	エコマーク商品認定基準適合	
製版線数	150 線（カラー 175 線）	

本書は永久保存を考慮し、すべて中性紙を使用

北区

十条台遺跡群南橋遺跡　第 2 分冊

―都営中十条アパート及び都営王子・王子母子アパート撤去等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―

東京都埋蔵文化財センター調査報告第 372 集

2023 年 9 月 29 日　発行

編集・発行　公益財団法人東京都教育支援機構
東京都埋蔵文化財センター
東京都多摩市落合一丁目 14 番 2
TEL 042 - 374 - 8044

印刷　株式会社サンワ
東京都千代田区飯田橋 2-11-8